

鵜川町

宮戸4遺跡

一日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

鵜川町

宮戸4遺跡

一日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

平成13年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



復元土器



剥片石器

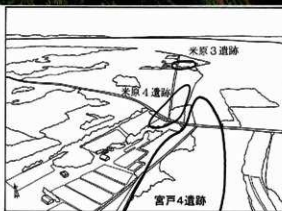


礫石器



遺跡周辺の空中写真

(1999年7月27日・室蘭開発建設部撮影)



遺跡周辺で見られるサクラソウ



「蝦夷図」(部分、「シモムカワ」周辺) 「ライバチン」「イウモツベ」などが読み取れる

例 言

1. 本書は、平成13年度に当センターが実施した、日高自動車道厚真門別建設工事に伴う、鷗川町宮戸4遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅱ章：西田 茂、第Ⅲ章：鎌田 望、第Ⅳ章：鎌田・芝田直人、第Ⅴ章：鎌田・芝田、第Ⅵ章：鎌田・芝田、第Ⅶ章：西田・芝田が担当し、鎌田が編集した。
3. 写真撮影は、現場においては、担当調査員が各自の責任において撮影し、柳瀬由佳が一括して写真整理を行なった。整理作業時の遺物撮影は、第1調査部第1調査課立川トマスと第2調査部第4調査課中山昭大の指導の下で柳瀬が行なった。
4. 調査報告終了後の出土遺物および記録類については鷗川町教育委員会が保管する。
5. 調査にあたっては下記の諸機関、各位からご指導ご協力をいただいた(順不同、敬称略)。

北海道教育委員会、鷗川町教育委員会、国土交通省北海道局室蘭開発建設部、社団法人北海道ウタリ協会鷗川支部 近森聖美、鷗川町四季の館まなびランド図書室 高地美穂子、鷗川町議会 山下与造、鷗川町沙見二区町内会 佐渡日出男、宮戸小学校・二宮小学校・田浦小学校・鷗川町高齢者大学の皆さん、苫小牧民報社 清水恵一、環境コンサルタント株式会社 芹澤祐二、株式会社野生生物総合研究所 富川 徹、酪農学園大学 村野紀雄、北海道大学 加藤博文、北海道開拓記念館 水島未記、北海道文化財保護協会 扇谷昌康、勇武津資料館 佐藤一夫、苫小牧市埋蔵文化財調査センター 吉田国吉・宮夫靖夫・工藤 肇・赤石慎三・兵藤千秋、苫小牧市役所 渡辺俊一・二階堂啓也・大泉博嗣・鈴木耕榮、門別町図書館郷土資料館 川内谷 修・橋本 晋、平取町教育委員会 米田秀喜・森岡健治・長田佳宏、静内町郷土館 藪中剛司・齋藤大朋、三石町教育委員会 小野寺 聡、えりも町教育委員会 中阿利泰、浦河町教育委員会 川内 基、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉、虻田町教育委員会 角田隆志、北広島市教育委員会 遠藤龍敏、恵庭市郷土博物館 大林春香、恵庭市教育委員会 上屋真一・松谷純一・森 秀之・佐藤幾子・長町章弘、千歳市サケのふるさと館 高橋 理、千歳市教育委員会 大谷敏三・田村俊之・松田淳子・豊田宏良・乾 哲也、深川市教育委員会 葛西智義、旭川市教育委員会 瀬川拓郎・友田哲弘、富良野市郷土館 杉浦重信・澤田 健、帯広百年記念館 北澤 実・山原敏郎・西沢千鶴、芽室町ふるさと歴史館 大橋 毅、浦幌町立博物館 後藤秀彦、小樽市教育委員会 青木 誠、余市町教育委員会 乾 芳宏、北檜山町教育委員会 谷岡康孝、シン技術コンサル株式会社 長谷川 徹・大島秀俊

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。

H：住居跡 TP：Tピット
F：焼土 FC：フレイク・チップ集中

2. 遺構図の方位は真北を示す。遺構平面図の+はグリッドライン交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示している。遺構平面図の・小数字とセクションレベルは、標高(単位m)である。

3. 遺構図の出土遺物は、下記の記号を使用した。

	床面	覆土	床面	覆土	床面	覆土		
土器：	●	○	剥片石器：	▲	△	礫石器：	▼	▽
剥片：	■	□	礫・礫片：	◆	◇	その他：	★	☆

4. 遺構の最大規模は、「確認面での長軸長×短軸長/床(底)面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深・最大厚(単位はm)」の順で記した。一部破壊されているものは現在長を()で示し、不明のものは-で示した。

5. 実測図の縮尺は原則として下記のとおりである。下記以外の図および、例外については図内にスケールを付して示した。

遺構 1:40 復元土器 1:4(ミニチュア土器 1:2)
土器拓本 1:3 剥片石器 1:2
礫石器 1:3 石斧 1:2
台石 1:4 土製品・石製品 1:2

6. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の層位についてはアラビア数字で示した。

7. 土層の色調は、『新版標準土色帖19版』(小山・竹原 1997)に従った。

8. 火山灰の略号は、『北海道の火山灰』(北海道火山灰命名委員会 1982)による。

9. 土器、石器、土製品、石製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記した。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。なお、実測図中でたたき痕はV-V、すり痕は| - |で範囲を表した。

目 次

口絵	
例言	
記号等の説明	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	3
3 調査にいたる経緯	3
4 調査の概要	3
5 調査結果の概要	5
6 試掘調査について	8
7 本書の概要(特色)	13
8 調査日誌(抄録)	14
II 遺跡の位置と環境	16
1 位置と環境	16
(1) 位置	16
(2) 地形	16
(3) 50年前の地形図	18
(4) 砂礫層と降下火山灰	22
(5) 周辺の草花など	23
(6) 気候と風土	25
2 歴史的環境	26
(1) 鷺川(ムカワ)、井目戸(イモッペ)の語義	26
(2) ムカワの諸記録	28
(3) 古地図など	32
(4) 5万分の1地形図	32
III 鷺川町の遺跡	37
1 概 要	37
2 鷺川下流左岸地域の遺跡	43
(1) 汐見の遺跡	43
(2) 宮戸の遺跡	48
(3) 米原の遺跡	54
3 鷺川下流右岸地域の遺跡	67
(1) 春日の遺跡	67
(2) 豊城の遺跡	69
(3) 二宮の遺跡	70

4	鷗川中流地域の遺跡	72
(1)	花岡の遺跡	72
(2)	生田の遺跡	76
(3)	有明の遺跡	80
(4)	旭岡の遺跡	80
IV	調査の方法、遺物の分類	81
1	調査区の設定と調査の方法	81
(1)	調査区(グリッド)の設定	81
(2)	調査の方法	81
2	土層の区分	85
3	遺物の分類	89
(1)	土器	89
(2)	石器等	90
(3)	土製品・石製品	90
(4)	自然遺物	90
V	遺構とその遺物	91
1	概要	91
2	住居跡	94
3	Tピット	96
4	焼土	109
5	フレイク・チップ集中	119
VI	包含層の遺物	123
1	土器	123
(1)	縄文時代早期の土器	124
(2)	縄文時代前期の土器	177
(3)	縄文時代中期の土器	179
(4)	縄文時代後・晩期の土器	183
(5)	弥文時代の土器	183
2	石器	205
(1)	剥片石器	216
(2)	磨製石器	227
(3)	礫石器	227
3	土製品・石製品	243
(1)	土製品	243
(2)	石製品	244
VII	成果と問題点	245
1	宮戸4遺跡のTピットについて	245
2	アイヌ語地名のイモッペについて	251

写真図版

引用・参考文献

報告書抄録

挿 図 目 次

I 調査の概要

図 I-1-1	鷓川町の位置と遺跡位置図 …	1
図 I-1-2	日高自動車道と 宮戸 4 遺跡の位置 ……………	2
図 I-4-1	年度別調査範囲と 周辺の地形 ……………	4
図 I-5-1	遺構位置図 ……………	6
図 I-6-1	試掘溝位置図(7月) ……………	8
図 I-6-2	土層柱状図(7月) ……………	9
図 I-6-3	試掘溝位置図(10月) ……………	10
図 I-6-4	土層柱状図(10月) ……………	11
図 I-6-5	樹林部分の試掘調査 により出土した遺物 ……………	12
図 I-6-6	樹林部分の試掘調査 ……………	13

II 遺跡の位置と環境

図 II-1-1	遺跡位置図 ……………	17
図 II-1-2	50年前の地形図(1) ……………	19
図 II-1-3	50年前の地形図(2) ……………	20
図 II-1-4	50年前の地形図(3) ……………	21
図 II-1-5	砂礫層とシコツ火砕流 堆積物の堆積概念図 ……………	22
図 II-1-6	サクラソウと降下火山灰 ……	23
図 II-1-7	鷓川、河口域の流路変化 ……	25
図 II-2-1	「シモムカワ」周辺の地名 ……	27
図 II-2-2	5万分の1地形図(1) ……………	29
図 II-2-3	5万分の1地形図(2) ……………	31
図 II-2-4	5万分の1地形図(3) ……………	33
図 II-2-5	5万分の1地形図(4) ……………	35
図 II-2-6	5万分の1地形図(5) ……………	36

III 鷓川町の遺跡

図 III-1-1	大正10年の地形図 ……………	40
図 III-1-2	鷓川町の遺跡分布図 ……	41・42
図 III-2-1	沙見・宮戸・米原の 遺跡分布図 ……………	43
図 III-2-2	鷓川盛土墳墓群の遺物(1) ……	44
図 III-2-3	鷓川盛土墳墓群の遺物(2) ……	45
図 III-2-4	トンニトイ遺跡・沙見 2 遺跡 の遺物 ……………	46

図 III-2-5	柏山遺跡の遺物 ……………	47
図 III-2-6	宮戸遺跡・米原の遺物 ……	48
図 III-2-7	宮戸 3 遺跡の遺構 ……………	49
図 III-2-8	宮戸 3 遺跡の遺物(1) ……	50
図 III-2-9	宮戸 3 遺跡の遺物(2) ……	51
図 III-2-10	米原 4 遺跡 A 地区の 遺構と遺物 ……………	52
図 III-2-11	米原 4 遺跡 A 地区の遺物 ……	53
図 III-2-12	米原 4 遺跡 B 地区 H-1 ……	54
図 III-2-13	米原 4 遺跡 B 地区 H-1 の遺物(1) ……………	55
図 III-2-14	米原 4 遺跡 B 地区 H-1 の遺物(2) ……………	56
図 III-2-15	米原 4 遺跡 B 地区 H-4 とその遺物 ……………	57
図 III-2-16	米原 4 遺跡 B 地区の遺物(1) ……	58
図 III-2-17	米原 4 遺跡 B 地区の遺物(2) ……	59
図 III-2-18	米原 3 遺跡 H-1 とその遺物 ……………	60
図 III-2-19	米原 3 遺跡 H-2 とその遺物 ……………	61
図 III-2-20	米原 3 遺跡の遺物(1) ……	62
図 III-2-21	米原 3 遺跡の遺物(2) ……	63
図 III-2-22	米原 3 遺跡の遺物(3) ……	64
図 III-2-23	米原 3 遺跡 (鷓川町教委調査地点)の 遺構、遺物(1) ……………	65
図 III-2-24	米原 3 遺跡 (鷓川町教委調査地点)の 遺物(2) ……………	66
図 III-3-1	春日・豊城・二宮 の遺跡分布図 ……………	68
図 III-3-2	春日遺跡・モイバツ遺跡 ・パンヤケラ遺跡・豊城 2 遺跡 ・上カーナイ・藤高沼遺跡の 遺物 ……………	69
図 III-3-3	二宮遺跡の遺物 ……………	71
図 III-4-1	花岡・生田・有明	

	の遺跡分布図	73	図V-5-1	FC-1	120
図III-4-2	花岡1遺跡の遺物(1)	74	図V-5-2	FC-1出土の遺物	121
図III-4-3	花岡1遺跡の遺物(2)	75	VI 包含層の遺物		
図III-4-4	花岡3遺跡・オルイカチャシ ・ルベシナイ遺跡の遺物	76	図VI-1-1	包含層出土土器分布図(1)	124
図III-4-5	パンケニウキナイ1遺跡 ・パンケニウキナイ2遺跡 ・ニクトンナイ1遺跡 ・ニクトンナイ2遺跡 ・ベンケニウキナイ遺跡 ・ピタルシナイ1遺跡 ・ピタルシナイ2遺跡の 遺物	77	図VI-1-2	包含層出土土器分布図(2)	125
図III-4-6	パンケニウキナイ1遺跡の 遺物(1)	78	図VI-1-3	包含層出土土器分布図(3)	126
図III-4-7	パンケニウキナイ1遺跡の 遺物(2)	79	図VI-1-4	包含層出土土器分布図(4)	127
IV 調査の方法、遺物の分類			図VI-1-5	包含層出土土器分布図(5)	128
図IV-1-1	調査区設定図	82	図VI-1-6	包含層出土土器分布図(6)	129
図IV-1-2	Ⅲ層上面地形図	83	図VI-1-7	包含層出土土器分布図(7)	130
図IV-1-3	最終面地形図	84	図VI-1-8	包含層出土土器分布図(8)	131
図IV-2-1	土層柱状図	85	図VI-1-9	包含層出土土器分布図(9)	132
図IV-2-2	メインセクション(1)	86	図VI-1-10	包含層出土土器分布図(10)	133
図IV-2-3	メインセクション(2)	87	図VI-1-11	包含層出土土器分布図(11)	134
図IV-2-4	メインセクション(3)	88	図VI-1-12	包含層出土土器分布図(12)	135
V 遺構とその遺物			図VI-1-13	包含層出土土器分布図(13)	136
図V-1-1	遺構位置図	92	図VI-1-14	包含層出土土器分布図(14)	137
図V-2-1	H-1とその遺物	95	図VI-1-15	包含層出土土器分布図(15)	138
図V-3-1	TP-5・6	97	図VI-1-16	包含層出土土器分布図(16)	139
図V-3-2	TP-7・8	99	図VI-1-17	包含層出土土器分布図(17)	140
図V-3-3	TP-9・10	100	図VI-1-18	包含層出土土器分布図(18)	141
図V-3-4	TP-11・12	101	図VI-1-19	包含層出土土器分布図(19)	142
図V-3-5	TP-13・14	103	図VI-1-20	包含層出土土器分布図(20)	143
図V-3-6	TP-15・16	105	図VI-1-21	包含層出土土器分布図(21)	144
図V-3-7	TP-17	106	図VI-1-22	包含層出土土器分布図(22)	145
図V-3-8	Tピット出土の遺物	107	図VI-1-23	包含層出土土器分布図(23)	146
図V-4-1	F-1~8	110	図VI-1-24	包含層出土土器分布図(24)	147
図V-4-2	F-9~18	112	図VI-1-25	包含層出土土器分布図(25)	148
図V-4-3	F-19~26	114	図VI-1-26	包含層出土土器分布図(26)	149
図V-4-4	焼土出土の遺物	117	図VI-1-27	包含層出土土器分布図(27)	150
			図VI-1-28	包含層出土土器分布図(28)	151
			図VI-1-29	包含層出土土器分布図(29)	152
			図VI-1-30	包含層出土土器分布図(30)	153
			図VI-1-31	包含層出土土器分布図(31)	154
			図VI-1-32	包含層出土土器分布図(32)	155
			図VI-1-33	包含層出土土器分布図(33)	156
			図VI-1-34	包含層出土土器分布図(34)	157
			図VI-1-35	包含層出土土器分布図(35)	158
			図VI-1-36	包含層出土土器分布図(36)	159
			図VI-1-37	包含層出土土器分布図(37)	160

図VI-1-38	包含層出土の土器(1)	161	図VI-2-8	包含層出土石器分布図(8)	213
図VI-1-39	包含層出土の土器(2)	162	図VI-2-9	包含層出土石器分布図(9)	214
図VI-1-40	包含層出土の土器(3)	163	図VI-2-10	包含層出土石器分布図(10)	215
図VI-1-41	包含層出土の土器(4)	164	図VI-2-11	包含層出土の石器(1)	218
図VI-1-42	包含層出土の土器(5)	165	図VI-2-12	包含層出土の石器(2)	219
図VI-1-43	包含層出土の土器(6)	166	図VI-2-13	包含層出土の石器(3)	220
図VI-1-44	包含層出土の土器(7)	168	図VI-2-14	包含層出土の石器(4)	221
図VI-1-45	包含層出土の土器(8)	170	図VI-2-15	包含層出土の石器(5)	222
図VI-1-46	包含層出土の土器(9)	172	図VI-2-16	包含層出土の石器(6)	224
図VI-1-47	包含層出土の土器(10)	174	図VI-2-17	包含層出土の石器(7)	225
図VI-1-48	包含層出土の土器(11)	175	図VI-2-18	包含層出土の石器(8)	226
図VI-1-49	包含層出土の土器(12)	176	図VI-2-19	包含層出土の石器(9)	228
図VI-1-50	包含層出土の土器(13)	178	図VI-2-20	包含層出土の石器(10)	229
図VI-1-51	包含層出土の土器(14)	180	図VI-2-21	包含層出土の石器(11)	230
図VI-1-52	包含層出土の土器(15)	182	図VI-2-22	包含層出土の石器(12)	231
図VI-1-53	包含層出土の土器(16)	184	図VI-2-23	包含層出土の石器(13)	232
図VI-2-1	包含層出土石器分布図(1)	206	図VI-2-24	包含層出土の石器(14)	234
図VI-2-2	包含層出土石器分布図(2)	207	図VI-3-1	包含層出土の土製品・石製品	243
図VI-2-3	包含層出土石器分布図(3)	208	VII 成果と問題点		
図VI-2-4	包含層出土石器分布図(4)	209	図VII-1-1	Tピットの形態分類模式	245
図VI-2-5	包含層出土石器分布図(5)	210	図VII-1-2	Tピット配列図	247
図VI-2-6	包含層出土石器分布図(6)	211	図VII-1-3	イモッペ川流域の 遺跡群	249・250
図VI-2-7	包含層出土石器分布図(7)	212			

表 目 次

I 調査の概要

表 I - 5 - 1 遺構敷一覽	7
表 I - 5 - 2 出土遺物一覽	7

III 鷓川町の遺跡

表 III - 1 - 1 鷓川町の遺跡一覽(1)	38
表 III - 1 - 2 鷓川町の遺跡一覽(2)	39

V 遺構とその遺物

表 V - 1 - 1 検出遺構一覽	93
表 V - 2 - 1 H - 1 出土遺物一覽	95
表 V - 2 - 2 H - 1 掲載遺物一覽(1)土器	95
表 V - 2 - 3 H - 1 掲載遺物一覽(2)石器	95
表 V - 3 - 1 Tピット掲載遺物一覽 (1)土器	107
表 V - 3 - 2 Tピット掲載遺物一覽 (2)石器	108
表 V - 3 - 3 Tピット出土遺物一覽	108
表 V - 4 - 1 焼土掲載遺物一覽 (1)土器	117
表 V - 4 - 2 焼土掲載遺物一覽 (2)石器	117
表 V - 4 - 3 焼土出土遺物一覽	118
表 V - 5 - 1 フレイク・チップ集中 出土遺物一覽	120
表 V - 5 - 2 フレイク・チップ集中 掲載遺物一覽(1)土器	122
表 V - 5 - 3 フレイク・チップ集中 掲載遺物一覽(2)石器	122

VI 包含層の遺物

表 VI - 1 - 1 層別別出土土器一覽	123
表 VI - 1 - 2 包含層掲載土器一覽(1)	185
表 VI - 1 - 3 包含層掲載土器一覽(2)	186

表 VI - 1 - 4 包含層掲載土器一覽(3)	187
表 VI - 1 - 5 包含層掲載土器一覽(4)	188
表 VI - 1 - 6 包含層掲載土器一覽(5)	189
表 VI - 1 - 7 包含層掲載土器一覽(6)	190
表 VI - 1 - 8 包含層掲載土器一覽(7)	191
表 VI - 1 - 9 包含層掲載土器一覽(8)	192
表 VI - 1 - 10 包含層掲載土器一覽(9)	193
表 VI - 1 - 11 包含層掲載土器一覽(10)	194
表 VI - 1 - 12 包含層掲載土器一覽(11)	195
表 VI - 1 - 13 包含層掲載土器一覽(12)	196
表 VI - 1 - 14 包含層掲載土器一覽(13)	197
表 VI - 1 - 15 包含層掲載土器一覽(14)	198
表 VI - 1 - 16 包含層掲載土器一覽(15)	199
表 VI - 1 - 17 包含層掲載土器一覽(16)	200
表 VI - 1 - 18 包含層掲載土器一覽(17)	201
表 VI - 1 - 19 包含層掲載土器一覽(18)	202
表 VI - 1 - 20 包含層掲載土器一覽(19)	203
表 VI - 1 - 21 包含層掲載土器一覽(20)	204
表 VI - 2 - 1 層別別出土石器等一覽	205
表 VI - 2 - 2 包含層掲載石器一覽(1)	235
表 VI - 2 - 3 包含層掲載石器一覽(2)	236
表 VI - 2 - 4 包含層掲載石器一覽(3)	237
表 VI - 2 - 5 包含層掲載石器一覽(4)	238
表 VI - 2 - 6 包含層掲載石器一覽(5)	239
表 VI - 2 - 7 包含層掲載石器一覽(6)	240
表 VI - 2 - 8 包含層掲載石器一覽(7)	241
表 VI - 2 - 9 包含層掲載石器一覽(8)	242
表 VI - 3 - 1 土製品一覽	244
表 VI - 3 - 2 石製品一覽	244

VII 成果と問題点

表 VII - 1 - 1 Tピット属性一覽表	246
-------------------------	-----

図 版 目 次

- | | |
|---|--|
| <p>図版 1 1 遺跡遠景(田浦地区・高速度路の工事中盛土より、北西から)</p> <p>2 遺跡遠景(道々鷗川・穂別線と町道米原1号線の合流点より、東から)</p> <p>3 遺跡遠景(鷗川左岸堤防より、西から)</p> <p>図版 2 1 調査風景(斜面部分、南東から)</p> <p>2 調査風景(斜面部分、南から)</p> <p>図版 3 1 調査風景(斜面部分の地形測量、北から)</p> <p>2 調査風景(斜面部分、北西から)</p> <p>3 調査風景(南から)</p> <p>4 作業風景(作業用道路整備、西から)</p> <p>5 出勤風景(西から)</p> <p>図版 4 1 調査風景(平坦部分、南西から)</p> <p>2 調査風景(平坦部分、大雨の後、北西から)</p> <p>図版 5 1 調査風景(宮戸3遺跡、土層確認調査、北西から)</p> <p>2 土層断面(宮戸3遺跡、南西から)</p> <p>3 土層断面(宮戸3遺跡、Ⅷ層中の腐植部分、南西から)</p> <p>図版 6 1 調査風景(平坦部分試掘調査、南東から)</p> <p>2 調査風景(平坦部分試掘調査、北から)</p> <p>3 遺物出土状況(平坦部分・M)</p> <p>4 調査風景(斜面部分試掘調査、北から)</p> <p>5 遺物出土状況(斜面部分・T)</p> <p>図版 7 1 斜面部分完掘状況(北から)</p> <p>2 平坦部分完掘状況(南から)</p> <p>3 土層断面(斜面部分、Y11~13、東から)</p> <p>4 土層断面(平坦部分、M22、南から)</p> <p>図版 8 1 土壌集積状況(南から)</p> <p>2 土壌集積状況(東から)</p> <p>3 イモッペ川の氾濫による町道米原2線の冠水状況(南から)</p> <p>4 常時のイモッペ川と土壌(南東から)</p> <p>5 氾濫時のイモッペ川と土壌(南東から)</p> <p>図版 9 1 作業風景(次年度調査区保護、南から)</p> | <p>2 作業風景(浸透槽保護、南西から)</p> <p>3 作業風景(簡易水道管保護、西から)</p> <p>4 作業風景(簡易水道管保護、南東から)</p> <p>図版10 1 遺跡見学(宮戸小学校)</p> <p>2 遺跡見学(宮戸小学校)</p> <p>3 遺跡見学(田浦小学校)</p> <p>4 遺跡見学(田浦小学校)</p> <p>5 遺跡見学(二宮小学校)</p> <p>6 遺跡見学(鷗川町高齢者大学)</p> <p>図版11 1 汐見2区集落と道指定史跡「鷗川盛土墳墓群」(珍川左岸堤防より、西から)</p> <p>2 汐見2区集落(鷗川左岸堤防より、西から)</p> <p>3 汐見2区集落(南東から)</p> <p>4 汐見2区集落(北東から)</p> <p>図版12 1 道指定史跡「鷗川盛土墳墓群」遠景(鷗川左岸堤防より、北西から)</p> <p>2 鷗川盛土墳墓群 近景(珍川左岸堤防上流側より、北東から)</p> <p>図版13 1 鷗川盛土墳墓群(北東から)</p> <p>2 鷗川盛土墳墓群 標柱</p> <p>3 鷗川盛土墳墓群 看板</p> <p>4 八王子千人同心入植地(南から)</p> <p>5 汐見3遺跡(東から)</p> <p>図版14 1 トンニトイ遺跡(南西から)</p> <p>2 ムレトイの丘(南西から)</p> <p>3 トンニカ遺跡(東から)</p> <p>4 チン川左岸1遺跡(南西から)</p> <p>5 チン川左岸2遺跡(南から)</p> <p>図版15 1 柏山遺跡 遠景(北西から)</p> <p>2 柏山遺跡(西から)</p> <p>3 柏山遺跡 標柱</p> <p>4 チン川左岸1・2遺跡(柏山遺跡より、南東から)</p> <p>図版16 1 花岡1遺跡 遠景(北東から)</p> <p>2 オルイカチャシ跡(北から)</p> <p>図版17 1 「オマンルバル」・春日遺跡 遠景(南から)</p> |
|---|--|

	2	春日遺跡(南東から)		2	TP-11完掘(南から)
	3	春日遺跡 標柱		3	TP-13検出状況(北から)
	4	「萌別」標柱		4	TP-13土層断面(南から)
	5	モイベツ遺跡(南から)		5	TP-13完掘(南から)
図版18	1	「トコムの坂」(北から)	図版27	1	TP-12検出状況(南から)
	2	「トコムの坂」標柱		2	TP-12土層断面(南から)
	3	「オマンルバル」(「トコムの坂」より、南東から)		3	TP-12調査状況(北から)
				4	TP-12完掘(南から)
図版19	1	「オマンルバル」 遠景(南西から)	図版28	1	TP-14土層断面(南東から)
	2	「オマンルバル」(南西から)		2	TP-14検出状況(南西から)
	3	「オマンルバル」(南西から)		3	TP-14調査状況(東から)
図版20	1	豊城1・2・3遺跡 遠景(南西から)		4	TP-14完掘(南から)
	2	二宮遺跡へ続く二宮小学校の丘(南から)	図版29	1	TP-15土層断面(北東から)
	3	正門脇に立てられた看板		2	TP-15検出状況(南西から)
	4	二宮遺跡(南東から、遺物が出土した丘はすでに削平されている)		3	TP-15調査状況(北から)
				4	TP-15完掘(南東から)
図版21	1	H-1 検出状況(東から)	図版30	1	TP-16検出状況(南から)
	2	H-1 土層断面(東から)		2	TP-16土層断面(南から)
	3	H-1 土層断面(南から)		3	TP-16完掘(南から)
	4	H-1 完掘(東から)		4	TP-18土層断面(北から)
図版22	1	TP-5 土層断面(東から)		5	TP-18今年度調査区内完掘(北西から)
	2	TP-5 完掘(西から)	図版31	1	TP-17土層断面(南から)
	3	TP-6 土層断面(北から)		2	TP-17完掘(南から)
	4	TP-6 完掘(南から)		3	TP-17墳底オーバーハング部分(北から)
図版23	1	TP-7 土層断面(西から)		4	TP-18埋め戻し状況(北西から)
	2	TP-7 完掘(西から)	図版32	1	F-14検出状況(西から)
	3	TP-8 土層断面(北西から)		2	F-14土層断面(南から)
	4	TP-8 完掘(北西から)		3	F-17・18検出状況(西から)
図版24	1	TP-9 検出状況(南から)		4	F-17土層断面(南西から)
	2	TP-9 土層断面(南から)		5	FC-1 検出状況(西から)
	3	TP-9・11調査状況(南東から)	図版33	1	遺物出土状況(南から)
	4	TP-9 調査状況(南から)		2	遺物出土状況(北西から)
	5	TP-9 完掘(南から)		3	遺物出土状況(Y19c、北東から)
図版25	1	TP-10検出状況(南西から)		4	遺物出土状況(T12c・d、北から)
	2	TP-10土層断面(南西から)	図版34	1	遺物出土状況(V17付近、南西から)
	3	TP-10調査状況(南西から)		2	遺物出土状況(V17d、南から)
	4	TP-10完掘(南西から)		3	遺物出土状況(I13c、西から)
	5	TP-10調査状況(南から)		4	遺物出土状況(I13c、南東から)
図版26	1	TP-11土層断面(南から)			

- 5 遺物出土状況(113c、南から)
- 図版35 1 遺構出土の土器
- 図版36 1 遺構出土の石器
2 包含層出土の復元土器(図VI-1-38-1)
3 包含層出土の復元土器(図VI-1-38-2)
- 図版37 1 包含層出土の復元土器(図VI-1-39-3)
2 包含層出土の復元土器(図VI-1-39-4)
3 包含層出土の復元土器(図VI-1-39-5)
4 包含層出土の復元土器(図VI-1-40-9)
5 包含層出土の復元土器(図VI-1-40-6)
6 包含層出土の復元土器(図VI-1-40-7)
7 包含層出土の復元土器(図VI-1-40-8)
- 図版38 1 包含層出土の復元土器(図VI-1-40-10)
2 包含層出土の復元土器(図VI-1-41-11)
3 包含層出土の復元土器(図VI-1-41-12)
4 包含層出土の復元土器(図VI-1-41-13)
5 包含層出土の土器(図VI-1-41-14)
- 図版39 1 包含層出土の土器(1)
- 図版40 1 包含層出土の土器(2)
- 図版41 1 包含層出土の土器(3)
- 図版42 1 包含層出土の土器(4)
- 図版43 1 包含層出土の土器(5)
- 図版44 1 包含層出土の土器(6)
- 図版45 1 包含層出土の土器(7)
- 図版46 1 包含層出土の土器(8)
- 図版47 1 包含層出土の土器(9)
- 図版48 1 包含層出土の土器(10)
- 図版49 1 包含層出土の土器(11)
- 図版50 1 包含層出土の土器(12)
- 図版51 1 包含層出土の土器(13)
- 図版52 1 包含層出土の土器(14)
- 図版53 1 包含層出土の土器(15)
- 図版54 1 包含層出土の土器(16)
- 図版55 1 包含層出土の土器(17)
- 図版56 1 包含層出土の土器(18)
- 図版57 1 包含層出土の土器(19)
- 図版58 1 包含層出土の石器(1)
- 図版59 1 包含層出土の石器(2)
- 図版60 1 包含層出土の石器(3)
- 図版61 1 包含層出土の石器(4)
- 図版62 1 包含層出土の石器(5)
- 図版63 1 包含層出土の石器(6)
- 図版64 1 包含層出土の石器(7)
- 図版65 1 包含層出土の石器(8)
- 図版66 1 包含層出土の石器(9)
- 図版67 1 包含層出土の石器(10)
2 包含層出土の石器(11)
- 図版68 1 包含層出土の石器(12)
- 図版69 1 包含層出土の石器(13)
- 図版70 1 包含層出土の石器(14)
- 図版71 1 包含層出土の石器(15)
- 図版72 1 包含層出土の石器(16)
- 図版73 1 包含層出土の石器(17)
2 包含層出土の土製品(円盤状土製品ほか、図VI-3-1-1~5・7)
3 包含層出土の土製品(板状土偶、図VI-3-1-6)
4 包含層出土の石製品(図VI-3-1-8)

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：日高自動車道厚真門別道路工用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：宮戸4遺跡(北海道教育委員会登録番号：J-14-40)

所在地：勇払郡鵜川町宮戸182の1ほか

調査面積：5310m²

受託期間：平成13年4月2日～平成14年3月29日

発掘期間：平成13年5月7日～10月26日

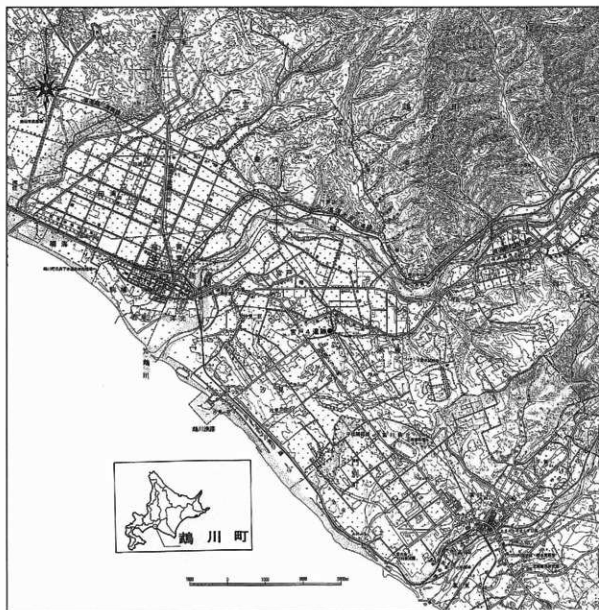


図 I-1-1 鵜川町の位置と遺跡位置図

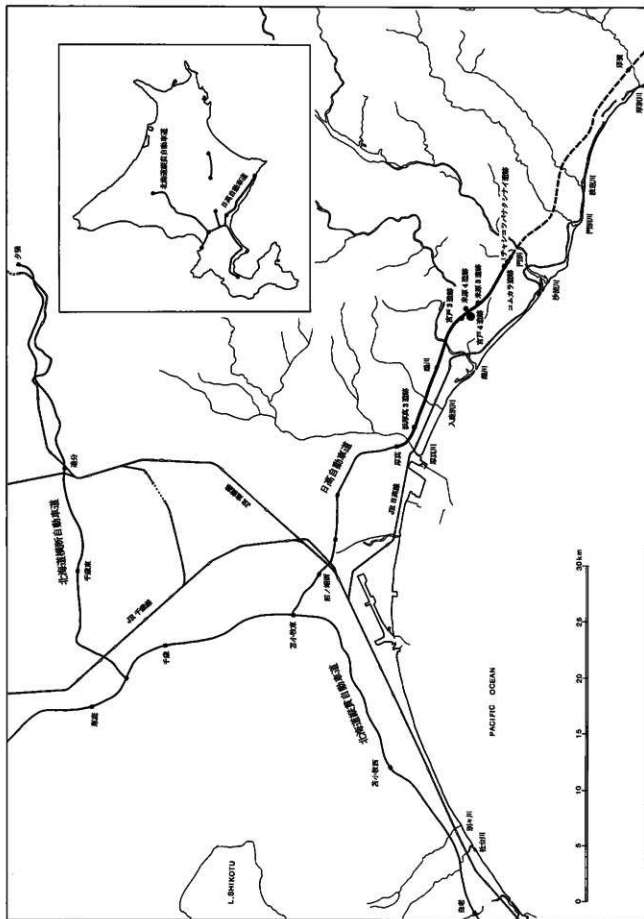


図 1-1-2 日高自動車道と宮戸 4 遺跡の位置

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 大澤 満 専務理事 宮崎 勝 総務部長 柳瀬 茂樹

常務理事兼第1調査部長 木村 尚俊(7月17日死去)

第1調査部長 大沼 忠春(7月18日から)

第2調査課 課長 西田 茂(発掘担当者)

主査 鎌田 望(発掘担当者)

主任 芝田 直人(発掘担当者)

文化財保護主事 柳瀬 由佳(発掘担当者)

3 調査にいたる経緯(図I-1-2)

日高自動車道は、苫小牧市から浦河町までの延長120kmの高規格幹線道路である。道央自動車道の苫小牧東インターチェンジから厚真(あつま)インターチェンジまでの苫東道路19.7kmは、1998年(平成10)暫定供用開始となったが、その東側は静内町までが事業区間(工事区間、着工準備区間)、さらに東の浦河町までは計画区間となっている。このうち厚真から門別までの厚真門別道路20kmは現在建設工事が進められている。なお苫東道路は高規格道路ではあるが、無料通行となっている。

この厚真門別(あつまもんべつ)道路の建設工事にかかわる埋蔵文化財の保護についての活動は、北海道教育委員会が行っている。すなわち1993年(平成5)8月の遺跡所在確認調査、1999年(平成11)8月以降の遺跡範囲確認調査などである。

範囲確認調査を終えた遺跡で、工事計画の変更が不可能であるために発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は、厚真町内1か所(浜厚真3遺跡)、鷗川町内4か所(米原3遺跡、米原4遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡)、門別町内2か所(コムカラ遺跡、チャシコツバナクシナイ遺跡)である。このうち鷗川町内の3遺跡(米原3遺跡、米原4遺跡、宮戸3遺跡)については、2000年(平成12)に発掘調査が行われ、2001年3月に報告書が刊行されている。

宮戸(みやと)4遺跡は、北海道教育委員会の日高自動車道建設にかかわる遺跡所在確認調査によって明らかになった遺跡である。範囲確認調査は、以下に示すように土地の所有、地表現況の実情などに規制されて3回に分けて行われている。なお()内は北海道教育委員会の調査担当者名である。

1999年(平成11)8月4日、宮戸3遺跡よりも南側の樹林部分(大沼忠春)。

1999年11月9日、2001年に調査した樹林部分並びに2000年に一部調査した畑地(宗像公司)。

このときイモッペ川の河川敷部分も試掘調査の予定であったが、簡易水道管の埋設があらかじめあったので、次回を期すことになった。

2000年9月20日、イモッペ川の河川敷部分(宗像公司)。

2000年7月31日から9月26日まで、財団法人北海道埋蔵文化財センターにより、600m²の発掘調査が行われた。

4 調査の概要(図I-1-1、図I-4-1)

宮戸4遺跡は、JR鷗川駅の東南東約5kmに位置している。鷗川市街地からは一般河川鷗川を隔てたところであり、その支流イモッペ川の上流域にあたる。遺跡の立地は、標高40～50mほどの台地を開析して、略南から北に流れているイモッペ川が、標高20mほどの平坦部にさしかかる辺りである。

今年度は遺跡調査の2か年目である。高速道路の建設計画に基づき「町道米原2線」に接した区域とイモッペ川の改修区域とを発掘した。町道に接する区域は、標高19mから27mの斜面(樹林)部分であり、河川改修区域は標高20mから22mの平坦(水田)部分である。平坦部分では、水田造成時に遺物包

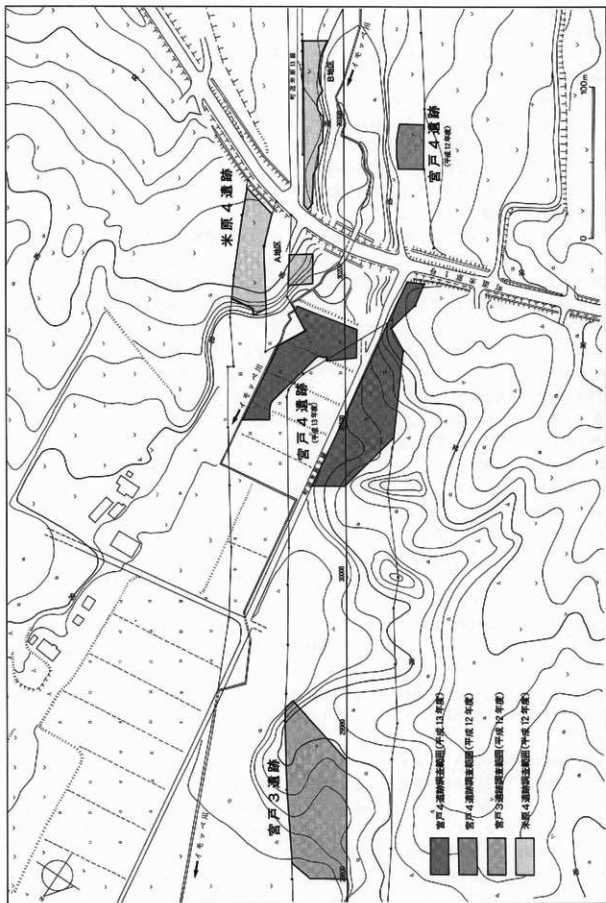


図 I-4-1 年度別調査範囲と周辺の地形

含層が削平され消失したところがあり、さらに地域住民の使用している簡易水道2本の埋設時に包含層が攪乱を受けている(北側のものは曙第2地区給水利用組合の水源施設、南側のものは宮戸第1給水利用組合の水源施設である)。これら最近の人為範囲を除くと、斜面部分、平坦部分ともに17世紀中葉の降下火山灰(有珠 \downarrow 降下火山灰と樽前 \downarrow 降下火山灰)に40~60cmほど覆われており、縄文時代の遺物包含層の残存状況は比較的良好であった。

斜面部分での堆積土層の概略は、17世紀中葉の降下火山灰(白色)の約60~80cmほどは黒褐色土・黒色土であり、さらにその下は褐色土・黄褐色土(礫を多く含む)である。縄文時代早期の土器、石器等は褐色土・黄褐色土の10cmの深さまでに包含されている。

発掘の進展に伴って、遺跡範囲の拡大が推測されたので北海道教育委員会の指導のもと試掘調査を行った。これにより平坦(水田)部分、斜面(樹林)部分ともに遺物包蔵地が広がっていることが判明した。一部については発掘をおこなったが、大部分は次年度以降の調査範囲となる。

5 調査結果の概要(図I-4-1、図I-5-1)

検出した遺構は、竪穴住居跡1、Tピット13、焼土26、剥片集中1である。これらの遺構はすべて斜面(樹林)部分にある。住居跡は斜面部分の沢地形の中、標高20mにある。長径5mほどの略円形で、掘り込みが浅く、明瞭な炉跡や柱穴をもたない。床面から検出された土器片から判断すると、縄文時代早期後半(コックロ式土器)の遺構と考えられる。

Tピットは、平面形により、楕円形のものと同楕円形のものに分けられる。楕円形のは比較的深く(1.3m~1.5m)掘り込まれており、長楕円形のは比較的浅い(1.0m~1.3m)。これらのTピット相互の連絡を推定すると、楕円形のは斜面地形を沢に沿うように分布しており、一方長楕円形のは沢地形を横切るように列をなしている。Tピット同士の間隔は確認されなかった。

焼土は、検出された土層面ならびに出土遺物から判断すると、その大半は縄文時代早期後半の時期に形成されたものである。同じような判断基準に照らして縄文時代前期前半、縄文時代中期後半とみなされるものもある。

剥片集中は、長径5m弱の範囲に黒曜石の残核片、剥片、破片が1600点ほど検出されたもの。このなかには製作途中の破損品とみなされる石鏃片9点もある。こは素材の黒曜石を打ち割り、剥片を加工し石鏃を製作したところであろう。

平坦部分では、縄文時代にあってもいくたびかイモッペ川の流路が変化した痕跡が認められ、今回の調査範囲からは明瞭な遺構は検出されなかった。

遺物は、土器22650点、石器等33980点、合計56630点が出土した。縄文時代の遺物包含層の広い範囲にわたって、多量の礫(14.3万点)が含まれていたが、大・中・小の全点を水洗いし詳細に観察した結果、その大多数は自然営力によるものと判断した。土器は縄文時代の高坏1個体分のほかは縄文時代早期、前期、中期、後期のものである。型式的な特徴が判明するものは、東館路Ⅲ式、コックロ式、中茶路式、東館路Ⅳ式、綱文式、静内中野式、植苗式、天神山式、柏木川式、余市式、タブコブ式などである。出土状態は、時期の先後関係が包含土層の上下として捉えられるものが多い。

石器は石鏃、石槍、石鏃、つまみ付ナイフ、石斧、たたき石、すり石、砥石、台石などがあり、これらの石器の破損品、製作途中の残片なども多い。これらの石器等のほとんどは、縄文時代早期、前期、中期のものとみなされる。石鏃、つまみ付ナイフでは、検出層位およびその形態的な特色からみて、縄文時代早期後半、縄文時代前期前半と判断できるものがある。さらに石鏃には、その検出層位、形態的な特色から判断して、縄文時代後期、晩期、続縄文時代のものとみなされるものもある。

土偶の一部かとみなされる、いくぶんのふくらみ部を持つ板状の土製品は、縄文時代前期の土器の出土層位から検出されたものである。

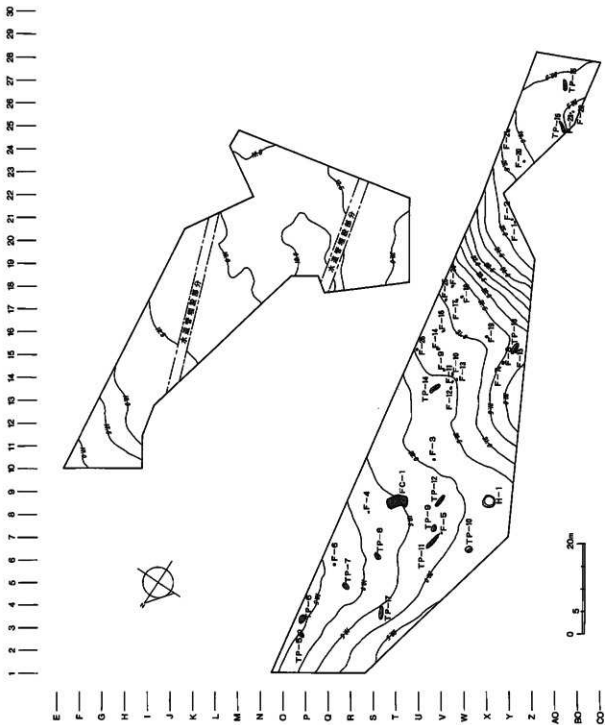


圖 I-5-1 遺構位置圖

表 I-5-1 遺構数一覧

種 別	合 計
竪穴住居跡	1
Tピット	13
焼土	26
フレイク・チップ集中	1
総 計	41

表 I-5-2 出土遺物一覧

土 器			石 器 等					
分 類	点 数		分 類	点 数		分 類	点 数	
	遺構	包含層		遺構	包含層		遺構	包含層
Ib-1	59	11068	石鏃	19	534	石斧	2	372
Ib-2	50	3931	石槍・ナイフ		26	たたき石		49
Ib-3	36	658	石鏃	2	81	くぼみ石		17
Ib-4	3	1116	つまみ付ナイフ		112	すり石		122
Ib細分不能	3	288	スクレイパー	1	228	石錘		2
IIa-1	16	2340	ピース・エスキュー		20	砥石		24
IIa-2	1	311	Rフレイク	4	225	台石		57
IIa細分不能	1	71	Uフレイク		44	加工痕のある礫		7
IIb	1	166	両面調整石器		15	礫・礫片	1167	2570
IIIa		18	石核・原石	2	59	軽石		3
IIIb-1	1	802	フレイク	2437	8836			
IIIb-2	5	1011	小 計				3634	13403
IIIb細分不能	1	104	土・石製品					
IVa		519	分 類	点 数		分 類	点 数	
IVc		53		遺構	包含層		遺構	包含層
VII		38	土製品		8	石製品		1
			小 計					9
			自 然 遺 物					
			分 類	点 数		分 類	点 数	
				遺構	包含層		遺構	包含層
			炭化ドングリ	8	3	自然礫		154723
			炭化クルミ	144	20			
小 計	177	22494	小 計				152	154746
合			計				194615	

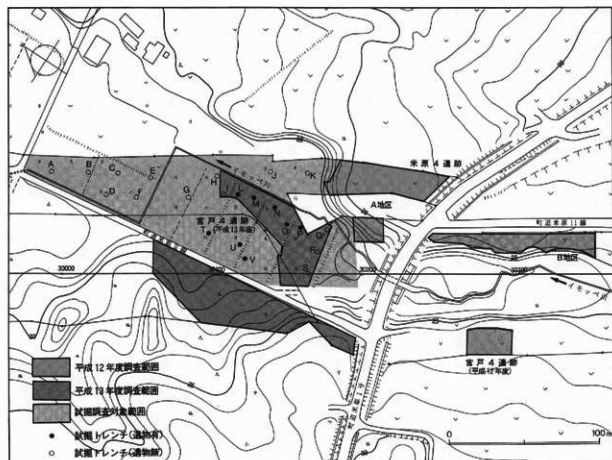
6 試掘調査について(図I-6-1・2・3・4)

今年度の宮戸4遺跡の発掘調査は、10月末までの予定で5月7日から開始した。6月上旬までの調査で、遺跡の範囲が拡大することが推定されたので、北海道教育委員会文化課へ連絡した。遺跡の広がり、遺物出土の濃淡から判断して、北側(樹林部分)と東側(水田部分)である。このうち東側(水田部分)については、イモッペ川の仮流路切り替えのために工事発注が間近であることから早急な対応が要請されたので、7月上旬に試掘調査を行い、7月10日現地での文化課の判断にしたがい、必要な区域は発掘調査を行ってきた。このとき北側(樹林部分)に関しては、10月末までに随時、埋蔵文化財センターで試掘調査を行うというものであった。

a 7月の試掘調査(図I-6-1・2)

調査の方法 発掘深度が1mを越えること、湧水による壁面崩落も生じることが想定されたので、試掘穴の大きさは2m×2.5mとした。東側(水田部分)の試掘対象面積は14900m²と広大なこと、さらに仮流路の工事発注が目前に迫っていることから、水路の計画図をもとに耕地の形状を考慮し、試掘穴を設定した。

耕作表土、盛り土、火山灰(約350年程前のもの)はスコップで掘りあげた。遺物包含層と推定される土層は、移植ゴテ、手クワ、スコップを併用して調査した。湧水は汲み出しながら発掘した。掘り上げた土は、流出防止のためすべて土嚢に入れる事にした。



図I-6-1 試掘溝位置図(7月)

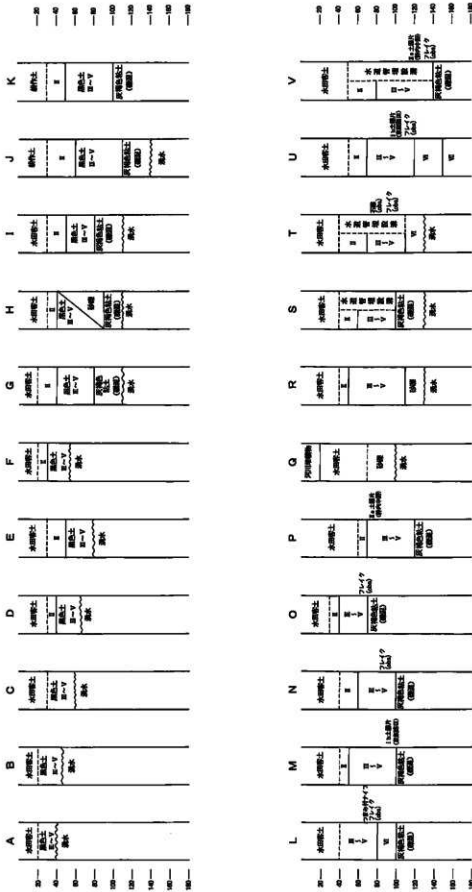


図 I-6-2 土層柱状図(7月)

調査の進行 6月28日、文化課調査班の田才雅彦主査、室蘭開発建設部苫小牧道路事務所の河門前勝己係長、埋蔵文化財センターの大沼忠春調査部長を交えて、7月からの試掘調査について現地協議を行う。この後、草払い、藪払い、表土除去など準備作業をすすめる。

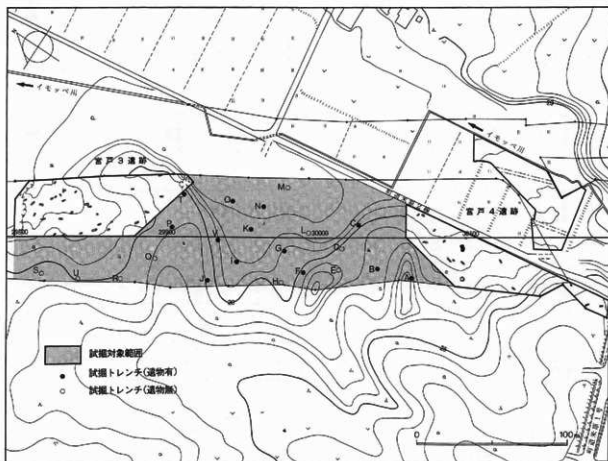
7月2日、午後から試掘を行う。4日、現地で文化課調査班の工藤研治主任へ進行状況等を説明する。10日、文化課調査班(田才主査)、苫小牧道路事務所(河門前係長)、埋蔵文化財センター(調査員)の三者で現地協議を行い、仮設流路にかかわる範囲の発掘調査をすぐに始めることとなる。さらに試掘を含む調査計画を検討、修正した。流路の周辺に関しては、順次試掘を行い7月末に全体の範囲を決定することとなる。

7月31日、文化課調査班の高橋和樹主査、宗像公司文化財保護主事の現地指導により、発掘調査を必要とする範囲が確定し、苫小牧道路事務所(河門前係長)を交えて、取り急ぎの調査範囲、工事工程との調整、新たに生起する問題点の解決方法などを協議する。

調査結果の概要 仮流路にあたる試掘穴の4か所から縄文時代早期(土器型式は東劔路Ⅲ、コックロ、中茶路など)の遺物が出土している。これらよりも西側の試掘穴からも、土器、石器などが検出されており、新たに判明した発掘を必要とする範囲は4260m²である。

b 10月の試掘調査(図I-6-3・4・5)

調査の方法 北側(樹林部分)は、用地買収は終了しているが、立ち木の伐採ができていないので、試掘穴の設定は、樹木間の適当な空間を見つけて行った。試掘穴の大きさは、発掘深度が1mを越える



図I-6-3 試掘溝位置図(10月)

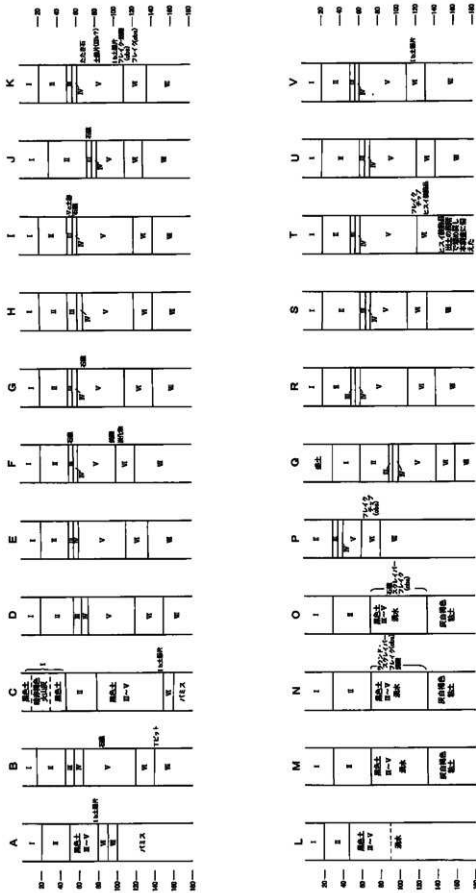


図 I-6-4 土層柱状図(10月)

ことが想定されるので、2m×2.5mとしたが、これよりも小さいところもある。

山林の表土と火山灰(約350年程前のもの)はスコップで掘りあげた。遺物包含層と推定できる土層は、移植ゴテ、手クワ、スコップを併用して発掘した。また、湧水が激しい低地部では、重機で掘りあげた土を移植ゴテ、手クワで精査して遺物の確認を行った。

調査の進行 9月11日、台風15号による豪雨のためイモッペ川が氾濫し、発掘を進めていた東側(水田部分)調査区の中を洪水が流れた。そのため修復作業などが加わり発掘調査に遅滞が生じ、試掘調査の開始も遅れることになった。水田部分の発掘が不可能な降雨時などを使い、9月中旬から、樹林部分の藪払い、下草払いをおこない地形の起伏を捉えるとともに、試掘穴の設定位置を検討した。

調査進行の全体を検討し、試掘調査は12日(金)までに終了する計画ができたので10月2日(火)その旨文化課へ連絡した。折り返し文化課調査班(田中哲郎主任)から「12日、田才雅彦主査が宮戸4遺跡に出向く」との通知があった。

試掘穴の発掘は南側から順に行った(A、B、C、Dの順)。当初の試掘範囲(約3500m²)の北端部(F)から遺物検出がなされており、範囲確定の資料を得るには、新たな試掘穴の設定を促すものであった。10日(水)午後、文化課田才主査から急遽11日の昼に出向く事になったとの連絡があった。等高線を考慮し新たな試掘穴(G、H、I、J)を準備した。

11日(木)の昼、田才主査から試掘を続行する必要がある旨の指導があった(K、L、T、P)。

遺物の出土する試掘穴が相次いだので、翌12日(金)も試掘作業を続行し、遺物検出がない地点の明確化につとめた(R、S、U)。15日、16日は発掘資料の整理にあたった。

調査結果の概要 斜面(樹林)部分での試掘調査の試掘穴19か所(A～S)は、その位置を略記してある。黒点は遺構、遺物などが検出されたところである。Bで確認されたTピットと見なされる遺構、Iから出土した縄文期の土器のほかは、前年度に発掘した宮戸3遺跡に接続する部分までほぼ全面に渡って縄文時代早期、前期の遺跡である。図示した遺物の説明で()内は試掘穴である。

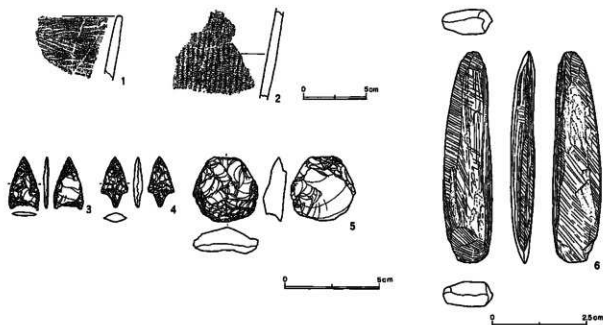


図 I - 6 - 5 樹林部分の試掘調査により出土した遺物



図 I-6-6 樹林部分の試掘調査

1：縄文時代早期の土器(K)、2：統縄文時代の土器(I)、3：黒曜石製の石鏃(F)、4：黒曜石製の石鏃(J)、5：黒曜石製のスクレイパー(N)、6：石製品(T)。この6の石製品は蛇紋岩(カンラン岩?)を素材としたものである。石斧の形態を模したものであり、擦り切りの技法が読み取れる事から、時期は縄文時代早期の可能性が高い。遺構、遺物の検出が相次いだことから、最終的な試掘対象面積は1500m²ほどに拡大した。この試掘調査により新たに判明した発掘調査を必要とする範囲は、工事中の立会調査部分(2930m²)を含む11700m²となった。

7 本書の概要(特色)

この報告書の作成にあたっては、2001年夏におこなった発掘調査の詳細な記録化はもとより、周辺の遺跡の紹介に努めることとした。鶏川町内においては、これまでに多くの遺跡の調査が行われてきたが、その紹介、報告は少数の刊行物であったり、配付先が胆振、日高地域に限定されがちなのがいくつか目に付いたからである。したがってそれらの再録部分が多くなる。さらに多くの遺跡の現状報告という意味で2001年に撮影した写真も載せた。

高速道路の建設もそうであるが、水田の客土採取などの農地造成による大地の改変が大規模に進みつつある。より自然状態に近い遺跡周辺の地形を把握するために、古い空中写真を元にして1万分の1地形図を作成した。これの判読の中から、宮戸4遺跡の南端付近にはアイヌ文化期から継続している可能性のある踏み分け道を推定するに至った。今後の遺跡調査において、どのような説明がなされるだろうか。

宮戸4遺跡の周囲は水田、畑地等として利用されているところが多いが、農地の間隙、傾斜地などには柏林に代表される自然植生が比較的残存している。遺跡調査区域の付近に準絶滅危惧種として希少性が増している「サクラソウ」の群落が認められたこともあって、開花によって識別しやすい草木の観察につとめた。そのような中で地名「むかわ」の語源の一つに引用される事もある「ムック(ばあそふ)」も認められた。これらは写真も加えて植生状態の説明に用いた。

発掘調査を経る中で得られた考古学的な論点に関しては、「Ⅶ 成果と問題点」(245ページ)に示した。遺跡の立地、Tピットにかかわる内容である。

8 調査日誌(抄録)

調査経過は調査日誌の抄録で以下に示す。

3月に作業員募集の準備をはじめ。4月4日(水)、6日(金)、10日(火)、調査予定地の現地確認を行う。地域住民の水道水源施設等の移転工事が遅延しており、調査区域の変更が確定的となる。

11日(水)、12日(木)、苫小牧市、門別町で作業員募集、採用の説明会、面接を行う。13日(金)、作業員の採用可否を決定し、作業員送迎バスの路線選定を検討する(門別方面、苫小牧方面)。

19日(木)、現地事務所、作業員休息所、作業ヤードなどの敷地造成の打ち合わせ。立ち木の伐採、雑物の除去移動、火山灰、表土の除去搬出作業の範囲、日程を現地で検討する。23日(月)、現地事務所、作業員休息所などの設置位置の確認。パスルートを確定し、実地走行する。

5月7日(月)、江利市の埋蔵文化財センターを出発し、現地の調査事務所に器材、物品を搬送する。

8日(火)、前年度に収納していた道具類を新しい保管場所に移動する。リース物品等を受け取る。表土、火山灰の除去(重機)を始める。鷗川町教育委員会へ挨拶に向かう。

9日(水)、調査事務所の開所式。大沼調査部長の挨拶。雇用に伴う事務手続き。通勤時のバス乗り場の確認など。午後、調査区域へ通じる通路の設定、確保作業。トイレの移設。

10日(木)、物品の整理、整頓。雇用に伴う諸書類の整理。11日(金)、降雨時に遺跡調査についての説明。作業用通路の確保作業。写真撮影。地域住民である山下と造さん(町議会議員)へ挨拶に向かう。

14日(月)～18日(金)、火山灰の除去作業、全面清掃、土嚢作りを始める。地形測量が終了した区域から順次発掘を始める。14日(月)、作業開始後間もなく作業員1名倒れる。すぐに、救急車を呼び、鷗川厚生病院に運ばれるも死去。午後、警察官の現場検証がなされる。15日(火)、重機を使って通路の整備を始める。17日(木)午前、苫小牧労働基準監督署の安全専門官による、現地検証が行われる。

21日(月)～25日(金)、包含層調査を継続する。順次地形測量を繰り返す。21日(月)、前年度調査分の遺物点検をはじめ、擦文土器の破片を確認する。22日(火)、前年度調査した宮戸3遺跡で、火山灰の堆積状況を検討する。23日(水)、縄文時代晩期の遺物を検出する。

28日(月)～6月1日(金)、包含層調査を継続する。周辺の遺跡の現状確認を始める。縄文時代後期、中期相当層を掘り下げる。イモツベ川の切り替え、町道の付替え工事が始まる。

6月4日(月)～9日(金)、包含層調査を継続する。文化課からの調査区域変更の図面が到着する。5日(火)、宮戸3遺跡にシカの足跡が見られる。7日(水)午前、宮戸小学校の5年生、6年生、先生計16名が遺跡見学。7月からの作業員募集を検討する。

11日(月)～15日(金)、包含層調査を継続する。土器が多く出土し始める。周辺の市町村史、誌等の資料収集を検討する。米原4遺跡の脇で、農道の工事が始まる(側溝の掘削)。

18日(月)～22日(金)、包含層調査を継続する。焼土の精査を始める。礫群の検出が顕著になる。

25日(月)～29日(金)、包含層調査を継続する。縄文時代早期の遺物が出土し始める。これまでの発掘により、遺跡の範囲が拡大されることが推定されるので、新たな試掘の計画を検討する。26日(火)午前、7月からの作業員採用の説明、面接を門別町で行う。28日(水)午後、次週からの試掘調査について、文化課(田才)、苫小牧道路(河門前)、埋文センター(大沼、西田、鎌田)三者による現地協議をおこなう。29日(金)、Tピットの精査を始める。試掘調査の準備作業。

7月2日(月)～6日(金)、包含層調査を継続し、水田部分の試掘調査を始める。Tピットの精査を継続する。6日(金)11:20、山下と造さんから私有地内を発掘しているのではないかとの指摘がある。すぐに苫小牧道路事務所の河門前係長、松坂係長へ連絡する。

9日(月)～13日(金)、試掘調査を終了し、順次包含層調査を継続する。10日(火)午後、試掘調査を

踏まえての今後の調査計画について文化課(田才)、苫小牧道路(河門前)、埋文センター、三者の現地協議を行う。12日(木)、重機による盛り土、表土、火山灰の除去を始める(切り替えの水路部分)。13日(金)、杭打開始。午前、二宮小学校17名遺跡見学。

16日(月)～19日(木)、包含層調査を継続する。切り替えの水路部分に関連して、積んである土壌の整理、橋架けなどを行う。17日(火)10:35、大沼部長から連絡「木村常務死去、通夜、告別式」。19日(木)午前、田浦小学校20名遺跡見学。

23日(月)～27日(金)、包含層調査、遺構の精査を継続する。24日(火)、地形測量の後にイモツペ川の切り替え部分を掘り始める。25日(水)、川の切り替え部分から擦文土器を検出する。

30日(月)～8月3日(金)、包含層調査を継続する。31日(火)、文化課(高橋、宗像)、苫小牧道路事務所(河門前、門馬)、埋文センター、三者で現地協議を行う。今後の調査範囲、調査の順番など。

8月6日(月)～10日(金)、包含層調査、遺構の精査を継続する。7日(火)、重機による表土、火山灰の除去。10日(金)お盆休みに備えての調査区域の保安作業。

20日(月)～24日(金)、包含層調査、遺構の精査を継続する。地形測量。遺跡の周囲でジャガイモ取り入れ始まる。23日(木)、24日(金)、イモツペ地蔵の例大祭。

27日(月)～31日(金)、包含層調査、遺構の精査を継続する。

9月3日(月)～7日(金)、包含層調査、遺構の精査を継続する。4日(火)夕刻、豊城のアンプルル(オマンブル)を見に行く。5日(水)空中写真から地形図を作ることに具体的な検討を始める。7日(金)、米原4遺跡の試掘調査が文化課(調査員:宗像公司)により行われる。

10日(月)～14日(木)、包含層調査を継続する。11日(火)、台風15号のため、250ミリをこす大雨となる。ためにイモツペ川が氾濫し、水田、豆畑等が冠水する。調査区内もイモツペ川の流路となり、一部包含層が流失し、土砂が堆積する。12日(水)降雨激しく、野外作業は休止する。13日(木)、周辺では道路、水路の復旧修復工事が始まる。14日(金)樹林部分の試掘調査の準備で藪払い、テント設置。

17日(月)～21日(金)、包含層調査、遺構の精査を継続する。最終面の清掃を行い、地形測量を始める。土層断面の検討を行い、図、写真の準備を行う。

25日(火)～28日(金)、包含層調査、遺構の精査を継続する。土層断面図、地形測量が進展する。28日(金)、町道移設のための測量が始まる。

10月1日(月)～5日(金)、包含層調査を継続。2日(火)、試掘調査開始。3日(水)重機を使って沈砂池を作る。鷓川町議一行12名、遺跡見学。5日(金)午前、鷓川町高齢者大学一行34名、遺跡見学。

9日(火)～12日(金)、包含層調査、試掘調査を継続する。重機を使って通路の補修を行う。町道切り替えの杭打ちが始まる。周辺の水田では稲刈りが行われている。10日(水)、試掘調査について文化課(田才)の現地指導あり。12日(金)、試掘調査はほぼ終了する。

15日(月)～19日(金)、包含層調査、遺構の精査を終了し、順次保護、保安作業を始める。15日(月)、苫小牧道路事務所(松坂)へ現地で、調査状況を説明する。17日(水)、調査区域の全面清掃を行う。発掘終了の写真撮影。18日(木)、地形測量。壁面の保護、土壌積み。試掘穴の埋め戻しを始める。19日(金)、水道管の保全作業。水抜き用トレンチの埋め戻し。

22日(月)～26日(金)、保護、保安のための作業を継続し、撤収作業を行う。22日(月)、壁面、水道管などの保護、保全作業。土壌積み。23日(火)、器材、道具の整理、点検。苫小牧道路事務所(河門前、松坂)、と最後の現地協議を行う。24日(水)、器材、道具の点検、水洗いなど。25日(木)、道具類の収納、保管。リース物品の点検。

26日(金)道具、器材の収納。汲み取り。リース物品の返却。江別市のセンターへ引き上げる。(西田)

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

(1) 位置(図I-1-1)

北海道の中央部には、日本海側の石狩から太平洋側の苫小牧まで幅30km長さ80kmほどの低平な地形が続いており、遺失低地帯と呼ばれている。この遺失低地帯の南東端、太平洋に面する位置に鷗川町がある。鷗川町は一級河川鷗川(むかわ)の下流域の市街地を中心に発達した農業、林業、漁業の町である。鷗川町は地勢的、歴史的にその東に隣接している日高地方との関係が密接なことが多いが、明治時代の北海道開拓使設置以来勇払郡であり、行政上はつねに胆振地方(支庁)に属している。

宮戸4遺跡は、JR 鷗川駅の東南東約5 kmに位置している。鷗川市街地からは一級河川鷗川を隔てたところであり、その東岸支流イモツベ川の上流域である。標高50mほどの台地を開削して、略南から北に流れているイモツベ川が、標高20mほどの平坦部にさしかかる辺りである。太平洋の海岸線からは、直線距離で3.5kmになる。

5万分の1地形図から割り出した遺跡の位置は、平成12年度調査区の南東端が東経141度59分01秒、北緯42度33分20秒である。

(2) 地形(口絵3、図I-4-1、図I-6-1、図II-1-1・2・3・4)

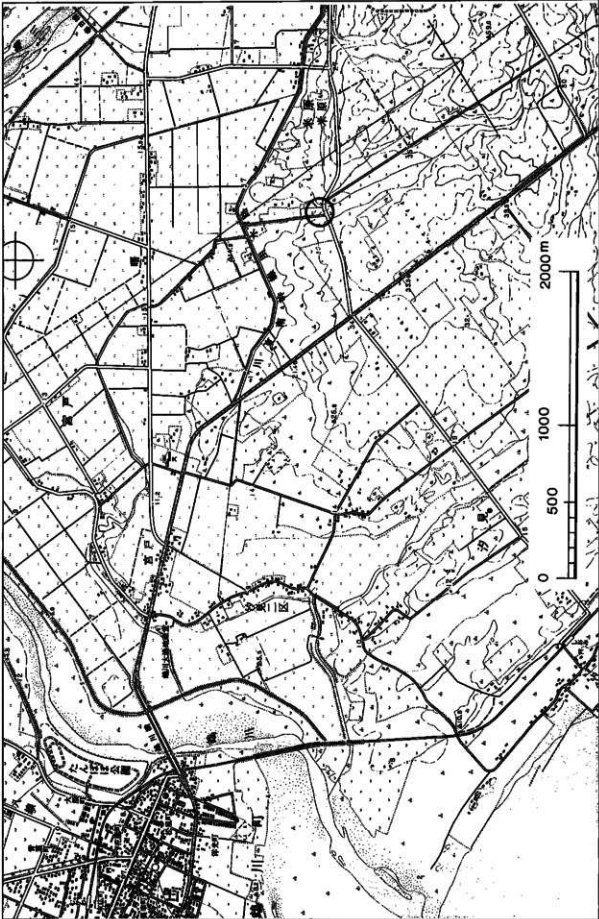
宮戸4遺跡の調査予定地は図I-4-1、図II-1-4に示した。南北の長さ350m、東西の幅100mの範囲である。遺跡の広がりは西側の丘陵上にのびることは確実であるが、遺物の分布状態から判断すると、東側および南側はこの線引きが妥当であろう。水田造成によって均平化がなされたところ、連年の耕作により不陸ならしが進行した畑地はほぼ平らな地形になっているが、遺跡範囲の大部分にはイモツベ川に向う傾斜地が連続しており、自然地形が良好に残っている。

図II-1-1は、1994年(平成6年)発行の2.5万分の1地形図である。宮戸4遺跡は、標高30m~20mの丘陵斜面にあることが良くわかる。遺跡がイモツベ川に面している事は繰り返し記述するところであるが、この川谷での遺跡よりも下流側には水田がある。さらに下流側の「川東南幹線用水路」よりも北側の平坦部には一面に水田が広がっている。減反政策の下、これらの水田では麦、豆類、花卉栽培に転じたところもある。

宮戸4遺跡よりも上流側ならびに丘陵上は、畑、牧草地、荒地となっている。道路を含む土地の区画は直線的になされておき、樹林は土地区画に応じて直線的に延びるものが目に付く。針葉樹林はカラマツを主とするもの、広葉樹林はカシワを主とするものである。この地図では良好に表現されたところは少ないが、丘陵上の土地利用は牛(乳牛)、馬(競走馬)の飼養域が卓越し、ジャガイモ、豆類、カボチャ、ナガイモなどの換金作物もみられる。

この図の左側を北から南に流れる鷗川は、その水源を脊梁山脈の日高山系に発し、幹線流路135kmを流下り太平洋に注いでいる。川名鷗川(むかわ)はアイヌ語「ムッカ・ベツ」を元としており、その意味は「塞がる川」とも伝えられている。たしかに河口部には多量の土砂が堆積しており、地形の特徴で命名されることが多いというアイヌ語地名の「塞がる川」を彷彿とさせるものがある(図II-1-7)。市街地と河川流路との間にある「たんぼ公園」は、蛇行曲流部の補正という河川改修により得られた空間地を、通常は都市公園、洪水時は遊水地とするものである。

鷗川市街地の南辺を通り、長さ800mの「鷗川橋」で鷗川を渡る道路がある。橋は新旧二本が架けられており、苫小牧と日高地方とを結ぶ国道235号である。鷗川橋から国道を東へ500m 進んだ南側に「鷗川大漁地藏堂」がある。これは1957年(昭和32年)まで「井目戸(いもつべ)大漁地藏尊」と呼ばれていたもの



図II-1-1 遺跡位置図(この図は国土地理院発行の2.5万分の1地形図「濁川」を複製したものである)

の改称堂字である。遺跡名称にも使われている地名「宮戸(みやと)」は、この「大漁地藏尊の名声」をもとにして1943年(昭和18年)の字名改正時に作られたものという。地名「井目戸(いもっべ)」は、アイヌ語の川名「イモッベ」に由来する。

(3) 50年前の地形図(図Ⅱ-1-2・3・4)

図Ⅱ-1-2・3・4は空中写真をもとに2001年12月に作成した地形図である。河川改修以前の自然地形を理解するために、空中写真は1948年、1952年撮影のものを使用している。しかし一部ではあるがイモッベ川の流路は、すでに直線化されている。にもかかわらず、20mの等高線がイモッベ川と交わる付近では蛇行の曲流部が表現されており、台地を下刻してきた水流が平地部に至って自由河川としての姿を表し始めている。さらに下流部に目を運ぶと、直線の水路の脇に蛇行流路の痕跡が読み取れる。

遺跡の立地を、台地と川谷との関係でよりわかりやすく捉えるために20m、25m、30mの等高線を強調したものが図Ⅱ-1-2である。これを見ると、台地をイモッベ川が割流した結果、緩やかな地形が南側に深く湾入しており、宮戸4遺跡はこのような湾入部の一角であることがわかる。前年度に発掘がおこなわれた宮戸3遺跡、米原4遺跡も同様な立地である。

図Ⅱ-1-3はイモッベ川の流れの全体を示したものである。イモッベ川は、図の右辺下方に流れの始めがあり、この図幅いっぱい半円を描いて左へ左へと流下り、図の左辺中央部で鷯川に注いでいる。流路と流域の土地利用の概略を上流から下流へ見ていく。

標高60mに満たない台地部をほぼ北流し、標高20mほどの平坦部からは北西方向に向う。そして道道別・鷯川線との交点から約500m北西に進んだ標高10m付近で、南西方向へ大きく曲がっている。標高14m以下の平坦部には小区画の水田が密にあるが、標高20m以上の丘陵部は小径のみが土地を区画する広葉樹林と荒地である。人家は川に沿って点在しているが、宮戸4遺跡の対岸がその最上流部にあたる。ここが水田耕作の、営農限界地なのであろう。

この屈曲部からさらに600m下ると、水面が広がり始め、長さ700m、最大幅150mほどにも及ぶ大きさの農業用の溜池になる。川の両側の小区画は水田であるが、大きな区画は畑であり、溜池の周囲は低湿な荒地である。溜池の北側には人家が比較的接近して認められる。溜池の堰き止めは、標高7.5mの段丘線にある。したがってこの用水は、3mほどの一段低い地形にある水田のためのものである。

段丘を降りたイモッベ川は、崖線に沿って南西方向へ向う。この図では標高5m以下の土地にも農地としての区画が認められるが、自然地形としては鷯川の氾濫原である。したがってここからのイモッベ川は鷯川の側線細流である。

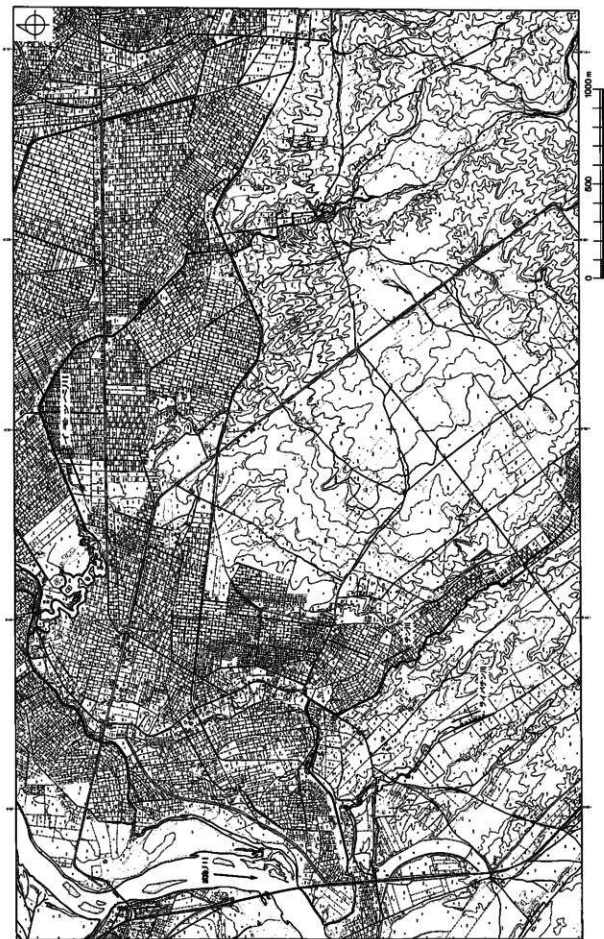
総じて平坦部の大部分は水田となっているが、その区画はすべて小さく、微地形の起伏に従ったものである。この小区画耕地の接続は独立した地形単位の内にとまっており、地質時代に起源をもつ流水の痕跡をも読み取れる。これは用水確保に強く規制される水田造成に、開拓初期の農民が対処した困難克服を示すものである。とともに農地の開発が小規模で順次なされたものであり、北海道の広い範囲に見られる直線的な大規模な土地区画とは異なることを物語る。

標高15mほどの丘陵と平坦部との境には、東から西へと流れる農業用水路がある。これは一級河川鷯川の東側平地をうるおす「川東幹線用水路」である。大規模な用水路の完成整備により水田造成がいつそう促進され、小区画の水田が増えていくのが読み取れる。

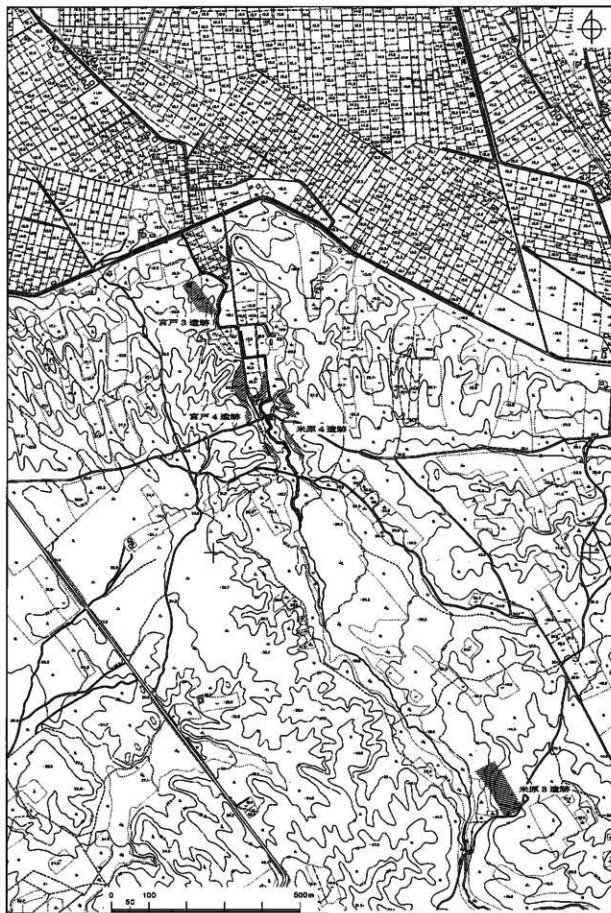
図の左端で下辺方向へ流れているのは、一級河川鷯川である。これを横切るものは北側の橋梁が国道235号の「鷯川橋」であり、南側は日本国有鉄道の日高本線鉄橋である。鷯川橋は200mほどの長さであり、国道235号は200mほど北に進んでほぼ直角に曲がり東へ向かっている。さらに2km進んで右に



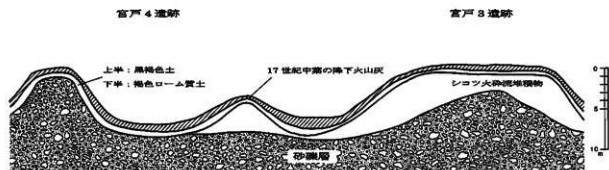
図II-1-2 50年前の地形図(1)



図II-1-3 50年前の地形図(2)



図II-1-4 50年前の地形図(3)



図II-1-5 砂礫層とシコツ火砕流堆積物の堆積概念図

折れ、南東側へ直線的に延びて日高地方へと続くものである。鷓川橋から1.5kmの地点で北側に分岐し、すぐに直線で東へ伸びる道路は、「道徳穂別・鷓川線」である。

宮戸4遺跡の南端には、地形の起伏に沿って小径が東西に延びている。川谷の斜面を下り上りして、イモツベ川を渡る道である。丘陵斜面を緩く曲がって延びるこれは鷓川河口と平取、穂別の方面とを結ぶものの一部である。農耕地及び人家との関係が薄いことから判断して、この道筋はアイヌ文化期から連続と継続している踏み分けの通路であろう。

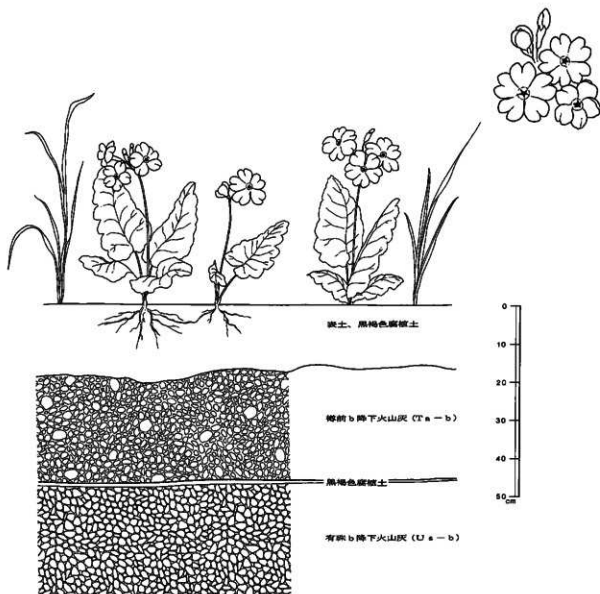
(4) 砂礫層と降下火山灰(図II-1-5)

図II-1-5は遺跡の基盤層をなしている、砂礫層とシコツ火砕流堆積物の堆積概念図である。今回調査の宮戸4遺跡と、前年度の調査区域であった宮戸3遺跡とを結ぶ線での略図である。両遺跡とも丘陵末端部に立地し、現地表で見ても緩やかな沢地形が繰り返り入こんでいる場所である。

調査区の全域に17世紀中葉の降下火山灰(1663年降下の有珠b降下火山灰:Us-b、1667年降下の樽前b降下火山灰:Ta-b)が認められる。その下に縄文時代の遺物包含層である黒褐色土があり、その下半に褐色のローム質土がある。さらにそれらよりも下にある、基盤をなす砂礫層の上面部は、河川の浸食を受けて波打っているものと推定される。この砂礫層の上に乗るシコツ火砕流堆積物の残存は部分的であり、砂礫層と縄文時代の遺物包含層が直接している場所もある。

宮戸3遺跡の深掘で観察したシコツ火砕流堆積物は、層状構造が顕著であり、風水の営力による二次堆積部分と見なされるところが多かった。このシコツ火砕流堆積物の下層には、暗褐色の土層が5センチほどの厚さで見られ、その中には倒木(樹幹)、立木(樹根)を推定させるような炭化物の集積が多量にあった。

縄文時代の構築物であるTピットは、宮戸3遺跡ではシコツ火砕流堆積物を掘り込んでいた。宮戸4遺跡ではローム層よりも下にある砂礫層にまで達したのもあった。大体において縄文時代のTピット下底部は、ほぼ水平をなすように作られるものが多いが、砂礫層に達したものではそのあまりの堅硬質のゆえか、下底部に凹凸が目立った。



図II-1-6 サクラソウと降下火山灰

(5) 周辺の草花など(口絵3上、口絵3下、図I-1-1、図II-1-6)

宮戸4遺跡の区域は、高速道路建設のために路線内の樹木伐採がなされるまでは、カシワ、カラマツ、ヤマザクラの樹林であった。したがって川谷の斜面部を含めて、荒地部分でも自然植生が比較的良好に残存している場所である。調査に着手して10日ほど経た5月中旬、発掘区脇の樹林で「サクラソウ」の開花がみられ、その群落が延々と広がりをもつことが認められた。

サクラソウは準絶滅危惧種(絶滅危惧II類：絶滅の危険が増大している)として指定がなされており、その残存自体に希少性が増している(『サクラソウの目』鷲谷いづみ、1998年)。発掘区域は、高速道路の建設により消滅する範囲なので、開花を機に観察、写真撮影などにとめた。一般的には湿地性の植物と説明されているが、今回観察した範囲では、腐植質の表土を含めて降下火山灰であり、保水性はきわめて低い土壤に群落を形成しているのであった(図II-1-6)。また、休耕田に広がるタンポポの大集団の中でも孤立して生育している個体を観察した。種子の分散による芽生えであろう。

遺跡の理解にあたって植生に代表される自然環境の現状記録は重要であるので、以後、開花による特色をてがかりにして、周囲の草本類、樹木の観察、名称の確認につとめた。判別にあたっては、図鑑類とともに『門別町の植物』（門別町教育委員会、2001年）を参考にした。5月から10月までの発掘調査期間に、遺跡の周辺ならびに汐見地区の砂浜海岸などで、開花等により目に付いたものを月日の順に並べると、以下のようになる。あわせて、厳密なものではないが、季節の変化を知り得る野鳥、虫、茸などのことも附した。

5月18日(金)サクラソウが目につき始める。クロツグミ、アカゲラ。21日(月)ヒバリ、ツバメ、ナシの白い花。22日(火)カッコウの鳴き声。24日(木)サクラソウが満開。カッコウ、ムクドリ、ショウドウツバメ。25日(金)サクラソウ。カッコウ、ヒバリ。28日(月)ツバメの巢は近くの養豚舎屋で確認。カラス、スズメ、トンビ、カッコウ、オオジシギ、ヒバリ、ムクドリ、アカゲラ。30日(水)ヤマザクラ、エゾノリュウキンカ、サクラソウ、ヒメイズイ。

6月5日(火)宮戸3遺跡にシカの足跡。フジ、ツツジ、スズラン。カッコウ。6日(水)サクラソウ、スズラン。カッコウ。7日(木)ササの芽吹きが認められる。白い花が目につく。チゴユリ、マイヅルソウ、コンロンソウ、スズラン、オオバナノエンレイソウ、ホウチャクソウ、オオアマドコロ、ヒトリシズカ、フタリシズカ、タニギキョウ。8日(木)アカザが大きくなり、ミヤコササの芽吹きが顕著になる。ユキザサ。19日(火)カッコウ、ムクドリ。26日(火)藪歩きの結果、右足の膝の裏にダニの食い込みあり。27日(水)オオアマナ、カイジンドウ。28日(木)白色のアヤメ、フタリシズカ。

7月3日(火)連日霧雨、濃霧。東となりの門別町で60ミリほどの降雨を観測。スカシユリ、ハマナス、ハマヒルガオ。5日(木)ムシトリナデシコ、ツキミソウ(アレチマツヨイグサ)、ヒメジヨオン。9日(月)クワの実が熟し黒変。エゾノシモツケソウ、ナワシロイチゴ、カワラナデシコ。12日(木)フタバハギ。16日(月)エゾニワトコの赤い実が多く目につく。

8月1日(水)ヤブカンゾウ。10日(金)オオバコ。20日(月)セイタカアワダチソウ、ハンゴンソウ、ツリフネソウ、クサフジ、ツユクサ、ナミキソウ、イヌホオズキ、ハッカ、イヌゴマ、バアソブ、ツリガネニンジン、タチギボウシ。21日(火)山下与造農園のジャガイモ取り入れ始まる。バアソブ、ツリガネニンジン、ナミキソウ、ミクリ。22日(水)シラヤマギク、ヨウシュヤマゴボウ。23日(木)ヨブスマソウ。28日(火)バアソブ(むっく)、クルマユリ、シャボンソウ。29日(水)ペカンベ(ひし)はまだ花。チョウセンダリア。30日(木)ネナシカズラ、キタゴミシ。

9月3日(月)オニユリ。休耕田の作物は大豆、小豆。13日(木)マクキヌガサタケ。14日(金)カケス。17日(月)ムク(ばあそぶ)、ホップ、アカミズヒキ。18日(火)ミゾソバ、アカマンマ、ツユクサ。19日(水)ナギナタコウジュ。21日(金)センボンヤリ、エゾノコンギク。ヤエザキオオハンゴンソウ(ハナガサギク、チョウセンダリア)、ハチジョウナ。25日(火)タモギタケ、エゾノコンギク。26日(水)エゾノコンギク、ナギナタコウジュ。豆畑は取り入れのニオ作り。エゾリス、アカゲラ、コガラ、カケス。27日(木)ミズヒキ、ウンラン、エゾノコンギク。カケス、アカゲラ。

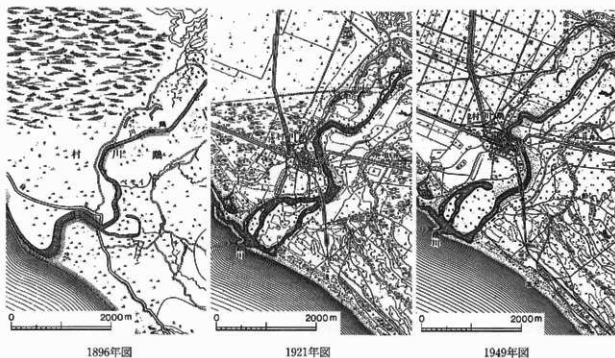
10月2日(火)ヤマハハコ。カケス、クロツグミ。5日(金)エウゼンギク、ネバリノギク。12日(金)ユキムシ(トドネオオワタムシ)。アオサギ、ハクチョウ。15日(月)キタゴミシ、ムシトリナデシコ。トンビ、カケス、ハクチョウ、ダイサギ、ツグミ、コガラ、キタキツネ。18日(木)カケスが多い。25日(木)畑の掘り取り作業は長芋。周囲で音もなく降下しているのは落葉松の葉。調査終了の区域内でTピットの底のカエルを食っているのはカケス。

(6) 気候と風土(図I-1-1)

鷓川町は、年間の平均気温7.4度であり、北海道全体でみると比較的温暖である。太平洋岸なので冬は雪が少なく(20センチほど)、夏季の前半は海霧(ガス)のために日照時間が少なくなり、比較的冷涼である。秋、冬は晴天日数が多い。1月の平均気温-6.9度、8月の平均気温22度となっている。年間を通じて降水量は少ないが(1200ミリ~1300ミリ)、夏~秋には、台風のもたらす集中豪雨に見舞われることもある。1975年(昭和50年)8月の降雨量225ミリがあり、2001年9月11日の集中豪雨は250ミリを上まわるものであった。

町内全域に渡って17世紀中葉の降下火山灰に覆われている。この降下火山灰は南側で厚く、北にいくにしたがって薄くなる。したがって水田、畑地の耕地はもとより、山林牧野であっても表層地質に恵まれず、利用には困難が付きまとう。にもかかわらず、明治時代から始まる農耕地の開拓は、用水路の整備確保、土壌の改良の実施により、良質米の産地、優良野菜の産地となっている。初夏の海霧は、農作物の生育に大きく影響するが、その程度は海岸に近いほど大きく、内陸部になるに従い少なくなる。ために水田の多くは、海岸から2キロ以上離れたところにある。8月9日には晴天日数に恵まれており、稲が成熟し、稲刈りは10月上旬頃が多い。

一級河川鷓川はシシヤモが遡上することでも知られている。10月中旬から11月中旬までが漁期である。鷓川の河口域には、草原と干潟が発達しており、ここでは草原性の鳥、河口・海岸性の鳥が良くみられることから、探鳥会の場所として知られている。とりわけ渡り鳥にとっては重要な中継地のひとつであり、「北海道野鳥愛護会」が1971年秋から1999年までに行った探鳥会記録(「私たちの探鳥会」2001年6月、札幌)には多くの種類が報告されている。なかでもシギ・チドリ類は春の北上時、秋の南下時ともに多くの種類が数えられている。この報告の中には、シギ・チドリ類の確認種類数および個体数が年を経るごとに減少していることが述べられ、海岸線の侵食進行、潟湖を含む干潟区域の減少が原因であろうと指摘してある。(西田)



図II-1-7 鷓川、河口域の流路変化

2 歴史的環境

地名「ムカフ」は、近世にあっては東蝦夷地に属し、「勇払」から十勝、根室などへ向う主要経路にあっていた。「勇払」領の東端、「沙流」領の西隣であり、多くの地図類にその地名が表されている。当時、陸路は海岸線に沿うものなので、勇払を東へ出発すると、ムカフは最初の宿泊地である「サルプト」までの中間である。日高路を東からくると、勇払まで半日の行程であり、旅人にとって今宵の勇払泊まりを目前にした昼飯の場所でもあった。このような旅程上の位置もあって旅行者の記録するところとなり、多くの文書が残されることになったものであろう。ちなみに1874年(明治7年)に北海道開拓使が取りまとめた「北海道地誌要領」には、「勇払」と「沙流」との距離は九里とある。

現在の鶴川市街地の付近が「ムカフ」と呼ばれるようになるのは19世紀中頃からであり、それ以前は一級河川鶴川の河口付近、東岸の地が「ムカフ」と称されていたようである。東岸の「ムカフ」を通る陸路は、東蝦夷地の全体と連絡するために次第に確保されていったものであろうが、18世紀末の「第一次幕府直轄の時代」には急速に整備されたようである。川「ムカフ」は、当然船で渡る。

開拓使は北海道東部地方および内陸部の開発政策を推し進めた。具体的には、札幌から日高地方さらには十勝地方への安定的な陸路の確保である。その結果、「ムカフ」付近での主要道路は、やがて3キロメートルほど内陸部を通るものとなる。明治政府の鉄道を含めた陸路の整備は、東岸の「ムカフ」地区にとって主要交通路からの逸脱を意味していた。「アイヌ文化期」の頃には荒地であった場所が、やがて市街地となることにより、地名「ムカフ」は西岸で生き延びることとなる。

アイヌ語地名の意味および18世紀、19世紀の旅行記などの古文書、古地図、近代の地図などをもとに歴史的な環境、土地利用の特色などを引用するなかで「ムカフ」への理解を深めておきたい。

(1) 鶴川(ムカフ)、井目戸(イモツベ)の語義

ムカフ、イモツベという地名はアイヌ語に由来するものである。「ムカフ」の表記にはムカハ、牟川、武川、武河、向川、む川、ウ川などが伝えられている。「イモツベ」の表記には井目戸、イモクヘ、イウモツベ、イムクベツ、イモクナイ、キメドなどがある。

その語義についてはいくつかの説があるが、ここでは最初に永田方正の説明を見ておきたい。その他の説は、大まかに時代の順に示しておく。

①「北海道蝦夷語地名解」(初版1891年；明治24年)の複製版(1984年)は、以下のように書いてある。胆振国勇払郡の項である。

Mukap, = muk-ap ムカフ 羊乳草(ツルニンジン)アル処 土人此根ヲ食料トス。

○鶴川(ムカハ)[村]ト称ス。

○松浦氏日誌ニ本名「ムカ」ナリ延(ノビ)タル義トアリ。「ムカ」トアルハ是ナリ延タルトハ非ナリ。

さらにムカフ川筋の項に

Imokpe イモクベ 陥(ヲトシ)ノ餌(エバ)ヲ置ク處。井目戸(井モクベ)村

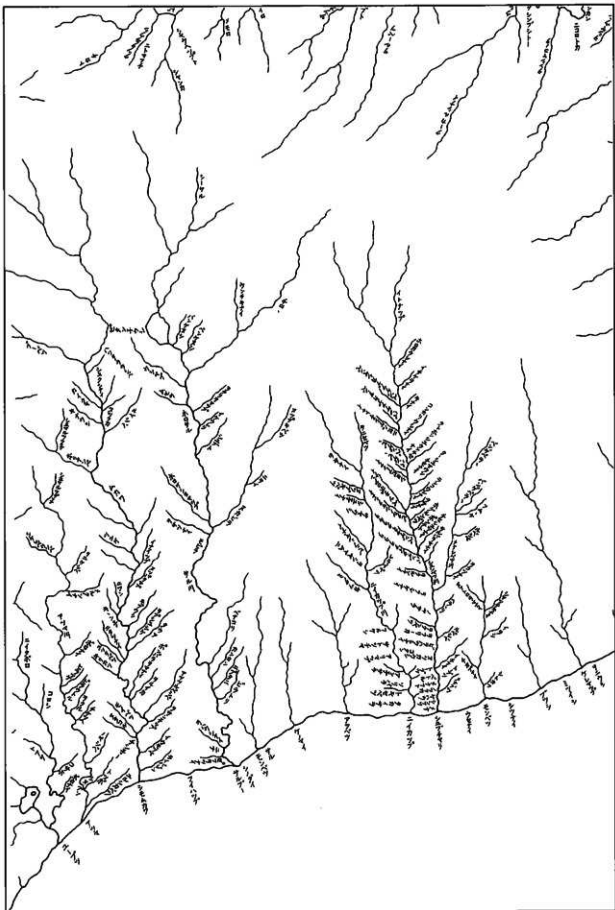
②秦嶺麻呂の「東蝦夷地名考」は、1808年(文化5年)の記述であるが、「ムカフ」の地名については、「未考」となっている。

③「東行漫筆」は、1809年(文化6年)の見聞である。このなかに「ムカフ水源三日路程あり、此川に魚無し。依て無川と云よし。」という一項がある。

④1824年(文政7年)の上原熊次郎「蝦夷地名考并里程記」には、以下のように書いてある。

ムカフ 休所 川舟渡 モンベツ江四里程

夷語ムカナリ。則水の涌くといふ「事」。此水上平原にして所々に水の涌き出て、源水となる故、地



図Ⅱ-2-1 「シモムカワ」周辺の地名
 (『観輿全圖』(伝1822年)をもとにした小林和夫作成の河川名図)

名になすといふ。

⑤『東蝦夷日誌』は、松浦武四郎の1858年(安政5年)の見聞録である。これのユウブツ領の項、6月29日の部分には地名の「義」について、次のように記してある。

ムカワの原名ムカにして、延たる義也。山中処々に湧水あり、それが集りて川と成し義也。
イモツベ(東岸小川、人家六軒)、此上にヲタケキと云砂地を飛虫多きより号(なづ)くる地有。

⑥ J.バチェラーの「アイヌ地名考」は1925年の著述である。中川裕の訳は以下のようである。

MUKAWA(鷓川) Muka-pet 「せき止められた川」または「しみ出している川」。こう呼ばれるのは、満ち潮のたびにその河口に大量の砂が集まり、川がそこを流れ出ることが難しくなるからである。

⑦1954年(昭和29年)の『北海道駅名の起源』の著者は、高倉新一郎、知里真志保、更科源蔵、河野広道である。鷓川(むかわ)については、「アイヌ語「ムッカ・ベツ」(塞がる川)から出たもので、鷓川が上げ潮のため砂で川口が塞がれるからである」と説明している。

この本には「アイヌ語地名単語集」というのが、知里真志保の執筆で付け加えてある。

これには「ムク(muk)ふさがる。ムッカ(muk-ka)ふさがらず。」とある。

⑧1968年(昭和43年)に刊行された『鷓川町史』の「地名解」を担当した更科源蔵は、以下のように説明している。

鷓川(むかわ) 疑問の地名であったために、色々伝説があった。昔この川はムカワといわずモシリカベツといったが、ある時この付近一帯が凶漁に見舞われたとき、人びとはこの川筋に多いムック(ばあそぶ)の根を掘って食べたため助かったので、それからムックアツというようになり、それがなまってムカワとなったと土地の古老たちは伝えている。しかし本当はムッカ・ベツというので、入鹿別と同じように海の潮のために砂で河口がふさがる川なので、ふさがる川(ムッカ・ベツ)と名付けられたものである。現在も時々川口がふさがってかわることがある。

井目戸(いもつべ) 鷓川町官戸の古名。イモツベとは魚を釣る餌などのことで、この辺で昔よくみみずを掘ったといわれている。

⑨1972年(昭和47年)山田秀三は『北海道の川』のなかで、鷓川について次のように注記した。

勇払郡の大川であるが、この川名の意味も、ほかの大川と同じように、はっきりと残っていない。(中略) (鷓川のアイヌ系古老から聞いた話) 並んで流れている沙流川は男で、鷓川は女であった。沙流川の古名がシシリ・ムカなのに対し、鷓川は女なのでモ・ムカ(小さい・ムカ)と呼ばれ、それから鷓川の音が生れた。《註 この二つ並んだ有名な川が、共に muka の音を持っていた。そこにこれら川名の謎がありそうである》

(2) ムカワの諸記録

①『元禄郷帳』は1700年(元禄13年)の調査記録である。これには、東蝦夷地61部のうちのひとつとして「ムカワ」が記してある。『東夷竊々夜話』は、1805年(文化6年)の見聞記録である。このなかに「松前郷帳」(元禄13年)の記述が引かれており、「イモツベ、ムカワフト」の地名がある。

②『東行漫筆』は、1809年(文化6年)の見聞である。西から東に向かう記述である。

(前略) イルシカベ、此小休所、葭葦(よしず) 建にて仮小屋也。此辺山なくここ平地也。壱里余にしてムカワ川有、船渡り。ユウフツ江、昼休所有。ムカワ、此所ユウフツ津方、和助住居。(中略) ムカワ水源三日路程あり、此川に魚無し。依て無川と云よし。(中略) 川手前に渡守夷家二軒有。(中略) ムカワより海岸を離れ、山中に成道、平にしてよし。壱里半程(で)サルの内。小休所、フユハツ。此所、葭葦(よしず) 建之仮休所也。夷家もなし。(後略)

③『入北記』は1857年(安政4年)、玉蟲左太夫の巡検日誌である。ここでは稲葉一郎解説(1992年)をも



図II-2-2 5万分の1地形図(1)

(この図は1896年、陸地測量部製版の「島川」を複写したものである)

とに、読みやすさを考慮して、カタカナをひらがなに改め、句読点なども加えて示した。9月5日の項であり、門別から勇払に向かう(東から西へ)の行程である。

(前略)行くこと一里余にして、ファイハフにて小憩あり。此処にて小憩す。此処、サル、ユウフツ境なり。又行くこと一里余にしてムカワに至りて、午飯を喫す。此処に川あり、幅七拾一二間程、人馬共に舟渡しなり。川筋通り、土人家ある由なり。さて、此間山道なれども平坦にして、歩行大に宜し。山中、楢多く生ず。此より後は、平原となり、渺々(びょうびょう)として、眼界窮(きわまり)なし。大抵焼砂にして、開墾なりがたき地なり。又、一里半余行きて、アツマと云う処に至りて、小憩す。(後略)

④『蝦夷行程記』は阿部将翁著述を松浦武四郎校訂により1856年(安政3年)刊行されたものである。これの裕富津(ユウフツ)の項は西から東へ向かう文章である。藤原秀樹の釈文を参考に、読みやすさを考慮し、仮名、送り仮名、句読点を加えてある。

ムカワ大川あり。はば六十間余、船渡し、昼休所人家あり。此所より右の方、浜通りなり。左本道、平山道なり。ファイハフ、サルとユウフツの境なり。小休所あり。トイフル、是をサル川といふ。船渡しなり、人家小休所あり。ヲコタヌサル人家あり、小川あり。この辺の地名(あざな)多し。

ムカワより右の方、ファイハフサキ漁小屋あり。サルフト漁小屋あり。モノタイ漁小屋あり。シノタイ人家あり。

⑤『東蝦夷日誌』は、松浦武四郎の1858年(安政5年)の見聞録である。これのユウフツ領の項、6月29日は、(前略)武四郎が川ムカワを下りて河口までやって来た部分である。

(前略)イモツベ(東岸小川、人家六軒)、此上にヲタキイと云砂地を飛虫多きより号(なづく)の地有。チン(同小川、人家十軒)、此辺より兩岸とも平地に成。茅原多く、上は?柏(くぬぎ)原也。ライバチン(東岸小山)過ぎて、ムカワフト(幅五十余間)此処、渡場也。?黄(ゆうがた)爰に着く。小休所(土人四軒)に宿す。ムカワの原名ムカにして、延たる義也。山中処々に湧水あり、それが集りて川と成し義也。川筋、鮭(さけ)、鱒(ます)、チライ、杜父魚(かじか)、桃花魚(うぐい)、? (あめます)、又初冬の頃シュシャモも入る事有。土地肥沃、土人好て畑作をなす。

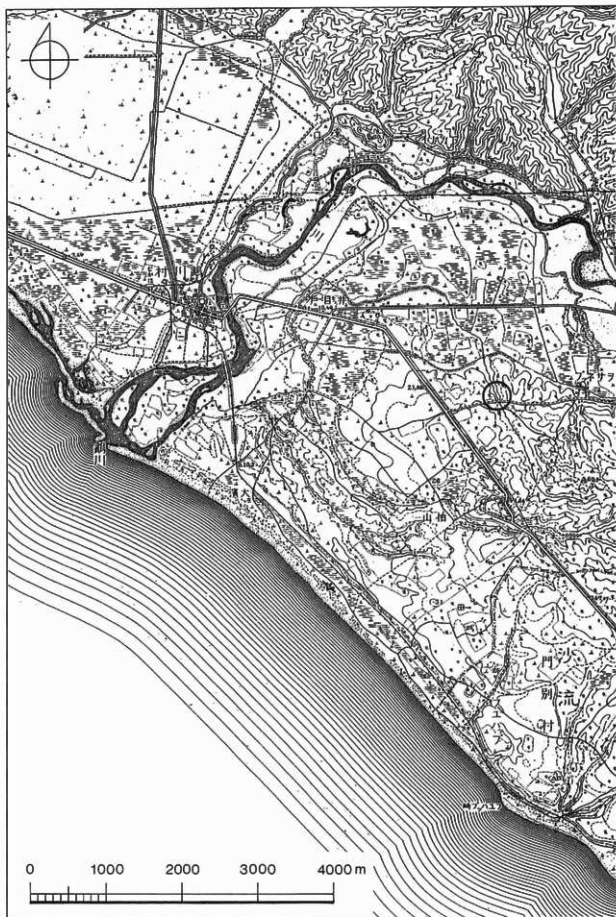
(中略)ムカワ(船渡)両方谷地中に道有。フレベツ(小川)、トンニトイ(小川)是より坂に懸かる。名義?柏(くぬぎ)原の義(是よりサル海陸両道有、今陸道を本道とす)。ヲヒシラマコツ(平山)浜へ出る道故号く(後略)。

同じ時の記録である『武加和誌』には「イモクナイ」「イモクベツ」の地名がある。

⑥『開拓使事業報告』第零編の地理の項には、明治15年2月の胆振国勇払郡の村として「井目戸」村があり、これには「キメド」のふりがながある。

⑦17世紀中葉の降下火山灰がもたらした荒地(火山灰地)と柏林の様子は、白野夏雲の「榊原ノ説」(1887年)にも良く示されている。白野夏雲(しらのかうん)は1870年(明治3年)夏、静岡藩の「十勝国開業方」として勇払から東へ向かい、十勝広尾を目指している。以後、1872年から1973年まで開拓使浦河出張所、開拓使本庁に属し、いくたびかムカワの地を往来している。

さらに1886年から北海道庁の役人として再び北海道の地にあつた。したがって、日本国内はもとより道内各地の見聞が豊富なのであつた。ここに引用する「榊原ノ説」は、日高沙流への出張記録の一部、平取のペンリウクからの聞き書き「沙流土人間答ノ記」の綴りに副えられているという(『白野夏雲』1984年)。当時1887年(明治20年)4月夏雲は道庁地理課にあつたので、ムカワの19世紀後半の風景である。なお、引用にあたっては読みやすさを考慮し、カタカナはひらがなにあらため、句読点、送り仮名も加えてある。



図II-2-3 5万分の1地形図(2)

(この図は1921年、大日本帝国陸地測量部発行の「轟川」を複写したものである)

榊原(こくげん)ノ説(前略)凡そ柏樹を生ずるの原野、本道各地到る処、皆有り。今予が所見に於いて、其の最も大なるもの胆振国勇弘の偏東に起り、日高国沙流を経て紋別(門別)の偏西に至り。東四十余里、南北六、七里、老木稚樹群を分かち林立整然、宛も人工に由りて種植せしものに似たり。其の老大なるもの幹高二、三丈周囲六、七尺、外皮灰白淡黒を帯び、以て、折裂せり。(中略)

然りて、此樹の生育する原頭の地質を察すれば、極めて瘠薄にして尽く廉粒なる新成の砂原ならざるはなし。(後略)

(3) 古地図など(口絵4、図2-2-1)

多くの古地図を紹介してある『北海道古地図集成』(高倉新一郎編著、1987年、札幌)を見ていく。

- ①『和漢三才図会、蝦夷之図』1713年(正徳3年)「ムカワ」。
- ②『津軽一統志、巻十附図』1731年(享保16年)「ムカハ」。
- ③『東山道陸奥松前千島及方州掌覧之図』1789年頃(寛政元年)これには「サル」の西側に「ムカウ」と読める地名が二つ並んでいる。
- ④『蝦夷古地図』1790年(寛政2年)「ムカワ」。
- ⑤『東西蝦夷地図』1801年(享和元年)「ムカワ川」。
- ⑥伊能忠敬の中図は『蝦夷国測量図』(1821年頃)と呼ばれているものである。東蝦夷地沿海部の地名のなかに「ムカワ」「ムカワ川」がある。これらの文字の西側には大きな水域が描きこまれている。
- ⑦『蝦夷全図』伝1822年(文政5年)伝間宮林蔵の図は、内陸の河川湖沼など詳細なものである。ここに見える「北海道古地図集成」の図は、尺があまりにも大きすぎて地名が読み取れないが、河川名に関しては、部分拡大図でもいえるものが小林和夫作成で示してある(図II-2-1)。この小林の付録地名図には、地名「シモムカワ」がある。

この『蝦夷全図』は、恵庭市郷土資料館の1999年夏の特別展示「記録に現れたエニワ」において、国会図書館所蔵の『蝦夷図』の名称で写真パネルとして展示された(口絵4)。この「シモムカワ」川筋の東岸の支流名は、下流から「ライバデン」「イウモッペ」「ヲサンツッブ」「アツツルベシベ」「ヲルイカ」などが読み取れる。ここで気がかりなのは「ライバデン」の親元の河川名といえる「チン」が見当たらないことである。

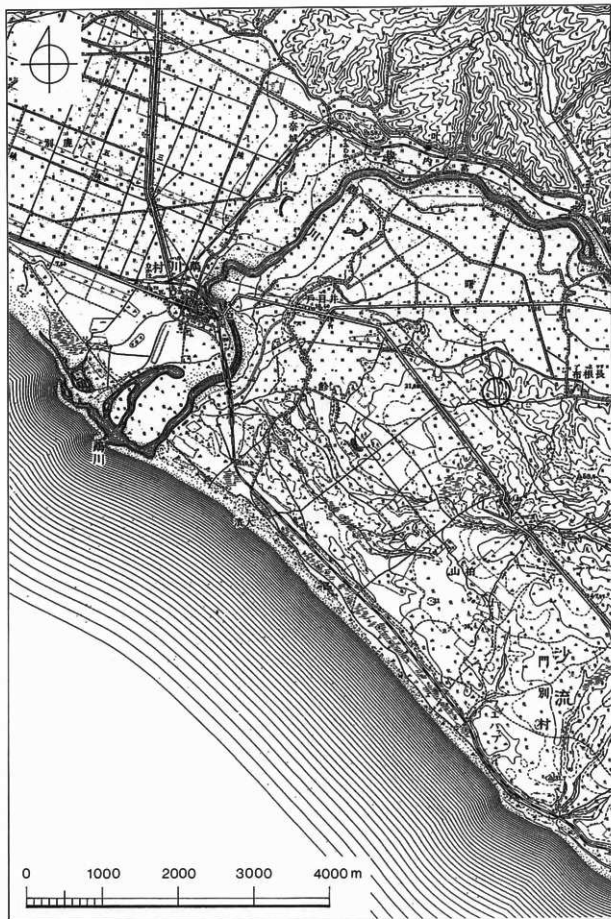
- ⑧松浦武四郎には、自著図および関係・関連図など、多くの記録がある。『東西蝦夷山川地理取調図』(1859年、安政6年)、『東蝦夷日誌』、『官版実測日本地図、蝦夷諸島』、『北海道国郡全図』(1869年、明治2年)など、すべて「ムカワ」である。
- ⑨ほぼ同じ頃の『北海道歴検図、北海道国郡全図』1871年(明治4年)では「ムカハ」が胆振州ではなく、日高州に属するような表示になっている。
- ⑩『三角術測量北海道之図』1875年(明治8年)、は開拓使地理課の刊行であり、英文題名は「THE ISLAND of HOKKAIDO」となっている。ここでは「ムカワ」であり「Mukarwa. R.」も読み取れる。
- ⑪『石狩原野殖民地撰定概図』1891年(明治24年)ここで示してある「鷄川」原野は、現在の鷄川町域よりも上流域のことである。

以上に見てきた諸地図の表記は、「ムカワ」「ムカハ」であり、コタンと川の名称である。

イモッペの初出は、⑦『蝦夷全図』の「イウモッペ」であり、川の名称である。松浦武四郎の『東蝦夷日誌』ではコタンの名称でもある。

(4) 5万分の1地形図

①図II-2-2は1896年(明治29年)「陸地測量部」製版の「北海道假製五万分一図」(「鷄川」(ムカハ)である。これは「假製」という制約もあって、海岸線や河川に比べて丘陵や山地の表示は概略的になってい



図II-2-4 5万分の1地形図(3)

(この図は1949年、地理調査所発行の「亀川」を複写したものである)

る。行政区の区画として右上に「萌別(モイベツ)村」、右下に「沙流(サル)郡」、「佐瑠太(サルプト)村」があり、中央上半に「鷄川(ムカワ)村」が記入してある。この図の地名表記は、すべてアイヌ語をカタカナ、漢字で写したものでばかりであり、「佐瑠太(サルプト)村」と「鷄川(ムカワ)村」との境界は、日高、胆振の国郡の境でもある。

宮戸4遺跡は、「イモッペ沢」のなか、小径(こみち)がこの「沢」を横切るところに位置する。この小径は当時の地図表現では「小路」と呼ばれていた。「小路」はアイヌコタンや「場所」「番屋」「会所」を連絡するものであり、踏み分け道である。イモッペ沢から小径を東に向かうと、「ポロヲサン子ブ」を横切り、丘陵縁を北に進み、やがて穂別、平取の方面へ抜ける道筋に達するはずである。

小径を西側へ行けば3キロメートル足らずで「チン」「ライ(バ)チン」に達する。さらに「ライ(バ)チン」から西へ500メートル進むと大きな道路にあたる。大きな道路は、この図幅では左端に「室根自」の文字があるが、元図では右から左に読むと「自根室至苫小牧」なので、根室と苫小牧とを結ぶ官道である。

この官道は19世紀前半の諸旅行記に表れる道筋が改良されてきた。つまり「ライ(バ)チン」から「佐瑠太(サルプト)村」間では、標高20m前後を行くもので、「入北記」に「此間山道なれども平坦にして、歩行大に宜し」とみえ、松浦武四郎が「陸道」と記述したのにあたる。川「鷄川」の東岸には「イモッペ」の地名が描きこまれ、ゆるく曲がる「小路」は段丘の縁に沿ってコタンを連絡する生活道路である。川の西岸、官道の北側、のちに鷄川市街地が形成される辺りに「文」の記号があり、学校が認められる。

宮戸4遺跡の周辺は、概略的な丘陵の表現にあっても、標高20mの等高線が南側に食い込んでいる様子が捉えられている。この沢地形と遺跡との関係は図Ⅱ-1-4(21ページ)の1950年頃の地形図とも調和的である。そして「イモッペ沢」の下流部は沼沢の荒地であり、途中の流路約1キロメートルは見失われる。

②図Ⅱ-2-3は、1921年(大正10年)「大日本帝国陸地測量部」発行の「鷄川」である。鷄川の市街地形成があり、海岸線に沿う鉄道線路が描き込まれている。大きな道路(官道)が3キロメートルほど内陸部に直線的に走り、その脇に「井目戸(イモッペ)」の地名がある。「柏山」「大濱」は和語地名である。

③図Ⅱ-2-4は、1949年(昭和24年)「地理調査所」発行の「鷄川」である。直線で延びる道路が多くなり、以前低湿な荒地と表現されていたところの大部分が、水田と化した。「むかは」駅から分岐して北に延びる鉄道は「宮内線」である。鷄川の流路は、鉄橋よりも下流域では直線的になっている。河口域の流路変化の様子は、図Ⅱ-1-7にもまとめて示していたが、50年ほどの時間幅で大きく変わったのが見て取れる。

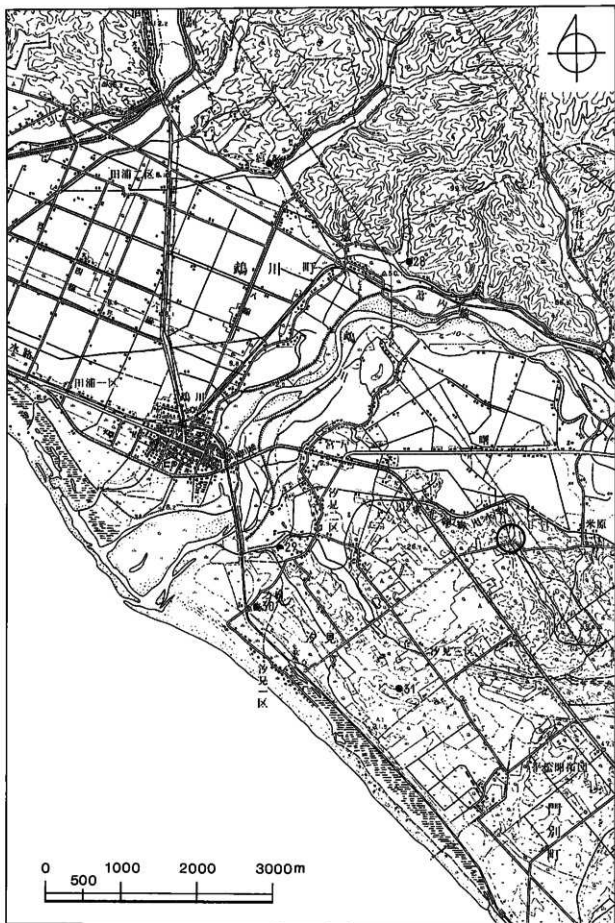
④図Ⅱ-2-5は、1979年(昭和54年)に発行された「全国遺跡地図、北海道Ⅲ」の鷄川部分で、北海道教育委員会の調査記録などをもとにした、文化庁刊行の遺跡分布図である。5か所の遺跡が掲載されている。これらの遺跡の詳細はⅢ章(37ページ)で詳しく述べる。

種別は、29番が墳墓であり、ほかは散布地となっている。27：二宮遺跡、28：豊城遺跡、29：鷄川盛土墳墓群、30：沙見一区遺跡、31：沙見団地遺跡

このような全国的な規模での遺跡の分布図は、1968年(昭和43年)にも文化財保護委員会から刊行されている(『全国遺跡地図(北海道)』)。その地図で鷄川部分を見ると、20万分の1の地形図に沙見遺跡のみが、種別は基地として記入されているだけである。

⑤図Ⅱ-2-6は1999年(平成11年)「国土地理院」発行の地形図である。河川改修の築堤が進展して鷄川の流路は、鉄橋よりも上流側では固定的になったようである。かつて「大濱」と呼ばれた地域が「沙見一区」となったのは1943年(昭和18年)の字名改正からで、日高線の鉄道の駅「沙見」が簡易駅として新設されたのは、1959年(昭和34年)のことである。

(西田)



図II-2-5 5万分の1地形図(4)

(この図は1979年、文化庁刊行の道跡地図を拡大複写したものである)



図II-2-6 5万分の1地形図(5)

(この図は1999年、国土地理院発行の「鶴川」を複製したものである)

III 鷓川町の遺跡

1 概要

北海道教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードによると、鷓川町には43ヶ所の遺跡が登録されている。縄文時代の遺跡は38ヶ所(早期18ヶ所、前期21ヶ所、中期21ヶ所、後期3ヶ所、晩期8ヶ所)、続縄文時代の遺跡は8ヶ所、濠文時代の遺跡は6ヶ所、アイヌ文化期の遺跡は6ヶ所となっている(表III-1-1・2)。そのほとんどは各時代各時期が重複しており、大部分は鷓川本流とその支流の河岸段丘に分布している。大正10年の陸地測量部発行の地形図(図III-1-1)を見ると、鷓川下流域には湿地帯が広がっており、縄文時代晩期～アイヌ文化期の遺跡は湿地帯に接した低地に、縄文時代早期～後期の遺跡は段丘や台地上に分布する傾向がある。(図III-1-2)。

鷓川町内でこれまでに行われた考古学的調査は、昭和30年代の花岡・汐見・春日・二宮の所在確認調査と鷓川盛土墳墓群および花岡1遺跡の発掘調査、昭和50年代の町内遺跡の所在確認調査と鷓川盛土墳墓群の範囲確認調査、そして、平成12・13年の開発に伴う、宮戸3遺跡・宮戸4遺跡・米原3遺跡・米原4遺跡の発掘調査と米原5遺跡の工事立会調査がある。以下に略年表を記す。

- | | |
|-------------------|---|
| 1961(昭和36)年 | ・ 扇谷昌康氏(富川中学校)、汐見と花岡の遺跡探査。 |
| 1962(昭和37)年 | ・ 大場利夫氏(北海道大学医学部)と扇谷昌康氏による花岡・汐見・春日・二宮の遺跡の所在確認調査。 |
| 1963(昭和38)年 | ・ 鷓川町教育委員会による、汐見遺跡(現鷓川盛土墳墓群)と花岡遺跡(現花岡1遺跡)の本格的な考古学調査(大場・扇谷 1964)。 |
| 1975・76(昭和50・51)年 | ・ 鷓川町教育委員会より委嘱を受けた扇谷昌康氏(苫小牧市立苫小牧東中学校)が鷓川町郷土史研究会の協力により、町内の遺跡の所在確認調査を行う(扇谷 1977)。 |
| 1980(昭和55)年 | ・ 扇谷昌康氏(苫小牧市立光洋中学校)と佐藤一夫氏(苫小牧市青少年センター学芸員)による汐見遺跡の範囲確認調査(扇谷・佐藤 1980)。 |
| 2000(平成12)年 | ・ 日高自動車道の建設に伴う、鶴北海道埋蔵文化財センターによる米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡・宮戸4遺跡の発掘調査(財団法人北海道埋蔵文化財センター 2001)。 |
| 2001(平成13)年 | ・ 農免農道整備事業に伴う、鷓川町教育委員会による米原3遺跡の発掘調査(兵藤 2001)。
・ 日高自動車道の建設に伴う、鶴北海道埋蔵文化財センターによる宮戸4遺跡の発掘調査(本書)。
・ 放牧地改良工事に伴う、北海道教育委員会・鷓川町教育委員会による米原5遺跡工事立会調査(田才・宗像・今村 2002)。 |

次節以下では三つの地域に分けて説明する。遺跡名後ろの()内の数字は、遺跡一覧・遺跡分布図の数字と対応する。遺構・遺物の図版は、大場利夫・扇谷昌康 1964「勇弘鷓川遺跡」[北方文化研究報告 第19輯]、扇谷昌康 1977「鷓川町遺跡分布調査報告書」、赤石慎三 1983「鷓川町パンケニウキナイ遺跡出土資料について」[北海道考古学]第19輯、鶴北海道埋蔵文化財センター 2000「鷓川町 米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡」(北埋調報153)、兵藤千秋 2001「北海道勇弘郡鷓川町 米原3遺跡」から転載した。出典は各遺跡の説明中に記した。

表Ⅲ-1-1 鷓川町の遺跡一覧(1)

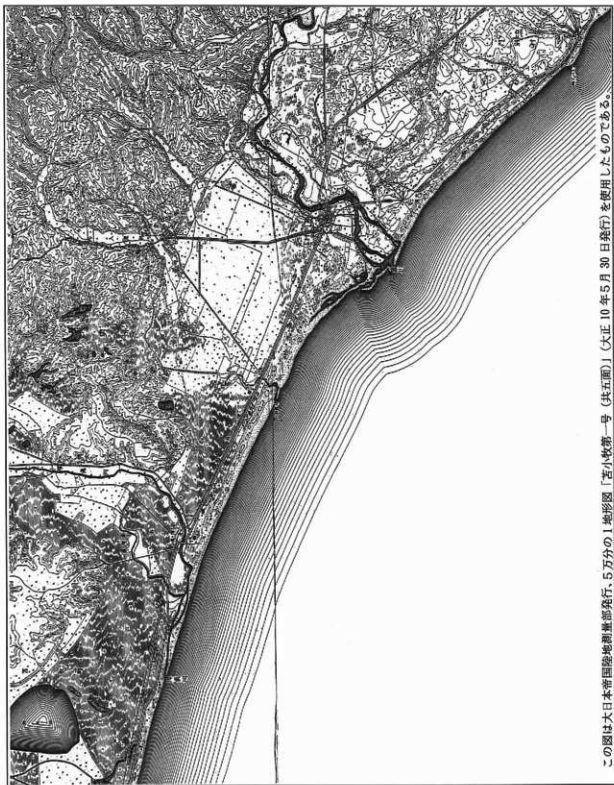
番号	名称	種別	所在地	立地
1	鷓川盛土墳墓群	墳墓	沙見189-1・6	鷓川左岸、チソ川・ライバチン川合流点東位段丘
2	花園1(旧花園)遺跡	墳墓	花園10	鷓川左岸段丘
3	豊城1(旧豊城)遺跡	遺物包含地	春日70-1	鷓川右岸、ケナシロ川左岸の舌状台地
4	二宮遺跡	遺物包含地	二宮117-2ほか	ニダチナイ川右岸台地の南向き傾斜地
5	春日遺跡	遺物包含地	春日245-1ほか	鷓川右岸台地先端〜河川敷
6	トンニイ(旧沙見1区)遺跡	遺物包含地	沙見94-1・2	鷓川左岸、海岸段丘の西端
7	柏山(旧沙見団地)遺跡	遺物包含地	沙見243-1ほか	ライバチン川右岸段丘緩斜面
8	花園3遺跡	遺物包含地	花園236-17	鷓川左岸、ボンハルオマナイ左岸段丘
9	チソ川左岸1遺跡	遺物包含地	沙見302-1	チソ川左岸段丘舌状台地
10	チソ川左岸2遺跡	遺物包含地	沙見230-1	チソ川左岸段丘舌状台地
11	豊城2遺跡	遺物包含地	豊城347	鷓川右岸、オコツ山南斜面
12	豊城3遺跡	遺物包含地	豊城347	鷓川右岸、オコツ山南斜面
13	パンケヤラ遺跡	遺物包含地	春日308-128	鷓川右岸、モイベツ川左岸山裾
14	モイベツ遺跡	遺物包含地	春日176	鷓川右岸、モイベツ川・鷓川合流点南東舌状台地
15	藤高沼遺跡	遺物包含地	豊城176	鷓川右岸、藤高沼(鷓川旧河床)西岸
16	沙見2遺跡	遺物包含地	沙見197・198	ライバチン川左岸段丘
17	沙見3遺跡	遺物包含地	沙見204-2	ライバチン川右岸段丘
18	トンニカ遺跡	遺物包含地	沙見316ほか	チソ川右岸、人口池の北側台地
19	サツバサ遺跡	遺物包含地	宮戸157-2〜5	鷓川左岸沖積地の舌状台地
20	宮戸遺跡	遺物包含地	宮戸263	鷓川左岸沖積地の舌状台地先端
21	ケナシノシケオマナイ遺跡	遺物包含地	米原490-1・2	鷓川左岸段丘
22	オルイカチャシ跡	チャシ跡	花園285-8	鷓川左岸、オルイカ川右岸台地舌状先端部
23	ルベシナイ遺跡	遺物包含地	花園308	鷓川左岸、ルベシナイ水源点東位
24	花園2遺跡	遺物包含地	花園288-1ほか	鷓川左岸段丘
25	パンケニウキナイ1遺跡	遺物包含地	生田240-22	鷓川左岸段丘
26	パンケニウキナイ2遺跡	遺物包含地	生田241-1〜3	鷓川左岸段丘、ニクトンナイ川岸
27	ニクトンナイ1遺跡	遺物包含地	生田244-12	鷓川左岸、ニクトンナイ川北東
28	ニクトンナイ2遺跡	遺物包含地	生田244-13	鷓川左岸、ニクトンナイ川北東
29	パンケニウキナイ遺跡	遺物包含地	生田167	鷓川左岸、パンケニウキナイ川西の台地下
30	ビタルシナイ1遺跡	遺物包含地	有明87	鷓川左岸、オブスケ川とアリアケ川の間
31	ビタルシナイ2遺跡	遺物包含地	有明47-1	鷓川左岸、アリアケ川右岸
32	オブスケ遺跡	遺物包含地	有明15ほか	鷓川左岸、オブスケ川南岸の台地
33	チソ川左岸3遺跡	遺物包含地	沙見225-4	チソ川左岸段丘
34	豊城4遺跡	遺物包含地	春日70-13	鷓川右岸台地上
35	二宮2遺跡	遺物包含地	二宮435-3	入鹿別川支流、イリシカベツ川右岸台地
36	米原第1遺跡	遺物包含地	米原585-1ほか	チソ川源流部の丘陵、南北に伸びる舌状台地
37	米原第2遺跡	遺物包含地	米原517ほか	オサネツ川源流部の丘陵
38	米原3遺跡	遺物包含地	米原449-1ほか	イモツベ川上流右岸の台地
39	宮戸3遺跡	遺物包含地	宮戸183-1	イモツベ川中流左岸の台地
40	宮戸4遺跡	遺物包含地	宮戸179-1ほか	イモツベ川中流左岸の台地
41	二宮3遺跡	遺物包含地	二宮487-6ほか	入鹿別川左岸の台地
42	米原4遺跡	遺物包含地	米原394ほか	イモツベ川中流右岸の台地上
43	米原5遺跡	遺物包含地	米原704ほか	チソ川上流右岸の台地

文献

1. 大場利夫・扇谷昌康 1964 「勇弘郡鷓川遺跡」『北方文化研究報告』第19輯
2. 鷓川町史編纂委員会 1968 「鷓川町史」鷓川町
3. 扇谷昌康 1977 「鷓川町遺跡分布調査報告書」鷓川町教育委員会
4. 赤石眞三 1983 「鷓川町パンケニウキナイ遺跡出土資料について」『北海道考古学』第19輯
5. 財団法人北海道埋蔵文化財センター 2001 「鷓川町 米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡」(北埋調報153集)
6. 兵藤千秋 2001 「北海道勇弘郡鷓川町 米原3遺跡」鷓川町教育委員会
7. 田才雅彦・宗像公司・今村繁吉 2002 「米原5遺跡」鷓川町教育委員会

表III-1-2 鷺川町の遺跡一覧(2)

番号	時 期					特 徴 ・ そ の 他	文献			
	文									
	早期	前期	中期	後期	晩期					
1					○	◎	昭和38年、大場・扇谷ほかの調査により土壌基(縄文初期)確認。1号墳墓で墓壇6基検出。昭和41年、遺指定。標柱あり。	1・2・3		
2	○	○	○	○	◎	○	○	○	昭和38年、大場・扇谷ほかの調査により墓壇(縄文晩期)20基検出。昭和43年造田工事で包含層は破壊され時に若干残存。遺構は現存。	1・3
3	時 期 不 明								豊城2遺跡と沢ひとつ隔てた北東岸舌状台地。	
4	○				○				晩式土器。中央部は土取りにより消滅。 高田氏宅裏手から二宮公民館に至る範囲で遺物採取。	3
5	○	○	○			○	○	○	川西幹線用水路が中央を貫通。	3
6						○	○		遺跡北側70×50mが土砂採取のため消失。これにより包蔵地消失。	3
7		○							古東開発に伴う住宅団地予定地。標柱あり。	3
8	○	○	○						ほとんどの部分が削平され遺田されているが、一部現地形を残す。	3
9			○						農道カット面に遺構。標柱あり。	
10		○							削平され腐植土露出。標柱あり。	
11		○	○							3
12					○	○				3
13		○								3
14		○							中央部を道路貫通。	3
15					○	○				3
16							○	○	相当数の墓穴を有する住居跡群。ムカワブ・コタン跡地の可能性大。八王子千人同心の開拓用水路が付近にある。	3
17	時 期 不 明								造田工事により土砂探掘された崖面から黒曜石細片多数出土。	3
18	○	○	○		○			○	トンニカ・コタンの跡地。	3
19			○					○	サツバサ・コタン跡地。	3
20	○	○							白樺を植林し保護しているので保存状態良好。	3
21							○		東方にアイヌ墓地、土葬墓現存。「米原遺跡」は墓地付近一帯と推定。	3
22			○					○	弧状の溝が東西各一本残存。	3
23	時 期 不 明									3
24	○	○	○						昭和40年の農地改善事業でほとんど破壊され丘腹の一部に残存。	3
25	○	○	○	○		○			近年の農地改良で攪乱を受けている。	3・4
26	○				○					3
27	○									3
28	○									3
29		○	○						土取りによりほとんど破壊。背後にアイヌ墓地あり。	3
30			○							3
31	○								アリアケ川を挟み、ピタルシナイ1遺跡と対峙。背後にアイヌ墓地あり。	3
32		○	○						周囲を沢が囲む。	3
33		○							長年の土砂崩壊により、攪乱されている。破壊に近い状況。	
34	○	○							保存状態良好。	
35		○							保存状態良好。	
36			○						南端部～南東側緩斜面で土器・石片出土。台地中央部にTピット。	
37			○						丘陵の頂部付近でTピット確認。	
38	○	○	○	○		○			縄文時代早期後半の焼土、中期末の墓穴住居跡。平成12・13年調査。	5・6
39	○	○							縄文時代のTピット、焼土。平成12年発掘調査。	5
40	○	○	○	○				○	縄文時代早期の石器制作址。縄文時代のTピット。平成12・13年調査。	
41	時 期 不 明								隣接地の農地造成事業に伴う表面踏査により石検片採取。	
42	○	○	○						縄文時代中期後半の墓穴住居跡。平成12年発掘調査。	5
43	○								縄文時代のTピット。早期の遺物。平成13年発掘調査。	7



図III-1-1 大正10年の地形図

2 鷓川下流左岸地域の遺跡

この地域にはライバチン川、チン川、イモッペ川などの鷓川支流が流れており、これらの流域に遺跡が分布している。字名でいえば汐見、宮戸、米原である。

(1) 汐見の遺跡(図Ⅲ-2-1、図版11)

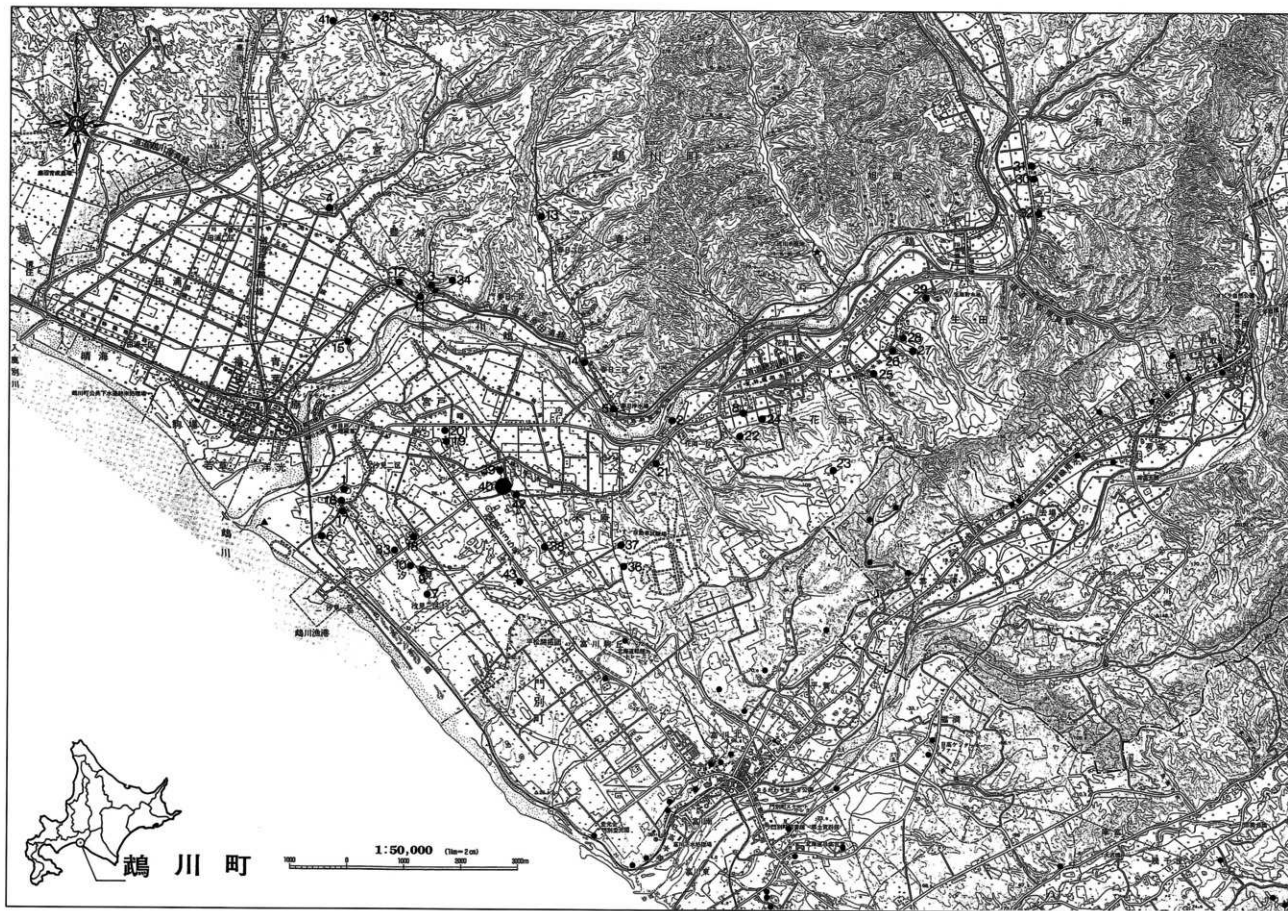
汐見はライバチン川とチン川の下・中流域、鷓川河口の沖積平野から日胆国境にかけての標高40m以下の丘陵地帯にある。下流域の旧地名は「チン」で「熊皮を乾すところ」の意といい(永田 1984)、ムカワブト・コタン、チン・コタンがあった。下流域には縄文時代晩期～アイヌ文化期の遺跡が分布する。中流域の旧地名は「トンニカ」「柏の木の沢山あるところ」といい、かつてチン・コタンに次ぐ大きなコタンであるトンニカ・コタンがあったといわれている(汐見二区沿革史編集委員 1987)。

鷓川盛土墳墓群(旧汐見遺跡)(1)(図Ⅱ-2-5、Ⅲ-2-2・3、図版12・13-1～3)

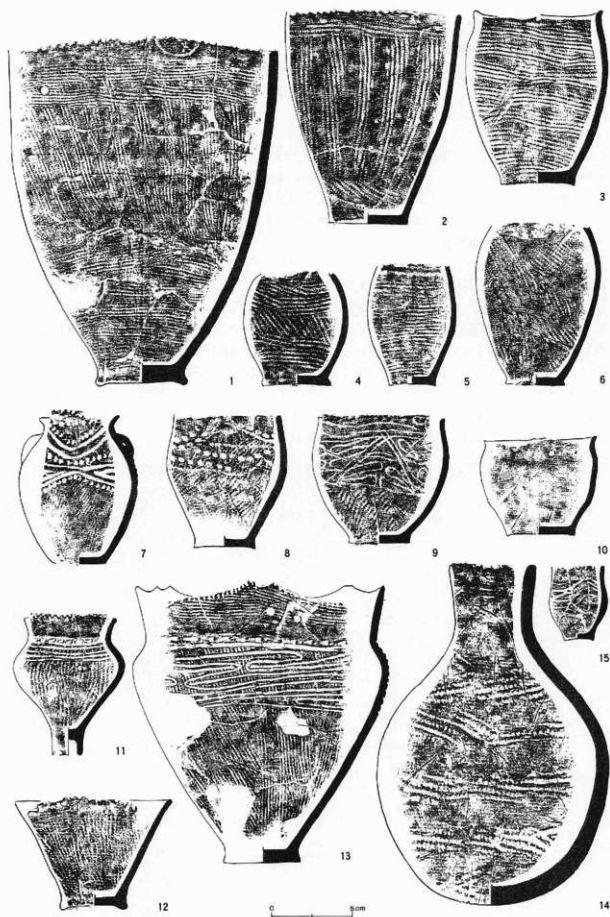
チン川とライバチン川の合流地点東位、標高20mほどの河岸段丘上に位置する。1963(昭和38)年、鷓川町教育委員会により2つの地点の調査が行われた。第一地点では2つの盛土墳墓が確認され、このうち1号墳墓が調査された。規模は直径7m、高さ65cmで平面形は円形である。周囲に幅85cm、深さ60～80cmの周溝が廻り、墳墓内に6基の土墳墓が検出された。土墳墓内には統縄文時代初頭の土器・石器・管玉・平玉などが副葬されていた。図Ⅲ-2-2-14は第一墓穴、3・5・8・10は第二墓穴、6は第三墓穴、1・2・4は第四墓穴、11・15は第五墓穴、9は第六墓穴、7は1号墳墓内、12は第一地点Aトレンチ、13は第二地点出土、図Ⅲ-2-3-17は第二墓穴、24・25は第五墓穴、1～16・18～23は1号墳墓内の出土である。土器は「汐見式」と仮称されている(大場・扇谷 1964)。1966(昭和41)年7月7日、北海道指定史跡に登録されている。



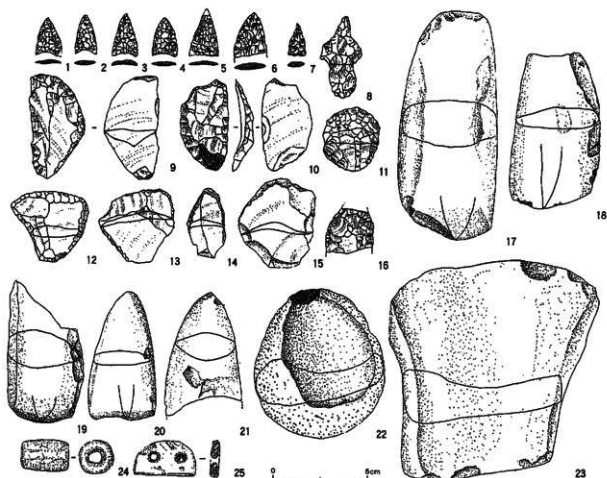
図Ⅲ-2-1 汐見・宮戸・米原の遺跡分布図



図III-1-2 鶴川町の遺跡分布図



図III-2-2 鵜川盛土墳墓群の遺物(1)



図III-2-3 鷺川盛土墳墓群の遺物(2)

トンニトイ(旧汐見1)遺跡(6)(図II-2-5、III-2-4-1~17)

鷺川盛土墳墓群より1kmほど海側にある標高約10mの海岸段丘の西端に位置する。1974(昭和49)年に伊藤明氏(当時鷺川高校在職)が現地でも遺物が出土するというお話を聞いて調査し、遺跡であることを確認した。1976(昭和51)年、土取り工事に伴う範囲確認調査により、統縄文時代の恵山式(1~11)・後北式(12)土器や擦文時代の土器(13~16)、砥石(17)が採集された(扇谷 1977)。

汐見2遺跡(16)(図III-2-4-18~20、図版13-4)

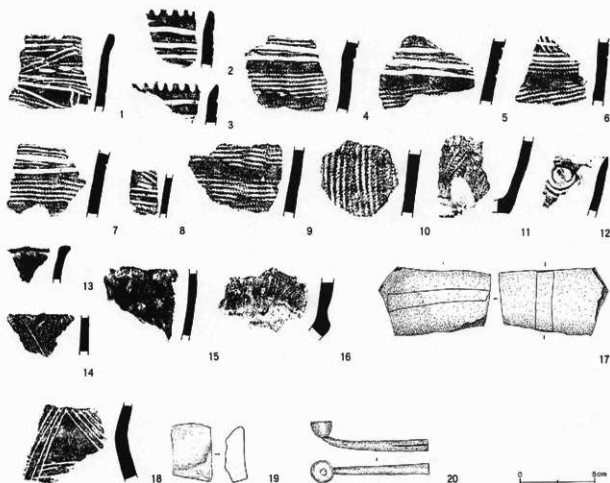
鷺川盛土墳墓群の南西、ライバチン川左岸の標高約20mの段丘上に位置する。擦文時代後期の土器(18)、砥石(19)、煙管(キセル)の煙首(20)が出土した。相当数の竪穴を有する住居跡群と推定される。ムカワブト・コタンの跡地の可能性が大きい。八王子千人同心の開拓用水路が附近にある。(扇谷 1977)。八王子同心入植跡地はこの遺跡の南西、大正10年の地形図(図III-1-1)で鷺川河口付近の東側の中島付近に位置すると推定される。

汐見3遺跡(17)(図版13-5)

鷺川盛土墳墓群の南東、ライバチン川右岸の標高約20mの段丘上に位置する。造田工事により土砂採取された崖面から黒曜石の剥片が多数出土した(扇谷 1977)。時期は不明である。

トンニカ遺跡(18)(図版14-3)

チン川右岸、標高約20mの台地に造成された人工池の東側に位置する。縄文時代早期~晩期の土器・石器が採集されている。かつてトンニカ・コタンもあったと伝えられている(扇谷 1977)。



図Ⅲ-2-4 トンノイトイ遺跡・汐見2遺跡の遺物

ムレトイの丘(図Ⅲ-1-2の▲印、図Ⅲ-2-1の△印、図版14-2)

鶏川河口東位の海岸砂丘末端に位置する標高約10mの独立丘である。チロンスップカムイの棲む場所として古くから信仰の対象とされており、一時期、稲荷の祠や鳥居等もあった。シシャモカムイノミが行われていた場所(犬飼 1941)で、昭和40年代にはシシャモを鶏川名物とする関係で市街地附近の川岸で行うようになった(扇谷 1977)。しかし、最近この地でのシシャモカムイノミが復活した。

チン川左岸1遺跡(9)(図版14-4、15-4)

1977(昭和52)年、地域振興公園の環境アセスメント調査により発見された遺跡で、チン川左岸の標高約20mの段丘上に位置する。農道カット面にピット状遺構が確認されている。1978(昭和53)年の宅地造成に伴う範囲確認調査で、縄文時代中期の土器が出土した。昭和54年度に標柱が設置された。

チン川左岸2遺跡(10)図版14-5、15-4)

1977(昭和52)年、地域振興公園の環境アセスメント調査により発見された遺跡で、チン川左岸の標高約15mの段丘上に位置する。火山灰が削平され腐植土が露出している。昭和54年度に標柱が設置された。縄文時代前期の遺跡とされているが詳細は不明である。

チン川左岸3遺跡(33)

1977(昭和52)年、航空保安無線施設工事に伴う範囲確認調査により発見された。チン川左岸段丘標高約18mの上に位置する。長年の心土破砕により攪乱され破壊に近い状況である。縄文時代前期の土器・石器が出土した。

III 鷺川町の遺跡



図III-2-5 柏山遺跡の遺物

柏山(旧汐見団地)遺跡(7)(図Ⅱ-2-5、Ⅲ-2-5、図版15-1~3)

ライパチン川右岸段丘緩斜面の標高10~20mに位置する。1976(昭和51)年の苫東開発の団地造成に伴う範囲確認調査により、縄文時代前期の静内中野式(1・2)や榎苗式系の土器(3~5)と石槍(6~8)・つまみ付きナイフ(9・10)・スクレイパー(11)・石のみ(12)・石斧(13)・石鏟(14)・北海道式石冠(15)などの石器が採集された(扇谷 1977)。昭和54年度に標柱が設置されている。

(2) 宮戸の遺跡(図Ⅲ-2-1)

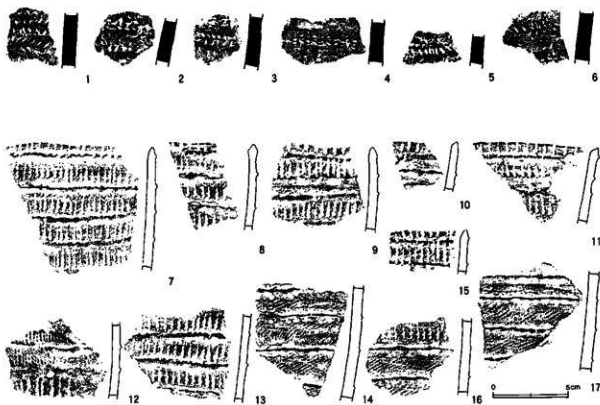
宮戸は鶴川市街地の対岸から東、日胆国境の丘陵地帯に続く地域である。旧地名は「イモッペ」で「陥しの餌を置く処」の意という(永田 1984)。イモッペ(imokpe)とは「餌」「ミミズ」の意である。漁あるいは小動物の罾猟に関わる地名と思われる。これについては第Ⅱ章を参照されたい。鶴川大漁地蔵(井目戸地蔵)が祀られたことにちなんで宮戸となった(鶴川大漁地蔵尊奉賛会 1987)。宮戸にはイモクベ・コタンがあり、のちに井目戸村と称した。明治9年頃の記録によると、当時の井目戸村は鶴川村よりも戸数も多く、馬商人、造材業者、運搬夫などの往來を加えて旅人宿もあり、猟師や仲買人の集合地として胆振・日高一の賑わいであったという(鶴川町史編纂委員会 1968)。

宮戸遺跡(20)(図Ⅲ-2-6-1~6)

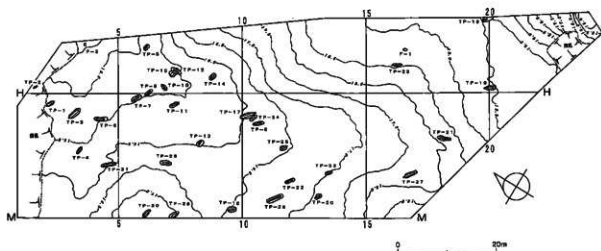
鶴川左岸沖積地に突出した舌状台地先端の標高約10mに位置する。1976(昭和51)年の範囲確認調査により縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器が出土した(扇谷 1977)。白樺を植林して保護しているため保存状態は良好である。

サツペサ遺跡(19)

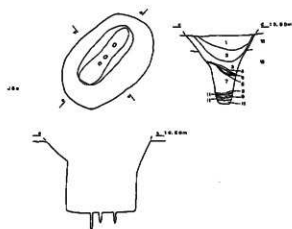
宮戸遺跡の南東の同一台地上標高約10mに位置する。1976(昭和51)年の範囲確認調査により縄文時代中期と推定される土器片、貝殻片や陶磁器片が採集された。かつてサツペサ・コタンのあった場所といわれている(扇谷 1977)。



図Ⅲ-2-6 宮戸遺跡・米原の遺物

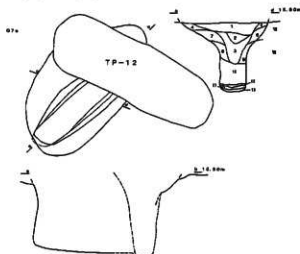


TP-13



- TP-13遺跡
- 1 遺跡：TP-13遺跡(1)～遺跡(12) 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 2 遺跡(1)：L. 15.90m～遺跡(12) 遺跡(12)：L. 14.80m
 - 3 遺跡(1)：L. 15.90m～遺跡(12) 遺跡(12)：L. 14.80m
 - 4 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 5 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 6 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 7 L. 15.90m～遺跡(12) 遺跡(12)：L. 14.80m
 - 8 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 9 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 10 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 11 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 12 遺跡(1)：L. 15.90m

TP-15

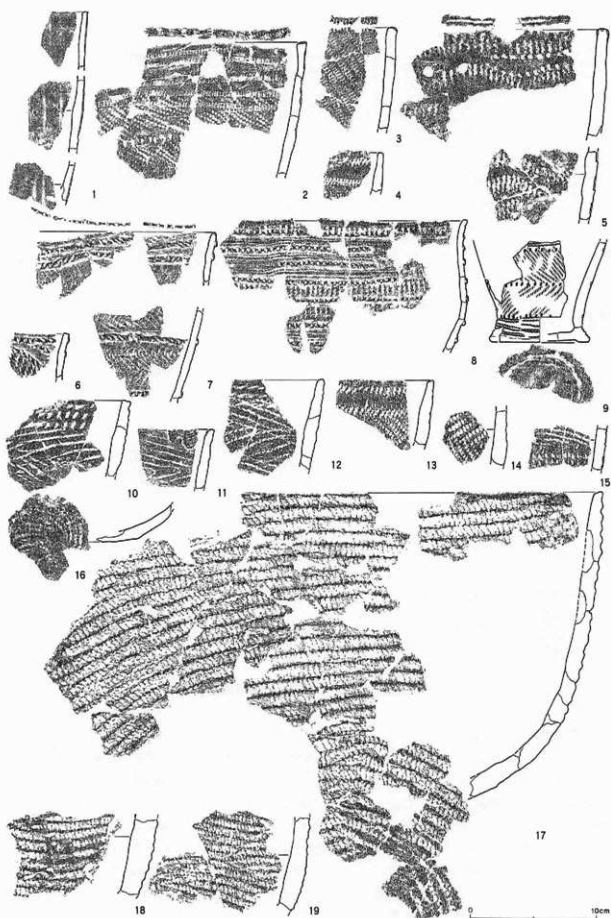


- TP-15遺跡
- 1 遺跡：TP-15遺跡(1)～遺跡(12) 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 2 遺跡(1)：L. 15.90m～遺跡(12) 遺跡(12)：L. 14.80m
 - 3 遺跡(1)：L. 15.90m～遺跡(12) 遺跡(12)：L. 14.80m
 - 4 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 5 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 6 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 7 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 8 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 9 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 10 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 11 遺跡(1)：L. 15.90m
 - 12 遺跡(1)：L. 15.90m

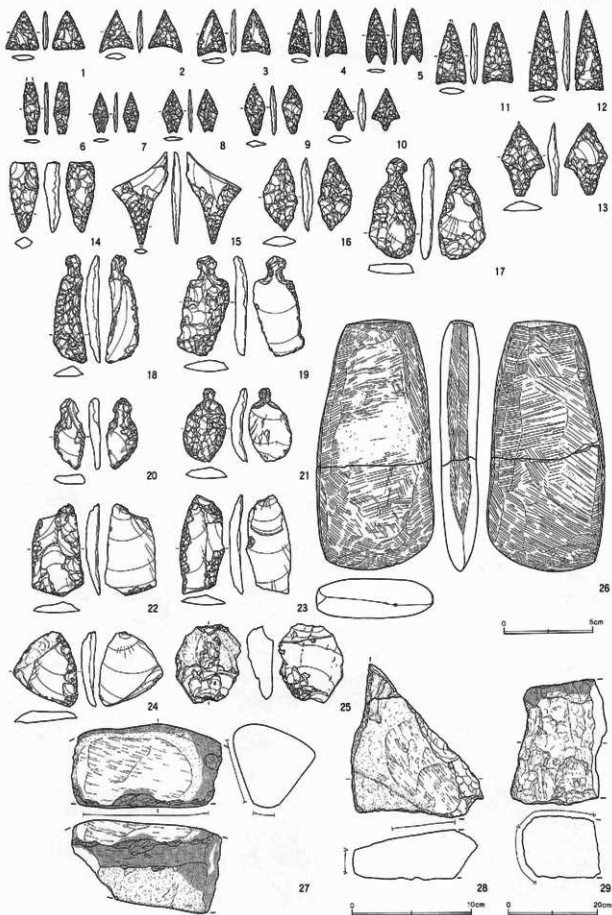
図III-2-7 宮戸3遺跡の遺構

宮戸3遺跡(39) (図III-2-7-9)

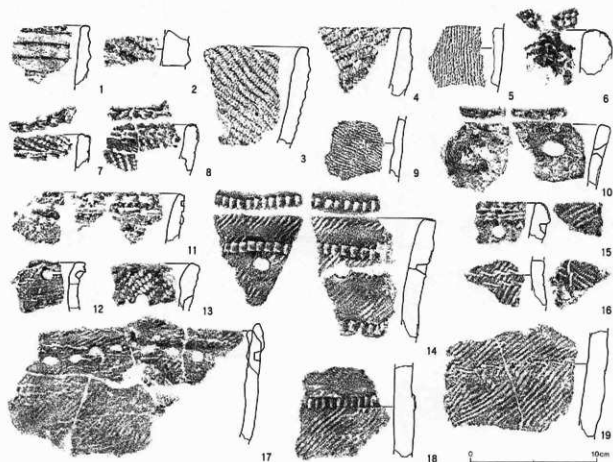
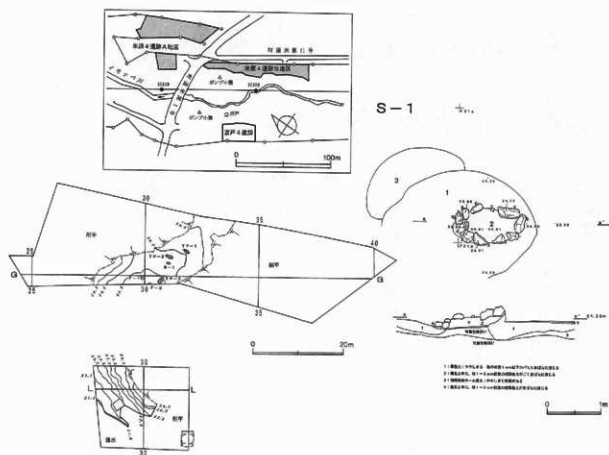
イモッペ川中流左岸の沖積平野に面した台地の標高15～20mに位置する。日高自動車道の建設に伴い、2000(平成12)年7・8月に鮎北海道埋蔵文化財センターが3,600m²の発掘調査を行った。縄文時代中期後半～後期初頭のTピット32基、早期後半の焼土1ヶ所、前期前半の焼土1ヶ所を検出した(図III-2-7)。遺物は、土器2,150点、石器等17,086点が出土した。土器は縄文時代早期中葉の貝殻条痕文土器(図III-2-8-1)、早期後半の東銅路Ⅲ式、コックロ式(2～9)、東銅路Ⅳ式(10～16)、前期前半の網文式(17～19)および鉢内中野式土器が出土した。定型的な石器では石鏃(図III-2-9-1～12)、石槍・ナイフ(13・16)、石錐(14・15)、つまみ付きナイフ(17～21)、スクレイパー(22～24)、ピエス・エスキュー(25)、石斧(26)、たたき石、くぼみ石、すり石(27)、北海道式石冠、砥石(28)、台石(29)が出土した。Tピットは墳底面を明瞭に造りだすものと、不明瞭なものの2種類があ



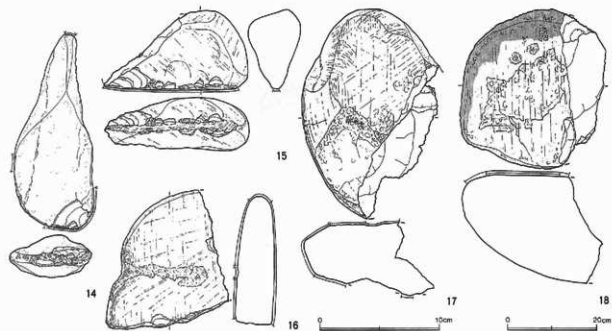
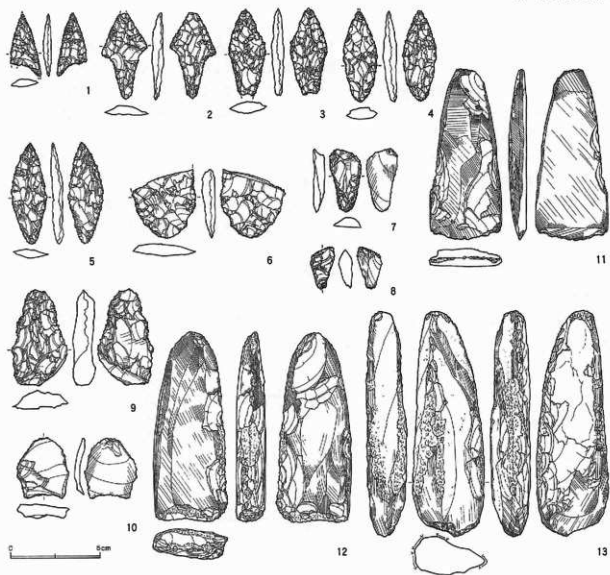
図III-2-8 宮戸3遺跡の遺物(1)



図III-2-9 宮戸3遺跡の遺物(2)



図III-2-10 米原4遺跡A地区の遺構と遺物



図III-2-11 米原4遺跡A地区の遺物

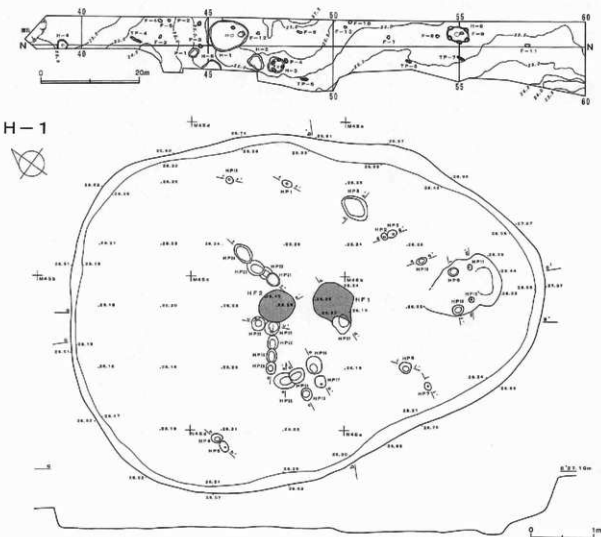
る。前者には長軸が2.5mを超える長いもの、1.7~1.9mとやや大型のもの、1.2~1.6mの中型のもの、1.2m以下の小型のものがある。中型や小型のものには小判型の幅広い墳底面をもつもの、逆杭跡をもつものがある。後者には長軸が2m以上のものがほとんどで、前者の大型のものと規模的に類似する。これらTピット群は、さらに沢筋に沿って北側および南西側に続くと推定される(北埋調報153)。

(3) 米原の遺跡(図III-2-1)

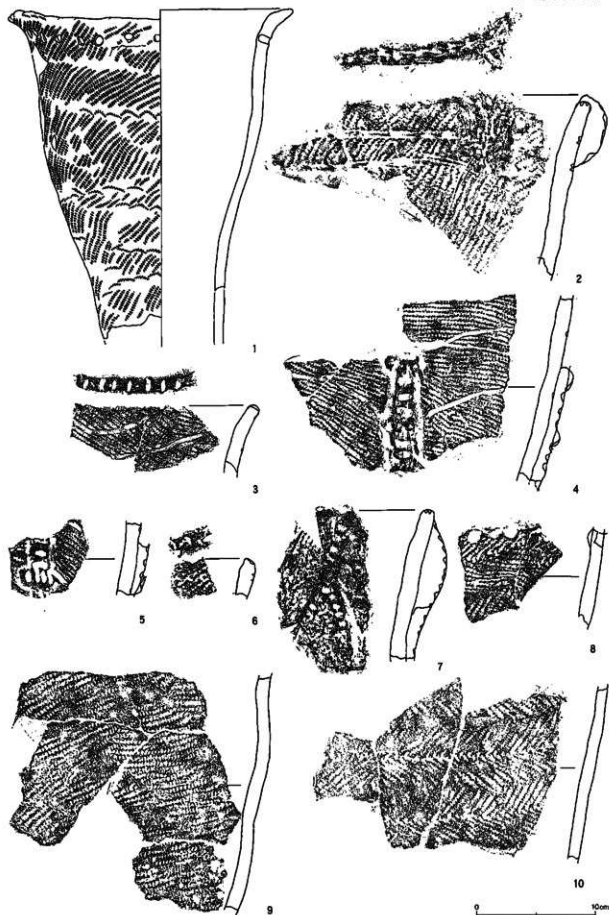
米原の旧地名は「オサネツ」といい「熊が流れ出るほどいる」あるいは「魔物のいるところ」の意という(鶏川町史編纂委員会 1968)。永田地名解では「オサン子ブ」として意味不明となっている。「鶏川町史」には明治6年の資料を基にして「オサネツコタンは、米原の東部丘陵沿いで川に遠いため、あまり住みつかなかったらしい。イコトク・ハルランの二戸だけ。」「…川岸あたりに先住アイヌ人四、五軒あったが、明治31年の大水害後どこかへ移ったらしい。アイヌの滅った原因の一つはキノコ中毒説もあるが、真偽の程はわからない。…」との記述がある。

米原出土の遺物(図III-2-6-7~17)

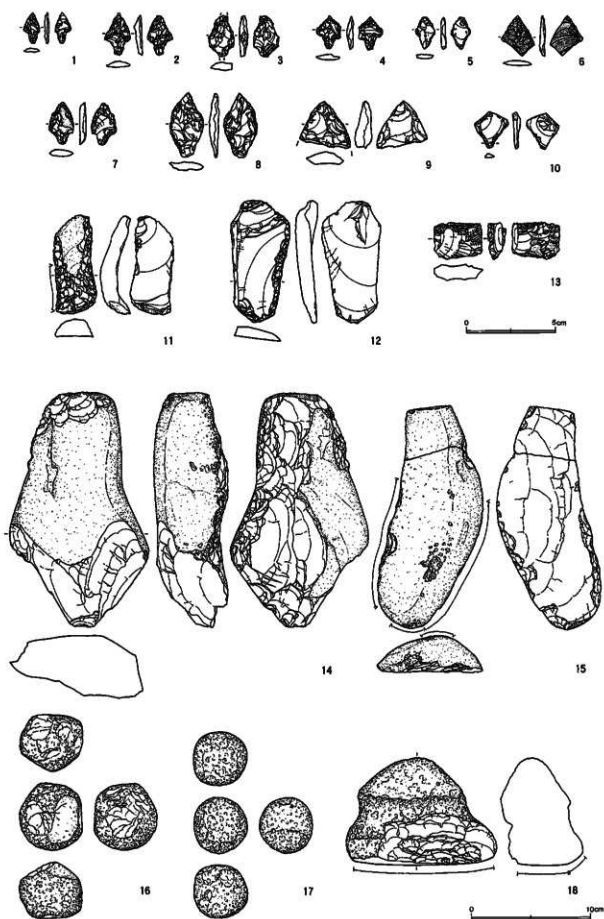
1967・68(昭和42・43)年頃、農道の工事中に鶏川左岸の段丘(標高30~40m)から縄文時代早期の中茶路式土器が出土した。出土地点は不明である(扇谷 1977)。



図III-2-12 米原4遺跡B地区 H-1

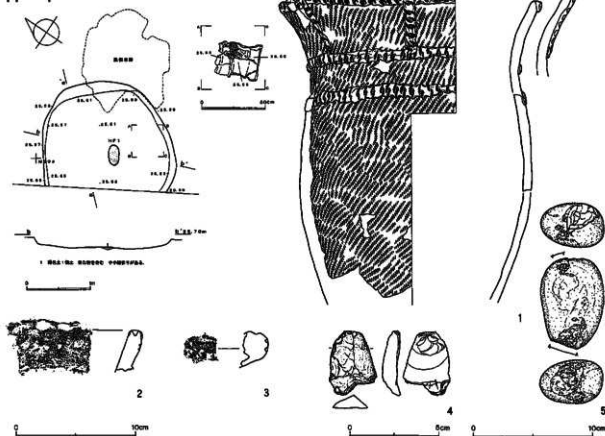


図III-2-13 米原4遺跡B地区 H-1の遺物(1)



図III-2-14 米原4遺跡B地区 H-1の遺物(2)

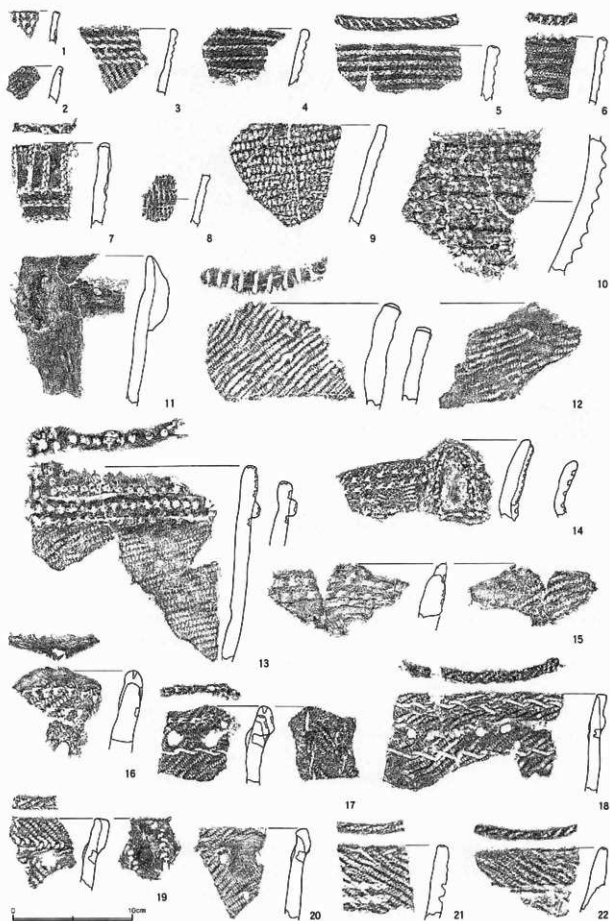
H-4



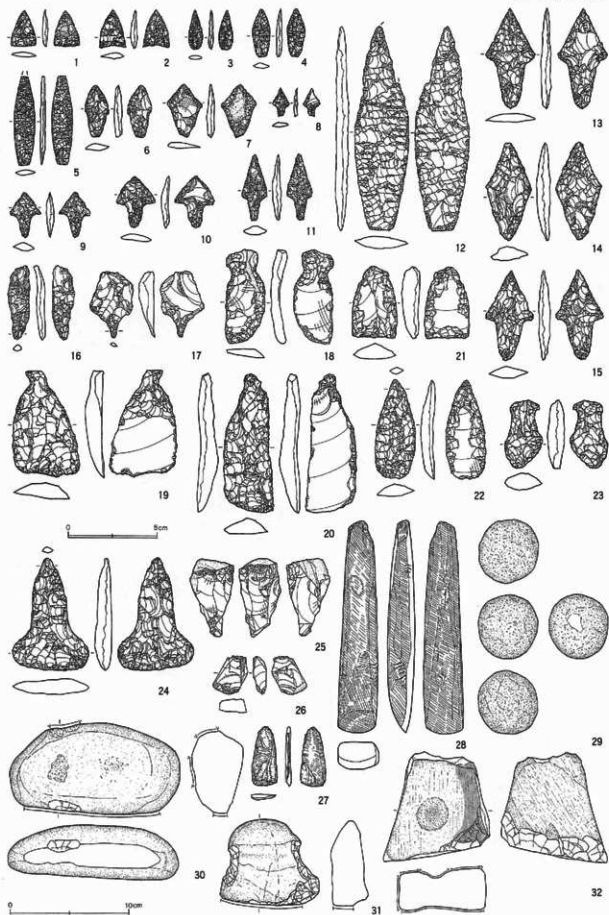
図Ⅲ-2-15 米原4遺跡B地区 H-4とその遺物

米原4遺跡(42)(図Ⅲ-2-10~17)

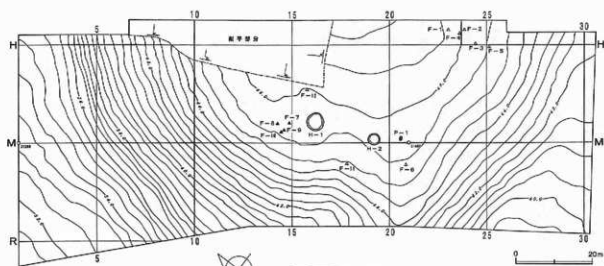
イモッペ川中～上流右岸の台地斜面の標高23～28mに位置する。宮戸4遺跡の対岸である。日高自動車道の建設に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが2000(平成12)年8～10月に2,675m²の発掘調査を行った。遺跡が町道1号により分断されており、北側をA地区、南側をB地区と呼称した。B地区の川側にはポンプ小屋保護のためにクリアランスを設けた。遺構はいずれも縄文時代中期後半の柏木川式から北筒式期のもので、竪穴住居跡6軒(図Ⅲ-2-12～15)、土壇4基、Tピット10基、焼土13ヶ所、集石1ヶ所(図Ⅲ-2-10)を検出した(以下図Ⅲ-2-を略)。遺物は、土器12,908点、石器等23,497点が出土した。土器は縄文時代早期後半の東銅路Ⅲ式(図Ⅲ-2-16-1～7)、中茶路式(8)、東銅路Ⅳ式、前期前半の網文式(10-1・2、16-9・10)、静内中野式(10-3・4)、前期後半の植苗式、円筒土器下層式(10-5)、中期前半の円筒土器上層式、中期後半の天神山式(10-6～8)、柏木川式(16-11～14)、北筒式(10-11～20、2-16-15～20)、後期初頭のタブコブ式(16-21-22)などがある。石器は、石鏃(10-1、17-1～11)、石槍・ナイフ(10-2～5、17-12～15)、石錐(17-16・17)、つまみ付きナイフ(17-18～20・23)、スクレイパー(10-6・7・9、17-21・22・24)、ピエス・エスキュー(10-8、17-26)、石核(図Ⅲ-17-25)、石斧(図Ⅲ-10-11～13、図Ⅲ-17-27・28)、たたき石(図Ⅲ-10-14、図Ⅲ-17-29)、すり石(図Ⅲ-10-15、図Ⅲ-17-30)、北海道式石冠(図Ⅲ-10-16、図Ⅲ-17-31)、砥石(図Ⅲ-10-17、図Ⅲ-17-32)、台石(図Ⅲ-10-18)などがあり、ほとんどは早期、中期のものとみなされる。米原4遺跡の調査は次年度以降も予定されている(北埋調報153)。



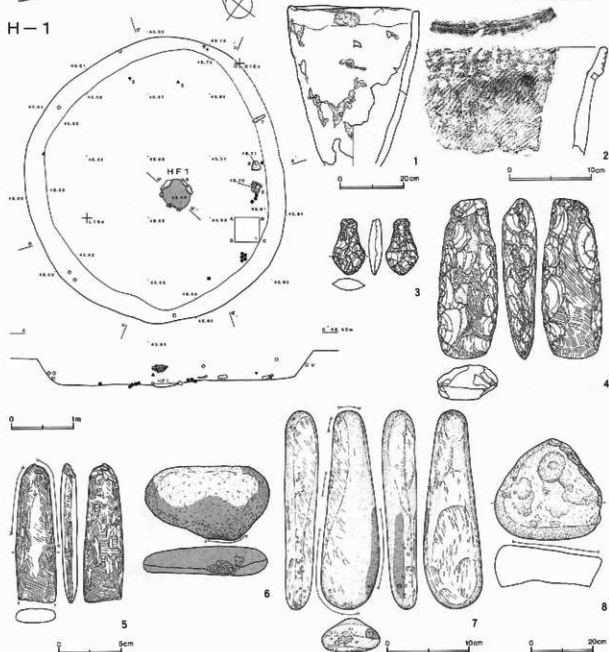
図III-2-16 米原4遺跡B地区の遺物(1)



図III-2-17 米原4遺跡B地区の遺物(2)



H-1



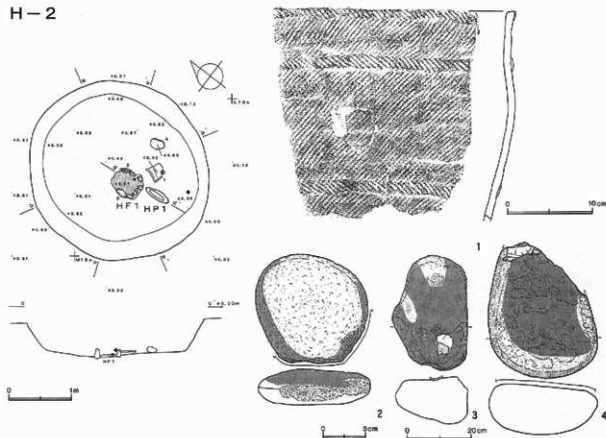
図III-2-18 米原3遺跡 H-1とその遺物

米原3遺跡(38)(図Ⅲ-2-18~24)

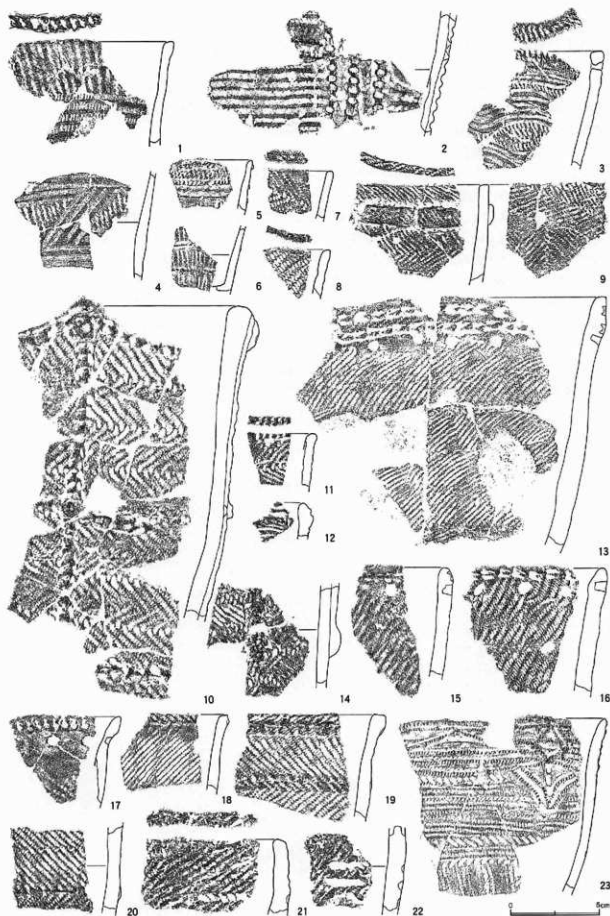
イモッペ川上流右岸、前述の米原4遺跡から1kmほど上流の舌状台地上の標高40~50mに位置する。日高自動車道の建設に伴い、(財)北海道埋蔵文化財センターが2000(平成12)年5~7月に7,400m²の発掘調査を行った(図Ⅲ-2-18~22)。また、農免農道(町道米原11号線)の改良工事のため、鷓川町教育委員会が2001(平成13)年5・6月に400m²の発掘調査を行った(図Ⅲ-2-23・24)。

2000(平成12)年の調査では、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡2軒(図Ⅲ-2-18・19)と土壌1基、早期後半の8ヶ所、中期末葉の焼土4ヶ所を検出した。遺物は土器5983点、石器等5463点が出土した。土器には、縄文時代早期後半の東釧路Ⅲ式(図Ⅲ-2-20-1~3)、コッタロ式(4・5)、中茶路式(6)、東釧路Ⅳ式(7)、前期前半の静内中野式(8)、前期後半の植苗式(9)、中期前半の円筒土器上層式(11・12)、萩ヶ岡1式(10・14)、中期後半の柏木川式、北筒式(15~17)、後期初頭の余市式(18~20)、タブコブ式(21・22)、晩期後葉のタンネトウL式、続縄文時代の後北B式(23)などがある。石器は石鏃(図Ⅲ-2-21-1~12)、石槍・ナイフ(13~19)、石錐(24~26)、つまみ付きナイフ(20~23・27~29)、スクレイパー(32)、ピエス・エスキュー(30・31)、両面調整石器(33・34)、石核、石斧(図Ⅲ-2-22-1~3)、たたき石(4・8)、くぼみ石、ナリ石、北海道式石冠(6・7)、石鋸(5)、砥石(9)、台石(10)などがある(北埋調報153)。2001(平成13)年の調査では、土壌1基、Tピット1基、焼土1ヶ所が検出された(図Ⅲ-2-23)。遺物は土器187点、石器等2,108点が出土した。土器は縄文時代早期後半の中茶路式(1・2)、前期後半の植苗式(3~10)、中期後半の天神山式(11~18)がある。石器はつまみ付きナイフ(図Ⅲ-2-24-1~3)、石斧(4)、たたき石(5~8)、北海道式石冠(9)、砥石(10~12)がある(兵藤 2001)。

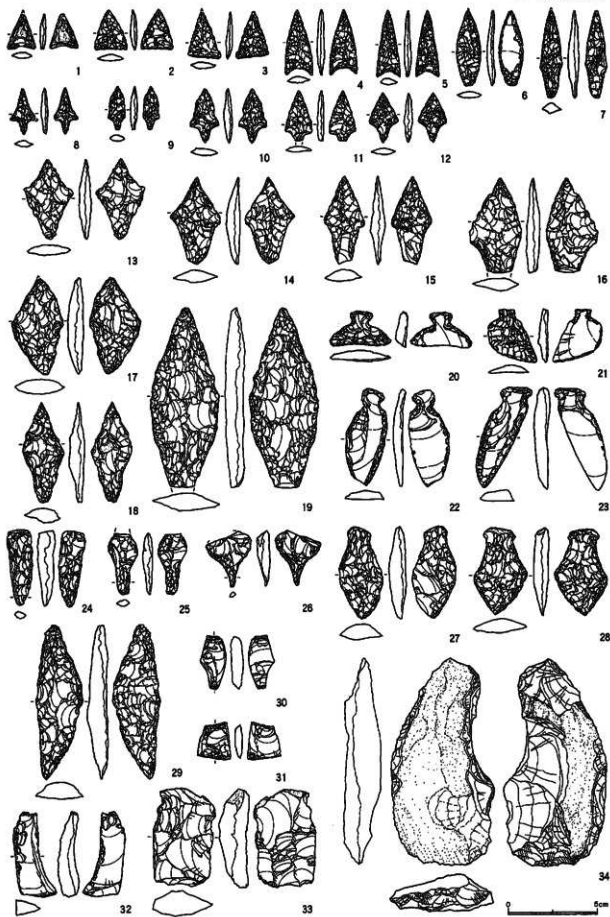
H-2



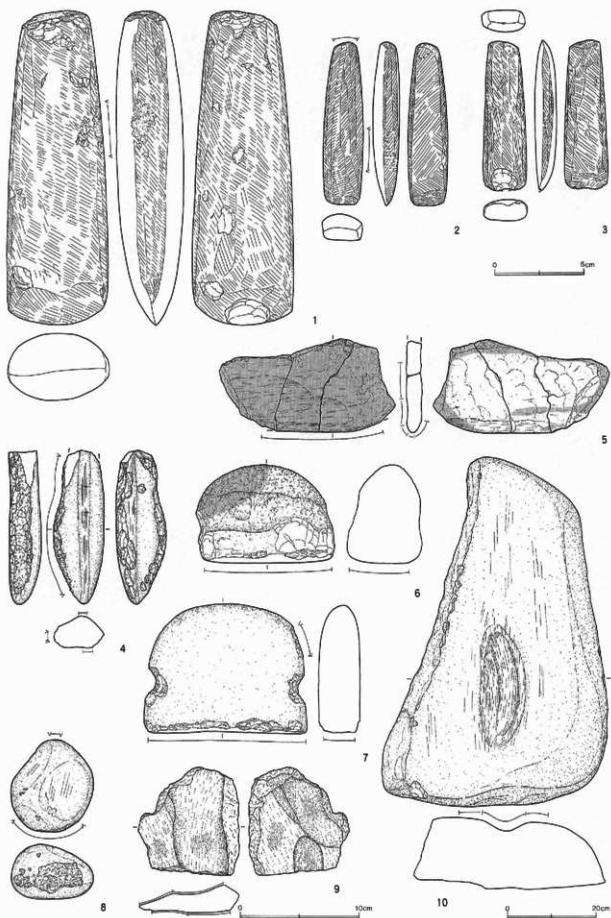
図Ⅲ-2-19 米原3遺跡 H-2とその遺物



図III-2-20 米原3遺跡の遺物(1)

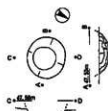
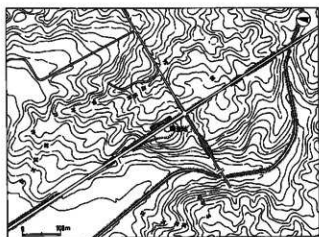


図III-2-21 米原3遺跡の遺物(2)



図III-2-22 米原3遺跡の遺物(3)

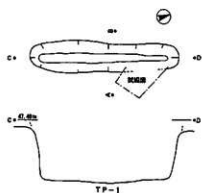
III 鷺川町の遺跡



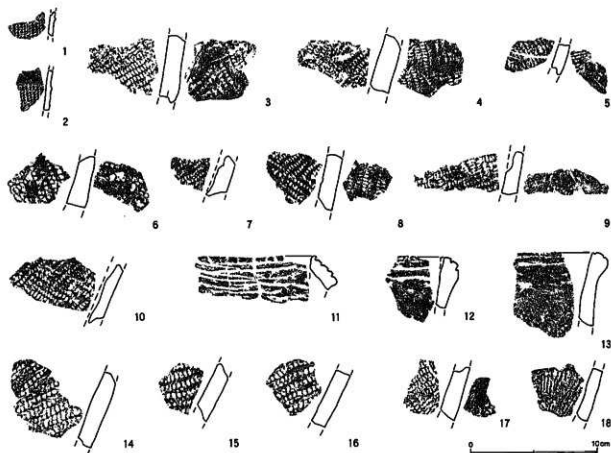
- 1 1.5YR 2/1 黒色
- 2 1.5YR 3/2 暗褐色
- 3 1.5YR 4/3 暗褐色



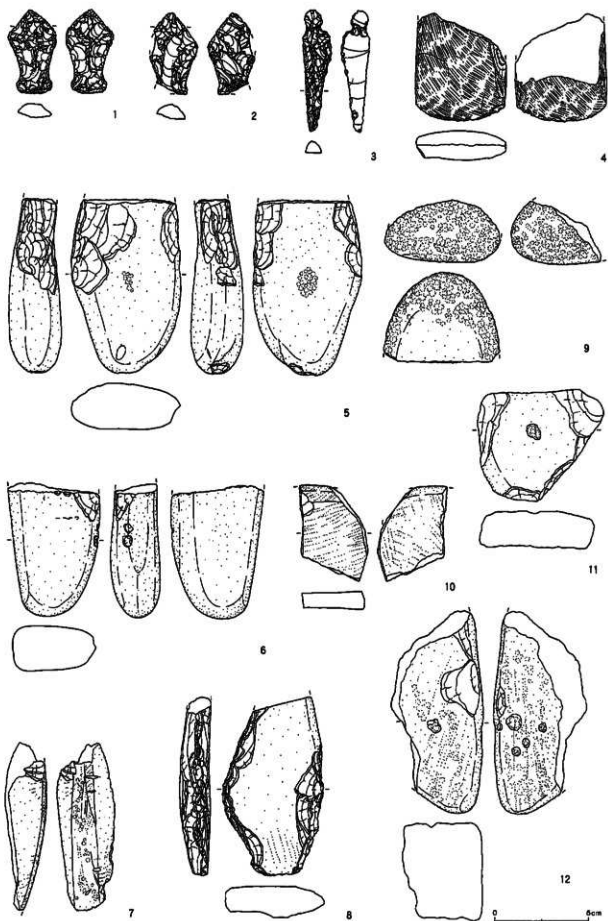
- 1 1.5YR 3/2 暗褐色



- 1 1.5YR 2/1 黒色
- 2 1.5YR 3/2 暗褐色
- 3 1.5YR 3/4 暗褐色
- 4 1.5YR 3/2 暗褐色
- 5 1.5YR 2/3 暗褐色
- 6 1.5YR 4/6 黒色
- 7 1.5YR 1/1 黒色



図III-2-23 米原3遺跡(鷺川町教委調査地点)の遺構、遺物(1)



図III-2-24 米原3遺跡(鷓川町教委調査地点)の遺物(2)

米原第1遺跡(36)

チン川源流部丘陵の南北に伸びる舌状台地上の標高60mに位置する。1993(平成5)年6月にいすず自動車高速周回路建設に伴う所在確認調査により発見された。1995(平成7)年4月のいすず自動車高速周回路建設に伴う範囲確認調査により、南端部から南東側の緩斜面で縄文時代中期の土器片、石片が出土した。また台地中央部でTピット3基が確認された。

米原第2遺跡(37)

オサネップ川源流部丘陵の標高60mに位置する。1993(平成7)年4月のいすず自動車高速周回路建設に伴う範囲確認調査により、丘陵頂部付近でTピット1基が確認された。遺物は出土していない。

米原5遺跡(43)

チン川上流右岸台地南側緩斜面の標高35~40mに位置する。2001(平成13)年11月、24,000m²を対象とした、北海道教育委員会と鷓川町教育委員会による、放牧地改良工事にともなう工事立会調査により、Tピット7基が検出された。遺物は縄文時代早期後半の土器片・石器が出土した。ローム(Ⅶ層)上面まで削平しているため早期以降の遺物については不明である(田中・宗像・今村 2002予定)。

ケナシノシケオマナイ遺跡(21)(図Ⅲ-2-6)

鷓川左岸の標高約20mの段丘上に位置する。この遺跡の北東に旧地名ケナシノシケオマナイ(湿原の木原・のまん中・へ入っている・川)と称する小川が、鷓川に流れ込んでいた。工事用の施設建設のため、削った段丘の崖面から縄文時代の土器片が採集された。東方にアイヌ墓地があり、土葬墓も現存する(扇谷 1977)。

3 鷓川下流右岸地域の遺跡

この地域には、モイベツ川、下カーナイ川、ケナシロ川などの鷓川支流が流れており、これらの川の流域および河口部、鷓川流域に遺跡が分布している。字名でいえば春日、豊城、二宮である。二宮は入鹿別川、ニクチナイ川流域であるが、便宜上ここで紹介する。

(1) 春日の遺跡(図Ⅲ-3-1)

春日は南西に流れてきた鷓川が北西に大きく蛇行して流れが緩やかになるあたりの、川に面した南斜面であり、古くからモエベツ・コタンのある一帯である。旧地名はモイベツ、カアナイ、キリカチである。モエベツは「モイベツ」で「遅流川」「静かな川」の意という(永田 1984)。モイベツ川流域にはカアナイ・コタンがあり、のちにごちらを「上カーナイ」、モイベツ川河口から豊城に続く一帯を「下カーナイ」とよぶようになった。また、旧富内線の春日駅から鷓川上流側右岸一帯を「キリカチ」といい、「川筋取調図」にはキリカチ川口北側にキリカチ・コタンがある(松浦 1988)。永田地名解には「キリカチコタン」として「蛙の産卵場」、「イチヤン」と同義とされている。

春日遺跡(5)(図Ⅲ-3-2-1~11、図版17-1~3)

鷓川右岸台地の舌状先端部から河川敷へかけての標高約10mに位置する。旧富内線春日駅の南東約200~300mの地点にある。川西幹線用水路が中央を貫通している。舌状先端部で縄文時代晩期の土器片、スクレイパー、握石(たたき石?)が採集された(稲葉 1961)。1976(昭和51)年の範囲確認調査では、縄文時代早期後半の東駒路Ⅲ式(1・2)、東駒路Ⅳ式(3~5)、前期前半の静内中野式(7)、中期前半の円筒土器上層式(6・8)と続縄文時代の土器片(9・10)、黒曜石製のスクレイパー(11)が採集された(扇谷 1977)。また、1977(昭和52)の道路改修工事による所在確認調査では縄文時代晩期、アイヌ文化期の遺物が採集されている。なお、「9. 鷓川町春日第1」として、「春日駅より西位にある沢を約3軒程奥に丘陵より一段低くなった地域」で縄文時代早期後半のコックロ式、中茶路式、東駒路Ⅳ式と中期と思われる土器片が採集されたという記述がある(稲葉 1961)。

モイベツ遺跡(14) (図Ⅲ-3-2-12、図版17-4・5)

モイベツ川と鷺川の合流地点南東の舌状台地上、標高約10mに位置する。春日神社の下の一帯で、中央部を道路が貫通している。この道路脇には「トコムの坂」の標識が設置されている(図版18-1・2)。1976(昭和51)年の範囲確認調査により縄文時代前期前半の静内中野式土器(12)が採集された(扇谷 1977)。また、稲葉勝男氏の「鷺川流域の遺跡遺物について」には、「10、鷺川町春日第2」として、「右岸段丘より突出した部分の切削より土師器を1片と黒曜石片を確認している、尚春日小学校校長南氏の話によると当地点から小学生が時々土器片を拾ってくるそうである。」との記述がある(稲葉 1961)。

パンヤケラ遺跡(13) (図Ⅲ-3-2-13~17)

モイベツ川河口から3kmほど上流左岸の山裾の標高約50mに位置する。縄文時代早期後半の東釧路系および中期の土器片、石鏃、スクレイパーが採集されている(稲葉 1961)。また、1976(昭和51)年の範囲確認調査により縄文時代前期前半の静内中野式土器(13・14)、黒曜石製の石鏃(15)とスクレイパー(16)、緑泥片岩製のたたき石(17)が採集された(扇谷 1977)。



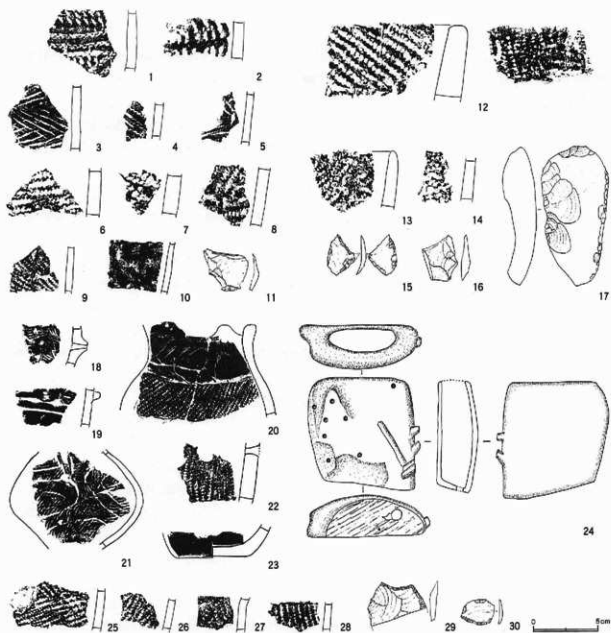
図Ⅲ-3-1 春日・豊城・二宮の遺跡分布図

上カーナイの石製品(図III-3-2-24)

モイベツ川下流の集落の旧地名は「カーナイ」といい「糸川」の意という。このあたりには鶴が多く、この鶴を獲る糸を仕掛けておいたところという(永田 1984)。この集落の南西にある崖面下の川から、長さ8.5cm、幅8.0cm、厚さ2.9cmの滑石製の石製品(24)が採集されている。石材内部を加工して袋状の容器様に作出し、底部に径0.5cmの孔がある。全面滑沢に調整し、一面は扁平でもう一面には溝と列点が刻まれている。側面には2つの突起がある(扇谷 1977)。

(2) 豊城の遺跡(図III-3-1)

豊城は西流する鷓川が南流をはじめあたりの地域である。旧富内線(1986年廃止)の駅名で、旧地名を「ケナシオロコタン」、「林の中の部落」の意という(永田 1991)。ケナシロ・コタンは東方の丘陵沿いにあり、川端から高台にかけてハンノキ、ヤチダモの繁った湿地帯でよい狩場であった(鷓川町史編纂委員会 1968)。ちなみに富内線は鷓川で分岐し、豊城、春日、旭岡と駅が設けられてあった。



図III-3-2 春日遺跡・モイベツ遺跡・バンヤケラ遺跡・豊城2遺跡・上カーナイ・藤高沼遺跡の遺物

藤高沼遺跡(15)(図Ⅲ-3-2-25~30)

豊城と鷗川市街地の中間の鷗川右岸沖積地に、鷗川の流路痕跡である藤高沼がある。遺跡は沼の西岸の標高約10mに位置する。1976(昭和51)年の範囲確認調査により、縄文時代晩期~統縄文時代の土器片(25~28)、黒曜石製のスクレイパー(29・30)、鉄製品、獣骨片が出土している(扇谷 1977)。

豊城1(旧豊城)遺跡(3)(図Ⅱ-2-5、図版20-1)

鷗川右岸、旧富内線豊城駅北東の独立丘オコツ山(標高50m)から川西幹線用水路を隔てた北東側、ケナシロ川左岸舌状台地の標高約50mに位置する。1979(昭和54)年に一般分布調査により確認された遺跡で出土遺物による時期等は不明である。

豊城2遺跡(11)(図Ⅲ-3-2-18~23、図版20-1)

鷗川右岸、オコツ山南斜面の標高約50mに位置する。縄文時代前期前半の網文式、静内中野式、中期・晩期の土器片と石錐、スクレイパー、石錐が採集されており(稲葉 1961)、1976(昭和51)年の範囲確認調査では縄文時代晩期の土器片(18~23)が採集されている(扇谷 1977)。

豊城3遺跡(12)(図版20-1)

鷗川右岸、オコツ山南斜面の標高約50mに位置する。前述の豊城2遺跡の西600m、かつて豊城神社社殿のあった場所である。縄文時代晩期、統縄文時代の土器片が採集されている(扇谷 1977)。

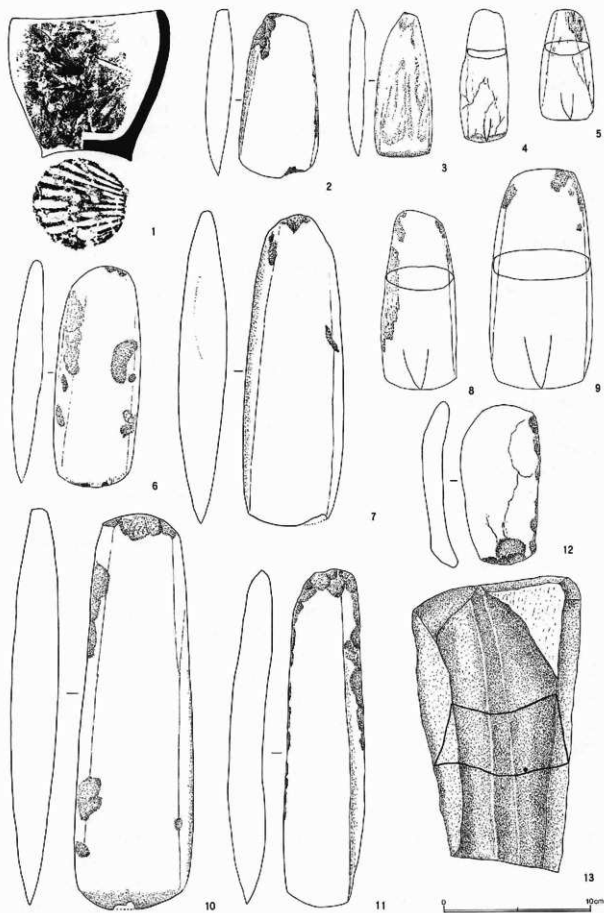
豊城4遺跡(34)

鷗川右岸、ケナシロ川左岸台地の標高約80mに位置する。1991(平成3)年の範囲確認調査により発見された。縄文時代早期後半の東銅路Ⅳ式、前期前半の静内中野式の土器片、石槍などが出土した。鷗川のオマンルパロ(図Ⅲ-1-2の■印、Ⅲ-3-1の□印、図版17-1、18-3、19)

「旧富内線が鷗川から分かれて間もなくウコトイというところがあり、かつてここに洞窟があった。この洞窟付近に時々人の姿が見えるので、近寄ってみるといつの間にか消えてしまうので、あの世に通ずる穴だといわれていた。穴の入り口は狭く、やっと人が通って通れるくらいだが、入っていくと次第に広くなり明るくなる。そこには村があり、昔自分の村にいて死んだ人達ばかりである。声をかけてみるが相手には聞こえず、相手の身体に手をかけると相手はたちまち死んでしまう。その食べ物もこの世に持って来て食べるとすぐに死んでしまう。そこで死人に見つかつて芥や灰を頭にかけられると、身体について離れないが、入り口の狭いところを這い出すときにとれてしまう。そこは、この世とは季節も昼夜も逆であるという。この洞窟は旧富内線工事のためにくずされ、今はわずかに痕跡が残っている」(更科 1955)。同様の「あの世への入り口」は富川のオマンルパロ、沙流川上流のオマンルパロ、虎杖浜のアブンルパロなど各地にある(知里・山田 1956)。

(3) 二宮の遺跡(図Ⅲ-3-1)

二宮は鷗川町の北西部である。北と西は厚真町に接する。入鹿別川とニクチナイ川に挟まれた丘陵地帯である。旧地名は「ニクチナイ」といい「湿原の川」の意という(山田 1994)。昭和18年の字名改称の際に、部落で信奉されている二宮尊徳の報徳道にちなんで二宮とした(部落史編集委員会 1972)。入鹿別(イルシカベツ)川はアイヌ語で「イルシカベ」といい「怒川」の意で、「沙原ノ長川ニテ行人怒ルヲ以テ名クト云」と説明されている(永田 1984)。これについて、更科源蔵氏の「北海道伝説集 アイヌ篇」には、「鷗川の腹立川」と題して、「…イルシカベツという川は、時々川尻がふきがつてあたりが沼になり、その水が一杯になると沼尻が破れて一時に水が海に出してしまうことがあった。或るとき沙流の女の人の子供を負つてこゝを通つていたとき、とつぜん沼が破れて親子共海に流されて死んでしまった。そこで老人達が集つてこんな不届きなことをしては困ると、水的神様に談判をつけたところ、水的神様が腹をたて、海に沿って厚真の方へ流れて行き、そこから海にそぐようになつたが、後の



図III-3-3 二宮遺跡の遺物

人が不便だというので現在のように真直に切つて海におとすようにした…(鷄川町チン部落 片山カシデアシ老伝)」という伝説が収録されている(更科 1955)。

二宮遺跡(4)(図Ⅱ-2-5、Ⅲ-3-3、図版20)

ニタチナイ川右岸段丘の南向き斜面標高約20~30mに位置する。二宮小学校西側から二宮公民館の西側一帯である。昭和30年頃、水田用の客土採取工事の際に縄文時代早期前半の甍式土器(1)、石斧(2~11)、たたき石(12)、砥石(13)が採集されている。遺跡中央部は土取りにより既に消滅している。土器は上面観楕円形を呈する小型の深鉢形土器で、底部にホクテ貝の背圧痕が施されたほかは無文である。口径10.6(最大)cm・9.7cm(最小)、器高10.5(最大)・9.5cm(最小)を計る(扇谷 1977)。当該期の集落が2000・2001(平成12・13)年に門別町のビタルバ遺跡で調査されている。

二宮2遺跡(35)

入鹿別川支流のイリシカベツ川右岸台地標高約80mに位置する。1991(平成3)年にゴルフ場造成工事に伴う範囲確認調査により発見された遺跡である。縄文時代前期前半の静内中野式の土器片が出土している。

二宮3遺跡(41)

入鹿別川左岸台地の標高約70mに位置する。1999(平成11)年に農地造成事業に伴う所在確認調査により石槍片を採集した。時期は不明である。

4 鷄川中流地域の遺跡

鷄川は春日付近で大きく北西に流れを変える。この曲流部よりも上流では、河岸段丘および台地上に遺跡が分布している。字名でいえば、花岡、生田、有明、旭岡である。

(1) 花岡の遺跡(図Ⅲ-4-1)

花岡は鷄川町の東部、鷄川が沖積地に出る出口にあたる。南西側は米原、北東側は生田である。米原側の花岡1区アツベツ川付近の旧地名を「アツベツ」、花岡2区の川西頭首工対岸のキリカチ川付近を「キリカチ」、生田側の旧地名を「オルイカ」という(鷄川町史編纂委員会 1968)。松浦武四郎の「川筋取調図」には「アツルベシベ」の北に「ヲサン子ブ」コタンがあり、さらに小川を2本越えた北側に「オルイカ」と記されている。そして、さらに「バンケウルニウシ」「バンケウルニウシ」の2本の小川を越えた北側の鷄川西岸に「キリカツ」川があり、その川口北側に「キリカツ」コタンが記されている(松浦 1988)。そして、「武和加誌」には、「アツルベシベ」は、「楡皮をうるかしておいたところ」、「ヲルイカ」は、「橋があるの意で、川口に自然の大石があり、飛石橋のようであったため」との説明がある。「アツルベシベ」と「ヲルイカ」の間には「ヲサン子ブ」「ソコムカ」の記載がある。「ヲサン子ブ」は「洪水の時に大木が多く流れて来て、それが折り重なって橋のようになっていたため」、「ソコムカ」は「近年まで家が二軒あったが今はキリカツへ行っても何もない」との説明がある。「キリカチツ」の名の由来について「昔ここに山の乙名が来て、(習慣である饗応のための)鹿の骨と思って太い骨髄を食べたところ、それは人の骨であったため」と説明している(松浦 1985)。

花岡1(旧花岡)遺跡(2)(図Ⅲ-4-2・3、図版16-1)

鷄川左岸河岸段丘の標高約25mに位置する。1963(昭和38)年4月に鷄川町教育委員会による発掘調査により、縄文時代晩期から続縄文時代初頭の土墳墓20基が検出された。遺物は縄文時代早期後半の東銅路Ⅲ式(図Ⅲ-4-2-1)、前期前半の綱文式(2・3)、静内中野式(4)、中期後半の北筒式(5)、晩期後葉のタンネットウⅠ式(6~27、図Ⅲ-4-3-1~4)、続縄文時代初頭の大狩部式や恵山式に相当するもの(5~13)、擦文時代の土器片(14・15)や、石鎌(16~32)、石槍もしくはナイフ(33)、スクレイパー(34~43)、石斧(44・45)、たたき石(46)などの石器、垂飾(47)が出土した(大場・

扇谷 1964)。1968(昭和43)年の造田工事により包含層は破壊され、畦に残存する程度である。遺構の残存状態は不明である。

花岡2遺跡(24)

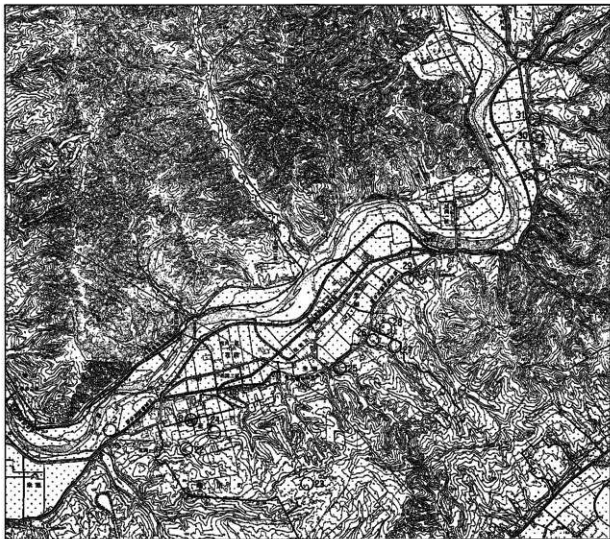
鷺川左岸段丘上の標高約40mに位置する。1965(昭和40)年の農地改善事業により段丘は削平され、丘陵の一部に残存する。縄文時代早期・前期の遺跡とされるが詳細は不明である。

花岡3遺跡(8)(図Ⅲ-4-4-1~13)

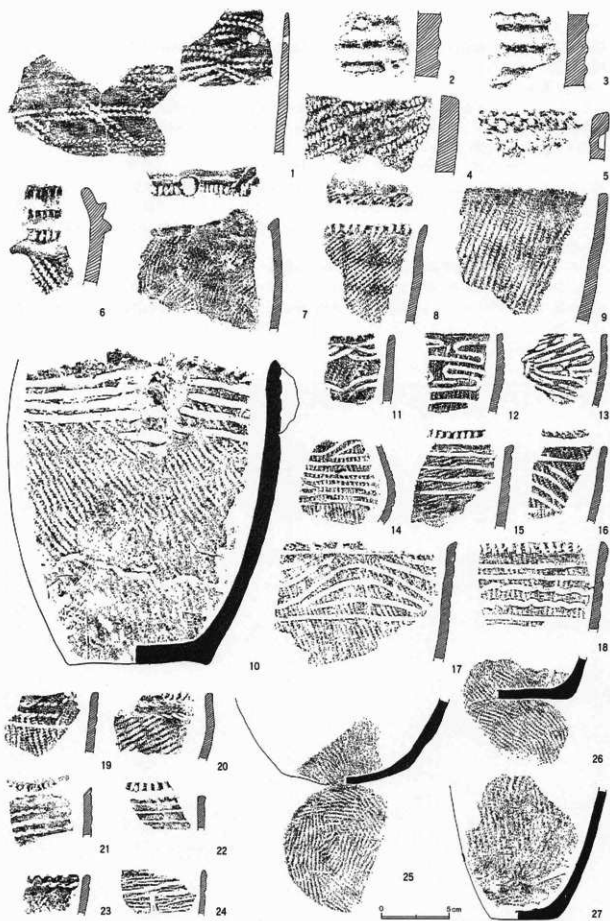
鷺川左岸、旧地名ボンハルオマナイ左岸段丘の標高約30mに位置する。1965(昭和40)年頃、農業構造改善事業によりこの一帯の段丘を削って造田工事が行われた際に、縄文時代早期後半の東廻路Ⅳ式(1)、前期前半の網文式(2)、静内中野式(3~8)、中期後半の北筒式の土器片(9・10)、つまみ付きナイフ(11・12)、スクレイパー(13)などが採集された(扇谷 1977)。遺跡のほとんどの部分は削平され破壊した。

オリカチャシ跡(22)(図Ⅲ-4-4-14・15、図版16-2)

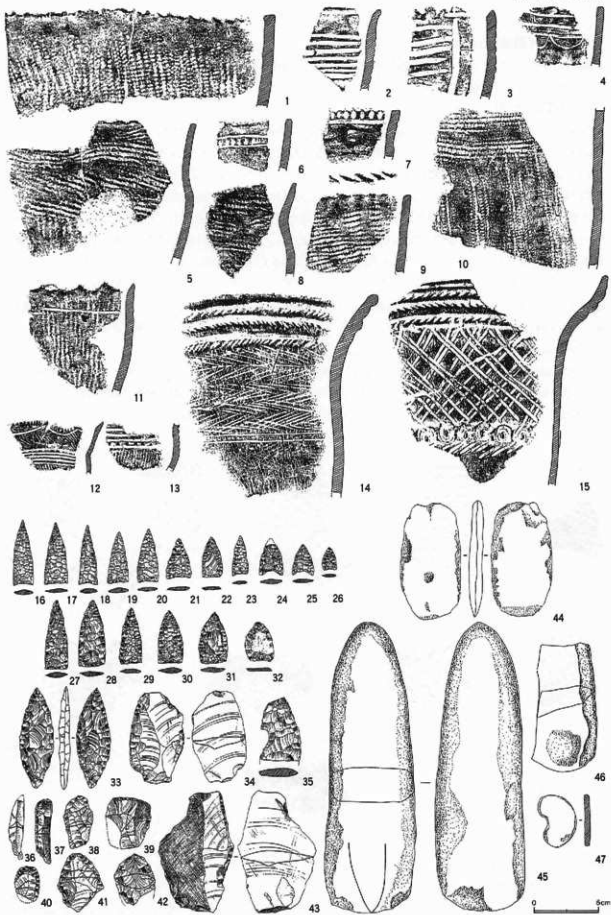
鷺川左岸、段丘北縁の西へ延びる舌状先端部の標高約60mに位置する。台地の上は平坦で、舌状先端部基部に弧状の溝が東西各1本残存する。東側の溝が長く、幅4.3m、深さ0.7mである。1976(昭和51)年の範囲確認調査では縄文時代後期初頭の余市式の土器片(14)、スクレイパー(15)と自然礫が出土した(扇谷 1977)。



図Ⅲ-4-1 花岡・生田・有明の遺跡分布図



図III-4-2 花網遺跡の遺物(1)



図III-4-3 花岡1遺跡の遺物(2)

ルベシナイ遺跡(23) (図Ⅲ-4-4-16)

鷗川右岸の丘陵、ルベシナイ水源東位の標高約120mに位置する。農地造成のための深度耕の際に石斧(16)が出土した(扇谷 1977)。

(2) 生田の遺跡(図Ⅲ-4-1)

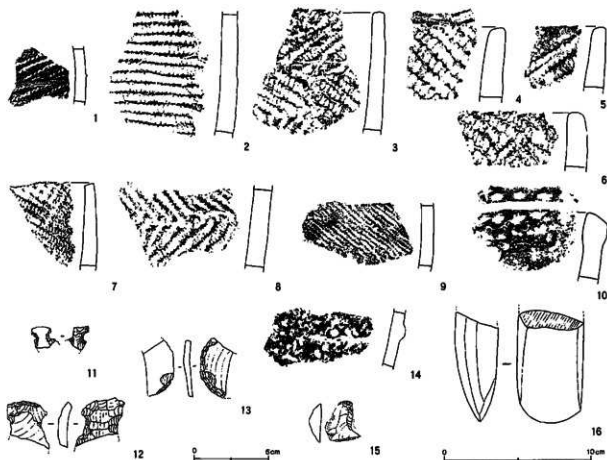
生田は旧地名「ユッペ」で「鹿川」の意という(永田 1984)。沙見の古老は「ユコッペツ」(yuk-ot-pet 鹿が多くいる・川)と呼んでいた(山田 1994)。なお、対岸のバロー沢の旧地名もユクベツである。

バンケニウキナイ 1遺跡(25) (図Ⅲ-4-5-1~7、図Ⅲ-4-6・7)

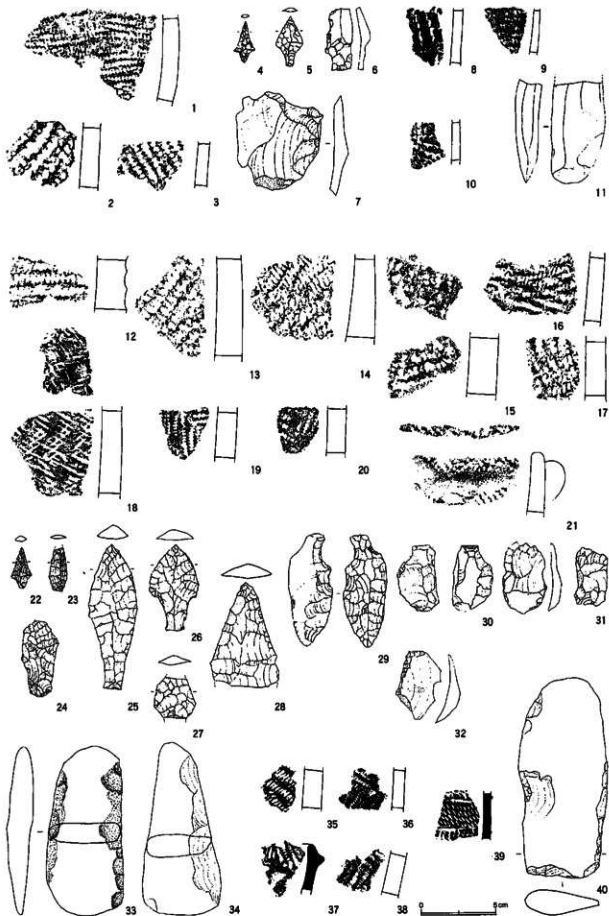
鷗川左岸段丘の標高約40mに位置する。1976(昭和51)年の範囲確認調査では縄文時代前期前半の静内中野式(図Ⅲ-4-5-2・3)、中期前半の円筒土器上層式の土器片(1)、石鏃(4・5)、スクレイパー(6)、フレイク(7)などが採集された(扇谷 1977)。また、扇谷氏の調査と相前後する時期に採集された資料についての赤石慎三氏の報告によると、縄文時代早期後半のコックロ式(図Ⅲ-4-6-1)、東劔路Ⅳ式(2)、前期後半の植苗式(3)、中期後半の天神山式(4~15)、柏木川式(16~20)、後期中葉の手稲式(22)、統縄文時代の後北 C₂式の土器片(23)と石鏃(図Ⅲ-4-7-1・2)、石槍(3・4)、つまみ付きナイフ(5)、スクレイパー(6・7)、たたき石(8)、凹石(9)がある(赤石 1983)。

バンケニウキナイ 2遺跡(26) 図Ⅲ-4-5-8・9)

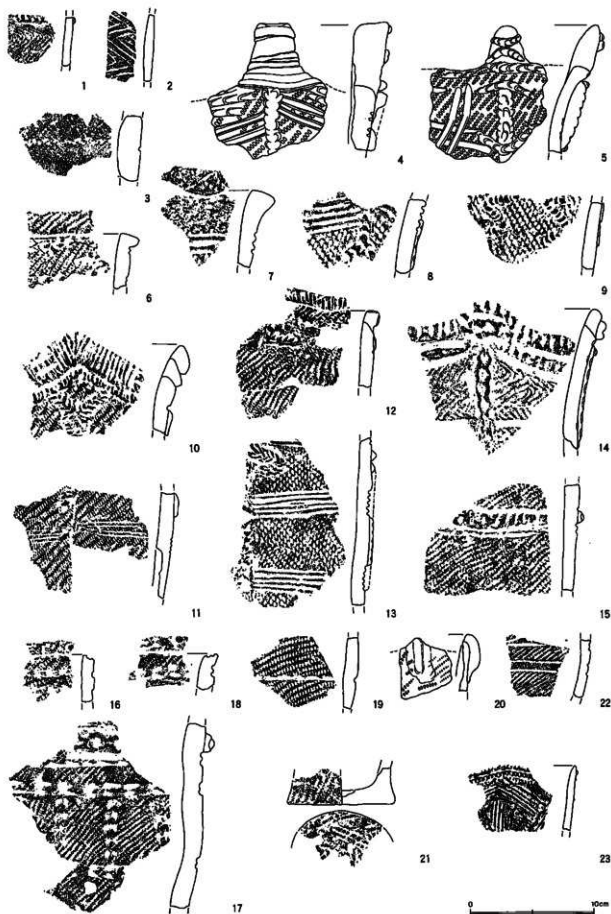
鷗川左岸段丘、ニクトンナイ川岸の標高約40mに位置する。前述のバンケニウキナイ 1遺跡から500mほど北東の同一段丘上にある。1976(昭和51)年の範囲確認調査では、縄文時代早期後半の東劔路Ⅲ式(図Ⅲ-4-5-8)、東劔路Ⅳ式と晩期~統縄文の土器片(9)が採集された(扇谷 1977)。



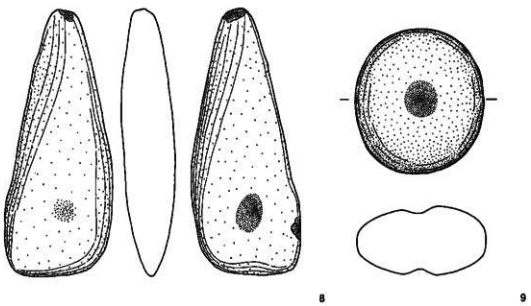
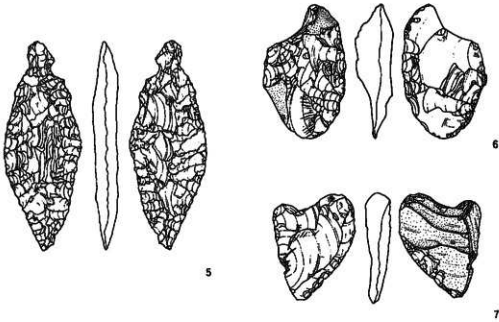
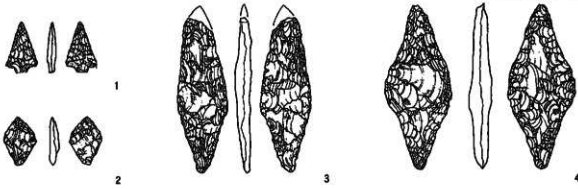
図Ⅲ-4-4 花岡3遺跡・オルイカチャシ・ルベシナイ遺跡の遺物



図III-4-5 バンケニウキナイ1遺跡・バンケニウキナイ2遺跡・
 ニクトンナイ1遺跡・ニクトンナイ2遺跡・ペンケニウキナイ遺跡・
 ビタルシナイ1遺跡・ビタルシナイ2遺跡の遺物



図Ⅲ-4-6 パンケニウキナイ1遺跡の遺物(1)



0 10cm

図III-4-7 パンケニウキナイ1遺跡の遺物(2)

ベンケニウキナイ遺跡(29) (図Ⅲ-4-5-12~34・40)

鷺川左岸のベンケニウキナイ川西の台地下標高約40mに位置する。縄文時代前期前半の網文式(12)、静内中野式(13~17)、中期前半の円筒土器上層式(18~20)、中期後半の柏木川式の土器片(21)と、石鏃(22~24)、石槍もしくはナイフ(25~28)、つまみ付きナイフ(29・30)、スクレイパー(31・32)、石斧(33・34・40)が採集されている(扇谷 1977)。遺跡は土取りによりほとんど破壊した。背後にアイヌ墓がある。

ニクトンナイ1遺跡(27) (図Ⅲ-4-5-10)

鷺川左岸、ニクトンナイ川の北東の標高約20mに位置する。農地改良工事により攪乱されている。1976(昭和51)年の範囲確認調査では、縄文時代早期後半の東館路Ⅳ式の土器片(10)が採集されている(扇谷 1977)。

ニクトンナイ2遺跡(28) (図Ⅲ-4-5-11)

鷺川左岸、ニクトンナイ川北東の標高約40mに位置する。前述のニクトンナイ1遺跡の北東にある。1976(昭和51)年の範囲確認調査では時期不明の土器小片と石斧(11)が採集された(扇谷 1977)。

(3) 有明の遺跡(図Ⅲ-4-1)

有明は鷺川町の北東端の鷺川左岸にあり、穂別町と接する。旧地名を「キナウス」「キナウシ」といい「蒲多き処」の意という(永田 1984)。穂別町側を上キナウス、有明を中キナウス、生田側を下キナウスと称した(鷺川町史編纂委員会 1968)。

オブスケ遺跡(32)

鷺川左岸、ビタルシナイ(アリアケ川)南岸のなだらかな台地の標高約40mに位置する。周囲を沢で囲まれている。縄文時代前期・中期の遺跡とされているが詳細不明。稲葉勝男氏によると、「12、鷺川町旭岡」として「旭岡駅対岸の北方にあるキタウシナイ沢の木下氏宅附近より縄文系及び薄手の土器片と石鏃1個、又さらに南位のオブスケ沢附近より後北式と思われる土器片を採集した。」とある(稲葉 1961)。この記述では現在のビタルシナイ1遺跡からオブスケ遺跡にかけての地域に該当する。

ビタルシナイ1遺跡(30) (図Ⅲ-4-5-35~38)

鷺川左岸、ビタルシナイ(アリアケ川)南岸からオブスケ川にいたる標高約60mの段丘上に位置する。1976(昭和51)年の範囲確認調査では、縄文時代前期前半の静内中野式(35)、中期前半の円筒土器上層式の土器片(36~38)が採集されている(扇谷 1977)。

ビタルシナイ2遺跡(31) (図Ⅲ-4-5-39)

鷺川左岸、ビタルシナイ(アリアケ川)北岸の標高約50mの段丘上に位置する。前述のビタルシナイ1遺跡の対岸にある。道路や宅地の造成工事により土砂が削られ、崖面から縄文時代早期後半の中茶路式の土器片(39)と石斧が採集されている(扇谷 1977)。

(4) 旭岡の遺跡(図Ⅲ-4-1)

旭岡は鷺川町の北東端の鷺川右岸にある。上流側を「キキンニ」、旭岡1区の旧地名を「クウナイ」、旭岡2区の旧地名を「ユクベツ」あるいは「パロー沢」という。「キキンニ」は「ナナカマドの密生したところ」、「クウナイ」は「仕掛け弓を置く処」、「ユクベツ」は「鹿川」の意という(永田 1984)。「川筋取調図」には現在のユクベツ沢川川口の南側にユクベツ・コタンが記されている(松浦 1988)。

ユクベツ遺跡(図Ⅲ-1-2の★印、Ⅲ-4-1の☆印)

通称パロー沢、ユクベツ沢川右岸台地の標高約30mに位置する。古老によれば造田工事のため段丘の末端を削ったところ、人骨や刀剣が出土したという。1976(昭和51)年の範囲確認調査では、出土地点は一部丘陵が残存するほか水田となっていた(1977 扇谷)。図の位置は推定である。(鎌田 望)

IV 調査の方法、遺物の分類

1 調査区の設定と調査の方法

(1) 調査区(グリッド)の設定

基本図

基本図には北海道開発局室蘭開発建設部の「日高自動車道鷗川町田浦米原間用地測量業務現況平面図1,000分の1図」を使用した。

基軸

平成12年度の米原4遺跡・宮戸4遺跡の調査の際に、当初は工事予定中央線上のSTA.30200とSTA.30400を結んだ線を基軸のMラインとしようとした。しかし、①基軸が調査区域と高低差があるイモッペ川の河川敷になり、調査区から見通すことができず調査上不便な点、②地形および試掘の結果から住居跡の想定される部分に住居跡の略称と同じアルファベットであるHラインが来てまざらわしい。③米原4遺跡A地区の大部分にはアルファベットA～Z以外の何らかの記号のラインが来てまざらわしい等の点から、変則的ながらも工事予定中央線の11m北東の工事予定北東側線を基軸のMラインとした。そのため、今年度もそれを踏襲することとした(図I-3-1)。しかし、これまでの発掘調査および今年度新たに行われた試掘調査の結果から、このイモッペ川中・上流域の宮戸3遺跡、宮戸4遺跡、米原4遺跡はひとつのまとまりとして捉えられる遺跡であることが分かった。そのため、これら遺跡群を全体として見る場合不都合な結果となった。

調査区(グリッド)設定

STA.30300から90°北東に振った線とMラインとの交点をM49として、5m方眼を設定した。この方眼は北東端交点にあるアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称し、さらに必要に応じて2.5m方眼に4分割して小発掘区とした。小発掘区は北西端から反時計廻りにa、b、c、dと呼ぶ(例：V15)(図IV-1-1)。

座標値

平面直角座標系第XII系の各座標は以下の通りである。

STA.30200 X=-159633.1812 Y=-21875.3153

STA.30300 X=-159717.7309 Y=-21521.9174

(2) 調査の方法

今年度の調査範囲は鷗川支流のイモッペ川左岸台地縁辺部斜面から河川敷にかけての部分である。高速道路の建設計画に基き「町道米原2号」の南西側の標高19～27mの樹林部分と、イモッペ川の改修区域である北東側の標高17～21mの平坦(水田)部分からなる。

樹林部分の包含層調査

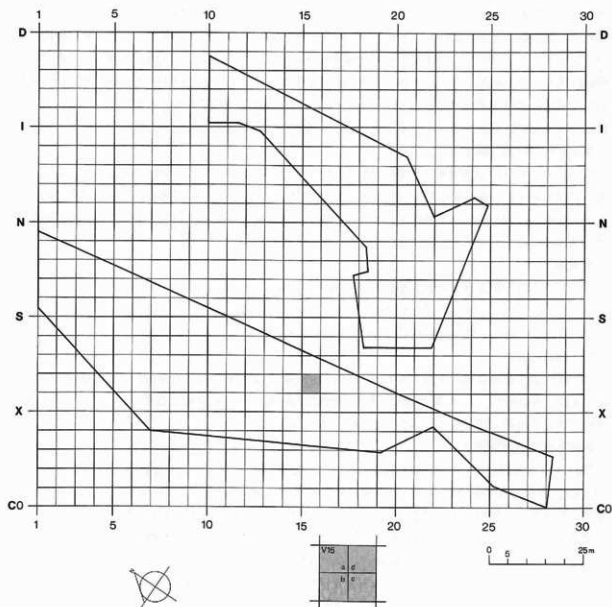
樹林部分では厚さ40～60cmの、表土および17世紀中葉の降下火山灰層である樽前b降下軽石層(Ta-b)、有珠b降下軽石層(Us-b)を重機で除去し、その下の黒色土層(Ⅲ層)から人力調査を始めた。まず、表土除去・杭打ち後にⅢ層上面に残った厚さ1～5cm程の火山灰をジョレンで除去した。Ⅲ～Ⅵ層の各層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、移植ゴテと三角ホーにより2cmずつ掘り下げ、遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップにより深さ2～5cmの細かい刻みを入れた後、ジョレンにより土を除去するという方法を繰り返して掘り下げて調査した。本来的な遺物包含層であるⅤ層については、上位・中位・下位の3段階に分けて調査した。

平坦(水田)部分の包含層調査

平坦部分では米原地区、宮戸地区で使用中の簡易水道が埋設されているため、水田客土・耕作土と樽前 a 降下軽石層 (Ta-b)、有珠 b 降下軽石層 (Us-b) を十分注意しながら重機で除去し、Ⅲ層上面に残った火山灰をジョレンにより除去した。Ⅲ～Ⅵ層の各層の調査は樹林部分と同様の手順で行った。平坦部分南端の斜面から平坦部へ移行する部分では湧水があるため排水溝を掘り、それを調査範囲外に重機により掘削した 4 段階の沈殿槽に繋げて、そこからイモッペ川に流した。

遺構調査

包含層調査時に遺物がやや集中して出土した部分については、土層観察用のベルト(土手)を十文字に残して、薄く平面的に掘り下げた。また、落ち込みが確認された T ビットについては、その短軸で半載して、土層観察用の面を残して掘り下げた。いくつかの T ビットは長軸で半載してある程度掘り下げ、遺構の上場を実測後に土層観察用の面側を残してその手前側を掘削する、いわゆる「縦割り調査」



図Ⅳ-1-1 調査区設定図

を行った。焼土については、その周囲の同じ面の遺物との関係、焼土同士の関係の把握に努めた。フレイク・チップ集中については、風倒木による破壊が主体部に及んでいることから、特に出土地点の実測やメッシュ組による取り上げは行わず、土壌を採取して土壌水洗を行い微細遺物の採集に努めた。

地形図

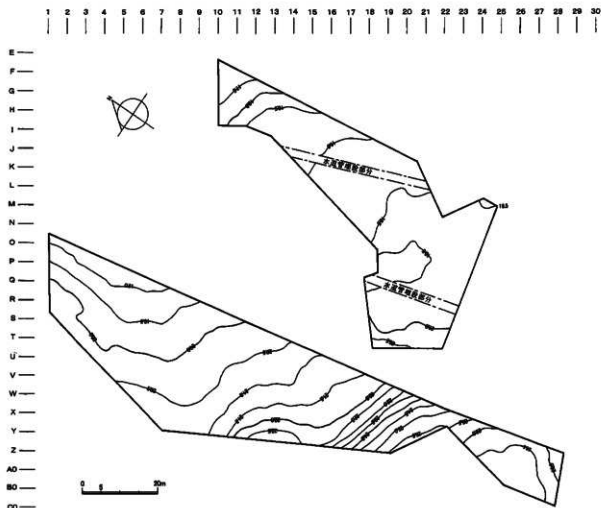
樹林部分、平坦(水田)部分とも、Ⅲ層上面、Ⅴ層上面、調査終了後の最終面であるⅣ層上面において端点測量による地形図の作成を行った。なお、Ⅴ層上面の地形図についてはⅢ層上面のものと同じ地形で標高が下がっただけであるため、地形変化の読み取れるⅢ層上面の地形図(図Ⅳ-1-2)と最終面の地形図(図Ⅳ-1-3)を掲載した。

遺物の取り上げ

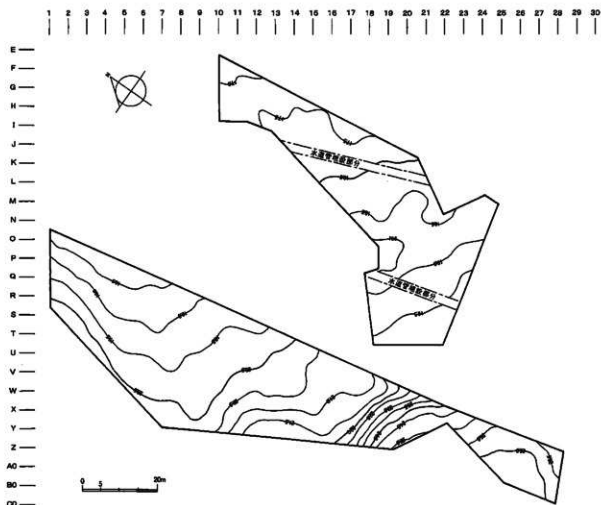
包含層の遺物は、位置や層位を記録して、小発掘区ごとに取り上げ番号を付けて取り上げた。微細な遺物の密集部分や焼土については土壌ごと取り上げて水洗により遺物を採集した。遺構の遺物は実測図により位置、層位、標高を記録して取り上げた。出土状況に応じて写真や出土状況図など詳細な記録化に努めた。

遺物整理の方法

出土した遺物は、野外作業と並行して現地で水洗作業、大まかな遺物の分類、カード作成、遺物収



図Ⅳ-1-2 Ⅲ層上面地形図



図IV-1-3 最終面地形図

集帳作成を行った。そして、夏からは定期的に遺物を江別の埋文センターに搬送して、分類、カード・遺物収集帳点検・補正(遺物台帳作成)、注記と土器の接合、石器の実測を進めた。

冬期の室内作業では、土器の個体識別、接合・復元、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器の実測・製図、集計、写真撮影、記録類の整理を行った。土器の接合・復元作業においては、同一個体ごとにとまとめて遺構間、遺構と包含層間や層での破片の接合状況を明らかにすることにつとめ、次年度以降の調査に備えた。

注記作業の実際

注記については、十円玉より大きな土器片と実測の際に注記が障害とならない石器、土製品、石製品および有意の礫・礫片を対象として対してラッカーで下地を塗り、そこに遺跡略号(ミヤ4)、調査区と小発掘区もしくは遺構名、遺物番号、層位の順に、白いポスターカラーと面相筆により記入し、その上にラッカーを塗布した。例えば、H-1の床から出土した遺物番号18番の遺物は「ミヤ4.H-1-18.床」、V15グリッドのc小発掘区のV層下位から出土した遺物番号10番の遺物は「ミヤ4.V-15-c.10.V下」と記入される。

(鎌田)

2 土層の区分

宮戸4遺跡の基本土層は、同じくイモツペ川の両岸に立地する米原3・宮戸3・米原4遺跡(北埋鋼報153)と共通する。よって、以下に示した土層の区分を用いて調査を行った。川に面した水路部分は、Ⅲ～Ⅵ層中に水成層を挟み込んでおり、斜面部分とは土層がやや異なる。図Ⅳ-2-4のメインセクション中に土層説明を付した。

I層 耕作土と Ta-a層が土壌化したものを指す。2つに区分した。

I a層 耕作土 層厚約40～60cm。斜面部分では見られない。

I b層 表土 黒色腐植土(7.5YR1.7/1) Ta-a層が土壌化したもの。

II層 縄文～縄文文化期の遺物包含層の上部に堆積する火山灰を一括してII層とした。火山灰の降下年代とその種類により4つに区分する。

II a層 樽前 a 降下軽石層 A.D1739年降下(10YR8/3)浅黄褐色 層厚約10cm 前後。粒径0.5mm以下の火山灰。耕作が及ばない地形の低いところのみられる。

II b層 樽前 b 降下軽石層 A.D1667年降下(2.5Y6/1)黄灰色 層厚約15cm 前後。粒径1.0～1.5mmの火山灰層。

II c層 有珠 b 降下火山灰層 A.D1663年降下。この2cm程度の薄い層(10YR4/1)褐色は有珠 b-1～6のいずれかに属するもの。粒子の細かい火山灰層。

II d層 有珠 b 降下軽石層 A.D1663年降下。(10YR8/1)灰白色 層厚約15cm 前後。粒径1～3mm程度の火山灰層。この軽石層の直下にフォルユニットを異にする粒子の細かい火山灰層(10YR5/1)褐色がみられる。

III層 腐植土(10YR2/1)黒色 層厚約5cm程度。水分を含むとやや粘性を帯びる。縄文～縄文文化期の遺物を包含すると考えられる。

IV層 腐植土(7.5YR4/4)褐色 地形により若干の差異がある。B-Tmから Ta-c(樽前 C 降下軽石層 B.C300年前降下)までの火山灰と、腐植土からなる、風成と腐植化が成因の層。

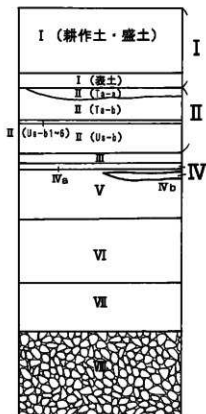
V層 腐植土(10YR1.7/1)黒色 層厚約20～40cm。水分を含むとやや粘性を帯びる。縄文早期～晩期の遺物を包含する。

VI層 漸移層 褐色(10YR4/4)～にぶい黄褐色土(10YR5/3) 層厚約40～50cm。上面には縄文早期の遺物を包含する。

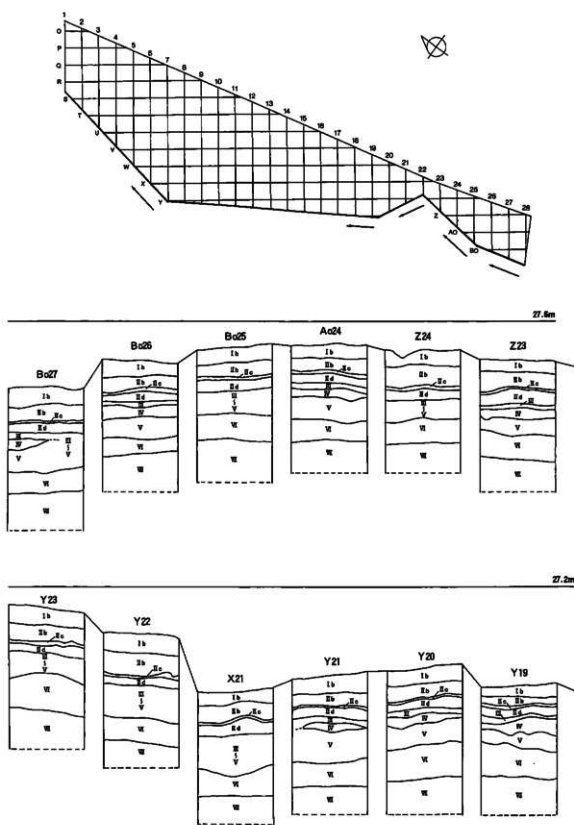
VII層 ローム質土層(10YR6/8)明黄褐色 層厚約30cm程度。水分を含むと粘性に富む。

VIII層 火山灰層(10YR6/8)明黄褐色 もしくは亜円の小円礫層。層厚2m以上。

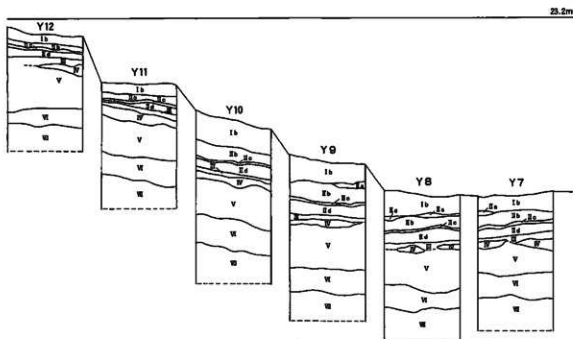
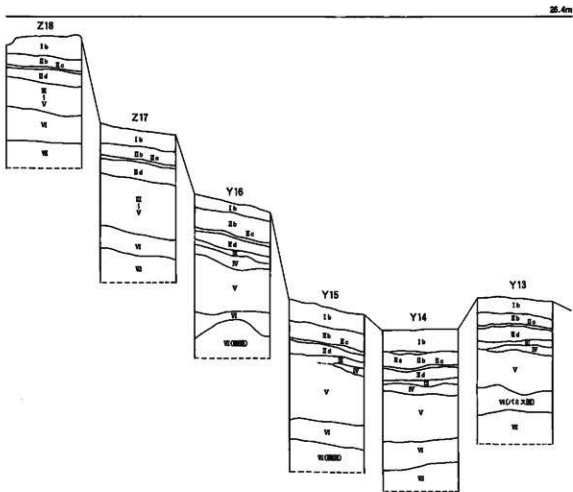
(芝田直人)



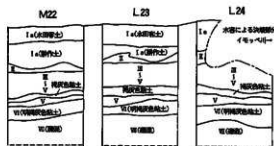
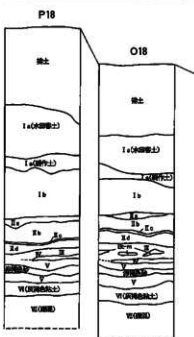
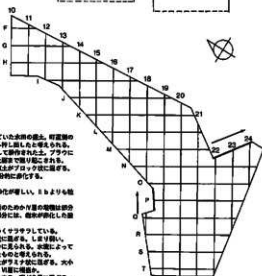
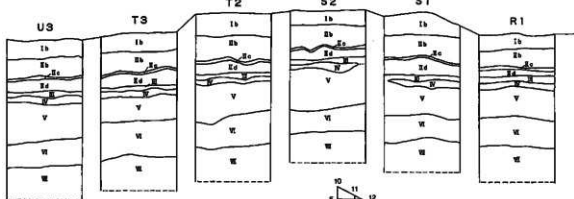
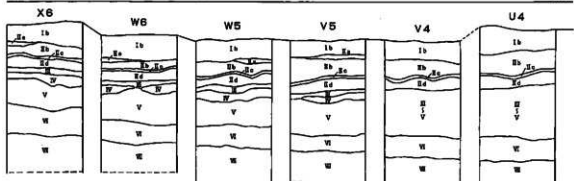
図Ⅳ-2-1 土層柱状図



図IV-2-2 メインセクション(1)



図IV-2-3 メインセクション(2)



図IV-2-4 メインセクション(3)

3 遺物の分類

(1) 土器

分類にあたっては、石狩低地帯、噴火湾～太平洋沿岸での調査結果を基にした分類を踏襲した。出土した土器には縄文時代早期から晩期のもの、統縄文時代のものがある。縄文時代早期の資料をI群とし、以下順次前期、中期、後期、晩期をII群、III群、IV群、V群とした。統縄文時代のものはVI群、擦文時代のものはVII群とした。

I群 縄文時代早期に属するもの。

- a類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。
- b類：縄文、摺糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などのある土器群。
 - b-1類：東馴路Ⅱ式、東馴路Ⅲ式に相当するもの。
 - b-2類：コックロ式に相当するもの。
 - b-3類：中茶路式に相当するもの。
 - b-4類：東馴路Ⅳ式に相当するもの。

II群 縄文時代前期に属するもの。

- a類：縄文の施された丸底・尖底の土器群。
 - a-1類：網文式に相当するもの。
 - a-2類：春日町式、静内中野式に相当するもの。
- b類：円筒土器下層式、植苗式、大麻Ⅴ式に相当するもの。

III群 縄文時代中期に属するもの。

- a類：円筒土器上層式、萩ヶ岡Ⅰ式に相当するもの。
- b類：円筒土器に後続する土器群。
 - b-1類：天神山式、萩ヶ岡Ⅱ式・萩ヶ岡Ⅲ式に相当するもの。
 - b-2類：柏木川式、萩ヶ岡Ⅳ式に相当するもの。
 - b-3類：北筒式、トコロⅥ類、煉瓦台式あるいは静符式に相当するもの。

IV群 縄文時代後期に属するもの。

- a類：余市式、タブコブ式、手稲砂山式、入江式、大津式に相当するもの。
- b類：ウサクマイⅢ式、船泊上層式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの。
- c類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

V群 縄文時代晩期に属するもの。

- a類：大洞Ⅱ式、上ノ国式に相当するもの。
- b類：大洞Ⅲ式、大洞Ⅳ式に相当するもの。
- c類：大洞Ⅰ式、大洞Ⅴ式、タンネトウⅠ式に相当するもの。

VI群 統縄文時代に属するもの。

- a類：大狩部式、トニカ式、東歌別式に相当するもの。
- b類：恵山式に相当するもの。
- c類：後北式に相当するもの。

VII群 擦文時代に属するもの。

(鎌田)

(2) 石器等

基本的に平成12年度に調査した米原3・宮戸3・米原4遺跡での袖岡による石器分類(北埋調報153)を踏襲したが、今年度の調査により新たな要素を加味し、若干の修正を行った。石器の特性や機能に直接言及するため、記号は用いていない。未製品や破損品、破片などは各々の分類に含めた。

1) 剥片石器

石鏃	ピエス・エスキーユ
石槍・ナイフ	R フレイク
石錐	U フレイク
つまみ付ナイフ	両面調整石器
スクレイパー	石核・原石

2) 剥片

フレイク・チップ(FC-1以外では「フレイク」で統一した)

3) 磨製石器

磨製石斧・石斧石材・擦切残片(すべて「石斧」に含めた)

4) 礫石器

たたき石	石錘
くぼみ石	砥石
すり石	台石

北海道式石冠(今年度は出土していない)

扁平打製石器(今年度は出土していない)

石網(今年度は出土していない)

5) 礫・礫片

加工痕のある礫

礫・礫片(人為的な打ち割り・被熱の可能性のあるもの)

軽石(砥石の一部の可能性のあるもの)

(3) 土製品・石製品

1) 土製品

円盤状土製品	三角形土製品	板状土偶
焼成粘土塊	その他	

2) 石製品

石のみ型石製品

(4) 自然遺物

炭化クルミ・炭化ドングリ

自然礫(Ⅷ層の礫が自然営力によりⅤ～Ⅶ層中へ上がってきたもの)

凝灰岩礫(本来Ⅵ・Ⅶ層中に含まれるもので、遺構の掘り上げ土に起因する)

* 自然礫・凝灰岩礫は、水洗後、人間の手が加わっていないことを確認し、廃棄した。(芝田)

V 遺構とその遺物

1 概 要

平成13年度、宮戸4遺跡では、竪穴住居跡1軒、Tピット13基、焼土26ヵ所、フレイク・チップ集中1ヵ所が検出された。これらの遺構は、2筋の小規模な沢に横断される、標高18.0～26.0mの緩斜面上に立地する。今年度の調査では、かつてのイモッペ川の氾濫原と推測される水田部分(仮流路切替予定部分)から、遺構は検出されなかった。

竪穴住居跡(H-1)は、調査区北西側の沢に含まれる平坦面上、W・X-8グリッドに位置する。平面形は円形で、掘り込みは浅い。炉跡や柱穴は確認されなかった。床面出土の遺物から、縄文時代早期後半、コックロ式期の遺構と考えられる。

Tピット(TP-5～17)は、ほぼ調査区全体に分布するが、沢地形を意識して構築されたと考えられるものが多い。形態は、楕円形で比較的深く(1.3～1.5m)掘り込まれているものと、長楕円形で比較的浅く(1.0～1.2m)掘り込まれているものがある。前者は微高地の縁辺を沢沿いに並び、後者は沢地形を横断するように並ぶという立地の違いが見られる。遺構自体から用途を判断することはできなかったが、鹿猟の陥穴を想定している。遺物を伴わないため時期は不明であるが、昨年度調査の宮戸3遺跡と立地・形態が類似することから、大森司によるTピットについての考察(北埋調報153)に従い、大部分が縄文時代中期後半～後期初頭の所産と考えた。ちなみに、平成12年度調査のTP-1～4は、宮戸地区全体の調査行程の事情と調査範囲のまとまりという観点から、次年度以降の報告となった。また、U16グリッド付近でTP-18を検出したが、一部が現道(町道米原2線)下に含まれるため完掘できなかった。これも次年度以降、完掘後に報告する予定である。

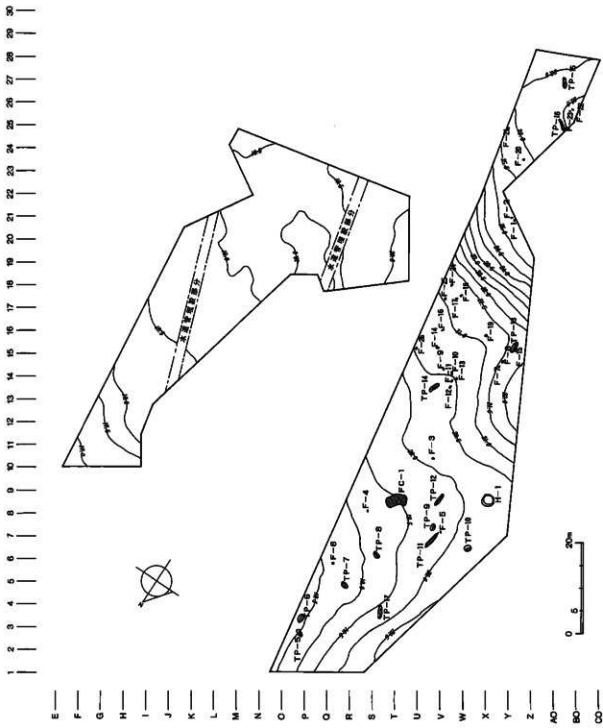
焼土(F-1～26)は、調査区内に点在するが、南側の沢の内部、V-13・14グリッド付近にやや集中が見られる。大部分がⅤ層下位からⅥ層上面で検出された。遺物を伴うものは少ないが、検出面および周囲の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半に形成されたと考えられる。

フレイク・チップ集中(FC-1)は、調査区北側の緩斜面上、S・T-8グリッドに位置する。黒曜石を主体とするフレイク・チップ1626点の他、石鏃9点(破片を含む)などが出土しており、石鏃を加工する作業が行われた場であったと考えられる。時期は、検出面と同一面から出土した土器片から、縄文時代早期後半、中茶路式期と推測される。

時期別では、遺跡の主体は縄文時代早期後半、そして同中期後半～後期初頭である。まず、早期後半には、H-1、FC-1、大部分の焼土が営まれる。この時期、調査区内で集落は確認されないが、何らかの生業活動が行われたと考えられる。FC-1のように石器製作という目的が明らかかなものを除けば、大半の遺構は用途が不明である。しかし、H-1、FC-1、F-22・23からは炭化クルミ、炭化ドングリが出土しており、ここが植物食料を採取した場である可能性がある。包含層中から当該期のものと考えられる断面三角形のすり石が多く出土することも傍証足りうるのではなからうか。

中期後半～後期初頭には、Tピットが構築される。昨年度調査の宮戸3・宮戸4・米原4遺跡においても、同様にイモッペ川へ向かう沢筋にTピットが多数検出されており、この地域が良好な鹿の猟場であったことが窺える。Tピットについては、形態・機能・立地など検討すべき課題が多くあるが、今年度は検出例が少ないこともあり、各遺跡の周囲を調査する予定の次年度以降、さらに資料を蓄積し、考察を期したいと思う。

(芝田)



图V-1-1 遺構位置図

表V-1-1 検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模 (m)	長軸方向	時期
H-1	竪穴式住居	W8b・c、X8a・d	W層上面	2.59×2.54/2.20×2.06/0.22	N-60°-E	縄文時代早期後半
TP-5	Tピット	O2c	W層上面	1.57×0.83/1.07×0.21/1.50	N-68°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-6	Tピット	O3b・c、P3a	W層上面	1.81×1.12/1.65×0.40/1.17	N-6°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-7	Tピット	Q4c	W層上面	1.49×0.86/1.12×0.25/1.33	N-82°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-8	Tピット	S6a	W層上面	1.54×0.85/1.22×0.24/1.30	N-72°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-9	Tピット	U7b	W層上面	(1.39)×0.91/1.17×0.26/1.40	N-20°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-10	Tピット	W6a・d	W層上面	1.56×0.93/1.10×0.25/1.40	N-19°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-11	Tピット	U6c・d、U7b	W層上面	3.57×0.70/4.36×0.28/1.13	N-8°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-12	Tピット	U8b・c、V8a・d	W層上面	(2.95)×0.68/2.45×0.14/1.20	N-6°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-13	Tピット	Y15a・b	W層上面	2.60×0.93/2.17×0.19/1.14	N-4°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-14	Tピット	U13b・c、V13d	W層上面	2.65×0.72/2.31×0.10/1.12	N-17°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-15	Tピット	A026c、A027b	W層上面	2.07×0.75/1.93×0.17/0.83	N-40°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-16	Tピット	A024c・d、A025a・b	W層上位	3.40×0.47/3.04×0.18/0.91	N-52°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-17	Tピット	S3a・d	W層上面	2.54×(0.73)/2.75×0.23/1.13	N-25°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
F-1	焼土	Y20d	V層下位	0.55×0.55/0.14	N-35°-E	縄文時代中期後半
F-2	焼土	Y20d	W層上面	0.52×0.39/0.11	N-59°-E	縄文時代中期後半
F-3	焼土	U10b	V層下位	0.70×0.49/0.10	N-62°-E	縄文時代早期後半～前期前半
F-4	焼土	R8b	V層下位	0.48×0.39/0.08	N-71°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-5	焼土	V7a	W層上面	0.55×0.46/0.12	N-32°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-6	焼土	Q5d	W層上面	0.57×0.46/0.12	N-45°-E	縄文時代早期後半～前期前半
F-7	焼土	X14b	V層下位	0.71×0.41/0.13	N-16°-E	縄文時代早期後半～前期前半
F-8	焼土	X14c	V層下位	0.55×0.52/0.09	N-4°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-9	焼土	V14a	V層下位	0.53×0.52/0.07	N-40°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-10	焼土	V14b	V層下位	0.81×0.55/0.17	N-43°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-11	焼土	V13c	V層下位	0.73×0.58/0.12	N-40°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-12	焼土	V13c・d	V層下位	0.56×0.48/0.09	N-34°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-13	焼土	V13c	V層下位	0.60×0.48/0.10	N-65°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-14	焼土	U15b、V15a	V層下位	1.04×0.61/0.17	N-74°-E	縄文時代早期後半～前期前半
F-15	焼土	Y15a・b	V層下位	0.71×0.49/0.16	N-9°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-16	焼土	V15d、V16a	V層下位	0.79×0.54/0.11	N-9°-E	縄文時代早期後半～前期前半
F-17	焼土	V17b	V層下位	0.70×0.64/0.14	N-60°-E	縄文時代早期後半～前期前半
F-18	焼土	W17d	V層下位	0.54×0.43/0.07	N-18°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-19	焼土	X15d	W層上面	0.46×0.31/0.08	N-35°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-20	焼土	Y23b・c	W層上面	0.80×0.63/0.14	N-11°-E	縄文時代早期後半～前期前半
F-21	焼土	Y24d	W層上面	0.48×0.43/0.11	N-8°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-22	焼土	A025c、B025d	W層上面	0.56×0.42/0.08	N-63°-E	縄文時代早期後半～前期前半
F-23	焼土	A025c、B025d	W層上面	0.50×0.39/0.07	N-84°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-24	焼土	V17c・d、V18a・d	V層下位	1.06×0.83/0.14	N-8°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-25	焼土	V17a・b	V層下位	0.66×0.47/0.12	N-54°-W	縄文時代早期後半～前期前半
F-26	焼土	V15b	V層下位	0.66×0.64/0.10	N-10°-W	縄文時代早期後半～前期前半
FC-1	フレイク・チップ集中	S8b・c、T8a～d	V層下位	(4.84)×2.82	N-48°-E	縄文時代早期後半

2 住居跡

H-1 (図V-2-1/表V-2-1~3/図版21・35・36)

位置: W8b・c, X8a・d 規模: 2.59×2.54/2.20×2.06/0.22m

特徴: 調査区北西側の沢に含まれる平坦面上、標高20.0~20.3mに立地する。

H-1が存在する位置は、遺物包含層のV層中位より土器片、フレイク、礫などがやや集中して出土する部分として確認された。当初は沢地形の内部で遺物が溜まりやすいためかと思われた。だが、周囲は遺物が疎らに出土するのに対して、約3m四方のその部分だけが突出して多いのは不可解であった。そこで、さらに下位では地形が部分的に凹んでいると推測し、遺構の存在を予想した。遺構の範囲と掘り込み面を明確にするため、少しずつ上部の包含層を平面的に掘り下げていった。VI層上面で黒色土が円形に落ち込んでいるのが認められた。黒色土の中心に十字ペルトを設定し、これに沿ってトレンチ調査を実施したところ、平坦な底面と遺物の広がりを確認した。この結果、遺構を竪穴住居跡もしくは浅い皿型の土壇と判断した。

平面はほぼ円形である。壁はやや傾斜して緩やかに掘り込まれている。底面はほぼ平坦であるが、それほど固くしまっていない。また、遺構内部および周縁部において付属施設を確認しようと、ロームの変色部分や腐植土の落ち込みなどを調査した。結果はどれも樹木の根穴や小動物の生息痕と考えられるもので、炉跡や柱穴は検出されなかった。

覆土の上部(1層)は、基本土層のV層に相当する腐植土である。下部(2層)はロームと腐植土の混合で、掘り上げ土が内部に流れ込んだ可能性がある。底面の直上に生活面を確認するため、覆土2層の下で遺物の分布、土壌の色調・質感などに注意したが、明確な変化は見られなかった。

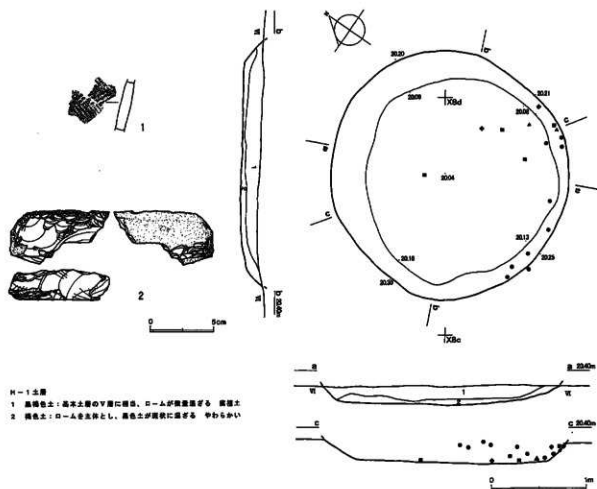
この遺構の性格は不明である。形状からすると小型の竪穴住居跡と考えられるが、炉跡や柱穴を伴わないことから、住居としての要素に乏しい。沢の内部という低い立地も、居住にふさわしい環境とは言えない。また、土壇とするならば、墓や貯蔵穴、Tピット、粘土探掘坑など一般的に知られているものとも形態を異にしている。ここでは、生業のための仮小屋という推測により、住居跡として扱った。その根拠は、この遺跡からの石核の出土点数が非常に多く、当該時期に良好な猟場として機能していたと考えられることである。また、炭化ドングリ・炭化クルミが出土していることから、堅果類などの植物食料を採取した場であった可能性がある。以上の点から、狩猟あるいは植物食料採集を行うにあたっての仮小屋で、きわめて短期間の居住であったと推測している。

遺物: 床面よりI群b-2類に属する土器片3点、フレイク1点が出土した。また、覆土1層および2層より、土器はI群b-2類28点、石器類は黒曜石製のRフレイク1点、石核1点、フレイク14点、礫5点、自然遺物は炭化ドングリ1点が出土した。これらは大部分が床面の直上に位置しており、遺構に伴うもの、あるいはほぼ同時期のものと考えられる。遺物の出土位置は南~南東側に偏っており、特に壁の立ち上がり際に多い。北~北西側では遺物が希薄である。

1は覆土2層出土のI群b-2類の土器片である。床面・覆土2層・覆土1層から27点出土した個体のうち2点が接合した。器厚は約7mmで、器面には羽状に施されたLRとRLの幅1~2mmの縄文が認められる。縄文は整っており、浅く施されている。胎土には微量の繊維、黄白色粒、砂粒を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。器面の色調は茶褐色を呈する。内面は平滑で、縦に調整されている。2は石核。上面に打面を設定して剝離作業を行っている。打面の転移が2回以上見られる。上面、裏面、側面に自然面を残す。石材は黒曜石である。

時期: 出土遺物から、縄文時代早期後半、コックロ式期の遺構と考えられる。

(芝田)



H-1土層

- 1 黒褐色土：黒土層のV層に相当し、ロームが散見される 炭層土
2 褐色土：ロームを主体とし、黒色土が混在している 中わらかい

図V-2-1 H-1とその遺物

表V-2-1 H-1出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
床面	土器	I群b-2類	3	覆土2層	土器	I群b-2類	19	覆土1層	土器	I群b-2類	9
	刺片	フリイク	1		刺片石礫	Rフリイク	1		刺片	フリイク	10
	計	4	石核		1	礫・燧片	礫		3		
			刺片		フリイク	4	炭水化合物		炭化ドングリ	1	
			礫・燧片		礫	2	計			23	
			計		27						
合計											54

表V-2-2 H-1掲載遺物一覧(1)土器

番号	遺物名	分類	遺物番号	層位	点数	同一個体・破片点数 遺物番号、層位、遺物番号			
						H 1-7覆土	H 1-8覆土	H 1-10覆土	H 1-11覆土、2
1	H-1	I b-2	13	覆土2層	2	H 1-12覆土	H 1-13覆土、9	H 1-16VI	H 1-18覆土V下、4
						H 1-21覆土、5	27点中の2点		

表V-2-3 H-1掲載遺物一覧(2)石器

番号	遺物名	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
2	H-1	石核	6	覆土2層	2.74×5.20×1.58	20.90	黒曜石	

3 Tピット

TP-5 (図V-3-1/表V-3-3/図版22)

位置: O2c 規模: 1.57×0.83/1.07×0.21/1.50m

特徴: 調査区北側、斜面地形の沢筋に含まれる低位部分に立地する。VI層上面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位、VI層、VIIa層(ローム)、VIIb層(バミス)を掘り抜き、底面はVIII層(礫)の約40cmにまで達している。検出面における上端の平面形は、北東側が歪に膨らんだ楕円形である。中端は南東側の壁面が崩落のため挟れている。底面は直線状だが、平坦ではなく中央部が深くなっている。今年度検出された中では最も深いTピットである。横断面はV字型で、壁面の上部が若干外湾する。底面の幅から推定すると、壁面の崩落は比較的少なかったと考えられる。縦断面は上部が開きぎみの袋状である。覆土は上位がV層を起源とする腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合、下位が礫混じりの腐植土になっている。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。TP-6と隣接するが切り合っておらず、互いの覆土に掘り上げ土の流入なども見られないことから、新旧関係は不明である。

遺物: 覆土1層より礫31点が出土した。流れ込みによるもので、遺構には伴わない。

時期: 縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-6 (図V-3-1/図版22)

位置: O3b・c、P3a 規模: 1.81×1.12/1.65×0.40/1.17m

特徴: 調査区北側、斜面地形の沢筋に含まれる低位部分に立地する。VI層上面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜き、底面はVIII層(礫)の約30cmにまで達している。検出面における上端の平面形は、東側がやや膨らんだ幅広の楕円形である。中端は所々に凹凸があり歪んでいる。底面は直線状で、今年度検出されたTピットの中で最も幅広である。ほぼ平坦であるが、中央部が少し深い。横断面はU字型で、底面の幅から推定すると、壁面の崩落は比較的多かったと考えられる。縦断面は中位が窄まった袋状で、底部がオーバーハングする。覆土は上位がV層を起源とする腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合、下位が粘性の強い腐植土になっている。底面に逆茂木の痕跡が2ヶ所確認された。北側の方がやや大きく径約8cm、深さ約22cm、南側が小さめで径約6cm、深さ約19cmの規模である。互いに約60cm離れて、垂直方向に掘り込まれている。炭化材などは残存していなかった。

遺物: 出土していない。

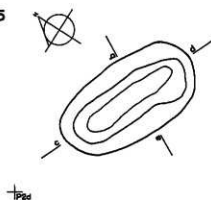
時期: 縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-7 (図V-3-2/表V-3-3/図版23)

位置: Q4c 規模: 1.49×0.86/1.12×0.25/1.33m

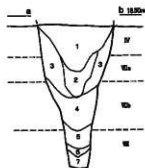
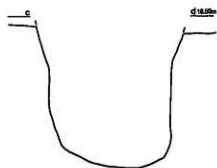
特徴: 調査区北側、沢地形内の緩斜面上に立地する。VI層上面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VIII層を掘り抜き、底面はVIII層(礫)の約40cmにまで達している。検出面における上端の平面形は、東端がやや窄まった楕円形である。底面は直線状だが、中央部が広く両端が狭い。底面には凹凸が有り、東側へ傾斜している。横断面はY字型である。壁面の上部は崩落のため若干外へ開くが、下部は垂直に切り立った形状を良好に残している。底面の幅から推定すると、壁面の崩落は比較的少なかったと考えられる。縦断面は袋状で、東側の底部がオーバーハングする。覆土は上位がV層を起源とする腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合、下位が砂礫混じりの腐植土およびシルト質粘土になっている。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

TP-5

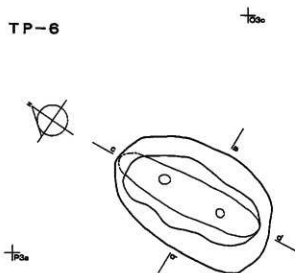


TP-5土層

- 1 黒色土：V層底面の腐植土 ややしまる
- 2 黒褐色土：腐植土主体 ローム質土が少量混ざる やわらかい
- 3 褐色土：ローム質土主体 薄い腐植が混ざられる
- 4 腐植色土：腐植土とローム質土の混合 しまり強い
- 5 褐色土：ローム質土主体 パリスが多量に混ざる しまりなし
- 6 黒色土：腐植土 砂礫混じり 腐植強い
- 7 腐植色土：灰褐色のシルト質粘土主体 ややしまる

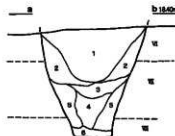
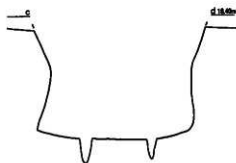


TP-6



TP-6土層

- 1 黒色土：V層底面の腐植土 ややしまる
- 2 腐植色土：腐植土とローム質土の混合 ややしまる
- 3 褐色土：ローム質土主体 しまり強くボロボロする
- 4 黒褐色土：腐植土とローム質土の混合 やわらかい
- 5 褐色土：ローム質土主体 腐植土が少量混ざる
- 6 黒色土：腐植土 腐植が強く、おっとりした腐植



図V-3-1 TP-5・6

遺物：覆土1層よりI群b-3類に属する土器片6点、黒曜石製のフレイク6点が出土した。いずれも流れ込みによるもので、遺構には伴わない。

時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-8 (図V-3-2/図版23)

位置：S6a 規模：1.54×0.85/1.22×0.24/1.30m

特徴：調査区北側、斜面地形の沢筋に立地する。VI層上面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜き、底面はVIII層(礫)の約45cmにまで達している。検出面における上端の平面形は、東側が尖頭気味の楕円形である。底面は西側が幅広く、中央部が若干窄まる形状で、南東側へ傾斜している。横断面はY字型である。壁面の上部は崩落のため大きく外へ開くが、下部は垂直に掘り込まれた形状を良好に残している。底面の幅から推定すると、壁面の崩落は比較的少なかったと考えられる。縦断面は袋状で、東南側の底部がわずかにオーバーハングする。覆土は上位がV層を起源とする腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合あるいは互層、下位が砂礫混じりの腐植土およびシルト質粘土になっている。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

遺物：出土していない。

時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-9 (図V-3-3/図版24)

位置：U7b 規模：(1.39)×0.91/1.17×0.26/1.40m

特徴：調査区北西側、斜面地形の沢筋に立地する。VI層上面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜き、底面はVIII層(礫)の約28cmにまで達している。検出面における上端の平面形は幅広い楕円形で、北西側の上部が抜根によって壊されている。底面は直線状で北西側へ向かって幅広くなり、南東側へ傾斜している。横断面はY字型である。壁面の上部は崩落のため外側へ広がるが、下部は溝状の形状を良好に残している。底面の幅から推定すると、壁面の崩落は比較的少なかったと考えられる。縦断面は中位が窄まった袋状で、下部の壁面が膨らんでいる。覆土は上位がローム・ブロックを含む腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合あるいは互層、下位がバミス混じりの腐植土である。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

遺物：出土していない。

時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-10 (図V-3-3/図版25)

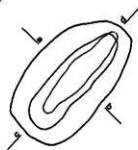
位置：W6a～d 規模：1.56×0.93/1.10×0.25/1.40m

特徴：調査区北西側、沢地形内の平坦面に立地する。VI層上面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜き、底面はVIII層(礫)の約36cmにまで達している。検出面における上端の平面形は幅広い楕円形で、北西側がわずかに窪む。底面は直線状で北東側がやや幅広く、中央部が深くなっている。横断面はV字型である。壁面の上部は崩落のため外側へ開くが、北西～西側にかけて特に大きい。下部は狭隘な形状が残っており、底面の幅から推定すると、壁面の崩落は比較的少なかったと考えられる。縦断面は袋状で、下部の壁面が若干膨らんでいる。覆土は上位がV層起源の腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合、下位が砂礫混じりの腐植土である。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

遺物：出土していない。

TP-7

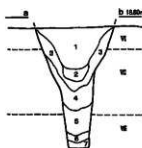
+1000



TP-7土層

- 1 黒色土：V層上部の腐植土 ややしまる
- 2 黒褐色土：腐植土と赤土層 ローム質土が厚めに混ざる やわらかい
- 3 暗褐色土：ローム質土と赤土層 やわらかい
- 4 暗褐色土：ローム質土と赤土層 腐植土が少量混ざる しまり強い
- 5 黒褐色土：腐植土とローム質土が厚層で混ざる しまりなし
一貫性土
- 6 暗褐色土：腐植土と赤土層の混合 やや粘り強い
- 7 黒褐色土：シルト質粘土 ややしまる

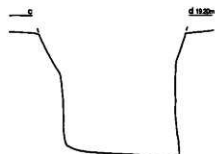
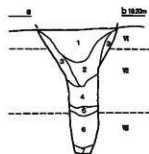
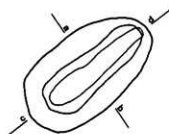
+1000



TP-8



+1000



TP-8土層

- 1 黒色土：V層上部の腐植土 ややしまる
- 2 暗褐色土：腐植土とローム質土の混合 ややしまる
- 3 褐色土：ローム質土と赤土層 粘り強い
- 4 暗褐色土：腐植土とローム質土の混合 やわらかい
- 5 黒褐色土：腐植土 しまりなし
- 6 褐色土：ローム質土と赤土層 しまり強い
- 7 黒褐色土：腐植土 シルト質粘土・腐が混じる ややしまる

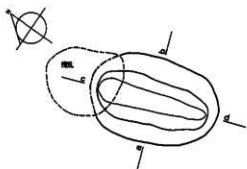
+1000

0 1m

図V-3-2 TP-7・8

TP-9

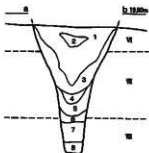
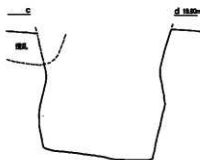
107a



TP-9土層

- 1 黒色土：V層底層の腐植土 ややしめる
- 2 にぶい黄褐色土：ローム・ブロック 中少量混在V
- 3 褐色土：ローム腐土主体 しまり強い
- 4 黒色土：腐植土主体 ローム腐土が少量混在する やわらかい
- 5 褐色土：ローム腐土主体 腐植土が少量混在する
- 6 腐植土：腐植土主体 砂層が混在する
- 7 黄褐色土：ローム腐土主体 しまり強い
- 8 黄褐色土：腐植土 片石混在V 腐植強い

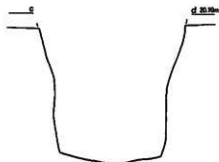
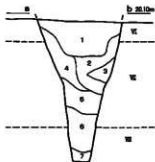
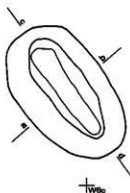
107b



TP-10



108a



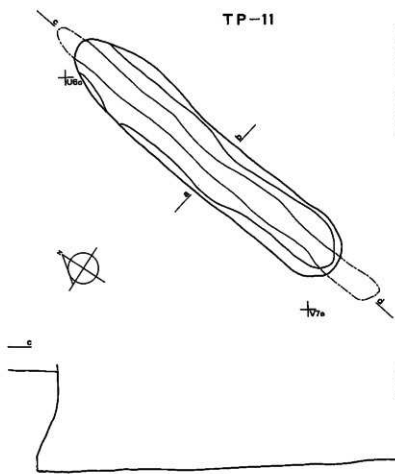
TP-10土層

- 1 黒色土：V層底層の腐植土 ややしめる
- 2 黄褐色土：腐植土主体 ロームが少量混在する
- 3 褐色土：ローム主体 腐植土がブロック状に入り込む ややしめる
- 4 腐植土：ローム主体 ややしめる
- 5 褐色土：ロームと腐植土の混合 砂層にやわらかく、腐植強い
- 6 黄褐色土：ローム主体 しまり強く、砂が混在している
- 7 黄褐色土：腐植土主体 砂層混在V しまり強V

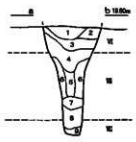


図V-3-3 TP-9・10

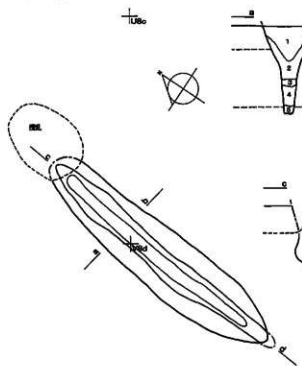
TP-11



- TP-11土層
- 1 黒色土：V層直下の腐植土 ややしめる
 - 2 暗褐色土：腐植土とロームの混在 ややしめる
 - 3 褐色土：ローム主体 やわらかい
 - 4 黒褐色土：腐植土 ロームが混在に過ぎる 粘性強い
 - 5 黄褐色土：ローム主体 粘性強く、やわらかい
 - 6 暗褐色土：腐植土とロームの混在 しまりなし
 - 7 黒褐色土：腐植土 やわらかく、物とりしている
 - 8 褐色土：ローム主体 ややしめる
 - 9 黄褐色土：腐植土 砂礫混じり しまりあり



TP-12



- TP-12土層
- 1 黒色土：V層直下の腐植土 ややしめる
 - 2 暗褐色土：ローム質土主体 黒色土が少量混ざる
 - 3 黒褐色土：腐植土 やや粘性あり
 - 4 褐色土：ローム質土主体 しまり強く、ボロボロしている
 - 5 暗褐色土：砂質シルト土体 やわらかい

図V-3-4 TP-11・12



時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-11(図V-3-4/図版26)

位置：U6c・d、U7b 規模：3.57×0.70/4.36×0.28/1.13m

特徴：調査区北西側、斜面地形の沢内部に立地する。VI層上面で黒色土が長楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜き、底面はVII層(礫)の下約16cmにまで達している。検出面における上端の平面形は、中央部が少し窄まった長楕円形である。今年度検出されたTピットの中で最も長い。中端は所々に凹凸があり歪んでいる。底部は幅が一定でなく、途中で広くなったり狭くなったりする。底面はほぼ平坦だが、南側へ高くなっている。横断面はY字型である。壁面の上部は崩落のため外側へ開くが、下部は垂直に掘り込まれた形状を良く残している。底面の幅と覆土の堆積状況から推定すると、壁面の崩落は比較的少なかったと考えられる。縦断面は船底型で、底部の両端が著しくオーバーハングする。検出面での上端から、北側は約28cm、南側は約52cm外側へ掘り窪められている。このため底面の長さは4mを超えている。壁面および底面との連続性、内部の覆土の観察から、これらは小動物の巣穴などではなく、人為的に掘り込まれたものと判断した。覆土は上位から下位まで腐植土とロームの互層になっており、底部に砂礫混じりの腐植土が堆積している。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

遺物：出土していない。

時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-12(図V-3-4/図版27)

位置：U8b・c、V8a・d 規模：(2.95)×0.68/2.45×0.14/1.20m

特徴：調査区北西側、斜面地形の沢内部に立地する。VI層上面で黒色土が長楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜き、底面はVII層(礫)の下約10cmにまで達している。検出面における上端の平面形は、北側が少し窄まった長楕円形で、北側の上部が抜根により壊されている。底部は幅が狭く、わずかに湾曲している。底面は平坦ではなく、北側が立ち上がり、逆に南側が大きき落ち込んでいる。横断面はY字型である。壁面の上部は崩落のため外側へ少し開くが、下部は細い溝状が良好に残存している。底面の幅と覆土の堆積状況から推定すると、壁面の崩落は少なかったと考えられる。縦断面は著しく歪んでおり、底面のほか南側の中端が若干オーバーハングする。覆土は上位から下位まで腐植土とロームの互層になっており、底部に砂質シルトが堆積している。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

遺物：出土していない。

時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

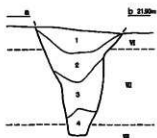
TP-13(図V-3-5・8/表V-3-2・3/図版26・36)

位置：Y15a・b 規模：2.60×0.83/2.17×0.19/1.14m

特徴：調査区東側、急斜面と微高地に挟まれた沢地形に立地する。VI層上面で黒色土が長楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜き、底面はVII層(礫)の下約15cmにまで達している。検出面における上端の平面形は、中央部が少し広がった長楕円形である。中端は所々に凹凸があり、壁面が波打っている。底部は若干湾曲しており、北端が狭くなっている。底面はほぼ平坦で、両端が上がりぎみである。横断面は歪んだY字型である。壁面の上部は崩落のため外側へ開くが、東側よりも西側の方がより大きい。一方で下部は東側の方がより挟かれている。底面の幅と覆土の堆積状況から推定すると、壁面の崩落は比較的多かったと考えられる。縦断面は船底型で、底部の北端がわずかにオーバーハングする。覆土は上位がV層を起源とする腐植

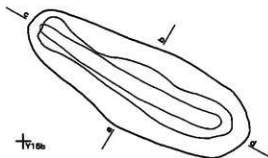
TP-13

T13a



TP-13本図

- 1 黒色土：V層直下の黒褐色土、ややしめる 雑草じり
- 2 黒褐色土：黒褐色土にロームが散在に混ざる 雑草じり
- 3 褐色土：ローム主体 腐植土がブロック状に混ざる しぼり混り
- 4 黒色土：腐植土 ねっとりしている

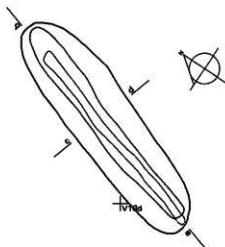


T13b

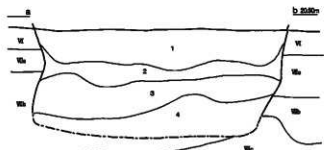


TP-14

T14a

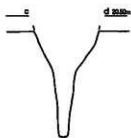


T14a



TP-14本図

- 1 黒色土：V層直下の黒褐色土、ややしめる 雑草混じる
 - 2 黒褐色土：黒褐色土とロームが混在に混ざる、ややしめる
 - 3 暗褐色土：ローム主体 腐植土が散在に混ざる、中からかい
 - 4 黒色土：腐植土主体、ロームがブロック状に混ざる 雑草混り
- W 褐色土：腐植層 雑草じり
 Wa 黄褐色土：ローム、パリス・層が多量に混ざる
 Wb 黄褐色土：ローム、パリス・層は中少なめに混ざる
 Wc 褐色土：ロームが腐植土が、浸水層の影響によりグライ化
 上部は腐分中で酸化している



0 1m

図V-3-5 TP-13・14

土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合、下位が粘性の強い腐植土になっている。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

遺物：覆土中より、土器はI群b-1類1点、II群a-1類10点、石器類は黒曜石製の石鏃1点、石鏃2点、フレイク14点、礫357点が出土した。いずれも流れ込みによるもので、遺構には伴わない。

時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-14(図V-3-5・8/表V-3-1～3/図版28・35・36)

位置：U13b・c、V13d 規模：2.65×0.72/2.31×0.10/1.12m

特徴：調査区中央、沢地地形から続く緩斜面上に立地する。VI層上面で黒色土が長楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。調査区内で自然礫が最も多量に出土する部分に位置する。このため、他のTピットとは掘削された地盤が異なり、径1～25cm大の礫が混在するV層下位、VI層、VII a～c層を掘り抜いている。このような掘削の条件がTピットの形態にどのように影響するのかわかるため、長軸での半割、いわゆる縦割り調査を行った。検出面における上端の平面形は、北西側がやや広がった長楕円形である。底部は幅が非常に狭く、中央部が西側へ湾曲する。この縦長で幅狭な底部の形状により、今年度検出された中で最も縦幅の高いTピットになっている。礫混じりの層を掘り抜くという制約にもかかわらず、底面はほぼ平坦である。横断面はY字型である。壁面の上部は崩落のため外側へ開くが、下部は垂直に掘り込まれた形状を良く残している。底面の幅と覆土の堆積状況から推定すると、壁面の崩落は比較的少なかったと考えられる。地盤に礫が多量に混ざっているため壁面が強固に保たれたことが原因と推測される。縦断面は船底型で、開口部よりも底部が南側へ若干ずれている。覆土は上位が礫混じりの腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合、下位が粘性の強い腐植土になっている。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

遺物：覆土中より、土器はI群b-2類1点、I群b-3類3点、II群a-1類6点、II群b類1点、石器類は黒曜石製の石鏃未製品3点、石核1点、フレイク15点、礫2点が出土した。いずれも流れ込みによるもので、遺構には伴わない。

時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-15(図V-3-6・8/表V-3-1・3/図版29・35)

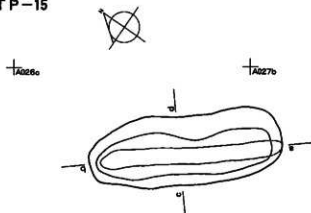
位置：A026c、A027b 規模：2.07×0.75/1.93×0.17/0.83m

特徴：調査区南側の小高い台地上に立地する。VI層上面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。他のTピットとは立地が異なるため、形態・埋没状況にどのように差異が生じるのかわかるため、長軸での半割、いわゆる縦割り調査を行った。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜き、底面はVII層(礫)の下約20cmにまで達している。検出面における上端の平面形は、中央部がやや窪んだ楕円形である。底部は直線状で、幅はほぼ一定である。礫混じりの層を掘り抜くという制約のためか、底面は平坦ではなく、南東側が深くなっている。横断面はV字型である。壁面の上部は崩落のため大きく外側へ開く。底面の幅と覆土の堆積状況から推定すると、壁面の崩落は比較的多かったと考えられる。縦断面は船底型で、地形の影響のためか全体的に形状が南東側へ傾いている。覆土は上位がV層起源の腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合、下位がローム混じりの腐植土になっている。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

遺物：覆土中よりIII群b類に属する土器片1点が出土した。流れ込みによるもので、遺構には伴わない。

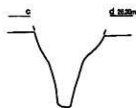
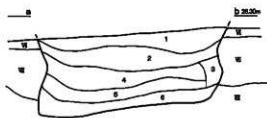
時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-15

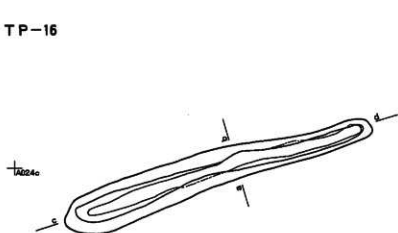


TP-15 土層

- 1 黄褐色土：V層直下の硬結土 中やしまる
- 2 黄緑色土：硬結土と伴 ロームが散在に混ざる 中やしまる
- 3 暗褐色土：硬結土とロームの混在 ボロボロしている
- 4 褐色土：ローム主体 腐植土が細く混在に混ざる 中わりかい
- 5 褐色土：ローム主体 腐植土が豊富混ざる 中わりかい
- 6 褐色土：硬結土と伴 ロームがブロック状に混ざる 粘性あり

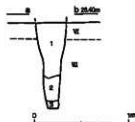


TP-16



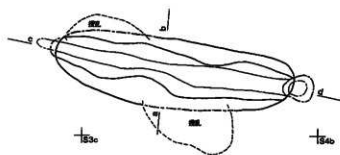
TP-16 土層

- 1 暗褐色土：硬結土と伴 しびりあり ローム混在
- 2 褐色土：ローム主体 しびり強い 褐色土ブロック状
- 3 黄褐色土：硬結土 粘性強く中わりかい

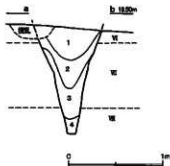


図V-3-6 TP-15・16

TP-17



- TP-17土層
- 1 黒色土：V層上部の腐植土 ややしきる
 - 2 暗褐色土：腐植土主体 ロームがブロック状に混ざる やわらかい
 - 3 褐色土：ローム主体 腐植土が少量混ざる やわらかい
 - 4 黒褐色土：腐植土主体 パリスと砂礫が少量混ざる やや硬軟あり



図V-3-7 TP-17

TP-16(図V-3-6・8/表V-3-1・3/図版30・35)

位置：A024c・d、A025a・b 規模：3.40×0.47/3.04×0.18/1.91m

特徴：調査区南側の小高い台地上に立地する。VI層上面で黒色土が溝状に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜いているが、底面はVIII層まで達していない。検出面における上端の平面形は溝状であるが、北西側が少し広い。底部は幅が一定ではなく、中央部が湾曲している。底面はほぼ平坦である。横断面はI字型である。壁面の上部はわずかに外側へ開くが、下部は細い溝状が良好に残存している。底面の幅と覆土の堆積状況から推定すると、壁面の崩落は非常に少なかったと考えられる。縦断面は船底型で、壁面の傾斜は小さい。覆土は上位がV層を起源とする腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合、下位が粘性の強い腐植土になっている。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

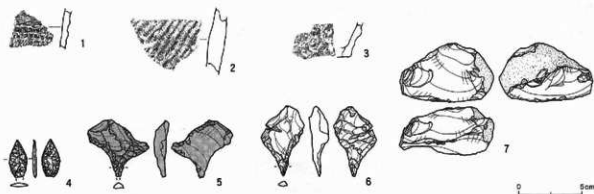
遺物：覆土中よりI群b-1類に属する土器片4点、黒曜石製のフリイク2点、礫3点が出土した。いずれも流れ込みによるもので、遺構には伴わない。

時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

TP-17(図V-3-7/図版31)

位置：S3a・d 規模：2.54×0.47/2.75×0.23/1.13m

特徴：調査区北側の緩斜面上に立地する。木根による擾乱のため形状が把握できず、VI層上位での確認となった。掘り込み面はV層中位と推測される。V層下位～VII層を掘り抜き、底面はVIII層(礫)の下約28cmにまで達している。上部が南北方向に壊されているが、上端の平面形は長楕円形であったと推



図V-3-8 Tピット出土の遺物

測される。中端は所々に凹凸があり、壁面が波打っている。底部はほぼ直線状だが、幅が一定ではなく、特に中央部が狭い。底面は南東側へ傾斜している。横断面はV字型で、壁面の上部は崩落のため外側へ大きく開いている。底面の幅と覆土の堆積状況から推定すると、壁面の崩落は比較的多かったと考えられる。縦断面は船底型で、底部の両端が著しくオーバーハングする。特に南東端は底面が深く落ち込み、小ピットのようにになっている。内部の覆土の観察などから、小動物の巣穴などではなく、人為的に掘り込まれたものと判断した。覆土は上位がV層を起源とする腐植土、中位が壁からの崩落土と考えられるロームと腐植土の混合、下位がバミス・砂礫混じりの腐植土になっている。底面に逆茂木などの痕跡は確認されなかった。

遺物：出土していない。

時期：縄文時代中期後半～後期初頭と推測される。

Tピット出土の遺物(図V-3-8/表V-3-1・2/図版35・36)

1) 土器

1はTP-14の覆土出土のI群b-3類土器である。幅2～3mmの貼付帯を巡らせた器面には、幅1～2mmのLR斜行縄文が認められる。内面は平滑で胎土に微量の白色鉱物・砂粒を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。2はTP-15の覆土出土のIII群b類土器である。器面には幅4～5mmのLR斜行縄文が認められる。器厚は1.1～1.3cmで輪積みの凹凸が残る。3はTP-16の覆土出土のI群b-1類土器である。底部直上に幅約3mmの短縄文と貼付が施されている。

2) 石器

4～6はTP-13出土の石器。4は石鏃。薄身に五角形のもの。両面に細かな調整が施される。5、6は石錐で、刺突部を顕著に作り出したもの。5は被熱により、表面の光沢が失われている。6の側縁には使用痕が見られる。7はTP-14出土の石核。上面の打面を徐々に移動させながら、表裏両面から剝片を剥ぎ取っている。自然面が残る。石材はすべて黒曜石である。(芝田)

表V-3-1 Tピット掲載遺物一覧(1)土器

番号	遺構名	分類	遺物番号	層位	点数	同一個体・破片点数、遺構番号、層位、遺物番号
1	TP-14	I b-3	10	覆土	1	1点中の1点
2	TP-15	III b	1	覆土	1	3点中の1点
3	TP-16	I b-1	1	覆土	1	4点中の1点

表V-3-2 Tビット掲載遺物一覧(2)石器

番号	遺構名	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
4	TP-13	石 鏃	7	覆 土	2.00×0.98×0.17	0.30	黒曜石	
5	TP-13	石 鏃	9	覆 土	(3.02)×3.16×0.61	(3.40)	黒曜石	被 熱
6	TP-13	石 鏃	8	覆 土	3.72×2.28×0.97	4.60	黒曜石	
7	TP-14	石 核	7	覆 土	3.10×4.99×2.58	29.50	黒曜石	

表V-3-3 Tビット出土遺物一覧

遺構名	層 位	遺物名	分 類	点 数
TP-5	覆土1層	礫・礫片	礫	31点
	合 計			31点
TP-7	覆土1層	土 器	I群a-3類	6点
		剝 片	フリイク	6点
	合 計			12点
TP-13	覆 土	土 器	II群a-1類	10点
		剝片石器	石 鏃	1点
			石 鏃	2点
			フリイク	11点
		礫・礫片	礫	170点
	合 計			194点
	覆 土 中	土 器	I群b-1類	1点
		剝 片	フリイク	3点
		礫・礫片	礫	366点
		合 計		
合 計			564点	
TP-14	覆 土	土 器	I群b-2類	1点
			I群b-3類	3点
			II群a-1類	6点
			II群b類	1点
		剝片石器	石 鏃	3点
			石 核	1点
			フリイク	15点
	礫・礫片	礫	2点	
合 計			32点	
TP-15	覆 土	土 器	III群b類	1点
	合 計			1点
TP-16	覆 土	土 器	III群b類	4点
		剝 片	フリイク	2点
		礫・礫片	礫	3点
	合 計			9点
総 計				649点

4 焼土

F-1 (図V-4-1・4/表V-4-1~3/図版35・36)

位置: Y20d 規模: 0.55×0.55/0.14m

特徴: V層下位の調査中、調査区南東側の台地上で、不明瞭な褐色土と微細な炭化物の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分のみられたことから、焼土と判断した。非常に強く焼けており、腐植土が脆弱になっている。焼土の範囲を確認する直前に、上部でオレンジ色の焼土の粒が検出されていたことから、形成面はV層中位と推測される。隣接するF-2は、ほぼ同時期に形成されたと考えられる。

遺物: 焼土中よりは礫が1点出土したのみであるが、その周辺のV層中位および下位から遺物が出土している。このうちV層中位から出土した土器・石器等については、焼土の形成面とほぼ同じ層位であることから、関連する遺物と見なしている。土器がⅢ群b-1類1点、Ⅲ群b-2類2点、Ⅲ群1点、石器類が石鏃1点、礫6点出土している。V層下位から出土した遺物は、F-1よりも古い時期のものと考えられる。石鏃1点、フレイク2点が出土した。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代中期後半と考えられる。

F-2 (図V-4-1)

位置: Y20d 規模: 0.52×0.39/0.11m

特徴: VI層上面の調査中、調査区南東側の台地上で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分のみられたことから、焼土と判断した。中央部分が強く焼けているが、周縁部分の焼けは弱い。包含層調査の手術から検出が遅れたが、隣接するF-1との位置関係などから、形成面はV層中位と推測される。

遺物: 出土していない。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代中期後半と考えられる。

F-3 (図V-4-1)

位置: U10b 規模: 0.70×0.49/0.10m

特徴: V層下位の調査中、調査区中央の緩斜面上で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分のみられたことから、焼土と判断した。やや強めに焼けている。

遺物: 出土していない。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-4 (図V-4-1)

位置: R8b 規模: 0.48×0.39/0.08m

特徴: V層下位の調査中、調査区北東側の緩斜面上で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分のみられたことから、焼土と判断した。強く焼けている。

遺物: 出土していない。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

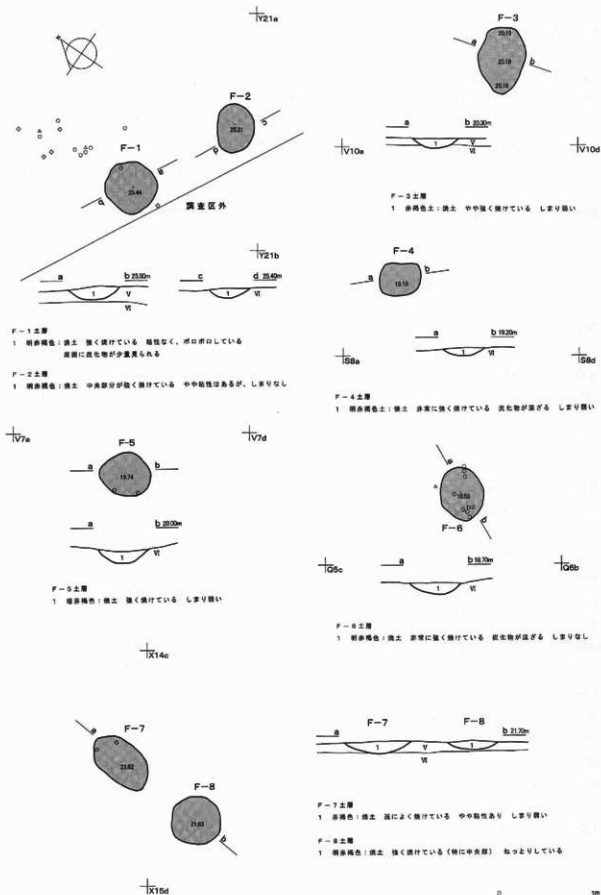
F-5 (図V-4-1/表V-4-3)

位置: V7a 規模: 0.55×0.46/0.12m

特徴: VI層上面の調査中、調査区北西側の沢内部で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分のみられたことから、焼土と判断した。強く焼けている。

遺物: 焼土中より黒曜石製のフレイク2点が出土した。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。



F-6 (図V-4-1/表V-4-1~3/図版35・36)

位置: Q5d 規模: 0.57×0.46/0.12m

特徴: V層上面にかけての調査中、調査区北側の緩斜面上で、不明瞭な褐色土と微細な炭化物の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。非常に強く焼けている。

遺物: 焼土中より土器はI群b-1類1点、I群b-2類5点、I群b-3類2点、II群a-2類1点、石器類は黒曜石製のフレイク3点、礫4点が出土した。また周辺より石鏃1点が出土しており、ほぼ同時期のものと考えている。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-7 (図V-4-1/表V-4-3)

位置: X14b 規模: 0.71×0.41/0.13m

特徴: V層下位の調査中、調査区西側の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。斑に良く焼けている。隣接するF-8と同時期のものと考えられる。

遺物: 焼土中よりフレイク1点、礫1点が出土した。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-8 (図V-4-1)

位置: X14c 規模: 0.55×0.52/0.09m

特徴: V層下位の調査中、調査区西側の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。特に中央部が強く焼けている。隣接するF-7と同時期のものと考えられる。

遺物: 出土していない。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-9 (図V-4-2/表V-4-3)

位置: V14a 規模: 0.53×0.52/0.07m

特徴: V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。焼けは非常に弱く、木根による攪乱を受ける。F-9～13は狭い範囲に集中しており、ほぼ同時期に形成されたと考えられる。

遺物: 焼土中より礫13点が出土した。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-10 (図V-4-2/表V-4-3)

位置: V14b 規模: 0.81×0.55/0.17m

特徴: V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。強く焼けている。木根による攪乱を受ける。

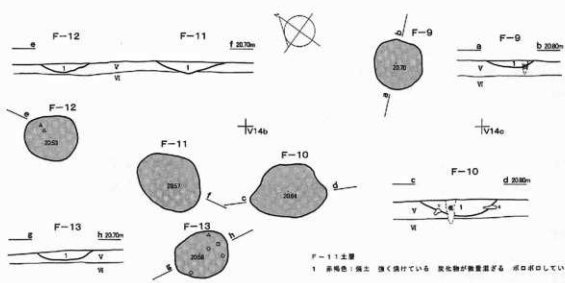
遺物: 焼土中より礫23点が出土した。

時期: 形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-11 (図V-4-2)

位置: V13c 規模: 0.73×0.58/0.12m

特徴: V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土と微細な炭化物の広がりを確認



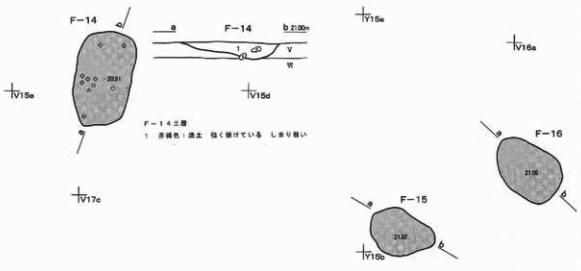
F-9土層
1 暗赤褐色：黄土 非常に強く盛り付けている ぬっとりしている

F-10土層
1 赤褐色：黄土 強く盛り付けている しまりなし

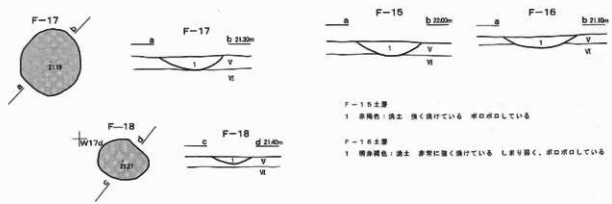
F-11土層
1 赤褐色：黄土 強く盛り付けている 反化物が少量広がる ボロボロしている

F-12土層
1 暗赤褐色：黄土 強く盛り付けている 暗性強い

F-13土層
1 暗赤褐色：黄土 強く盛り付けている ボロボロしている



F-14土層
1 赤褐色：黄土 強く盛り付けている しまり強い



F-15土層
1 赤褐色：黄土 強く盛り付けている ボロボロしている

F-16土層
1 暗赤褐色：黄土 非常に強く盛り付けている しまり強く、ボロボロしている

F-17土層
1 赤褐色：黄土 強く盛り付けている しまり強い 反化物が少量広がる

F-18土層
1 暗赤褐色：黄土 強く盛り付けている しまり強い やや暗性あり



図V-4-2 F-9~18

した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。強く焼けており、ボロボロしている。

遺物：出土していない。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-12(図V-4-2/表V-4-2・3/図版36)

位置：V13c・d 規模：0.56×0.48/0.09m

特徴：V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。焼けは弱い。

遺物：焼土中より黒曜石製の石鏃1点、Rフレイク2点、礫6点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-13(図V-4-2/表V-4-2・3/図版36)

位置：V13c 規模：0.60×0.48/0.10m

特徴：V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。焼けは弱く、脆い。

遺物：焼土中より黒曜石製のスクレイパー1点、フレイク1点、礫3点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-14(図V-4-2/表V-4-1・3/図版32・35)

位置：U15b、V15a 規模：1.04×0.61/0.17m

特徴：V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。強く焼けている。

遺物：焼土中より土器はI群B-1類2点、石器類は黒曜石製の石鏃未製品1点、フレイク1点、礫74点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-15(図V-4-2)

位置：Y15a・b 規模：0.71×0.49/0.16m

特徴：V層下位の調査中、調査区西側の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。強く焼けている。

遺物：出土していない。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-16(図V-4-2/表V-4-3)

位置：V15d、V16a 規模：0.79×0.54/0.11m

特徴：V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。非常に強く焼けている。

遺物：焼土中より礫123点が出土した。

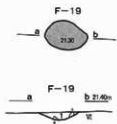
時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-17(図V-4-2/表V-4-3/図版32)

位置：V17b 規模：0.70×0.64/0.14m

特徴：V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土と微細な炭化物の広がりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。強く焼けている。隣接するF-18とほぼ同時期に形成されたと考えられる。

IX15d

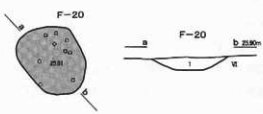


F-19土層
1 赤褐色：黄土 強く掘けている。しまり強い。炭化物が微量残存する。

IX16a

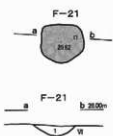


IY23c



F-20土層
1 暗赤褐色：黄土 非常に強く掘けている。粘性が強いが、しまりなし。

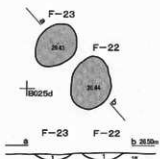
IY25a



F-21土層
1 暗赤褐色：黄土 強く掘けている。炭化物が微量残存。もろい。

IY25b

IY23d

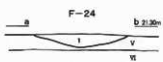
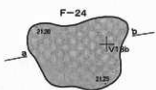


F-22土層
1 暗赤褐色：黄土 非常に強く掘けている。しまり強い。

F-23土層
1 暗赤褐色：黄土 強く掘けている。

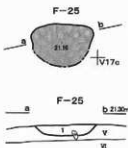
IX25e

IY17a



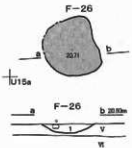
F-24土層
1 赤褐色：黄土 強く掘けている。しまり強い。

IY17b



F-25土層
1 赤褐色：黄土 強く掘けている。底の凹凸している。

IY15a



F-26土層
1 赤褐色：黄土 強く掘けている。しまり強い。やや粘性あり。

IY15d



図V-4-3 F-19~26

遺物：焼土中より I 群 b-1 類 3 点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-18(図 V-4-1/表 V-4-1/図版)

位置：W17d 規模：0.54×0.43/0.07m

特徴：V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。弱く焼けている。隣接する F-17 とほぼ同時期に形成されたと考えられる。

遺物：焼土中より礫164点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-19(図 V-4-3/表 V-4-3)

位置：X15d 規模：0.46×0.31/0.08m

特徴：VI層上面の調査中、調査区西側の沢地形内で、不明瞭な褐色土と微細な炭化物の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。焼けは強い。

遺物：焼土中より黒曜石製のフレイク 1 点、礫46点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-20(図 V-4-3/表 V-4-1・3/図版35)

位置：Y23b・c 規模：0.80×0.63/0.14m

特徴：VI層上面の調査中、調査区南側の台地上で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。非常に強く焼けている。

遺物：焼土中より土器は I 群 b-1 類 2 点、石器類は黒曜石製のフレイク 6 点、礫 1 点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-21(図 V-4-3/表 V-4-3)

位置：Y24d 規模：0.48×0.43/0.11m

特徴：VI層上面の調査中、調査区南側の台地上で、不明瞭な褐色土と微細な炭化物の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。焼けは弱い。

遺物：焼土中より黒曜石製のフレイク 1 点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-22(図 V-4-3/表 V-4-3)

位置：A025c、B025d 規模：0.56×0.42/0.08m

特徴：VI層上面にかけての調査中、調査区南側の台地上で、不明瞭な褐色土と微細な炭化物の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。非常に強く焼けている。隣接する F-23 はほぼ同時期に形成されたと考えられる。

遺物：焼土中より土器は I 群 b-1 類16点、I 群 b 類 3 点、II 群 a 類 1 点、石器類は黒曜石製の石鏃片 1 点、石斧片 2 点、フレイク583点、その他炭化クルミ75点が出土した。これらの遺物の大部分は水洗選別によって得られたものである。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-23(図 V-4-3/表 V-4-1・3/図版35)

位置：A025c、B025d 規模：0.50×0.39/0.07m

特徴：VI層上面にかけての調査中、調査区南側の台地上で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。焼けは弱い。F-22 と同

時期に形成されたと考えられるが、一体の焼土であった可能性もある。

遺物：焼土中より土器はⅠ群b-1類10点、Ⅰ群b-3類2点、石器類は黒曜石製のフレイク145点、その他炭化ケルミ60点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-24(図V-4-3/表V-4-1・3/図版35)

位置：V17c・d、V18a・d 規模：1.06×0.83/0.14m

特徴：V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。強く焼けている。

遺物：焼土中より土器はⅠ群b-2類2点、石器類は黒曜石製のフレイク8点、礫7点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-25(図V-4-3/表V-4-3)

位置：V17a・b 規模：0.66×0.47/0.12m

特徴：V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け赤褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。強く焼けており、脆い。

遺物：焼土中より土器はⅠ群b-1類17点、石器類は黒曜石製のフレイク6点、礫4点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

F-26(図V-4-3/表V-4-3)

位置：V15b 規模：0.66×0.64/0.10m

特徴：V層下位の調査中、調査区中央の沢地形内で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半載の結果、熱を受け褐色化した部分がみられたことから、焼土と判断した。強く焼けている。

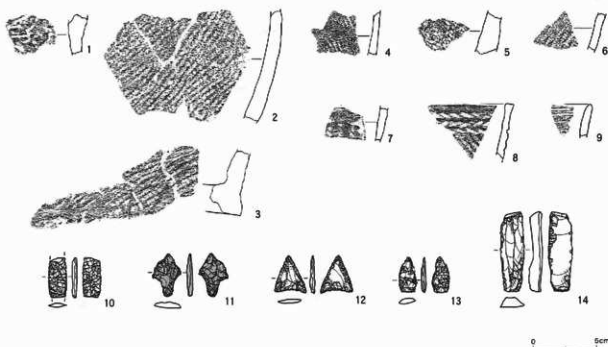
遺物：焼土中より礫17点が出土した。

時期：形成面と周辺の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半と考えられる。

焼土出土の遺物

1) 土器

1～3はF-1周辺出土である。1はV層中位出土のⅢ群b-1類土器である。器面に横断面形が三角形の貼付があり、器面には左方向からの半載竹管による突引文、貼付には同工具による右上方向からの刺突文が施されている。胎土には砂粒と微量の白色鉱物を含む。二次焼成を受けている。2・3は同一個体でV層上・中位出土のⅢ群b-2類土器である。器面には幅3mmのLR斜行縄文が施されている。底部は上げ底気味でわずかに張り出す。内面は平滑である。器面内面とも暗黄褐色を呈す。胎土には砂粒と微量の小礫・白色鉱物を含む。焼成は良好である。4・5はF-6出土で4がⅠ群b-2類、5がⅡ群a-2類土器である。4には羽状縄文と思われるRLの縄文が認められる。条の幅は1mmである。5には幅5～6mmのLR斜行縄文が施されている。胎土には繊維を含む。6はF-14出土、7はF-20出土、8はF-23出土のⅠ群b-1類土器である。6には条の幅3～4mmのLR斜行縄文、7には幅3mmの組紐疋痕文と短縄文、8には幅3～4mmの縄線文と条の幅3mmのRL斜行縄文が施されている。いずれも内面は平滑で、器厚は5mmほどである。8の口唇はわずかに張り出す。6・7は器面内面とも暗黄褐色、8は暗褐色を呈し、6の胎土には少量の砂粒と白色鉱物、7には微量の砂粒と白色鉱物、8には微量の砂粒と白色鉱物を含む。8の焼成は良好で堅く焼き締まる。9はF-24出土のⅠ群b-2類土器である。口唇は尖り気味で、器面には明瞭ではないが幅1mmの捺糸とみなされる横位の疋痕が認められる。器面内面とも暗黄褐色を呈す。胎土には少量の黒色鉱物と微量の白色鉱物を含む。



図V-4-4 焼土出土の遺物

表V-4-1 焼土掲載遺物一覧(1)土器

番号	遺構名	分類	調査区	遺物番号	層位	点数	同一個体・破片点数			
							遺構番号/グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)			
1	F-1周辺	Ⅲb-1	F1	6	V層中位	1	1点中の1点			
2	F-1周辺	Ⅲb-1	F1	Y20d	V層上位	1	F1周辺/11	X8b2V下、3	X16d1V上、	X18b4W、2
				Y20d	V層中位	3	X18b6V中	X19c12V下	X20b17V上、2	X20c9V上、2
				Y20a	V層上位	1	X20c17V下	X20c17V下	X20c29V下、3	X21b2W
				Y20d	V層中位	2	X21b18V下	X21b12V中、3	X21b33V下、3	X21b37V下、4
3	F-1周辺	Ⅲb-2	F1	Y21c	V層中位	1	Y20a10V中	Y20d1W	Y20d7V上、6	Y20d10V中、36
						1	Y20d11V中	Y21c2V中、2	Y21c3V上	Y21d1V上
						86点中の8点				
4	F-6	Ib-2	F6	3	焼土中	1	F6-1焼土中	F6-4焼土中、2	F6-8焼土中	5点中の1点
5	F-6	IIa-2	F6	6	焼土中	1	1点中の1点			
6	F-14	Ib-1	F14	2	焼土中	1	F14-3焼土中	2点中の1点		
7	F-20	Ib-1	F20	1	焼土中	1	F20-2焼土中	2点中の1点		
8	F-23	Ib-1	F23	9	焼土中	1	F23-1焼土中、3	F23-2焼土中	F23-9焼土中、5	F23-10
9	F-24	Ib-2	F24	2	焼土中	1	F24-1焼土中	2点中の1点		

表V-4-2 焼土掲載遺物一覧(2)石器

番号	遺構名	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
10	F-1周辺	石 鏃	12	V層下位	2.10×0.94×0.25	0.60	黒曜石	
11	F-1周辺	石 鏃	5	V層中位	2.22×1.56×0.31	0.70	黒曜石	被熱
12	F-6	石 鏃	10	焼土中	2.00×1.69×0.24	0.60	黒曜石	
13	F-12	石 鏃	3	焼土中	1.84×0.96×0.26	0.40	黒曜石	
14	F-13	スクレイパー	5	焼土中	4.20×1.28×0.68	3.90	黒曜石	

2) 石器

10、11はF-1周辺出土の石鏃。10は薄身で柳葉形のもの。両面の調整は非常に細かいが、先端部と基部を欠損する。11は茎を有するもの。被熱により、表面が白濁している。12はF-6出土の石鏃。三角形のもので、基部が内湾する。両面に剝離面を残す。13はF-12出土の石鏃。柳葉形のもので右側縁を欠損する。14はF-13出土のスクレイパー。縦長剥片の側縁に刃部が設けられている。石材はすべて黒曜石である。

(芝田)

表V-4-3 焼土出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	点数	
F-1	焼土中	礫・礫片	礫	1点	
			計	1点	
	土器		Ⅲ群b類	1点	
			Ⅲ群b-1類	1点	
			Ⅲ群b-2類	5点	
	焼土周辺 (Y層中位)	剥片石器	石鏃	1点	
		剥片	フレイク	1点	
		礫・礫片	礫	8点	
		計		17点	
		焼土周辺 (Y層下位)	剥片石器	石鏃	1点
			計	1点	
		合	計	19点	
F-5	焼土中	剥片	フレイク	2点	
	合	計	2点		
F-6	焼土中	土器	I群b-1類	1点	
			I群b-2類	5点	
			I群b-3類	2点	
			Ⅱ群a-2類	1点	
		剥片	フレイク	3点	
		礫・礫片	礫	4点	
		計		16点	
焼土周辺 (W層上面)	剥片石器	石鏃	1点		
		計	1点		
	合	計	17点		
F-7	焼土中	剥片	フレイク	1点	
		礫・礫片	礫	2点	
	合	計	3点		
F-9	焼土中	礫・礫片	礫	13点	
	合	計	13点		
F-10	焼土中	礫・礫片	礫	23点	
	合	計	23点		
F-12	焼土中	剥片石器	石鏃	1点	
			Rフレイク	2点	
		礫・礫片	礫	6点	
	合	計	9点		
F-13	焼土中	剥片石器	スクレイパー	1点	
		剥片	フレイク	1点	
		礫・礫片	礫	3点	
	合	計	5点		
F-14	焼土中	土器	I群b-1類	2点	
		剥片石器	石鏃	1点	
		剥片	フレイク	1点	
		礫・礫片	礫	74点	
	合	計	78点		
F-16	焼土中	礫・礫片	礫	123点	
	合	計	123点		
F-17	焼土中	土器	I群b-1類	3点	
	合	計	3点		
F-18	焼土中	礫・礫片	礫	164点	
	合	計	164点		
F-19	焼土中	剥片	フレイク	1点	
		礫・礫片	礫	46点	
	合	計	47点		
F-20	焼土中	土器	I群b-1類	2点	
		剥片	フレイク	6点	
		礫・礫片	礫	1点	
	合	計	9点		
F-21	焼土中	剥片	フレイク	1点	
	合	計	1点		
F-22	焼土中	土器	I群b類	3点	
			I群b-1類	16点	
			Ⅱ群a類	1点	
		剥片石器	石鏃	1点	
		剥片	フレイク	583点	
		磨製石器	石斧	2点	
	炭化物	炭化クルミ	75点		
	合	計	681点		
F-23	焼土中	土器	I群b-1類	6点	
			I群b-3類	2点	
		剥片	フレイク	7点	
			計	15点	
		土器	I群b-1類	4点	
		剥片	フレイク	138点	
	炭化物	炭化クルミ	60点		
	計		202点		
	合	計	217点		
F-24	焼土中	土器	I群b-2類	2点	
		剥片	フレイク	8点	
		礫・礫片	礫	7点	
	合	計	17点		
F-25	焼土中	土器	I群b-1類	17点	
		剥片	フレイク	6点	
		礫・礫片	礫	4点	
	合	計	27点		
F-26	焼土中	礫・礫片	礫	17点	
	合	計	17点		
	総	計		1,475点	

5 フレイク・チップ集中

FC-1 (図V-5-1・2/表V-5-1~3/図版32・35・36)

位置: S8b・c、T8a~d 規模: (4.84)×2.82m

特徴: 調査区北西側、沢地形内の緩斜面上に立地する。V層下位で黒曜石製のフレイク・チップを主体とする遺物集中を検出した。集中の範囲は歪曲した楕円形で、南西側が風倒木によって覆われている。遺物が最も密集しているのは、中心部よりやや北東側へずれた T8d グリッド杭付近である。遺物が濃厚に出土する層位は、V層下位の最下部(VI層上面の直上)であり、これが遺構の形成面と推測される。集中の内部に土壌、焼土などの施設は確認されなかった。だが、出土遺物に被熱しているものが多数含まれることから、焼土が攪乱部分に存在していた可能性がある。風倒木による攪乱が主体部に及ぶことから、特に遺物の出土地点の実測やメッシュ組みによる取り上げは行わなかった。

集中内部のV層土をVI層上面まで採取し、土壌水洗を行ったところ、多量の微細遺物を得ることができた。また、周辺の遺物包含層からは、FC-1から散乱したと推測される剥片石器類が多数出土しており、特に石鏃は集中内部出土のものとはほぼ同じ柳葉形のものが多い(図V-5-2)。図中に番号に黒丸を付した石鏃は、包含層出土扱いでVI章に掲載したものである(図VI-2-11)。同型の石鏃は調査区全体より出土している。また、フレイク・チップの石材が黒曜石が大部分を占め、その他の頁岩、メノウなどが非常に少ない点も包含層出土のものと共通している。

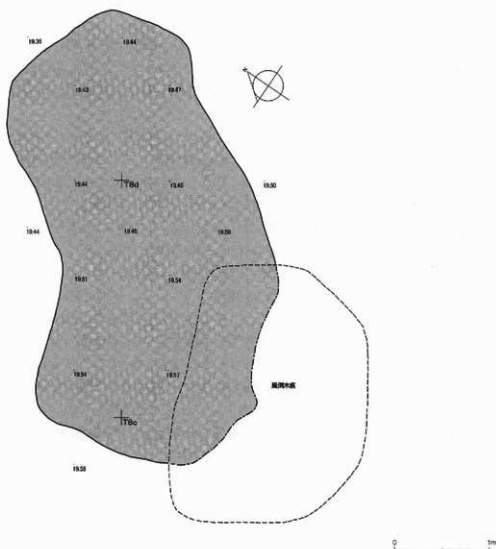
この遺構の性格は、さわめて多量のフレイク・チップのほか、製品として石鏃が9点出土していることから、石鏃などを加工・製造する場として機能していたと考えられる。一方、炭化したドングリ・クルミが出土しており、植物食料の採集に関係する作業が行われていた可能性もあるが、同時期のものは不明である。

遺物: 土器はI群b-1類2点、I群b-2類11点、I群b-3類23点、I群b-4類3点、石器類は石鏃9点、Rフレイク1点、フレイク・チップ1,626点、礫・礫片94点、自然遺物は炭化ドングリ7点、炭化クルミ9点が出土した。このうち、土器はI群b-3類が周辺を含めて最も多く同一平面上から出土しており、FC-1に伴うか、ほぼ同時期のものと判断した。石器類では、フレイク・チップが最も多い。石材別では、黒曜石1,619点(被熱57点)、頁岩3点、メノウ4点となっている。総重量は87.2gで、このうち0.2g以下の微細なチップが1,575点と大多数を占める。

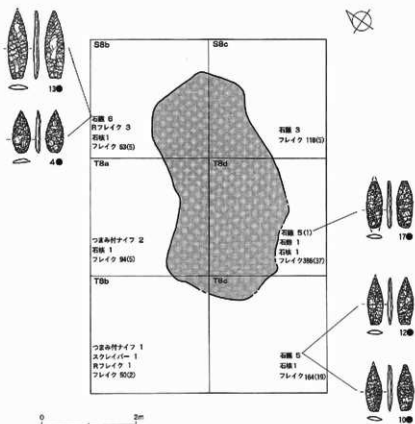
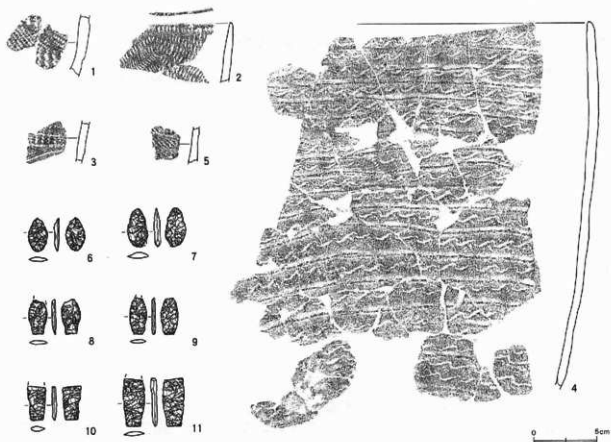
1はI群b-1類、2・4・5はI群b-3類、3はI群b-4類土器である。1は器面に幅4mmの短縄文と、幅3mmのRLの縄文が認められる。器厚は6~8mm、内面は横にナデ調整されている。器面は暗黄褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土には少量の砂粒と微量の白色鉱物を含む。2は11点中の3点が接合したものである。口唇が尖り気味で、器面には短縄文が横環、山形に施されて、口唇の一部にも縄の圧痕が認められる。器厚は最厚部で6mm、内面は横ナデにより平滑に調整され、器面内面とも暗褐色を呈する。胎土には微量の白色鉱物を含み、焼成は良好で堅く焼き締まる。3は器面に幅1~2mmの捻糸の圧痕が認められる。器厚5~6mmで内面は横ナデにより調整されている。器面は暗黄褐色、内面は黒褐色を呈する。胎土には微量の小礫を含み、焼成は良好である。4は79点中45点が接合したものである。口唇が尖り気味で、器面には下から上へいくほど間隔を狭くした微隆起線があり、その間には綾絡文が施されている。器厚は最厚部で6mmである。口縁から胴部上半にかけては吹き零れにより黒ずんでいる。内面は横にナデ調整され、器面は黄褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土には黒色鉱物を含む。5には幅3mmの横位の貼付帯があり、器面と貼付帯に幅1~2mmのLRの縄文が認められる。器厚は5~6mm、器面内面とも白黄褐色を呈する。胎土には微量の黒色鉱物と少量の砂粒を含む。

表V-5-1 フレイク・チップ集中出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	点数
FC-1	V層下位	土器	I群b-1類	2点
			I群b-2類	11点
			I群b-3類	23点
			I群b-4類	3点
		剥片石器	石鏃	9点
			Rフレイク	1点
		剥片	フレイク	1,626点
		礫・礫片	礫	94点
		炭化物	炭化ドングリ	7点
			炭化クルミ	9点
合		計	1,785点	



図V-5-1 FC-1



図V-5-2 FC-1出土の遺物

表V-5-2 フレイク・チップ集中掲載遺物一覧(1)土器

番号	遺物名	分類	調査区	遺物番号	層位	点数	同一個体・破片点数 遺物番号/グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)			
1	FC-1	1b-1	FC1	19		2	2点中の2点			
				T8d	11 VI 層	1	FC1-19、4	FC1-24、2	R8b2V下	T8d14W
2	FC-1	1b-3	T8d	10	V層下位	2	11点中の3点			
				24		1	FC1-24、2	3点中の1点		
4	FC-1	1b-4	FC1	19		2	FC1-1	FC1-19、2	FC1-24、2	S6b1V下、2
				24		1	S6c3V下	S6c5V下、2	S6c7V下	S7b1V下
				S6c	5 V層下位	1	S8c10W、3	X8c12W	T8a4V下	T8b2V下
				S8c	6 VI 層	1	T8d11W	T8d13W	T8d14W、4	T8d15W、5
				S8c	7 VI層風倒	3	T8d17木根、2	T12d20V下	X12a7V下	Y17a8V下
				S8c	9 VI 層	1	79点中の45点			
				S8c	10 VI 層	3				
				S8c	12 VI 層	3				
				S9c	7 VI層風倒	2				
				T8d	11 VI 層	2				
				T8d	14 VI 層	2				
				T8d	15 VI 層	17				
				T8d	16 VI 層	1				
T8d	17 木根	6								
5	FC-1	1b-3	FC1	19		1	FC1-19、6	FC1-24、2	9点中の1点	

表V-5-3 フレイク・チップ集中掲載遺物一覧(2)石器

番号	遺物名	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
6	FC-1	石 鏃	8	V層下位	1.75×1.01×0.22	0.30	黒曜石	水洗選別
7	FC-1	石 鏃	14	V層下位	2.01×1.10×0.29	0.60	黒曜石	水洗選別
8	FC-1	石 鏃	9	V層下位	1.79×0.98×0.18	0.48	黒曜石	水洗選別
9	FC-1	石 鏃	10	V層下位	1.90×0.92×0.19	0.30	黒曜石	水洗選別
10	FC-1	石 鏃	12	V層下位	1.80×1.01×0.26	0.40	黒曜石	水洗選別
11	FC-1	石 鏃	13	V層下位	2.50×1.13×0.29	0.90	黒曜石	水洗選別

6~11は石鏃。いずれも柳葉形。6~9は短身のもの。6・7は調整が粗雑で、未製品の可能性がある。8・9は両面に細かな剝離調整が施されるが、先端部を欠く。10・11は長身のもの。調整は丁寧で、基部が直線状である。いずれも欠損品で、先端部を失っている。

時期：出土遺物から縄文時代早期後半、中茶路式期の遺構と考えられる。

(芝田)

VI 包含層の遺物

I 土器

概要

平成13年度、宮戸4遺跡では遺物包含層より22,494点の土器が出土している。このうち、縄文時代のものが22,456点で99.8%を占める。擦文時代のものは38点で0.2%である。時期別の点数と包含層出土土器全体に占める割合を多い順に記すと、縄文時代早期後半の土器が17,061点と75.9%を占める。次いで、前期前半が2,722点で12.1%、中期後半が1,917点で8.5%、後期初頭が519点で2.3%、前期後半が166点で0.7%、後期後葉が53点で0.2%、中期前半が18点で0.1%となっている(図VI-1-1)。各時期の出土層位別点数と時期別出土土器点数に占める割合は、縄文時代早期後半はV層下位で12,703点(74.5%)、VI層で2,455点(14.4%)、前期前半はV層下位で2,162点(79.4%)、V層中位で407点(15%)、前期後半はV層下位で116点(69.9%)、V層中位で29点(17.5%)、中期前半はV層中位で14点(77.8%)、中期後半はV層下位で976点(50.9%)、V層中位で718点(37.5%)、後期初頭はV層下位で310点(59.7%)、V層中位で142点(27.4%)、後期後葉はV層中位で53点(100%)となっている。また、擦文時代のものはIII層で38点(100%)出土した。図VI-1-1~37に分布図を示した。図VI-1-1は包含層出土土器全体の分布図である。図VI-1-2~5は時期別の分布図、図VI-1-6~11は分類別の分布図、図VI-1-12~37は分類別・層位別の分布図である。

表VI-1-1 層位別出土土器一覧

分類	III層	IV層	V層				VI層	B調	風倒 攪乱	表採 排土	層位 不明	グリッド 不明	計
			上位	中位	下位	不明							
I群b類													
東銅路II式				1	3		6		2				12
東銅路III式	14	29	101	863	8263	9	1318	2	443	13		1	11056
Ib-2	1	2	6	175	2966		747	1	24	3	1	5	3931
Ib-3			6	44	430		156	2	18	2			658
Ib-4			2	53	886		168		7				1116
Ib細分不能	2	7	16	43	155		60		2	3			288
II群a類													
IIa-1	3	7	22	360	1894		42	4	7			1	2340
IIa-2		3	5	39	243		20					1	311
IIa細分不能	3	6	8	8	25		4					17	71
II群b類													
IIb	1	3	4	29	116		10		3				166
III群a類													
IIIa		3	1	14									18
III群b類													
IIIb-1	1	3	74	245	469		8				2		802
IIIb-2	1	8	55	440	472	1	17	2	10	2		3	1011
IIIb細分不能	1	3	26	33	35	3			3				104
IV群a類													
余市式			5	16	16					3			40
タブコブ式	3	14	22	126	294	4			16				479
IV群c類													
IVc				53									53
VII群													
VII	38												38
合計	68	88	343	2542	16267	17	2556	11	535	26	3	28	22494

(1) 縄文時代早期の土器

I群b-1類(1~9、15~119)

I群b-1類は、11,068点出土しており、その75%がV層下位で出土した。そのうちの35%にあたる2,916点がU3、X8・14・15・21、W14、V・W17、Y19グリッドで出土した。これらのグリッドからは10~30点/1m²の出土となっている。

15・16は東銅路II式に相当するものである。これらに類するものが12点出土した。15には撚りの異なる二種類の縄が使われ、施文が重複する。胎土に少量の繊維、微量の白色鉱物を含む。色調は黄褐色を呈する。16の口唇には指頭による刻み、器面にはRLの縄文が不明瞭ながら重複している。胎土に微量の白色鉱物を含む。

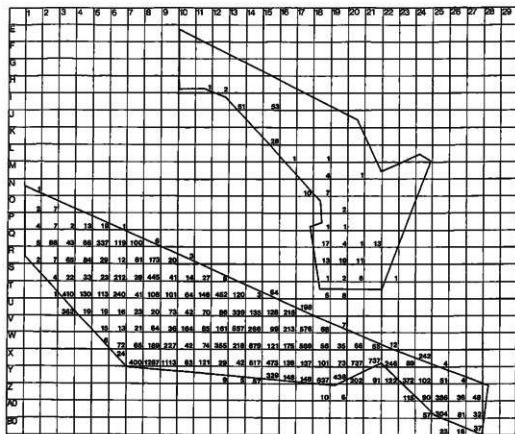
1~9、17~119は東銅路III式に相当するものである。組紐圧痕文、縄線文、短縄文、絡条体圧痕文、縄文などが複合施文される。輪痕の凹凸がある内面は横にナデ調整され、胎土に微量の白色鉱物・小礫を含むものが多い。焼成は概して中程度である。無文のもの、ミニチュア土器もある。施文等の特徴から、以下のa~g類に分けた。

a類 組紐圧痕文をもつもの(1・2、17~34)

1・17は太め、2・18~36bは細めの組紐圧痕文をもつ。これらは直線的に施されるもの(1・2、17~32)と曲線的に施されるもの(33・34)がある。1・2は復元土器、17・18は文様構成の分かるもの。19~31は口縁、32~34は胴部破片である。

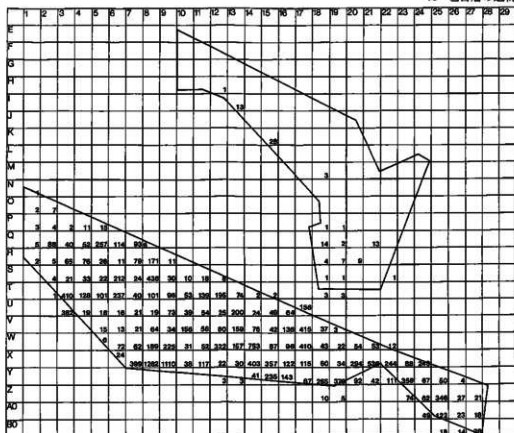
1は現存器高20.0cm、推定口径27.7cmを計る深鉢形土器である。口縁は緩やかに波打ち、外傾する口唇は縄により刻まれる。4つあると推定される口縁の頂部の右側から、湾曲して垂下する弓形の貼付帯が付けられ、器面と貼付帯を重ねて幅5mmの横線する組紐圧痕文が概ね原体1本文の間隔で

土器全体

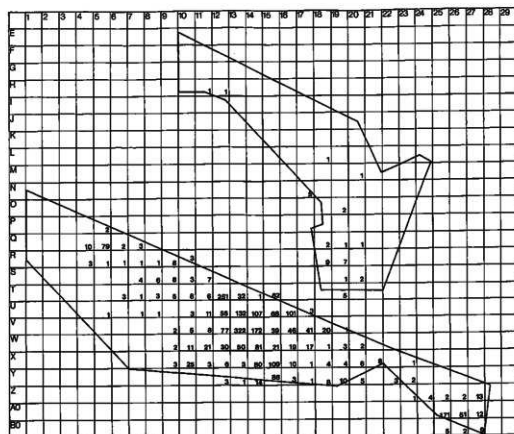


図VI-1-1 包含層出土土器分布図(1)

縄文時代
早期後半

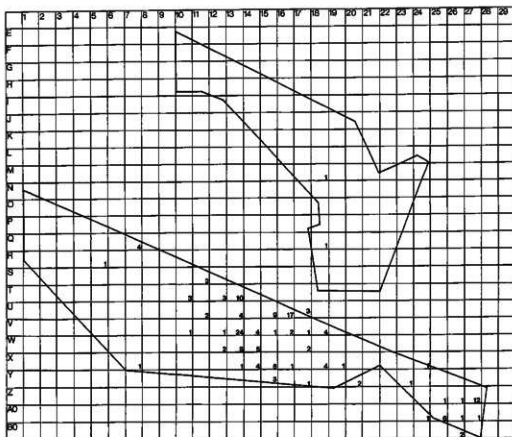


縄文時代
前期前半

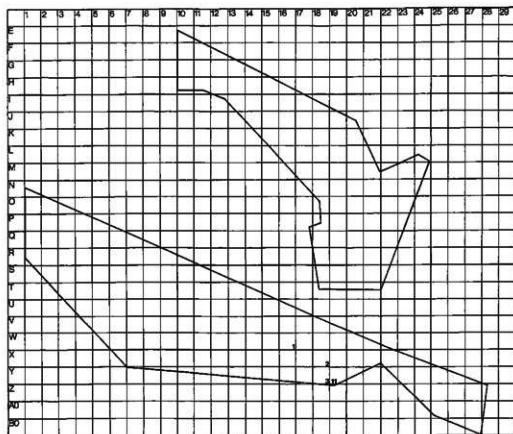


図VI-1-2 包含層出土土器分布図(2)

縄文時代
前期後半

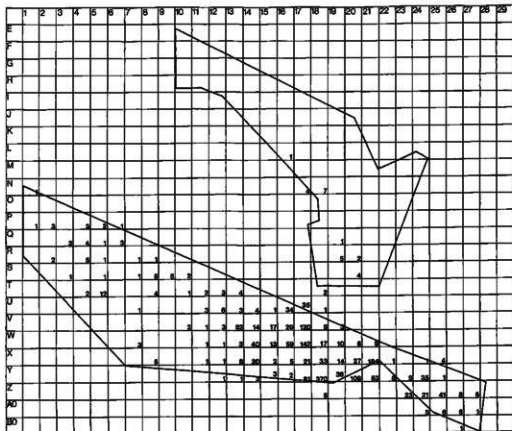


縄文時代
中期前半

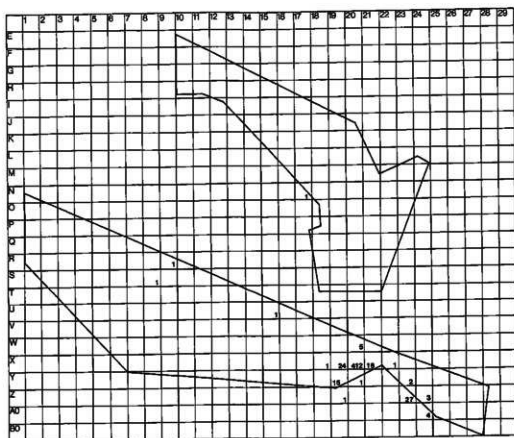


図VI-1-3 包含層出土土器分布図(3)

縄文時代
中期後半

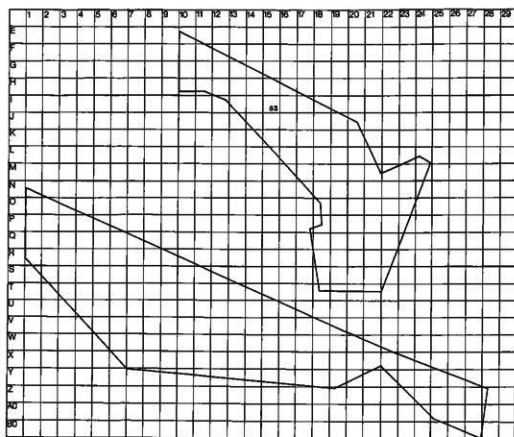


縄文時代
後期初頭

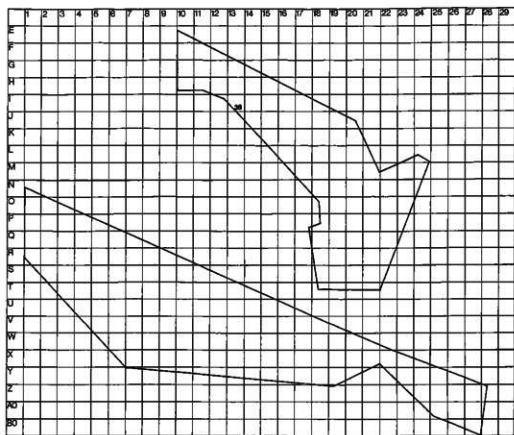


図VI-1-4 包含層出土土器分布図(4)

繩文時代
後期後葉

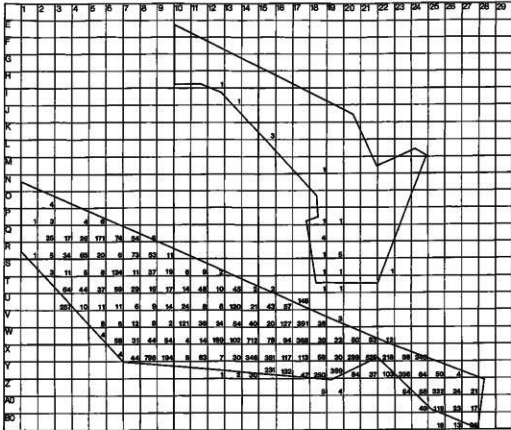


彌文時代

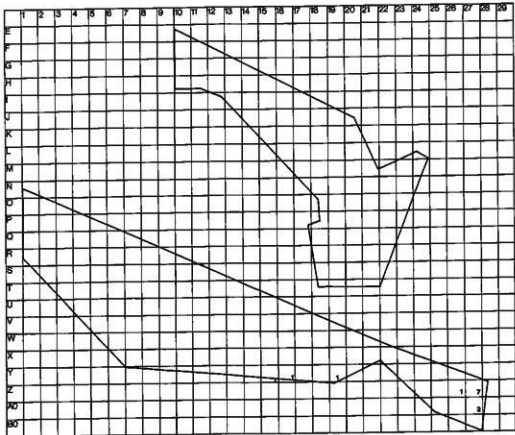


圖VI-1-5 包含層出土土器分布圖(5)

I群b-1類

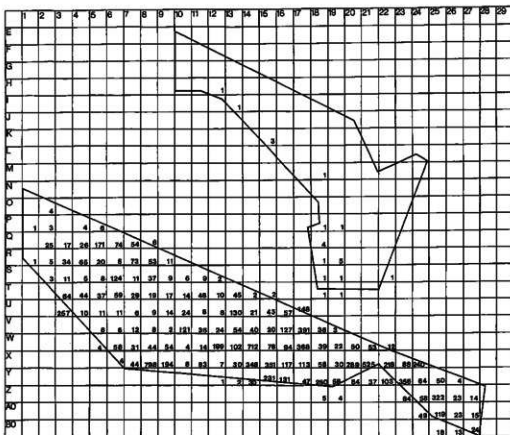


東鋼路II式

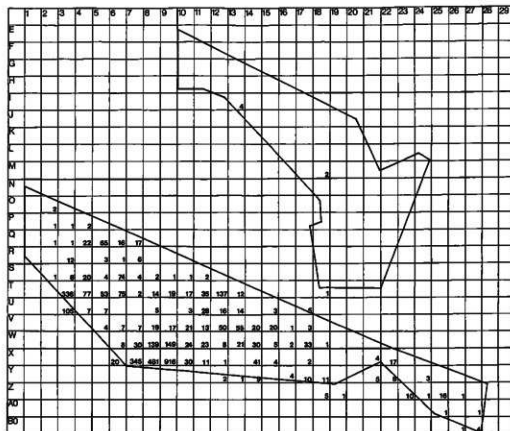


図VI-1-6 包含層出土土器分布図(6)

東鋼路Ⅲ式

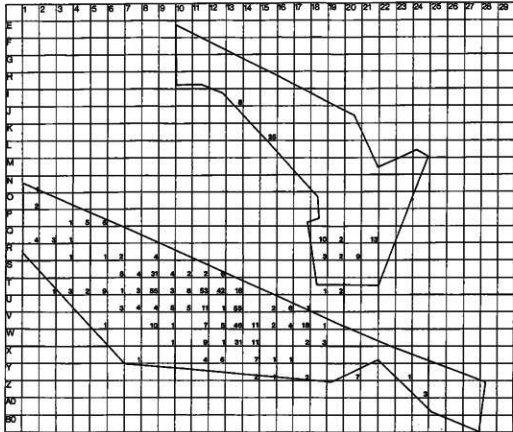


I 群 b-2 類

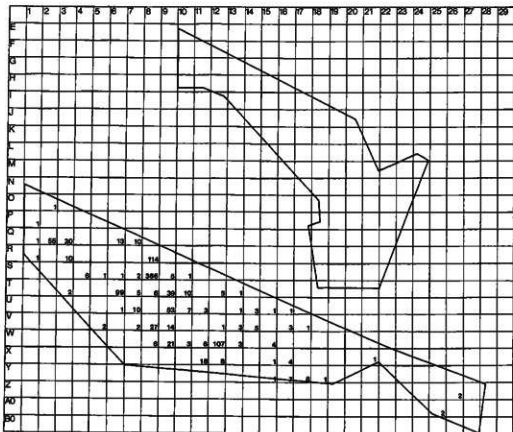


図VI-1-7 包含層出土土器分布図(7)

I群b-3類

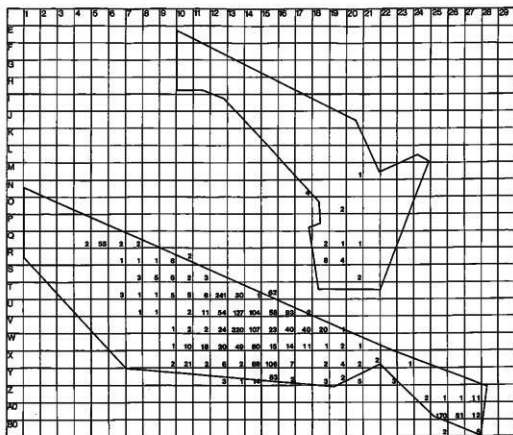


I群b-4類

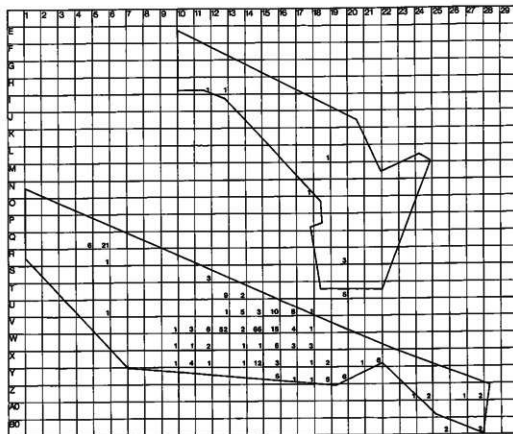


図VI-1-8 包含層出土土器分布図(8)

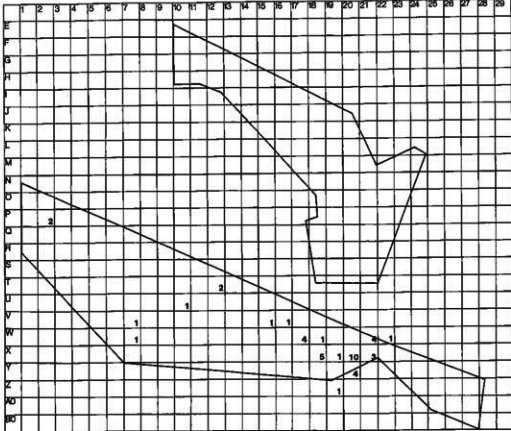
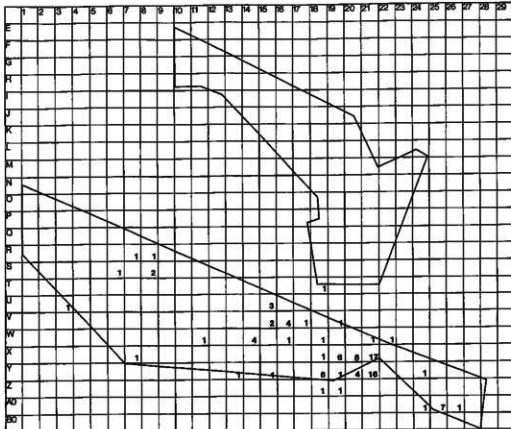
II 群 a-1 類



II 群 a-2 類

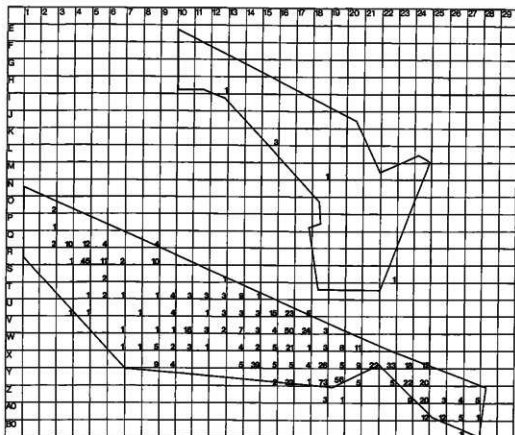


图VI-1-9 包含層出土土器分布图(9)

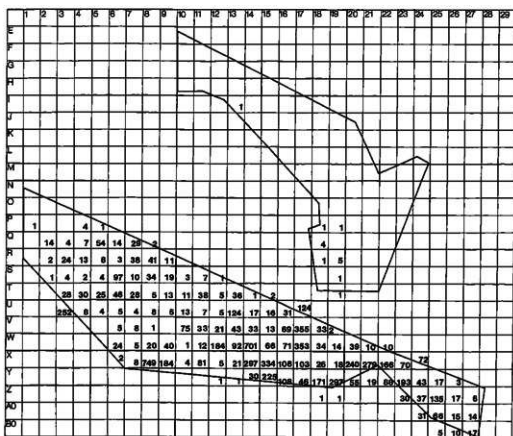
I群b-1類
Ⅲ・Ⅳ層I群b-1類
Ⅴ層上位

図VI-1-12 包含層出土土器分布図(12)

I 群b-1類
V層中位



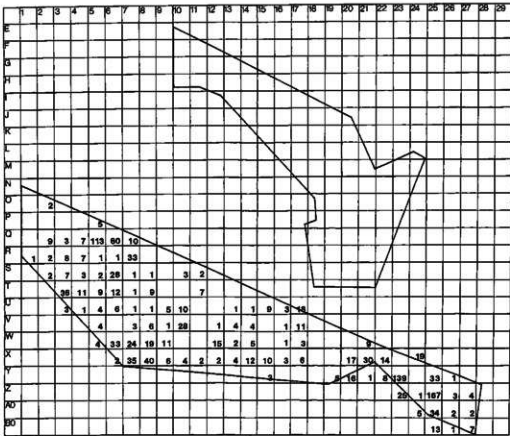
I 群b-1類
V層下位



图VI-1-13 包含層出土土器分布图(13)

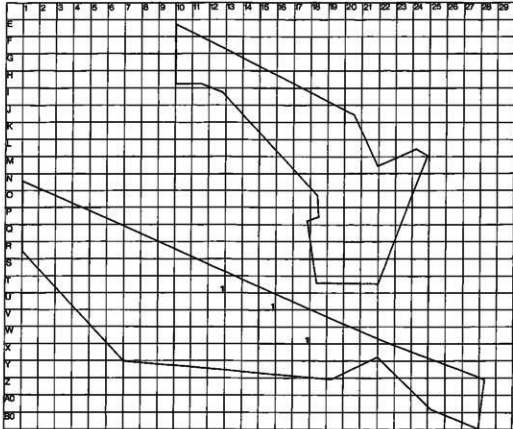
I群b-1類

VI層



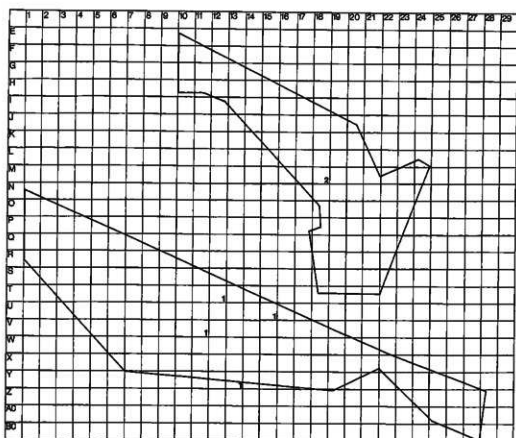
I群b-2類

III・IV層

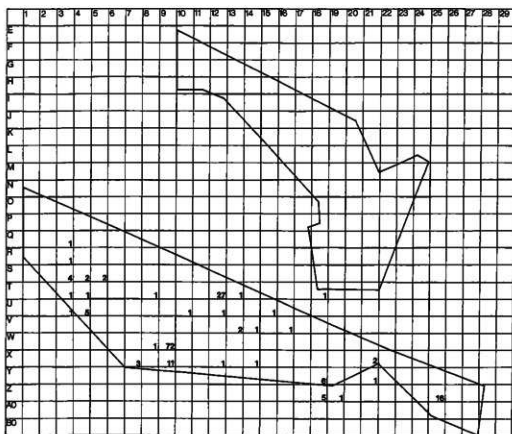


図VI-1-14 包含層出土土器分布図(4)

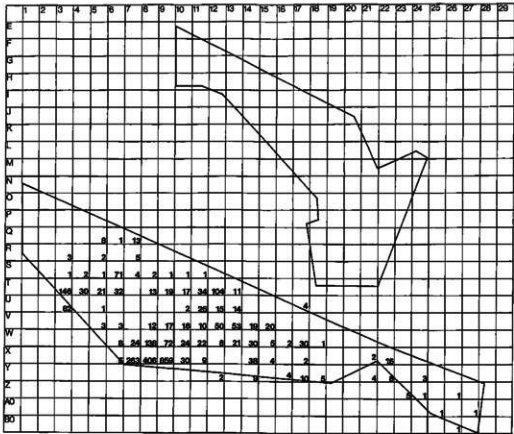
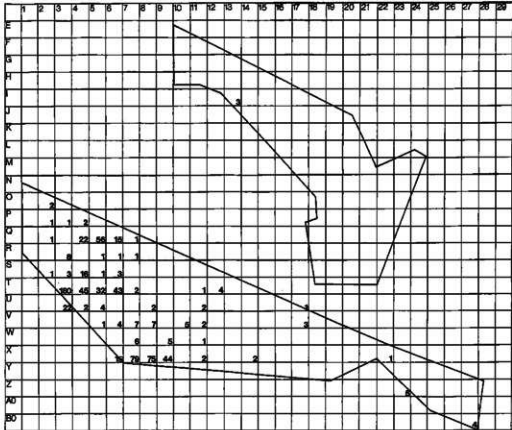
I 群b-2類
V層上位



I 群b-2類
V層中位

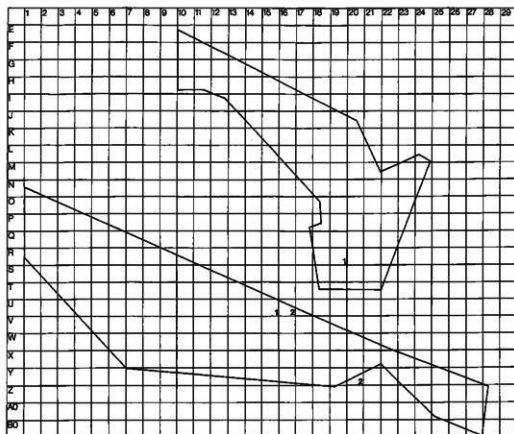


图VI-1-15 包含層出土土器分布图(15)

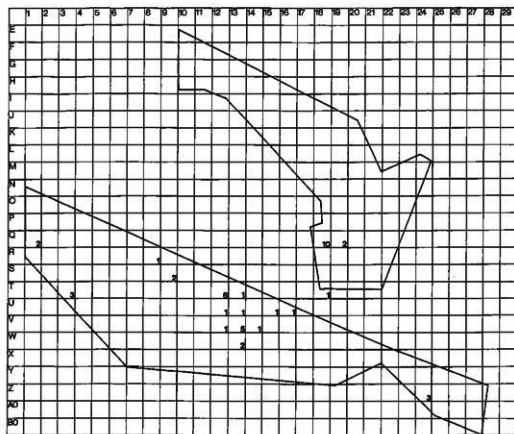
I群b-2類
V層下位I群b-2類
VI層

図VI-1-16 包含層出土土器分布図(16)

I 群 b-3 類
V 層上位

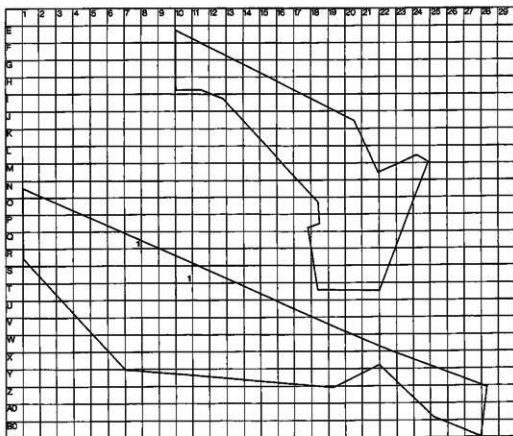


I 群 b-3 類
V 層中位

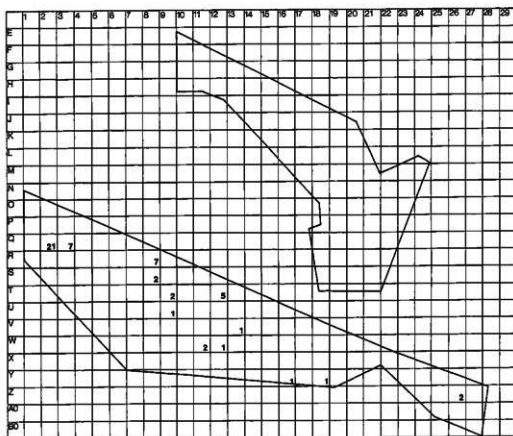


图VI-1-17 包含層出土土器分布图(17)

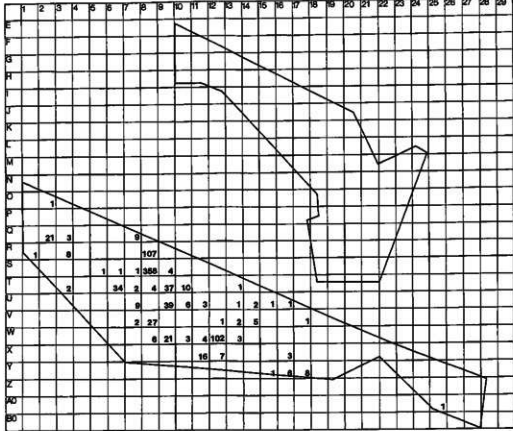
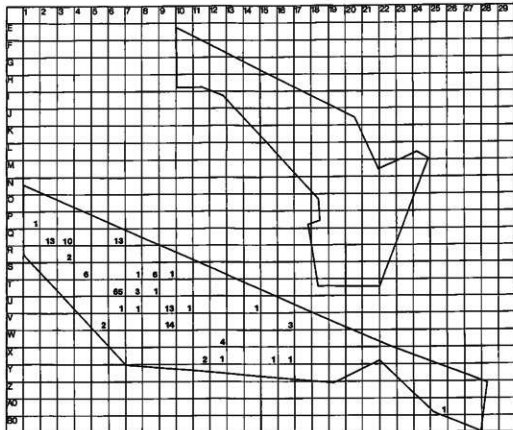
I 群b-4類
V層上位

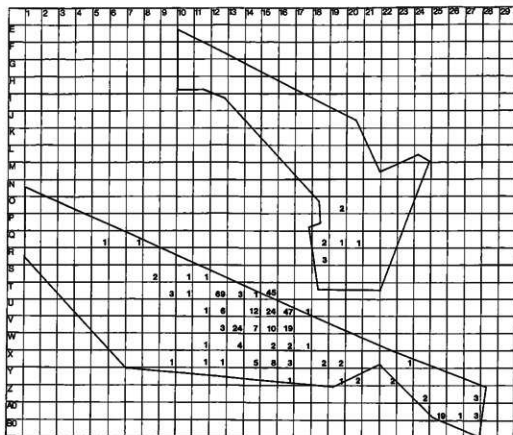
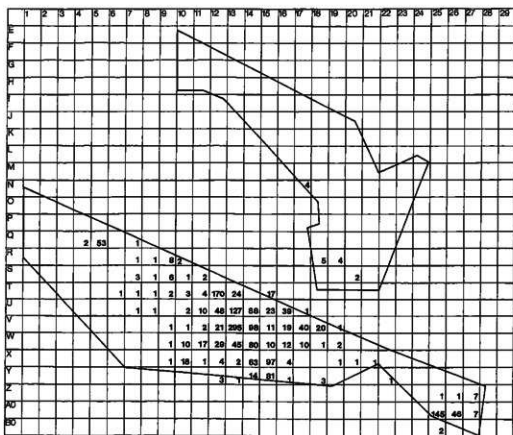


I 群b-4類
V層中位



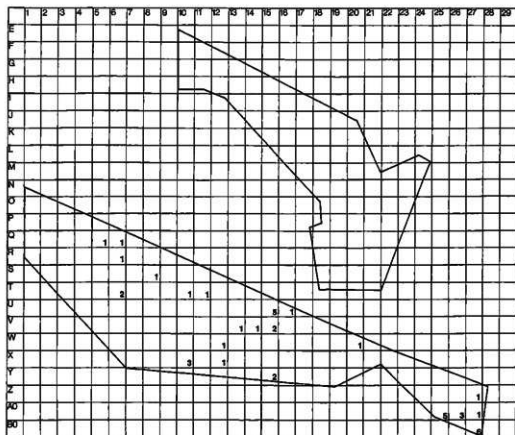
图VI-1-19 包含層出土土器分布图(19)

I 群b-4類
V層下位I 群b-4類
VI層

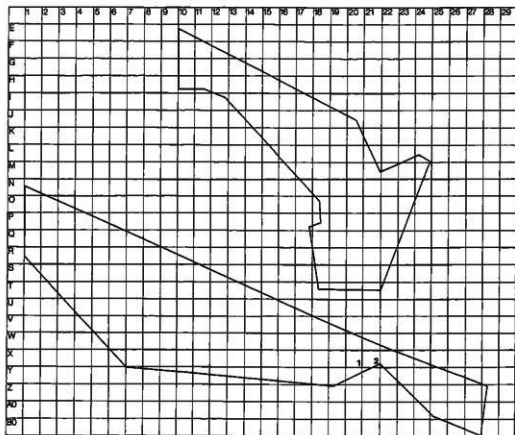
II群a-1類
V層中位II群a-1類
V層下位

図VI-1-22 包含層出土土器分布図(2)

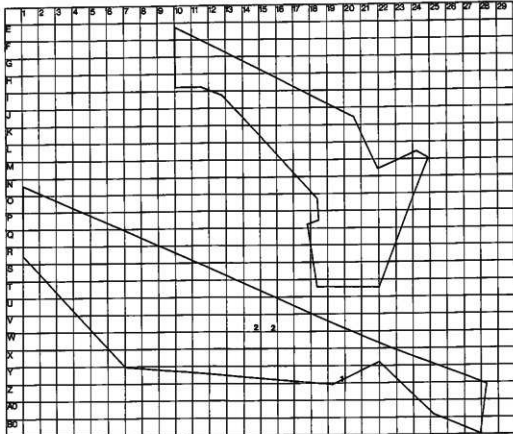
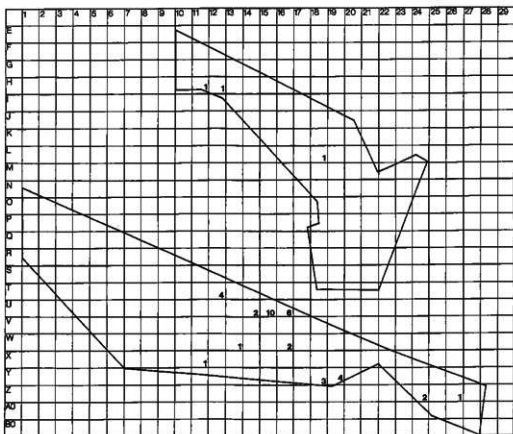
II 群 a-1 類
VI 層



II 群 a-2 類
IV 層

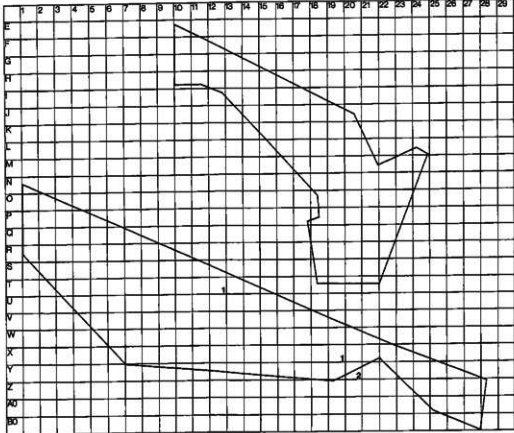


図VI-1-23 包含層出土土器分布図(2)

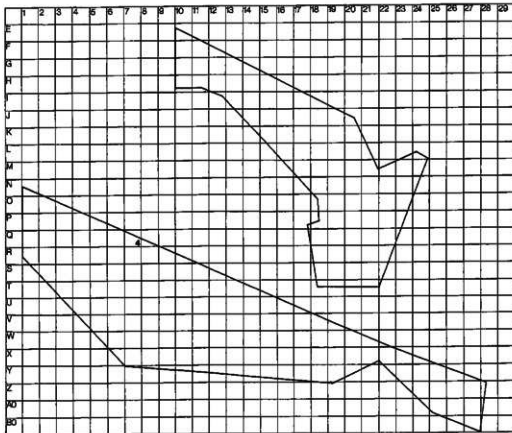
II群 a-2類
V層上位II群 a-2類
V層中位

図VI-1-24 包含層出土土器分布図(2)

II 群b類
III・IV層

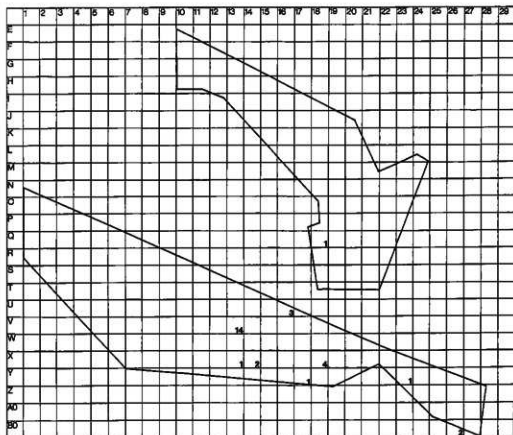


II 群b類
V層上位

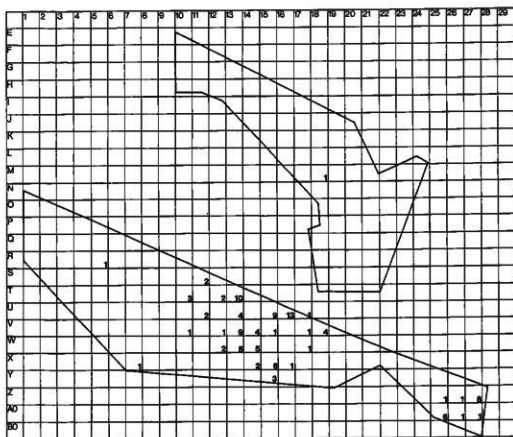


図VI-1-26 包含層出土土器分布図(26)

II 群 b 類
V 層中位

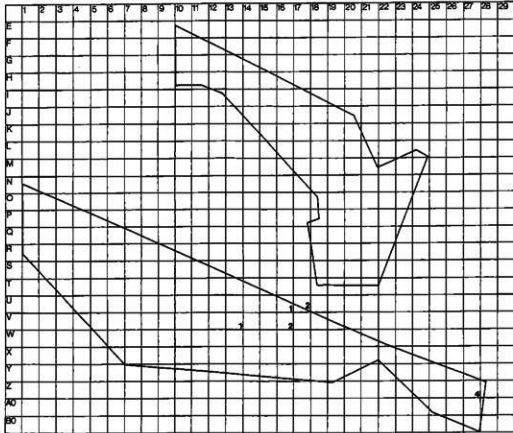


II 群 b 類
V 層下位

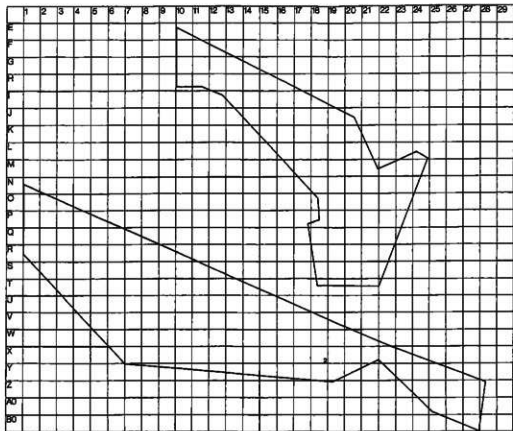


图VI-1-27 包含層出土土器分布图(7)

II 群 b 類
VI 層

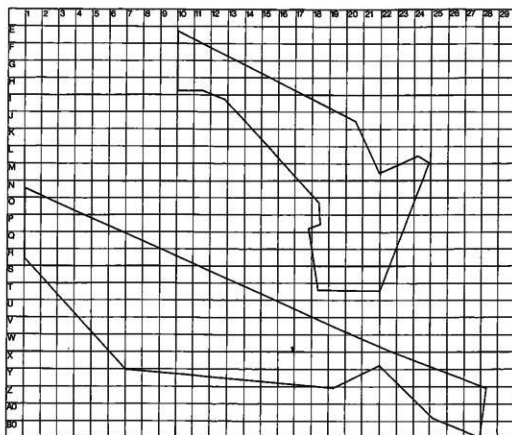


III 群 a 類
IV 層

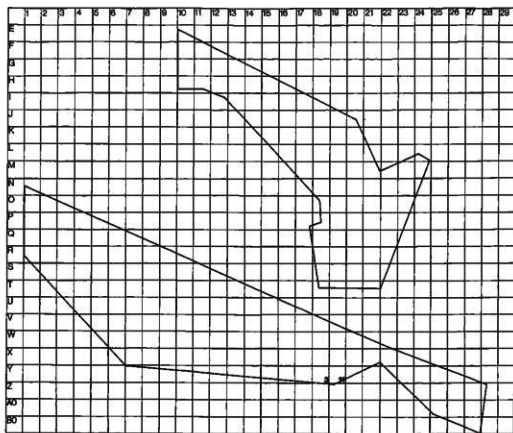


図VI-1-28 包含層出土土器分布図(20)

III 群 a 類
V 層上位



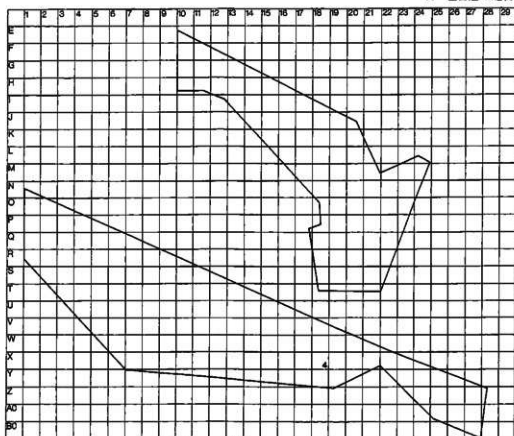
III 群 a 類
V 層中位



图VI-1-29 包含層出土土器分布图(2)

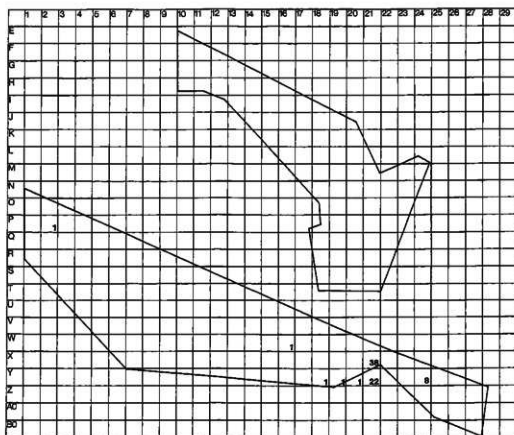
III群b-1類

III・IV層



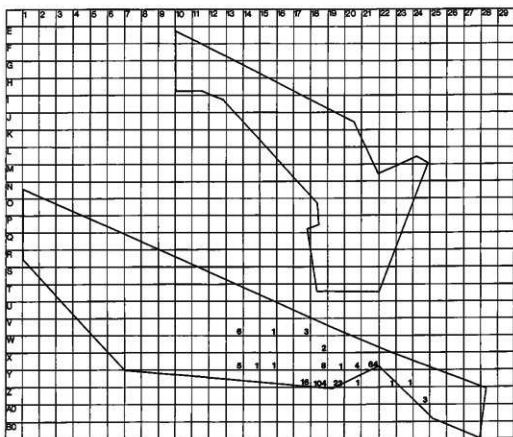
III群b-1類

V層上位

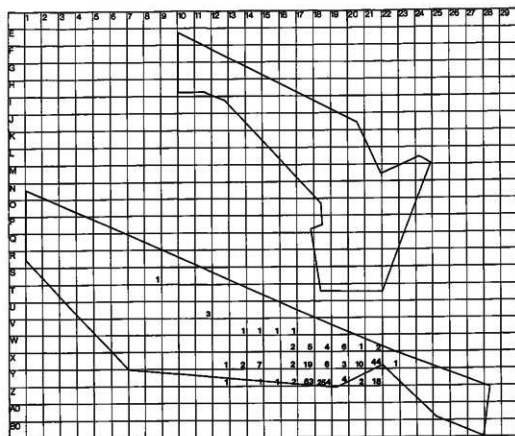


図VI-1-30 包含層出土土器分布図(30)

III群b-1類
V層中位

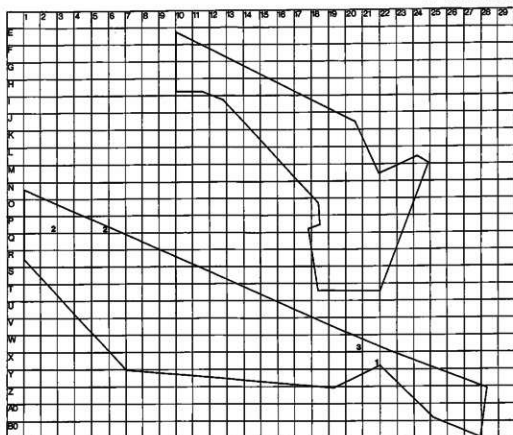


III群b-1類
V層下位

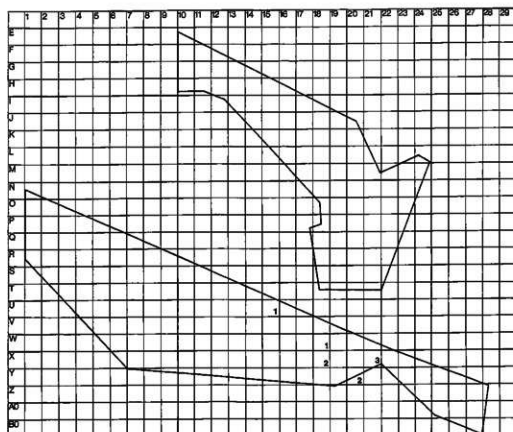


图VI-1-31 包含層出土土器分布图(31)

Ⅲ群b-1類
VI層

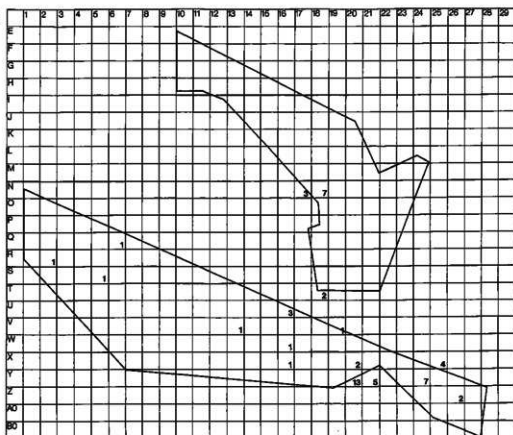


Ⅲ群b-2類
Ⅲ・Ⅳ層

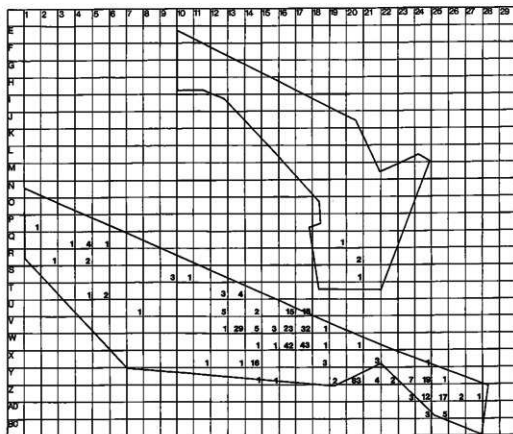


図VI-1-32 包含層出土土器分布図(3)

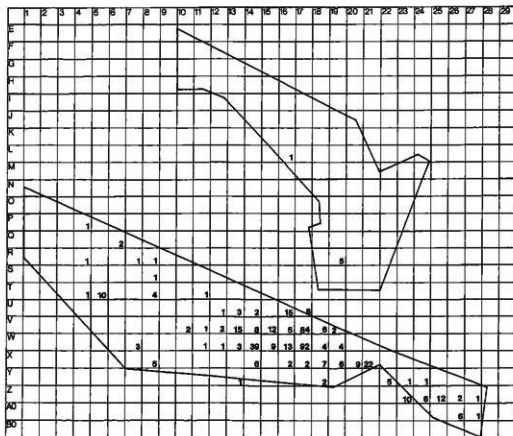
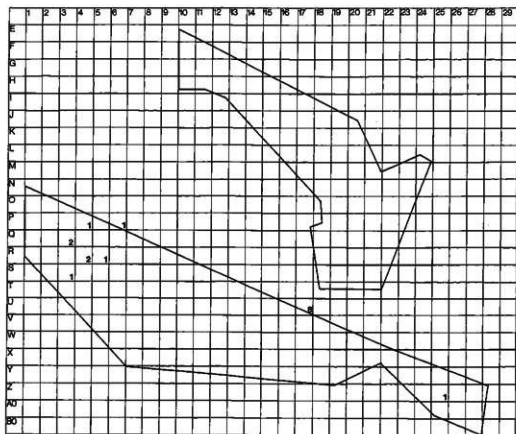
III群b-2類
V層上位



III群b-2類
V層中位

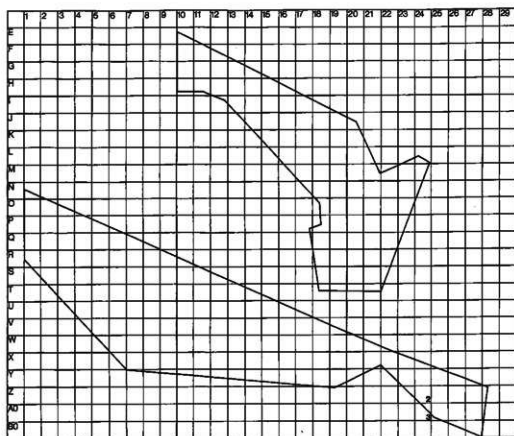


图VI-1-33 包含層出土土器分布图(3)

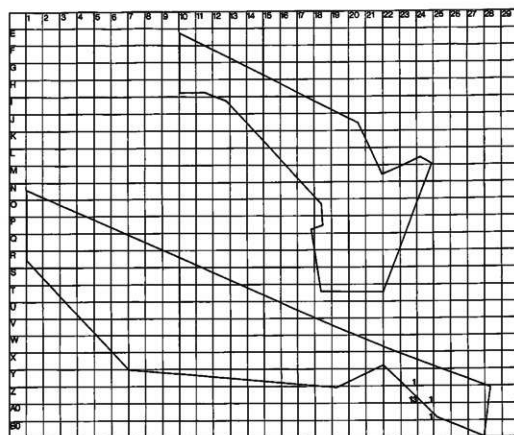
III群b-2類
V層下位III群b-2類
VI層

図VI-1-34 包含層出土土器分布図(34)

余市式
V層上位

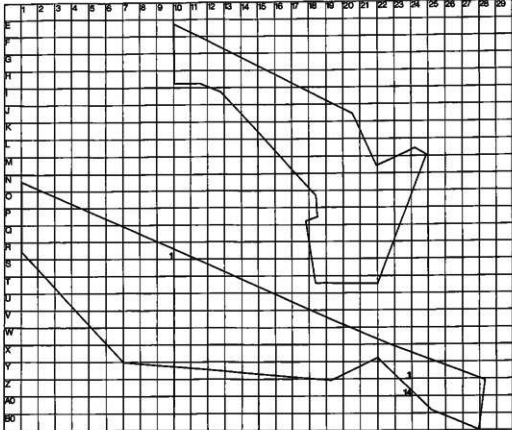


余市式
V層中位

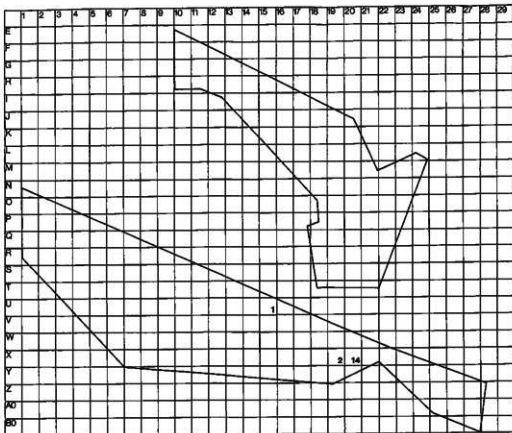


图VI-1-35 包含層出土土器分布图(35)

余市式
V層下位

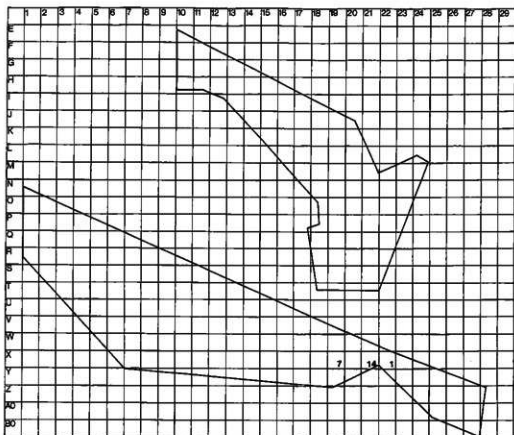


タブコブ式
Ⅲ・Ⅳ層

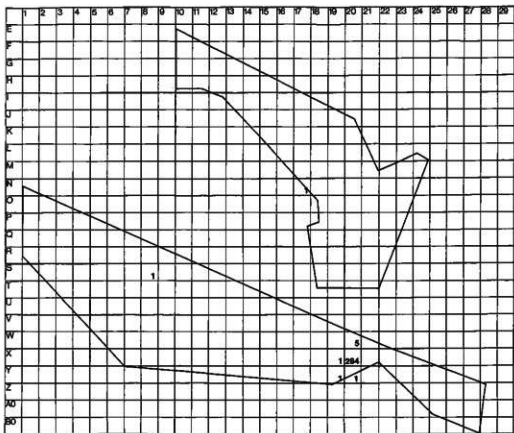


図VI-1-36 包含層出土土器分布図(36)

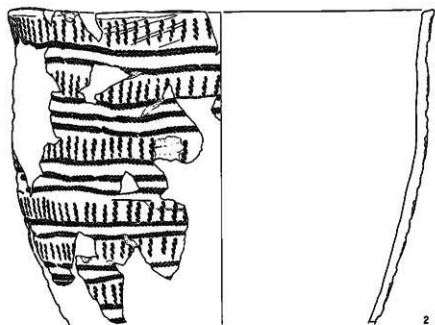
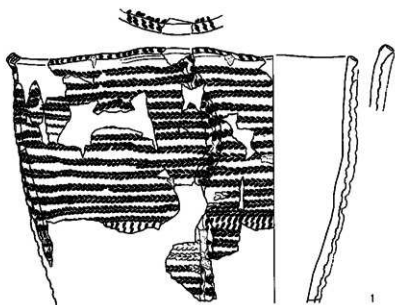
タブコブ式
V層上位



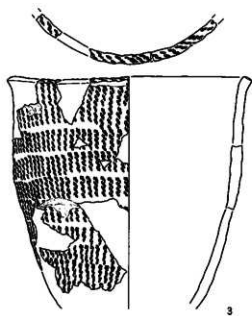
タブコブ式
V層下位



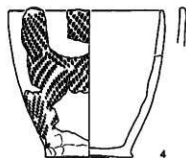
図VI-1-37 包含層出土土器分布図(3)



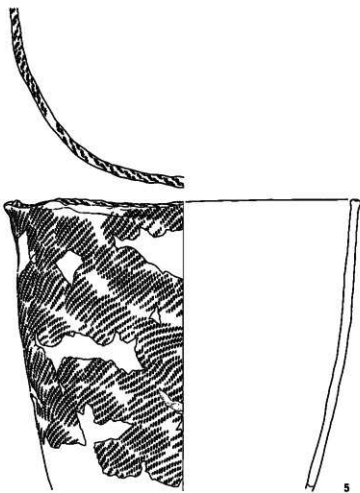
図VI-1-38 包含層出土の土器(1)



3



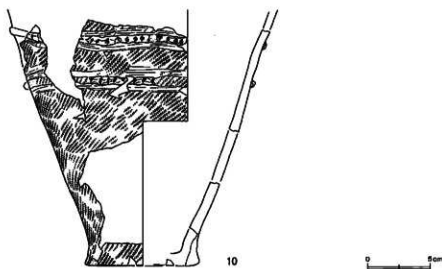
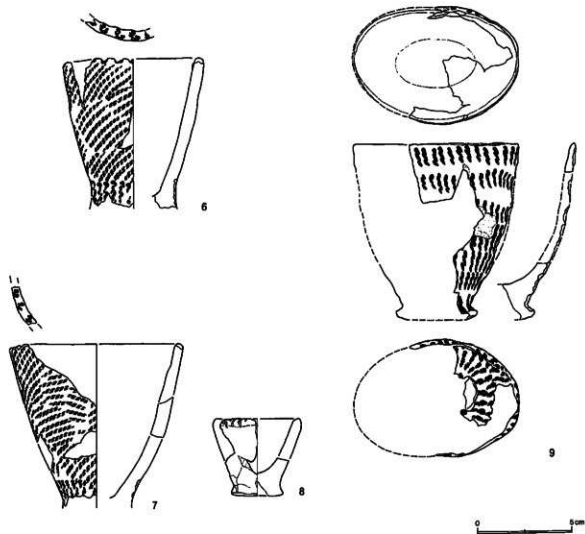
4



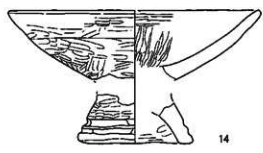
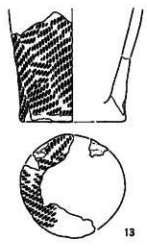
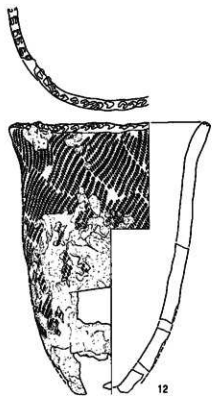
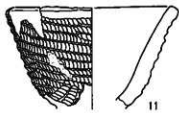
5



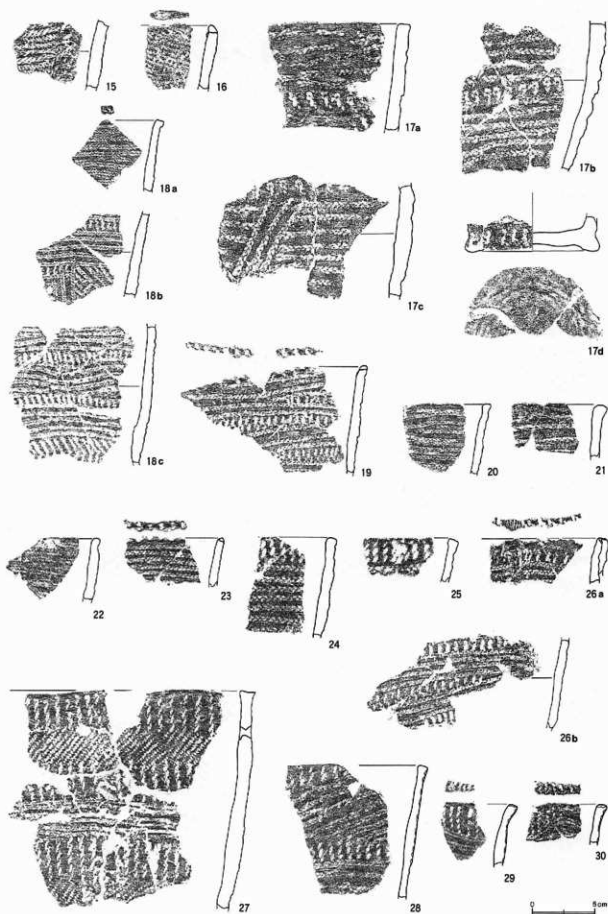
図VI-1-39 包含層出土の土器(2)



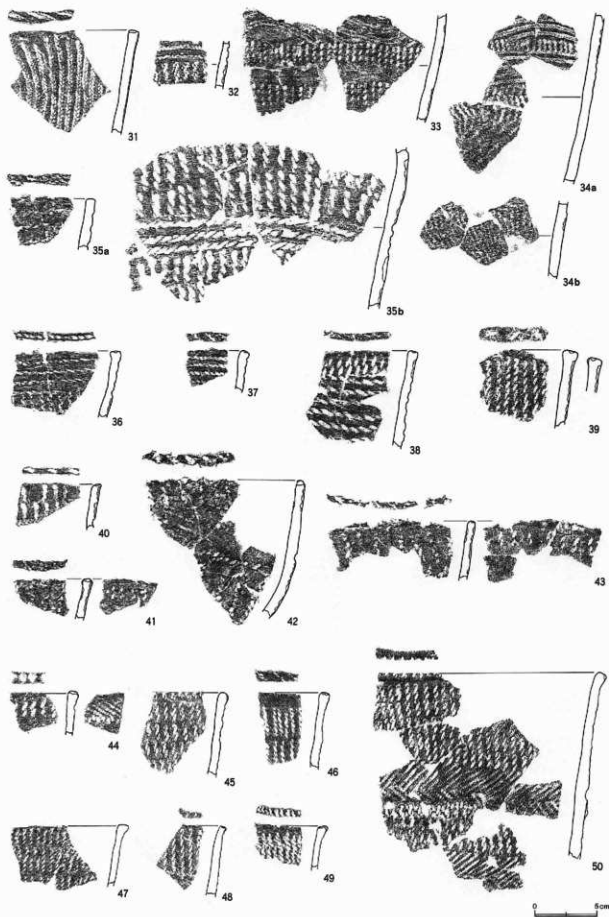
図VI-1-40 包含層出土の土器(3)



図VI-1-41 包含層出土の土器(4)



図VI-1-42 包含層出土の土器(5)



図VI-1-43 包含層出土の土器(6)

施される。胴部上半部の組紐瓦痕文の間隔が10mmほどに開いた部分には短縄文が充填されている。輪痕が残る凹凸のある内面は横にナデ調整されている。器面は暗黄褐色、内面は黒褐色を呈す。2は現存器高24.9cm、推定口径33.6cmを計る深鉢形土器である。口唇は内傾する。器面には幅3~4mmの組紐瓦痕文が2本もしくは3本単位で横環し、各単位間には短縄文が充填される。凹凸のある内面は横にナデ調整されている。器面は暗黄褐色、内面は暗褐色を呈する。1・2とも胎土には微量の白色鉱物と小礫を含む。17a~dは横位・斜位組紐瓦痕文、縄端刺突文をもち、底部(17d)は張り出し、短縄文が施されている。色調は暗黄褐色を呈す。胎土には微量の白色鉱物と小礫を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。18a~cは同一個体である。口唇は縄により刻まれ、器面には横位、縦位、斜位、波状の組紐瓦痕文と短縄文が組み合わされている。内面調整は横ナデである。器面は暗褐色、内面は黒褐色を呈す。胎土に微量の白色鉱物と砂粒を含む。

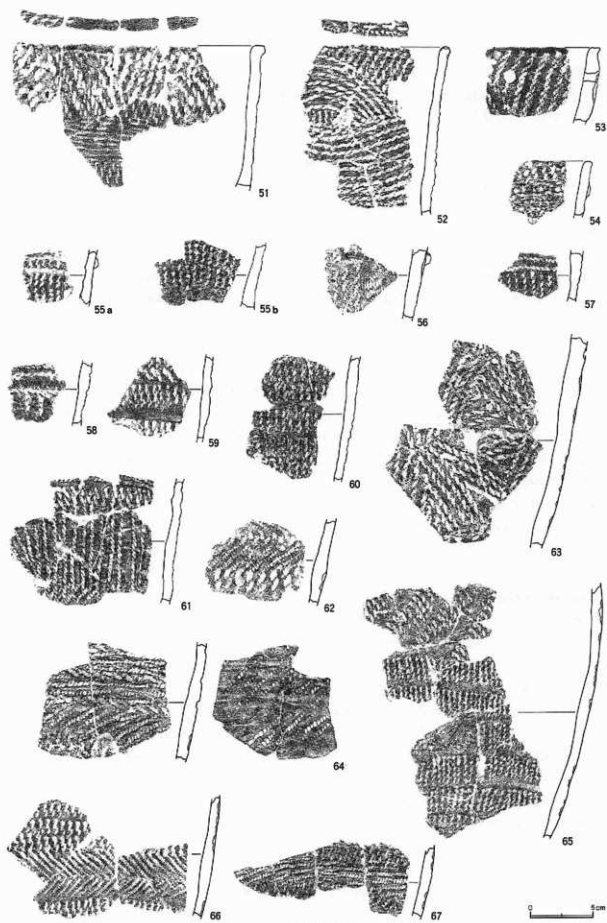
19~28は口縁に横位組紐瓦痕文のあるもので短縄文と組み合わせられる。28は口縁に斜位組紐瓦痕文のあるもの。29・30は口縁に弧状組紐瓦痕文のあるものである。19は口唇が縄により刻まれ、器面には2~3本単位の組紐瓦痕文の間に短縄文が充填される。20~23は口縁に横位組紐瓦痕文が施されている。23の口唇は縄により刻まれている。24~26は口縁に短縄文と組紐瓦痕文が施されている。26は口唇から垂下する貼付帯がある。口唇は縄により斜めに刻まれ、口唇にかかる貼付帯の上面には沈線が刻まれている。器面には、口縁部(26a)では短縄文と横位組紐瓦痕文の組み合わせ、胴部(26b)では3~4本単位の弧状組紐瓦痕文の間に短縄文が充填されている。27は短縄文、横位組紐瓦痕文、LR斜行縄文の順に施文されている。いずれも条の幅は3mmである。凹凸のある内面は横にナデ調整されている。器面は暗黄褐色、内面は暗褐色を呈す。胎土には微量の黒色鉱物・小礫を含む。28は横位・斜位組紐瓦痕文と短縄文が組み合わせて施文されている。器面・内面とも黒褐色を呈す。胎土には微量の白色鉱物を含み、焼成は良好で堅く焼き締まる。29・30は口唇が縄により刻まれ、器面には短縄文と弧状組紐瓦痕文が施されている。29は口縁が外反する。31は口唇に斜位、口縁に縦位の組紐瓦痕文が施されている。32には横位組紐瓦痕文と短縄文、33には弧状組紐瓦痕文と短縄文、34には横位・弧状組紐瓦痕文、短縄文、LR斜行縄文が組み合わされている。

b類 縄の側縁瓦痕をもつもの(3・35~70b)

縄線文をもつもの(35~39)、疎らな短縄文をもつもの(3・40~70b)がある。3は復元土器、35~54は口縁で、35~39は縄線文、40~50は短縄文、51~54は斜位・弧状の側縁瓦痕文をもつ。55~67は胴部である。

3は現存器高17.9cm、口径19.2cmを計る深鉢形土器である。外傾する口唇は縄により斜めに刻まれている。器面には指の幅程の長さ、幅3mmの短縄文が密に施されている。凹凸のある内面は横にナデ調整されている。器面・内面とも暗褐色を呈する。胎土には少量の白色鉱物を含む。

35~39は縄線文をもつ口縁である。同一原体により横位、縦位に縄の側縁瓦痕文が施される。35は口縁から胴部に幅5cmの縄線文と縦位の側縁瓦痕文が交互に施され、口唇には斜位に施される。36~38は口縁に縄線文をもつ。口唇には横位(36)、斜位(37・38)の縄の側縁瓦痕文がある。39は口縁に縦位に施されたもの。口唇には爪による刺突が施されている。縄線文の幅は36・37が2~3mm、38・39は4~5mmである。40~50は短縄文をもつ口縁である。40~43は施文の間隔が約1cmである。いずれも口唇に縄の瓦痕がみられる。41・43は内面にも短縄文が施されている。42には横位の縄の側縁瓦痕がある。44~50は施文の間隔が2~5mmである。45・47を除き口唇に縄の瓦痕がみられる。44の内面にはRLの縄文がある。50は貼付帯をもち、短縄文と羽状縄文が組み合わせて施されている。短縄文の幅は41・46・48が3mm、40・42・43・44・45・49・50が4mmである。51・53・54は斜位、52は斜



図VI-1-44 包含層出土の土器(7)

位・弧状の側縁圧痕文が施されている口縁である。51は短縄文と横走るLRの縄文が施される。53は弧状の側縁圧痕文の中に短縄文が充填されている。

54・55は短縄文と貼付帯が組み合わせて施文されている。54は貼付帯が指頭により抓まれている。55aは貼付帯が縄で刻まれている。56は短縄文、貼付帯、LR斜行縄文の組み合わせである。

57・58は横位・縦位の側縁圧痕文、59・60は短縄文が施される。61は横位・縦位の側縁圧痕文と短縄文、62は短縄文とLRの縄文の組み合わせである。63は斜位の側縁圧痕文を組み合わせて出来た空間に、同様の側縁圧痕文を充填している。65は二種類の原体による短縄文の組み合わせである。胴上部に幅3mmの短縄文が斜位、右上がり列をなし、胴下部は幅2mmの短縄文が縦位、横縞する列をなす。66は短縄文とRLとLRの羽状縄文、67は短縄文と横走気味のRL縄文の組み合わせである。68は短縄文と斜位の短縄文、69は短縄文と幅3mmのLR縄文を組み合わせて施文した口縁である。68は口唇外縁が刻まれる。70a・bは同一個体で、丸みを帯びた口唇を縄で刻んでいる。器面には縄端刺突と幅3mmのLRの縄文、張り出した底部には短縄文が施されている。

c類 結条体圧痕文をもつもの(71a~81)

いずれも幅5~7mm、角軸の、疎らな結条体圧痕文をもつ。71は文様構成の分かるもの、72~75は口縁、76~80は胴部、81は胴~底部である。

横位の結条体圧痕文をもつもの(71・78)、縦位の結条体圧痕文をもつもの(72)、横位・縦位の結条体圧痕文をもつもの(73・74・79)、斜位の結条体圧痕文をもつもの(75)、貼付帯と結条体圧痕文をもつもの(76・77)、短縄文と結条体圧痕文をもつもの(80・81)がある。

71aは張り出した口唇が縄により斜位に刻まれる。器面には縄線文、結条体圧痕文、縦位の縄の側縁圧痕文が施される。71bは張り出した底部に短縄文、その上には斜位の側縁圧痕文が施されている。75は口唇が縄により斜めに刻まれる。内面には縄文が認められる。76・77は貼付帯をもつ。76a・bは同一個体である。76aは断面三角形の貼付帯をもち、短縄文、横位の結条体圧痕文、縦位の側縁圧痕文、76bには斜位の側縁圧痕文が施されている。81は横位の結条体圧痕文と短縄文が交互に施され、張り出した底部には短縄文が施される。

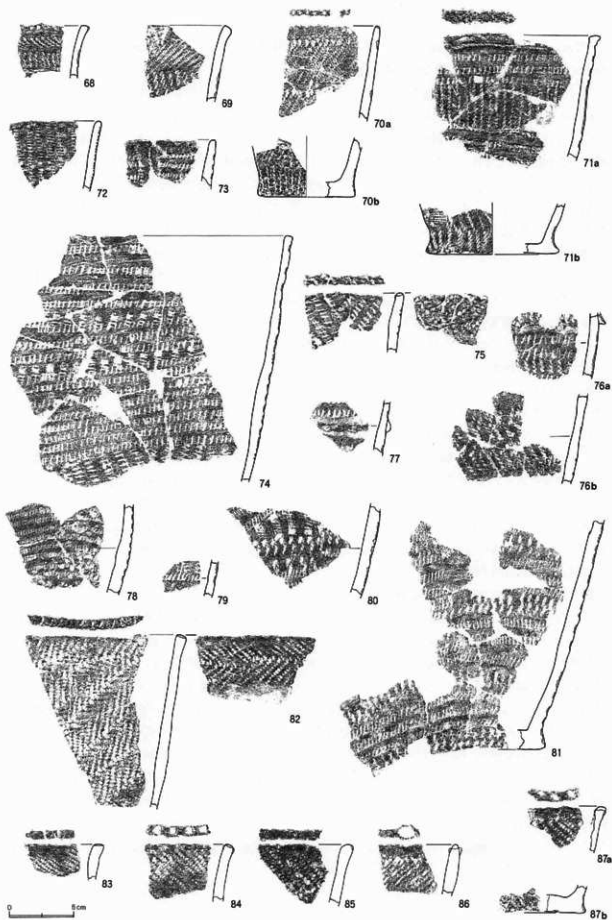
d類 縄文を主要な文様とするもの(4・5、82~96)

4は器高11.8cm、推定口径12.3cm、底径6.9cmを計る小型の深鉢形土器である。器面には条の幅約5mmのRLとLRの縄文が羽状に施されている。底部はわずかに張り出す。凹凸のある内面は横にナデ調整され、部分的に指頭痕が残る。器面は暗茶褐色、内面は暗褐色を呈す。胎土には微量の白色鉱物を含む。5は残存器高22.7cm、推定口径28.1cmを計る深鉢形土器である。わずかに外傾する口唇は縄により斜めに刻まれ、器面にはRL斜行縄文が施されている。輪痕の残る凹凸のある内面は横ナデにより調整されている。器面は褐色、内面は暗褐色を呈す。胎土には微量の黒色鉱物を含む。

82~96は口縁に縄文が施されたものである。82は器面にRL+LR結束羽状縄文が斜位に、内面には横位に施される。口唇は爪により刻まれている。器面・内面とも黒褐色を呈す。胎土には微量の黒色鉱物と小礫、少量の砂粒を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。83~85・87・96はRL、86・89~94はLR、95はRLとLRの縄文が施されている。83~93は口唇もしくは口唇外縁に施文がある。83~85は爪による刻み、86・87aは指頭による刺突、88は縄の斜位の圧痕、89は縄の斜位の刻み、90~93は縄の横位の圧痕が施されている。87a・bは同一個体である。

e類 無文のもの(97~100)

97~100は口縁である。いずれも器面・内面とも横にナデ調整されている。97は器面・内面とも黒褐色を呈し、胎土には微量の白色鉱物と少量の砂粒を含む。98は口縁が外反し口唇が張り出す。100の口



図VI-1-45 包含層出土の土器(8)

縁は薄く外反する。98の器面・内面は橙褐色、99は明黄褐色、100は褐色を呈する。いずれも胎土には微量の白色鉱物を含む。

f類 底部(101a~119)

101a・bは同一個体である。施文は短縄文とLRの斜行縄文である。張り出した底部には短縄文が施される。102はLRとRLの縄文が施され、底部直上には短縄文が施されている。103~119はいずれも底部が張り出している。張り出し部分に短縄文が施されるもの(103~115)、刺突文が施されるもの(116)、縦位の絡条体圧痕文が施されるもの(117・118)、無文のもの(119)がある。103・105・108・109は縄文と短縄文の組み合わせ、115は横位の絡条体圧痕文と短縄文の組み合わせである。116は刺突文と縄文の組み合わせである。104・106の底面には縄文が認められる。109の底面には製作時に下に敷いた葉の痕跡らしきものが残っている。

g類 ミニチュア土器(6~9)

いずれも深鉢形のものである。複筋の縄文と短縄文をもつもの(6・7)、短縄文をもつもの(9)、無文のもの(8)がある。

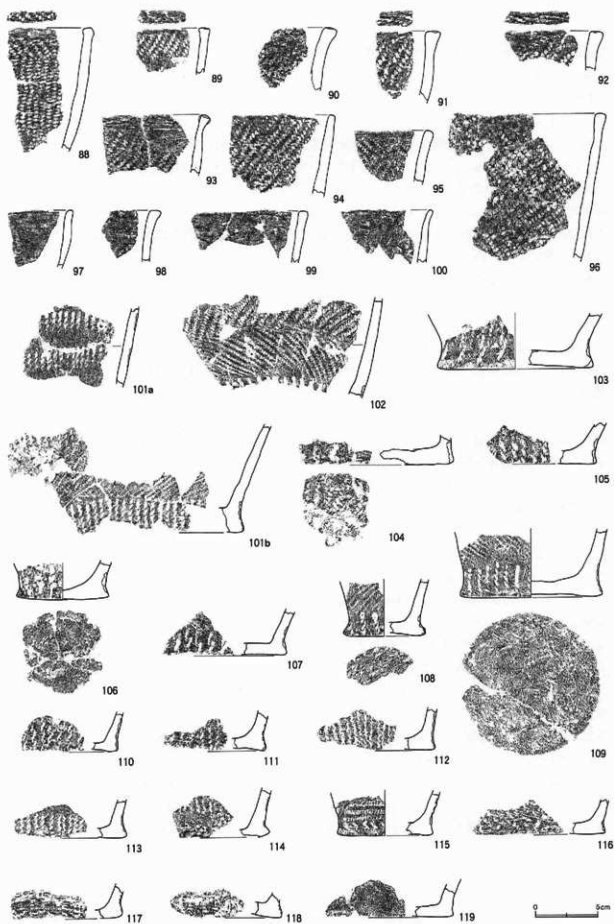
6は残存器高7.9cm、推定口径7.5cm、7は残存器高8.7cm、推定口径9.2cmを計る。いずれも口唇は縄により斜めに刻まれ、器面にRLRの斜行縄文、底部には短縄文が施されている。胎土には微量の黒色鉱物を含む。8は器高4.1cm、推定口径4.7cm、底径2.7cmを計る。底部は張り出す。口唇外縁に燃糸による刻みが認められる。器面・内面とも暗黄褐色を呈す。胎土には微量の黒色鉱物を含む。9は器高9.3cm、推定長軸口径8.8cm、短軸口径5.9cm、推定長軸底径4.7cm、推定短軸底径2.4cmを計る。上面観・底面観楕円形の土器である。底部は張り出す。器面には幅2mm、長さ8~9mmの短縄文が8列施されている。器面・内面とも暗黄褐色を呈す。胎土には微量の黒色鉱物を含む。

I群b-2類(10、120~150)

I群b-2類は3,931点出土しており、その75%はV層下位から出土した。そのうちの65%にあたる1,916点がT3、T12、W8、X7~9グリッドで出土した。また、T3グリッドのVI層で180点出土した。これらのグリッドからは7~34点/1m²の出土となっている。10、120~150はコックロ式に相当するものである。細かい縄文地に貼付帯、組紐圧痕文、絡条体圧痕文などが組み合わされて施文される。輪積痕の凹凸がある内面は横ナデに調整され平滑のものが多い。胎土は緻密で少量の白色鉱物や小礫を含むものが多い。焼成は概して良好で堅く焼き締まる。

a類 貼付帯をもつもの(10、120~132)

10、120~126は幅1~3mmの縄文地に、断面三角形の横環する幅5mm内外の貼付帯をもつものである。10は復元土器、120a・b~123a・bはそれぞれ口縁を含む同一個体、124は口縁、125・126は胴部である。10は残存器高20.3cm、底径9.0cmを計る深鉢形土器である。底部は張り出す。器面に条の幅約1mmのLR斜行縄文を施し、貼付帯を横環させている。指頭によりつまんで調整した貼付帯はRLRの縄により刻まれている。内面は横ナデにより調整されている。器面は暗黄褐色、内面は暗褐色を呈す。胎土には少量の砂粒、微量の小礫を含む。120・121は器面にRL+LR結束羽状縄文、122・123・125はLR+RL結束羽状縄文が施されている。124・126にはLRとRLの縄文が認められる。条の幅は120が約3mm、121~123・125は2~3mm、124は1mm、126は2mmである。120・124は口唇が外傾し、121~123は内傾する。120~123は縄、124は爪により刻まれている。口縁に巡らされた断面三角形の貼付帯は、120が指頭による掴みで刻まれ、121~126は縄により刻まれている。内面調整は横ナデで、120・121・125・126は内面には横ナデによる調整痕が目立つ。いずれも、胎土には少量の白色鉱物と微量の小礫、砂粒を含み、焼成は良好で堅く焼き締まる。



図VI-1-46 包含層出土の土器(9)

127~132は幅1~2mmの細目の縄文地に、幅2~3mmの細めの貼付文をもつものである。127a・bは口縁を含む同一個体、128~132は胴部である。127は口縁に沿った横位の貼付帯と縦位・弧状の貼付文、128・132には弧状、130には横位、129・131には横位・縦位の貼付文が施されている。127・130・132の貼付帯は細い丸棒状工具、129・131は縄により刻まれている。

b類 組紐圧痕文をもつもの(133・134)

133は縄端刺突文、ボタン状貼付と、134は貼付帯と組み合わせられたものである。133の口唇は縄により斜位に刻まれている。134は口縁に頂部をもち、貼付帯は丸棒状工具により刻まれている。

c類 結条体圧痕文をもつもの(135~141)

135~141はいずれも幅2~5mm、丸軸の、密な絡縄体圧痕文をもつ。135は短縄文と貼付文・刺突文、136は貼付帯、137・140は短縄文と貼付帯、138~141は貼付帯と刺突文が組み合わせて施文されている。136~139の貼付帯、138の口唇は縄により刻まれている。

d類 縄文を主要な文様とするもの(142~150)

142~150は幅1~2mmの細目の縄文を主要な文様とするものである。142は器面にLRとRLの羽状縄文、143・147はLRの縄文、144はLR斜行縄文、145・146はLRとRLの縄文、148・149はRL+LR結束羽状縄文が施されている。142・143は口縁に短縄文をもつ。143は口唇外縁が、144~147は口縁が縄により刻まれる。149a・bは胴部~底部、150は底部である。いずれも底部が張り出す。149は器面にRL+LRの結束羽状縄文を施し、幅3~4mmの貼付帯を巡らせている。貼付帯の間の地文はなで消され、貼付帯は縄により刻まれている。150は器面にRLの縄文が施されている。

I群b-3類(151~175)

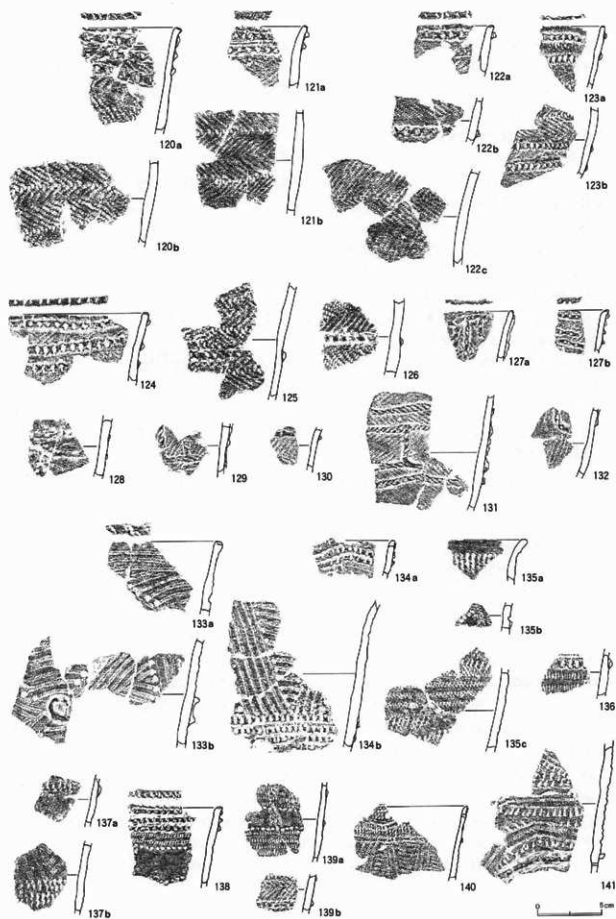
I群b-3類は658点出土しており、その65%がV層下位から出土した。そのうちの48%にあたる206点がT11・12、U~W13グリッドから出土している。また、T8グリッドのVI層では36点が出土した。これらのグリッドからは1~2点/1m²の出土となっている。151~175は中茶路式に相当するものである。細い貼付帯と短縄文、細かい縄文、綾絡文などが組み合わせられて施文される。

151・152は文様構成の分かるもの、153~162は口縁である。151~155は器面に横環する貼付帯を巡らせ、それを縦位の貼付で繋いで区画し、その間に縄の側縁圧痕文、短縄文、縄端刺突文、縄文などが充填されている。151は貼付を繋いだ区画の中に縄の側縁圧痕文を充填している。152は口縁の横環する貼付帯の間、縦位の貼付により区画された間には一区画おきに短縄文が充填されている。胴部の貼付帯の間には、幅1mm以下の細いRLの縄文が施されている。153には縄端刺突文、154には縄文、155には縄端刺突文と縄文が充填されている。156は貼付帯と縄の側縁、157は貼付帯と幅1.5mmのRL縄文、158は貼付帯と幅1~2mmのRL縄文、159は微隆起線と横走する撚糸の圧痕、160は貼付帯と2本単位の縄側縁圧痕の組み合わせである。161は細い筒状工具による刺突文と短縄文、162には綾絡文が施されている。いずれも口唇は尖り気味である。

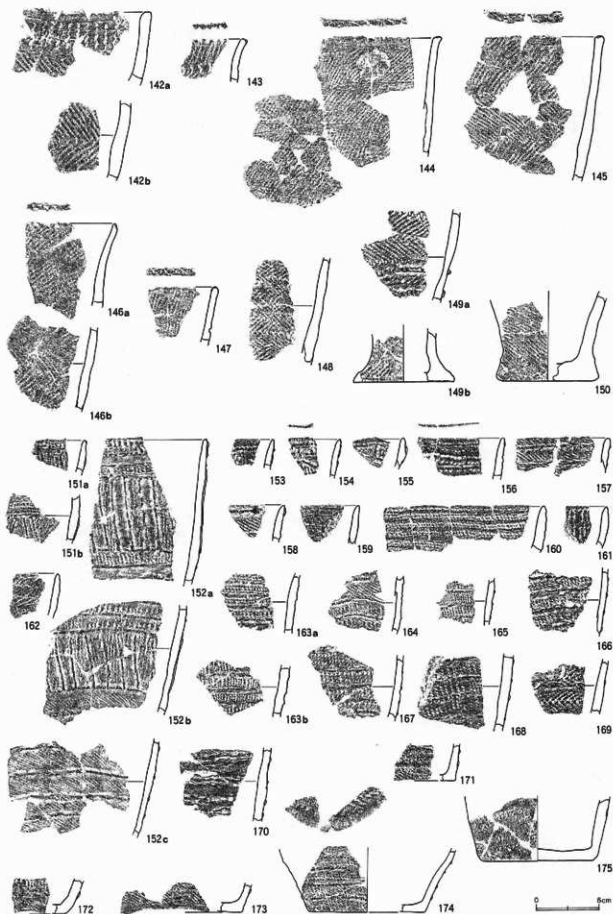
163~170は胴部である。163~168は貼付帯の間に短縄文が施される。163bには横環する貼付帯と縦位の貼付があり、それらの間に短縄文が充填されている。169は貼付帯に重ねて羽状縄文が施されている。170には貼付帯の下に貼付を押さえた時の爪の圧痕がみられる。貼付帯の間には幅1mmのRLの縄文が施されている部分がある。171~175は底部である。いずれも底部は開いている。171は貼付帯の間に幅1mm以下のRLの縄文、172・174は貼付帯の間に短縄文、173は貼付帯に重ねて幅1mmのRLの縄文が施されている。175は無文地の器面に縄の圧痕が認められる。

I群b-4類(176~186)

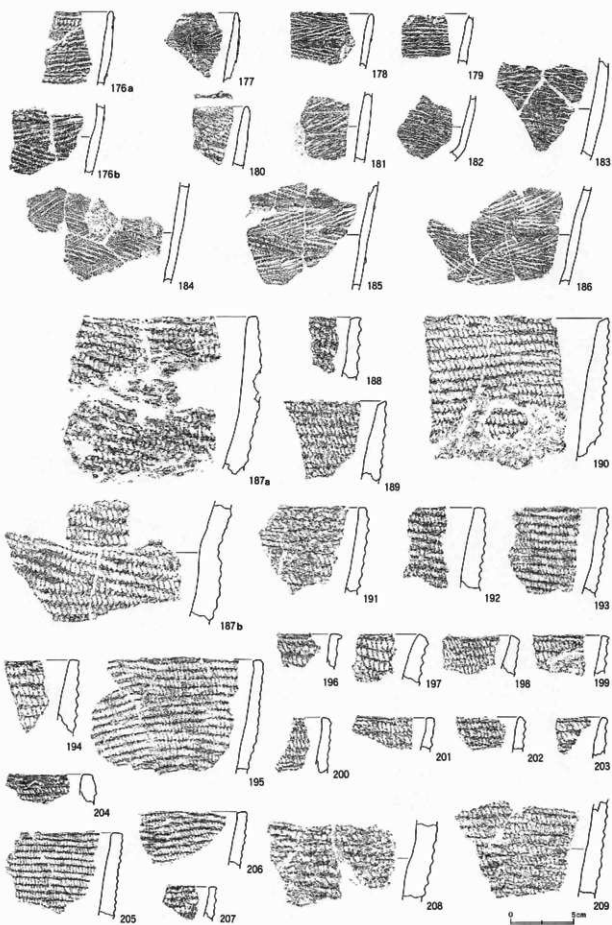
I群b-4類は1,116点出土しており、その79%がV層下位で出土した。そのうちの51%にあたる567



図VI-1-47 包含層出土の土器(0)



図VI-1-48 包含層出土の土器(II)



図VI-1-49 包含層出土の土器(12)

点がR・S8、W12グリッドで出土した。これらのグリッドからは4~14点/1m²の出土となっている。176~186は東銅路Ⅳ式に相当するものである。176a・bは文様構成の分かるもの、177~180は口縁、181~186は胴部である。器面には幅1~2mmの自縄自巻の原体による羽状縄文や横走する縄文が施されている。176は口唇が尖り気味で微隆起線と羽状縄文が組み合わされている。177には横位の貼付帯と縦位の貼付がある。179は口唇が欠落しており、器面には横走する縄文が施されている。181は器面に幅1mm以下の横位の沈線と、縄文が認められる。182・183には波状の横走気味の縄文が施されている。185は貼付帯に重ねて羽状縄文が施されている。

(2) 縄文時代前期の土器

Ⅱ群a-1類(11、187~217)

Ⅱ群a-1類は2,340点出土しており、その81%がV層下位で出土した。そのうちの39%にあたる737点がT12、U・V13、A025グリッドで出土した。これらのグリッドからは5~11点/1m²の出土となっている。11、187~217は縄文式に相当する。いずれも器面には多条RLの横走気味の縄文が施されている。ほとんどが縄文を施した後、節をナダ調整している。胎土には繊維が目立つ。

11は残存器高7.8cm、推定口径13.6cmを計る小型の深鉢形土器である。口唇は外傾する。器面には横走気味のRLの縄文が施されている。条の幅は約1cmである。内面は横にナダ調整されている。器面・内面とも暗褐色を呈する。187a・bは同一個体の口縁と胴部である。口唇は水平で胴部には「く」の字形の屈曲がある。器面には幅8~10mmのRLの縄文が施されている。188~207は口縁である。口唇は188~190・193・195・206が内傾、191・192・194・201・204・205・207は水平、196~200・202・203は外傾する。条の幅は、188~191が10~12mm、192~203が7~8mm、204~207が4~5mmである。208~216は胴部である。条の幅は、208~213が7~8mm、214~216が5~6mmである。217は丸底の底部である。

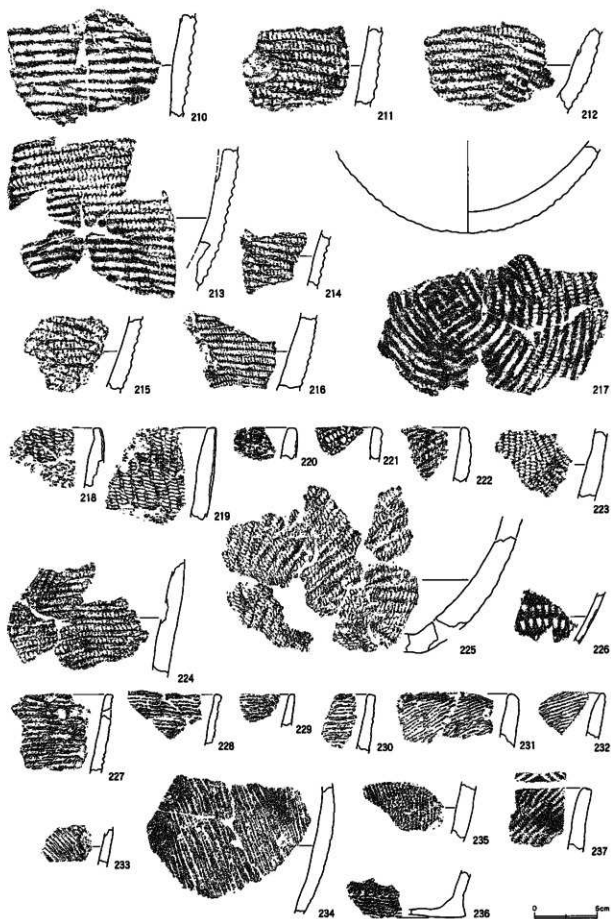
Ⅱ群a-2類(218~226)

Ⅱ群a-2は311点出土しており、その78%がV層下位で出土した。そのうちの47%にあたる115点がV12・14グリッドで出土した。これらのグリッドからは2点/1m²の出土となっている。218~225は静内中野式に相当する。

218~222は口縁である。218・219は器面に縦走気味のLR斜行縄文、220・221はLR斜行縄文、222はRL斜行縄文が施されている。条の幅は218・219が7~8mm、220~222が5~6mmである。223・224は胴部である。223にはRLの斜行縄文、224には横走気味のRLの縄文が施されている。条の幅は4~5mmである。225は丸底の底部である。器面には条の幅5~6mmのLR斜行縄文が施されている。いずれも胎土に繊維を含む。226はU16bのVI層から出土した底部付近の胴部である。器面には竹管状工具による下方向からの拗り上げるような刺突が巡らされている。内面調整は横ナダ、器面は暗褐色、内面は黒褐色を呈す。胎土は緻密で、微量の白色鉱物と砂粒を含む。焼成は良好である。

Ⅱ群b類(227~236)

Ⅱ群b類は166点出土している。その70%がV層下位で出土した。そのうちの49%にあたる57点がT13、U15・16、V・W13、Z27グリッドで出土した。また、V13グリッドのV層中位からは14点出土した。これらのグリッドからは0.3~0.5点/1m²の出土となっている。227~236は円筒土器下層式に相当するものである。いずれも撚糸文が施されており、胎土には繊維を含む。227~232は口縁である。口唇は227~230が水平、231は外傾する。232は薄く尖り気味である。器面に施された撚糸文は、227~230が横走、231・232は右上がりである。233~235は胴部である。いずれも右下がりの撚糸文が施されている。234は内面が平滑で、器面は暗褐色、内面は暗灰黄褐色を呈す。胎土には微量の黒色鉱物・白色



図VI-1-50 包含層出土の土器(3)

鉱物、少量の小礫・繊維を含む。235は胎土に白色火山灰、小礫、繊維を含む。236は底部である。底部は張り出し、器面に横走する燃糸文が施されている。内面には指頭痕がある。237は植苗式に相当するものである。口縁はわずかに外反し、外傾口唇は棒状工具により刻まれている。器面にはLRの斜行縄文が施されている。ナデ調整された内面には指頭痕が残る。色調は器面・内面とも明黄褐色を呈す。胎土には繊維と微量の白色火山灰を含む。焼成は良好である。

(3) 縄文時代中期の土器

Ⅲ群 a 類(244)

Ⅲ群 a 類は18点出土している。その78%がV層中位で出土した。その79%にあたる11点がY19グリッドのV層中位で出土した。0.6点/1m²の出土となっている。

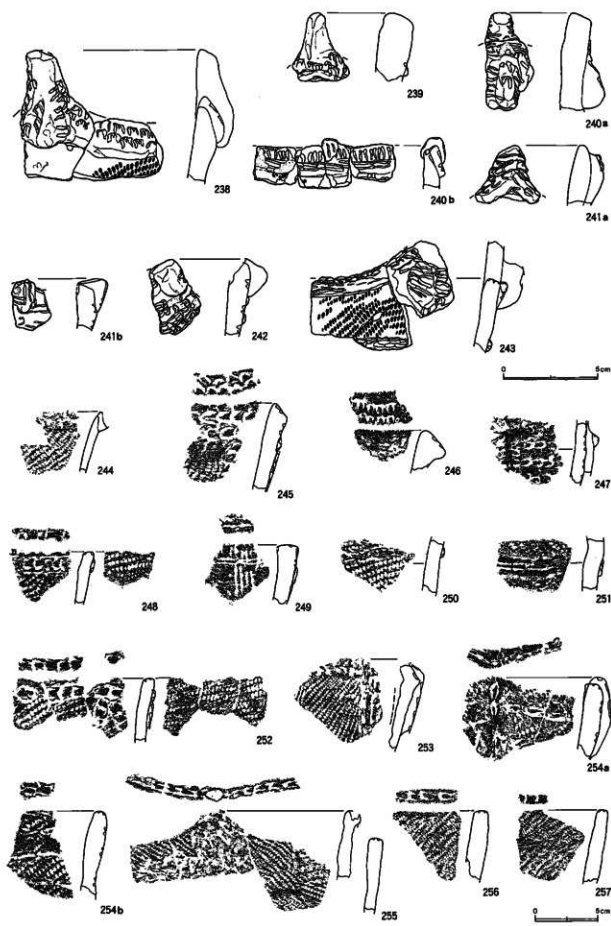
244は円筒土器上層式に相当するものである。断面形三角形肥厚させた口縁は剥落している。器面にはLRの縄文が施されている。内面は平滑である。色調は器面・内面とも暗灰褐色を呈す。胎土には微量の白色火山灰を含む。焼成は良好である。

Ⅲ群 b-1 類(238~243、245~251)

Ⅲ群 b-1 類は802点出土している。その31%がV層中位で、58%がV層下位で出土した。V層中位から出土したうちの69%にあたる168点がY17・18グリッドで出土した。また、V層下位から出土したうちの54%にあたる254点がY18グリッドで出土した。これらのグリッドからは2~10点/1m²の出土となっている。238~243、245~251は天神山式に相当するものである。いずれも半截竹管状工具による施文をもつ。

238~243は口縁突起である。238・239は垂直断面形三角形に肥厚させた口縁上に、水平断面形三角形の柱状突起をもつ。238は柱状突起基部にさらに水平断面三角形の小突起を付けている。この小突起は頂部が剥落しその跡が磨耗して横断面形台形を呈している。口縁突起頂部は右に傾斜する。口縁および口縁突起側面には正面方向からの突引文が2列施されている。突起基部の小突起側面にも同様の突引文が施されている。内面は横ナデにより調整されている。239は突起頂部が丸みを帯び、側面観鳥帽子形を呈する。口縁には正面方向からの突引文が2列施されており、その下の突引列は突起基部に及んでいる。240a・bは同一個体である。垂直断面形三角形に肥厚させた口縁上に、水平断面形五角形の柱状突起と小突起をもつ。柱状突起基部には水平断面三角形の小突起を付けている。これらには、突引文と刺突文が施されている。241a・bは同一個体である。241は口縁突起に粘土紐を2本貼り付け、粘土紐と口縁に右方向からの突引文を施している。口縁には垂直断面三角形の小突起をつけ、小突起と口縁に突引文と沈線文を施している。242は突起頂部が「V」字型に凹む、山形に近い形状の口縁突起と思われる。突起側面には突引文がみられる。突起基部から口縁には左下がりの粘土紐が付けられ、粘土紐には突引文、その両側には刺突文が施される。243は肥厚した口縁上の突起が欠落している。地文にLR斜行縄文を施し、口縁突起基部に水平断面形三角形の小突起を付けている。小突起より下には貼付帯を巡らせている。口唇には右方向と正面から、小突起側面には右方向と左方向から、小突起下には下方向から、貼付帯には右方向からの突引文が施されている。内面は平滑である。色調は238・239が器面・内面とも黄褐色、240・242は暗褐色、241は器面が明黄褐色、内面は暗黄褐色、243は器面が暗黄褐色、内面は褐色を呈す。胎土には微量の小礫と、少量の砂粒・白色火山灰を含む。

245~251は口縁および貼付帯をもつ胴部である。口唇、肥厚した口縁、貼付帯に突引文・沈線文が施されている。245・248・250には地文のLRの縄文、251にはRLの縄文が認められる。248は内面にも縄文をもつ。245~247は胎土に微量の砂粒、248・249・251には微量の小礫と、少量の砂粒・白色火山灰、250には微量の小礫・白色火山灰と少量の砂粒を含む。



図VI-1-51 包含層出土の土器(4)

Ⅲ群b-2類(12・13、252~236)

Ⅲ群b-2類は1,011点出土している。その44%はV層中位で、47%はV層下位で出土した。V層中位から出土したうちの52%にあたる229点がV13・17、W16・17、Y20グリッドで出土した。また、V層下位から出土したうちの45%にあたる215点がV17、W14・17グリッドで出土した。これらのグリッドからは1~4点/1m²の出土となっている。

12・13、252~291は柏木川式に相当する。12・13復元土器、253~276は口縁、277~279は文様帯部分、279は突起部分、280~288は胴部、289~290は底部である。半載竹管・竹管・棒状工具による施文が施され、胎土に砂粒を含む。口縁・文様帯は施文等の特徴から次のa~d類に分けた。

a類 半載竹管状工具の凹面による施文をもつもの(12・252~262・276)

12は残存器高21.3cm、口径15.8cmを計る深鉢形土器である。口縁は外反し、底部は窄まる。外傾する口唇は半載竹管による刺突が施される。刺突の方向は部分により左右異なる。器面にはLR斜行縄文が施されている。内面は横にナデ調整され部分的に指頭痕が残る。器面は暗褐色、内面は黒褐色を呈す。少量の砂粒と、微量の小礫を含む。

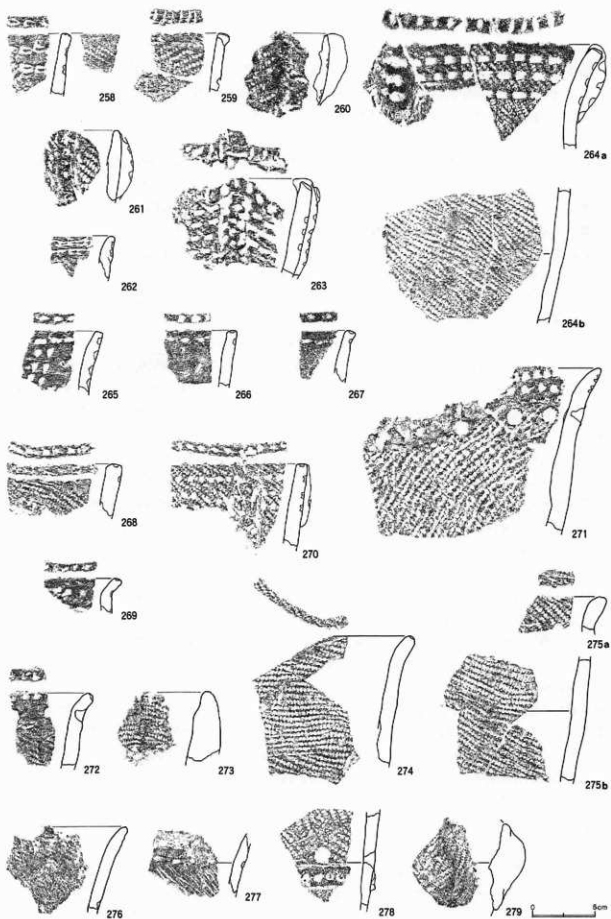
252・253は地文にLR斜行縄文を施した器面に貼付帯をもち、貼付帯に半載竹管の凹面による突引文が施される。252の口唇には半載竹管の凹面による突引文、253の口縁には半載竹管の凸面による突引文が施される。252は内面に縄文をもつ。254・255は口縁に山形の小突起をもつ。254は小突起から垂下する耳状の貼付をもち、地文にLR斜行縄文を施した器面には右方向から、耳状の貼付には下方向からの突引文が施される。口唇には左方向からの突引文、山形の小突起には刺突文をもつ。255は山形の小突起から口縁の器面が剥落しており、ここに小突起から垂下する耳状の貼付があったと思われる。口唇と小突起側面には右側には右方向、左側には左方向からの突引文が施されている。小突起頂部には半載竹管を突き立てて軸を回転させた刺突文がある。256・257は口縁には地文のLR斜行縄文が施され、口唇には256は右方向からの突引文、257は左方向からの浅い角度の刺突文をもつ。口縁の形状から、254と同様に口縁に山形の小突起をもち、小突起から垂下する耳状の貼付をもつものと推定される。258は口縁・口唇に右からの突引文、259は刻みが施されている。258は内面に縄文をもつ。260・261は口縁小突起から垂下する耳状貼付をもつ。260は器面に、261は耳状貼付に突引文が施されている。262は口縁に2列の突引文をもつ。

b類 半載竹管状工具の凸面もしくは竹管状工具による施文をもつもの(263~270・277・278)

263は口縁に山形の小突起をもち、ここから垂下する貼付帯と口縁に沿った貼付帯をもつ。突起頂部は内側に張り出す。器面には突引文が施され、口唇は刻まれている。貼付帯は指頭により抓まれ、爪跡が残る。垂下する貼付帯の両側には刺突文が施されている。264a・bは同一個体である。地文にRL斜行縄文を施した器面には口縁から垂下する貼付帯をもつ。口唇と貼付帯は刻まれ、器面には突引文が3列巡らされる。内面は横にナデ調整される。色調は器面が黒褐色、内面が暗黄褐色を呈す。胎土には微量の白色火山灰と、砂粒を多く含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。265~269は口縁および口唇に浅い角度の刺突文もしくは突引文をもつ。270は口縁から垂下する貼付帯が剥落している。地文のRL斜行縄文は貼付帯を付けた跡に施されている。口唇と器面には刺突文が施されている。244は器面に捺糸文が認められる。278は貼付帯に刺突文をもち、補修孔がある。

c類 棒状工具による施文をもつもの(271・272)

271は地文にLR斜行縄文を施してから口縁部分をナデ調整して右方向から半載竹管状工具による刺突列を2列巡らせ、その直下に棒状工具による刺突文を巡らしている。内面調整は横ナデ、器面は黄褐色、内面は暗黄褐色を呈す。胎土には、黒色鉱物・砂粒を多く含み、ザラついた感触である。272



図VI-1-52 包含層出土の土器(15)

は口唇に半截竹管状工具による突引文、口縁に棒状工具による刺突文をもつ。

d類 地文の縄文のみのもの(13・273~275)

13は残存器高8.7cm、底径8.3cmを計る深鉢形土器の胴下部~底部である。底部はわずかに張り出す。器面および底面にはLR斜行縄文が施されている。内面は横にナデ調整されている。器面は暗褐色、内面は黒褐色を呈す。胎土には微量の黒色鉱物と砂粒を含む。273~275にはRL斜行縄文が施されている。273は口縁突起、274は緩やかな頂部をもつ口縁である。274・275は口唇にも縄文がみられる。275には補修孔がある。279は254a・260と同様の耳状突起である。LR斜行縄文が施されている。

280~288は胴部である。280・281は同一個体である。280~282にはLR斜行縄文、283~287にはRL斜行縄文が施されている。289~291は底部である。いずれも張り出しは大きくない。289は底面に細い2方向からの沈線により、平行四辺形の網目状を呈する。290は底面に擦痕が認められる。289・291は器面にLRの縄文、292にはRLの縄文が認められる。

(4) 縄文時代後・晩期の土器

IV群a類

292~294は余市式、295・296はタブコブ式に相当する。余市式に相当するものは40点出土している。その40%はV層中位で、40%はV層下位で出土した。V層中位から出土したうちの81%にあたる16点、V層下位から出土したうちの88%にあたる14点がZ23グリッドで出土した。このグリッドからは1点/1m²の出土となっている。タブコブ式に相当するものは479点出土している。その26%はV層中位で、61%はV層下位で出土した。V層中位から出土したうちの90%にあたる114点、V層下位から出土したうちの97%にあたる284点がX20グリッドで出土した。このグリッドからは16点/1m²の出土となっている。

292~294は厚さ3~5mmの貼付帯をもつ。貼付帯を境にLRとRLの羽状縄文が施されている。

295にはRL斜行縄文が施されている。胎土には砂粒・小礫を多く含み、割れ口はパイ地状に層をなす。296a・b・cは275点出土した同一個体のうちの9点である。幅広い隆帯をもち、器面にはLR斜行縄文が施されている。底面にも同様の縄文が認められる。色調は器面・内面とも明黄褐色を呈す。胎土には白黄色火山灰を含む。

V群c類(297)

V群c類は53点全てがI15グリッドのV層中位で出土している。2点/1m²の出土となっている。297は45点出土した同一個体中の2点である。器厚5mmで器面に幅2mmのRLの縄文が方向を変えて菱形に施されている。内面は平滑で、色調は器面・内面とも暗黄褐色を呈す。胎土には微量の黒色鉱物を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。

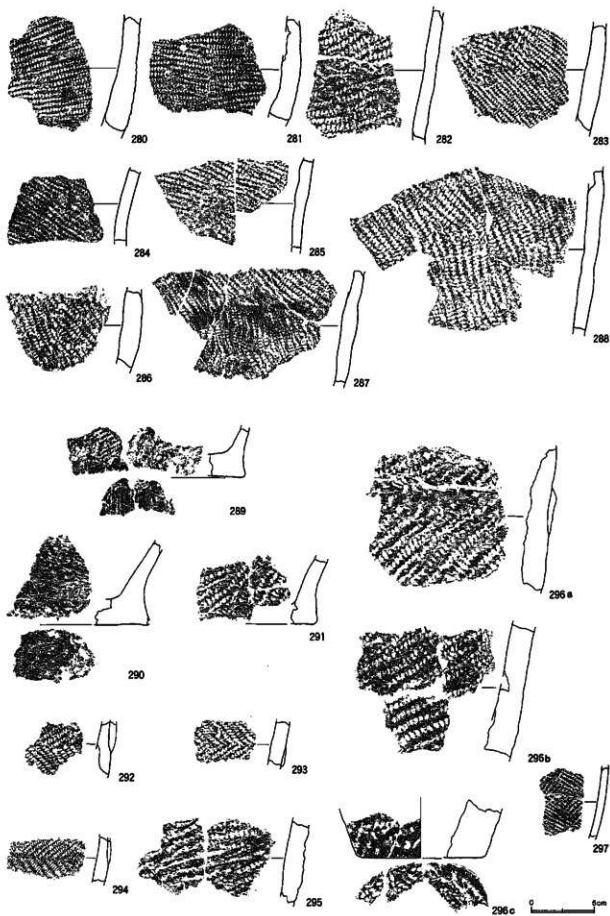
(5) 縄文時代の土器

VII群(14)

VII群は38点全てがJ13グリッドのIII層から出土している。1点/1m²の出土である。

14は推定器高7.1cm、推定口径13.4cm、底径6.1cmを計る、縄文時代中期後半~後期の高坏である。調査範囲の境界付近で出土した。体部と高台部は接合しなかった。次年度以降の調査によりさらに破片が出土する可能性があるため図上復元とした。口縁直下に段をもち、外内面ともヘラミガキ、脚部外面に2本の沈線が巡る。この近隣の高坏の出土例には、岩知志遺跡(渡辺・河野 1974)、二風谷遺跡(北埋調査 26)、カンカン2遺跡(森岡 1996)などがある。

(鎌田)



図VI-1-53 包含層出土の土器⑩

表VI-1-2 包含層掲載土器一覧(1)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
1	Ib-1	Y19c	18	V層下位	40	Y19c18V下, 43	83点中の40点			
2	Ib-1	X15d	11	V層下位	2	V16b5V中	W16c10V下	X14b2V下	X17b7V下	
		X17c	4	V層下位	1	X17c2V下	X17c3V中	X17c10V下	X17d5V下	
		X17c	6	V層下位	1	X17d7V下	X18a1V	X18b16V下, 2	X18b18V下	
		X17d	1	V層下位	1	X18b20V下, 3	Y17d5V下, 2	Y17d9V下	Y18a8V下	
		Y17b	5	V層下位	1	Y18a12V中, 4	Y18a17V下, 3	Y18a23V下, 11	Y18b17V中	
		Y17d	5	V層下位	3	Y18d20V下	Y19a18V下	Y19d4V中, 3	Y19d15V下	
		Y17d	11	V層下位	1	Z23b5V下, 2				
		Y17d	13	V層下位	1	84点中の34点				
		Y18a	8	V層下位	1					
		Y18a	12	V層中位	2					
		Y18a	15	V層下位	2					
		Y18a	17	V層下位	3					
		Y18a	23	V層下位	12					
		Y18b	31	V層中位	1					
		Y18c	18	V層下位	1					
Y19c	18	V層下位	1							
3	Ib-1	W13b	3	V層中位	2					
		W13d	6	V層下位	1	X14a4V下	X14b7V下	X14b10V下, 4	X14b12V下	
		W13d	8	V層下位	2	X14d4V中, 2	X15a10V下			
		W13d	13	V層下位	2	64点中の49点				
		W14a	6	V層下位	1					
		W14a	9	V層下位	1					
		W14b	3	V層下位	3					
		W14b	20	V層下位	1					
		X13c	1	V層下位	4					
		X13c	5	V層下位	2					
		X13d	5	V層下位	1					
		X14a	4	V層下位	1					
		X14a	7	V層下位	2					
		X14a	9	V層下位	1					
		X14a	14	V層下位	1					
		X14b	4	V層中位	6					
		X14b	7	V層下位	3					
X14b	10	V層下位	5							
X14b	12	V層下位	2							
X14b	18	V層下位	2							
X14c	6	V層下位	1							
X14d	4	V層中位	5							
4	Ib-1	W14b	4	V層下位	1	T12d23V下	T19a1V下	W11b1V下		
		W14c	5	V層下位	1	21点中の18点				
		W14c	11	V層下位	1					
		X14a	19	V層	1					
		X14a	18	V層下位	4					
X14a	20	V層	1							

表VI-1-3 包含層掲載土器一覽(2)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)			
4	Ib-1	X15a	14	V層下位	1				
		X15c	11	V層下位	1				
		X15c	14	V層下位	1				
		X15c	18	V層下位	1				
		X15c	19	V層下位	1				
		X15c	21	VI層	1				
		X15c	23	VI層	2				
		X15d	9	V層下位	1				
5	Ib-1	Y24c	3	V層中位	1	Y25b1 V下	Y25b3 V下	Y25b5 VI	Y25b7 VI
		Y25b	1	V層下位	2	Y25b18 VI	Y25c4 VI	Z24b9 V下	Z24c6 V中, 2
		Y25b	7	VI層	5	Z25a3 V下	Z25a6 V下, 29	Z25a8 V下風置	Z25a9 V下, 6
		Y25b	18	VI層	2	Z25a10 V下	Z25a14 VI, 7	Z25a15 VI, 5	Z25a17 VI, 8
		Y25b	19	VI層	1				
		Z25a	3	V層下位	4				
		Z25a	6	V層下位	22				
		Z25a	9	V層下位	4				
		Z25a	8	V層下位	1				
		Z25a	13	VI層	1				
		Z25a	14	VI層	6	130点中の63点			
		Z25a	15	V層下位	6				
		Z25a	17	VI層	5				
		Z25b	18	VI層	1				
Z25b	19	VI層	1						
Z25d	9	V層下位	1						
6	Ib-1	Y15c	3	V層下位	1	U13a4 V下	V12c8 V下	W13b5 V下	
		X13c	4	V層中位	1				
		X14c	16	V層下位	1	7点中の4点			
		X14d	14	V層下位	1				
7	Ib-1	V13b	6	V層下位	1				
		V13b	10	V層下位	2	9点中の9点			
		V13b	15	V層下位	1				
		W13a	5	V層下位	5				
8	Ib-1	W6c	4	V層下位	1	W12b1 V下			
		W8b	4	V層下位	1				
		X6d	3	VI層	1	5点中の4点			
		X7a	6	VI層	1				
9	Ib-1	T13d	29	V層下位	1	T12a1 V下	V12a1 V中	V12b1 V下	V12b5 V下
		W12a	2	V層下位	1	V12b6 V下	V12c4 V下	V12d8 V下	
		W12d	3	V層下位	2				
		W12d	6	V層下位	1	13点中の6点			
		W12d	8	V層下位	1				
10	Ib-2	S5c	4	V層中位	1	S5c3 V下	S6b7 VI, 2	S6b8 V下, 2	S6b9 V下, 3
		S6b	3	V層下位	1	S6b3 V下	S8b9 V下	T3c5 VI	T3d3 V下
		S6b	4	V層下位	2	T3d5 VI	T5a6 V下, 2	T5a13 VI	T5d1 V下
		S6b	7	VI層	1	T5d4 VI上, 2	T5d3 V下	T5d5 V下, 4	T5d6 VI

表VI-1-4 包含層掲載土器一覧(3)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)					
10	Ib-2		S6b	8	V層下位	5	T6a4VI上	T8c3V中	T8c6V下風撿	T11a4V下, 2	
			S6b	9	V層下位	13	88点中の58点				
			S6c	7	V層下位	4					
			T5d	1	V層下位	1					
			T5d	3	V層下位	9					
			T5d	4	VI層上位	11					
			T5d	6	VI層	8					
	T6a	9	VI層	2							
11	IIa-1		Y15a	9	V層下位	1	6点中6点				
			Y15d	8	V層下位	2					
			Y15d	9	V層下位	3					
12	IIIb-2		V13a	5	V層下位	1	V13a5V下	V13c10V中	V13d1V上	V13d8V下, 3	
			V13a	13	V層中位	1	V13d12V中, 2	V13d13V中	V13d18V中	V17c1V下	
			V13a	23	V層下位	1	W14d13V下	32点中の20点			
			V13c	4	V層下位	1					
			V13c	7	V層中位	1					
			V13d	4	V層中位	1					
			V13d	7	V層中位	1					
			V13d	8	V層下位	4					
			V13d	12	V層中位	1					
			V13d	18	V層中位	4					
			V13d	22	V層下位	1					
			V14c	10	V層中位	1					
	V14d	2	V層中位	2							
13	IIIb-2		W17a	10	V層中位	3	W17a10V中				
			W17a	26	V層下位	5	Y17d8V中	14点中の8点			
14	Ⅳ		I13c	1	III層	4	I13c1III, 3	I13c2III, 20			
			I13c	2	III層	10	37点中の14点				

表VI-1-5 包含層掲載土器一覽(4)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)							
15	Ib-1	Z27c	11	木根	1	Z27b6 V下	Z27c7 VI	Z27c8 VI	Z27c9 VI, 2				
						Z27c11木根	AO27d6 V下	AO27d8 VI	9点中の1点				
16	Ib-1	Y19d	19	VI層	1	1点中の1点							
17a	Ib-1	W18c	7	V層下位	2	W20d7 V下, 2	X20b15 V下	X20c8 V上, 2	X20c21 V下, 2				
17b		X20c	19	V層下位	1	X20c26 V下, 2	X20d11 V下	X20d22 V下	Y20d12 V上				
		X20c	21	V層下位	2	27点中の15点							
		X20c	26	V層下位	3								
17c		X15d	11	V層下位	1								
		X20c	18	V層下位	1								
		Y17a	5	V層下位	1								
17d		Y17a	9	V層下位	1								
		X22d	3	V層下位	1								
			Y22a	9	V層下位	2							
18a	Ib-1	W17d	9	V層下位	1	V16c14 V下	V17b11 V下, 2	V17c3 V下	V17d11 V下				
18b		W17d	10	V層下位	1	W17d9 V下, 3	W17d10 V下	W17d12 V下	W17d15 V下				
		W17d	12	V層下位	1	W17d16 V下, 2	W17d20 V下						
		18c	U13b	14	V層下位	1	25点中の11点						
W17d			10	V層下位	3								
W17d			12	V層下位	1								
W17d			16	V層下位	3								
19		Ib-1	V12c	11	V層下位	2	U13d2 V下	V12b3 V下	V13c15 V下	W12d9 VI			
			W14a	8	V層下位	6	W13b5 V下	W13d3 V下, 3	W14a6 V下, 2	W14a8 V下, 20			
			W14a	12	V層下位	1	W14a12 V下, 2	W14b17 V下	W14b20 V下	W14d1 V上			
						W14d7 V下	X14d12 V下	X15d11 V下					
						47点中の9点							
20	Ib-1	X17d	6	V層下位	1	X17a5 V下	2点中の1点						
21	Ib-1	Y19d	12	V層中位	2	Y19d4 V中	Y19d12 V中	4点中の2点					
22	Ib-1	V17b	9	V層下位	1	1点中の1点							
23	Ib-1	W14a	8	V層下位	2	W14a12 V下	W14a13 V下	4点中の2点					
24	Ib-1	X24b	23	VI層	3	3点中の3点							
25	Ib-1	X20b	5	V層	1	X20c15 V下, 2							
		X20b	16	V層下位	1	4点中の2点							
26a	Ib-1	V12c	11	V層下位	2	W12d3 V下	W12d6 V下	W12d8 V下	W13c4 V下				
		W14a	8	V層下位	1	W13d6 V下, 2	W14a6 V下, 2	W14a8 V下, 11	W14a12 V下, 3				
		W14a	6	V層下位	1	W14a13 V下, 3	W17d9 V下	W17d10 V下	W19c5 V中				
		W14a	8	V層下位	5	X14a14 V下	X21d11 V下	Y18a3 V中					
		26b	W14a	12	V層下位	2	43点中の12点						
			W14a	13	V層下位	1							
27	Ib-1	W19c	4	V層中位	1	W18d8 V下	X20b16 V下, 2	X20b23 V下	X20c14 V下				
		W20a	4	V層下位	1	X20c19 V下, 3	X20c21 V下, 3	X20c30 V下	X21b14 V中				
		X20b	16	V層下位	2	X21b39 V下	Y18c3 V中	Y20a16 VI					
		X20c	7	V層下位	1	24点中の8点							
		X20c	19	V層下位	2								
		Y20d	8	V層中位	1								

表VI-1-6 包含層掘載土器一覽(5)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
28	Ib-1	Z25a	14	VI層	1	Z25a13V, 2	Z25a14VI	Z25d11VI		
			Z25d	11	VI層	2	7点中の3点			
29	Ib-1	Y15a	8	V層下位	1	1点中の1点				
30	Ib-1	Y15b	2	V層下位	2	Y15b2V下	3点中の2点			
31	Ib-1	Z25a	13	VI層	1	1点中の1点				
32	Ib-1	X22b	8	V層下位	1	W22b3V下, 2	X22b8V下, 30	X22c10V下	X22d5V下, 2	
						Y19a16V下	Y24a8V下	A025b7VI	39点中の1点	
33	Ib-1	Y16b	2	V層下位	2	Y16c5V下, 7				
			Y16c	5	V層下位	3	12点中の5点			
34a	Ib-1	W17d	15	V層下位	1	U15d18V	U17b9V下	V17b11V下, 3	V17b14V下	
			16	V層下位	2	V17c3V下, 3	V17c7V下	V17c14V下	V17c31V下	
			W18a	10	V層下位	1	V17c32VI	V17c35V下	V17d7V下	V18b10V下
			V17c	7	V層下位	1	W17a27V下	W17d9V下, 14	W17d10V下, 7	W17d15V下, 2
34b	Ib-1	W17d	10	V層下位	1	W17d16V下, 11	W17d17V下	W17d18V下	W18a10V下	
			W17d	16	V層下位	1	W20d5V下			
			W18a	13	V層下位	1	63点中の8点			
35a		Z22c	1	V層下位	2					
35b	Ib-1	X22a	6	V層中位	2	W22b1VI	X20b1III	X20b7V下	X20b22V下	
			X22d	2	V層下位	1	X21a11V下風取	X21d17V下, 2	X22c7V下, 4	X22d1V中
			Y22d	3	V層下位	1	Y18a21V下	Y22a8V下	Z22b7V下	Z22c1V下, 8
			Z22c	1	V層下位	6	35点中の12点			
36	Ib-1	W16b	11	V層下位	2	2点中の2点				
37	Ib-1	X24b	20	V層下位風取	1	1点中の1点				
			U17b	3	V層下位	1	U17b3V下	U17b17V下, 2	W16c6V下	W16d13V下
			V17c	6	V層下位	1				
			W17a	35	V層下位	1	10点中の5点			
38	Ib-1	W17a	36	V層下位	2					
39	Ib-1	Y23a	17	VI層	1	X20b18V下	X20d25V下	3点中の1点		
40	Ib-1	Y23c	10	VI層	1	1点中の1点				
41	Ib-1	V17c	6	V層下位	2	2点中の2点				
42	Ib-1	W16c	10	V層下位	1	X13d7VI	X14a4V下, 2	X14a7V下	X14a9V下	
			W17a	36	V層下位	1	X14a15V下, 5	X14b20V下	Y15b3V下, 2	Y15c3V下, 2
			W17b	11	V層下位	1				
			W17d	10	V層下位	1	21点中の6点			
43	Ib-1	X14a	14	V層下位	2	V14d14V下	V14d16V下	V15a4V下	V16a5V中	
			Y16b	4	V層中位	1	13点中の4点			
			X14b	21	VI層	2				
44	Ib-1	Y16d	9	V層下位	1	X16d2V下	Y16c7V下	3点中の1点		
45	Ib-1	X15c	18	V層下位	1	1点中の1点				
46	Ib-1	W17b	11	V層下位	1	W17d16V下	2点中の1点			
47	Ib-1	Z24c	9	V層下位	2	Z24c8V下, 2	4点中の2点			
48	Ib-1	U17b	28	V層下位	2	U15c12VI	U15d13V下, 4	V16d18V下	8点中の2点	
49	Ib-1	W12b	11	V層下位	2	2点中の2点				

表VI-1-7 包含層掲載土器一覧(6)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
50	Ib-1		Y15d	3	V層下位	1	W14b3 V下	W14b8 V下	W16b9 V下	X15b8 V下, 4
			Y15d	7	V層下位	1	X15c3 V中	X15c8 V下, 3	X15c18 V下, 26	X15c20 V下, 3
			Y15d	10	V層下位	10	X15c22 VI	X15d10 V下, 2	X15d11 V下	X15d15 V下
						X15d16木根	X16b7 V下, 3	Y15a8 V下, 2	Y15d2 V中	
						Y15d3 V下	Y15d10 V下, 11	76点中の12点		
51	Ib-1		Y22d	10	VI層	2	X21c18 V下, 2	X21d28木根	X23c11 V下	X24b19 V下風塊
			Y23a	9	V層下位	3	Y20a15 V下, 4	Y22a9 V下	Y23a5 V中	Y23a6 V中, 2
			Y23a	19	VI層風塊	2	Y23a7 V中	Y23a14 V下, 5	Y23b7 V下	Y23d8 V下
						Y23d14 VI	Z23d10 V下	30点中の7点		
52	Ib-1		T13c	4	V層下位	1	T13a1 V中	T13b1 V下	T13b3 V中	T13b9 V下, 5
			U13b	14	V層下位	1	T13c4 V下, 3	T13c10 V下	T14b1 V中	U13a1 V中
			U13d	2	V層下位	3	U13a4 V下, 4	U13a8 V下	U13a9 V下	U13a10 V下, 3
			U13d	7	V層下位	1	U13b14 V下, 2	U13d2 V下, 24	U13d3 V下, 2	U13d7 V下, 10
			U13d	13	V層下位	1	U13d13 V下, 6	U14a2 V下	V14a20 V中	V14c16 V下
			U13d	16	V層下位	2	V14d12 V下	V15c8 V下	V17a14 V下	X13d6 V下
						X14a1 V下	X14a14 V下	X14a18 V下	77点中の10点	
53	Ib-1	V18c	3	V層下位	1	1点中の1点				
54	Ib-1	X20c	21	V層下位	1	1点中の1点				
55a	Ib-1		Y17b	5	V層下位	1	Y22c4 V下	BO26d1 V下		
			Y17c	10	V層下位	1	5点中の3点			
55b	Ib-1		Y18b	17	V層中位	1				
			V15c	11	V層下位	1	U17d2 VI	W17a30 V下	W17d2 V下	W18a9 V下
56	Ib-1						W19b5 V下	W20c8 V下, 3	W20d5 V下	Y18a20 V下
							Y19b11 V下	Y20d8 V中	13点中の1点	
57	Ib-1		X24b	20	V層下位風塊	1	U11a6 V下	X20b23 V下	X23c7 V中	X24b4 V下
							X24b6 V下, 3	X24b11 V下	X24b12 V下	X24b14 V下
							X24b15 V下	X24b20 V下風塊, 2	X24b21 V下風塊, 2	16点中の1点
58	Ib-1		Y16d	2	V層下位	1	W20d3 V下	X19c13 V下	X20b22 V下	X20d22 V下
							Y18a17 V下	Y18b17 V中	Y18c5 V中	Y18c10 V下
							Y23d3 V中	AO25a8 V下	11点中の1点	
59	Ib-1		W14a	6	V層下位	1	W14b3 V下	W14b11 V下	W14b23 V下	4点中の1点
			X21d	17	V層下位	3	U17b31	V17d30 V下	W20c7 V下, 2	X20d28 VI
60	Ib-1						X21c1 N	X21d1 V上	X21d5 V下, 3	X21d11 V下
							X21d17 V下	X21d20 V下, 2	X21d22 V下風塊	18点中の3点
61	Ib-1	X14a	14	V層下位	11	11点中の11点				
62	Ib-1	Y22a	8	V層下位	1	1点中の1点				
63	Ib-1		Y17d	11	V層下位	2	4点中の4点			
			Y18a	24	V層下位	2				
64	Ib-1		W17b	11	V層下位	1	U17b3 V下	V13b16 V下	V17c6 V下	W16c10 V下
			X17a	10	VI層	1	W16c13 V下	W17a36 V下	X17a5 V下, 2	X17a6 V下
							X17a10 VI	X17b8 V下	X17d8 V下	X17c16 V中
						Y16c8 V下	Y17b7 V下	17点中の2点		
65	Ib-1		Y19c	18	V層下位	11	V18b4 V下	W21b3 VI風塊	W21b9木根, 2	Y19c18 V下
							28点中の11点			

表VI-1-8 包含層掲載土器一覧(7)

図番	分類	調査区	遺物番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
66	Ib-1	W13c	7	V層下位	1	W17d10 V下	X15b8 V下, 2	X15c18 V下	Y15d10 V下	
		W13c	8	V層下位	1	8点中の3点				
		X14b	12	V層下位	1					
67	Ib-1	W16d	18	V層下位	3	W16d18 V下, 10				
		W17a	49	V層下位	1	14点中の4点				
68	Ib-1	X18b	16	V層下位	1	W18b2 V中	W18b3 V下	Y19a18 V下	4点中の1点	
69	Ib-1	Y15d	10	V層下位	1	X15c18 V下, 2	3点中の1点			
70a	Ib-1	Q6b	8	VI層	1	Q3c3 W, 4	Q4b2 W	Q4c1 V下	Q4c3 V中	
70b		Q6d	6	VI層	4	Q4c6 V下	Q5b6 V下, 9	Q6b8 W, 9	Q6b9 W	
		Q6c	11	VI層上位	1	Q5c10 V下	Q5c12 W	Q5d3 V中, 2	Q6b1 V下	
							Q6b3 W上	Q6b4 V下, 2	Q6b6 W, 3	Q6b7 W
							Q6b8 W, 7	Q6c8 W上	Q6c14 W, 3	Q6d2 W上
							Q6d6 W, 5	Q6d8 W	Q7a1 V下	R3c5 W
							R4d3 V下	R6d1 V下	S3c3 W	S4d2 W
							69点中の6点			
71a	Ib-1	Y23b	8	V層下位	6	X24b5 V下	X24b6 V下, 3	Y23b8 V下, 10	Y23b13 V下, 5	
71b		Y23c	10	VI層	2	Y23b14 W	Y23b15 W, 10	Y23c6 V下, 12	Y23c7 W, 5	
							Y23d14 W, 2	Y23c9 W	Y23c10 W, 6	Y24a5 V中
72	Ib-1	Z24d	4	V層下位	1	Y24a2 V上	Y24a7 V下	Z25d14 W	71点中の8点	
73	Ib-1	X14c	13	V層下位	1	V10a9 W	V14c14 V下	V14c21 W	W14b3 V下	
		X14d	17	V層下位	1	W14b18 V下	W15b5 V下	W16c14 V下	X13c5 V下	
							X13d1 V下	X14a9 V下	X14b16 V下	X14c13 V下
							X14c17 V下	X14d7 V下	X14d12 V下, 3	X14d15 V下
							X16a4 V下	X18b21 V下	22点中の2点	
74	Ib-1	Y23a	13	V層下位	9	V17c21 V下, 2	W17d7 V下	W17d15 V下	W18d7 V下	
		Y23d	7	V層下位	2	W18d7 V下	W20a5 V下	X18a5 V中, 2	X18b15 V下	
		Y23d	13	VI層	1	X18b19 V下	X21a18 木根, 3	X22c6 V下	X23b1 V中	
							X23c4 V中	X23c6 V中	X23c8 V下	X24b18 V下
							Y22a5 V下	Y22c1 V中	Y22c1 V中	Y23a13 V下, 7
							Y23a13 V下, 5	Y23a16 W	Y23a18 W, 2	Y23b1 V中
							Y23b6 V下	Y23b10 W	Y23c8 V下	Y23d13 W
75	Ib-1	V17a	22	V層下位	1	U17b3 V下	W14b22 V下	W14b24 W	W17a4 III	
		V17a	24	V層下位	1	W17a35 V下	W17a37 V下	W17a48 W風覆	W17b9 V下, 3	
		W17b	4	V層中位風覆	1	W17c2 V下	W17c6 V下	X14d12 V下	X14d15 V下	
							Y14d10 V下 18点中の3点			
76a	Ib-1	X8d	16	VI層	2	R8c2 V下	R8c5 V下, 2	R8d5 V下	S9a4 V下, 2	
R8c		2	V層下位	1	S9a5 V下	X8d9 V下	X8d15 W	X8d16 W, 3		
R9b		2	V層下位	6	21点中の9点					
77	Ib-1	W18d	12	V層下位	1	V14c2 V中	W17b3 V中	X19c5 V中	X21a9 V下風覆	
							X21a13 V下風覆	X21a15 W風覆, 2	X21a18 木根, 4	X21d17 V下, 2
							X22c12 V下	X23c6 V中	Y22a5 V下, 3	Y23d7 V下, 2
							Y23d16 W, 3	Y24b4 V下, 2	Z26a4 V下	27点中の1点

表VI-1-9 包含層掲載土器一覧(8)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
78	Ib-1	X18d	2	V層中位	1	W18c3V下	W19a1V下	X18c12V中	X18d1V下	
		X18d	5	V層中位	2	X18d2V中	Y19d18V下, 3	11点中の3点		
79	Ib-1	X21c	20	V層下位	1	X21b41V下	2点中の1点			
80	Ib-1	T7a	3	V層下位	2	S6a2VI	S6c7V下	T6a5V下	T6d7VI	
						6点中の2点				
81	Ib-1	Y18a	13	V層下位	1	Y17d4V下	Y17d12V下	Y18a13V下	Y18b21V下	
		Y18b	17	V層中位	1	Y18b34V中, 3	Y18d22V下	Y19d13V下	Y20a13V下	
		Y18b	20	V層下位	3	Y20a14V下, 2	Y20a17VI	Y20a18VI	Y20d15V下	
		Y18b	27	V層下位	2	25点中の10点				
		Y18b	34	V層中位	1					
		Y20a	1	IV層	1					
Y20a	14	V層下位	1							
82	Ib-1	Y16c	7	V層下位	1	Y17d2VI	W17d9V下	W17d10V下	Y16c4V下	
		Y16c	10	V層下位風損	1	Y16d2V下	Y16d4V中, 3	Y16d9V下, 3	Y16d10V下風損	
				14点中の2点						
83	Ib-1	Y17c	2	V層下位	1	1点中の1点				
84	Ib-1	Z24a	4	V層下位	1	Z24c4V中	Z24c8V下	Z25a15VI	4点中の1点	
85	Ib-1	A025b	4	V層下位	1	1点中の1点				
86	Ib-1	W20c	6	V層中位	1	1点中の1点				
87a	Ib-1	X23c	10	V層下位	1	X23c10V下, 36				
87b		X23c	10	V層下位	2	39点中の3点				
88	Ib-1	V16b	5	V層中位	3	3点中の3点				
89	Ib-1	Z22b	1	V層下位	1	1点中の1点				
90	Ib-1	W20b	5	V層下位	1	1点中の1点				
91	Ib-1	X7d	5	VI層	1	1点中の1点				
92	Ib-1	U15a	3	V層下位	1	2点中の2点				
		U15b	2	V層中位	1					
93	Ib-1	S4b	3	VI層	1	2点中の2点				
		S4b	4	VI層	1					
94	Ib-1	Z25a	15	VI層	1	Z24a6V下	Z25a13VI, 3	Z25a14VI	Z25a15VI, 9	
						Z25d11VI, 4 19点中の1点				
95	Ib-1	Y16a	5	V層下位	1	Y16a3V下	Y16a5V下, 3	5点中の1点		
96	Ib-1	A025b	6	V層下位	5	A025b6V下, 4 9点中の5点				
97	Ib-1	A025b	4	V層下位	1	1点中の1点				
98	Ib-1	Z24d	5	V層下位	1	1点中の1点				
		Z27c	6	V層下位	1	3点中の3点				
		A027c	2	VI層	1					
		A027d	7	V層下位	1					
100	Ib-1	X14b	15	V層下位	1	X14a3V中	X14a6V下	X14b15V下	X14c6V下, 2	
		X14b	19	V層下位	2	X14c11V下	9点中の3点			
101a	Ib-1	Y15b	2	V層下位	4	W15c8V下	X14a14V下	Y14c3V下	Y14c4V下, 5	
Y15a		7	V層下位	2	Y14d9V下, 2	Y14d10V下, 2	Y14d12V下	Y15b2V下, 40		
Y15b		2	V層下位	7	Y15a7V下, 4	Y16b4V中, 3	Y16b5V下	74点中の13点		
102	Ib-1	Y15a	7	V層下位	7	8点中の8点				

表VI-1-10 包含層掲載土器一覧(9)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)			
102	Ib-1	Y15a	8	V層下位	1				
103	Ib-1	X20d	16	V層下位	1	X20b25VI	2点中の1点		
104	Ib-1	W17d	19	V層下位	2	V16c16V下, 2	V16d7V中	5点中の2点	
105	Ib-1	X21b	39	V層下位	1	X21a6V下	2点中の1点		
106	Ib-1	X18c	11	V層中位	1	4点中の4点			
		X19a	1	V層下位	3				
107	Ib-1	W18a	11	V層下位	1	V17c29V下	W17d10V下	W17d16V下	X15b8V下
						5点中の1点			
108	Ib-1	W14b	11	V層下位	1	W14b3V下	W14c5V下	W14d7V下	4点中の1点
109	Ib-1	Y18b	24	V層下位	1	V16b5V中	W16c10V下	X14b2V下	X15d11V下, 2
		Y18b	28	V層下位	1	X17b7V下	X17c2V下	X17c3V中	X17c4V下
		Y18b	34	V層中位	1	X17c6V下	X17c10V下	X17d1V下	X17d5V下
						X17d7V下	X18a1W	X18b16V下, 2	X18b18V下
						X18b20V下, 3	Y17b5V下	Y17d5V下, 2	Y17d5V下, 3
						Y17d9V下	Y17d11V下	Y17d13V下	Y18a8V下
						Y18a8V下	Y18a12V中, 2	Y18a12V中, 4	Y18a15V下, 2
						Y18a17V下, 3	Y18a17V下, 3	Y18a23V下, 12	Y18a23V下, 11
						Y18b17V中	Y18b31V中	Y18c18V下	Y18d20V下
						Y19a18V下	Y19c18V下	Y19d4V中, 3	Y19d15V下
110	Ib-1	V13c	20	V層下位	1	V13c17V下	2点中の1点		
111	Ib-1	U14a	7	V層下位	1	T13c4V下	2点中の1点		
112	Ib-1	Z22c	2	V層下位	1	W22b4V下	X22b4V中	Z22b1V下, 5	Z22b4V下, 7
						Z22c2V下, 12	27点中の1点		
113	Ib-1	X6d	1	V層下位	1	U3d1V上	U3d2V中	3点中の1点	
114	Ib-1	X22d	4	V層下位	1	1点中の1点			
115	Ib-1	X20c	42	VI層	1	X20c21V下	X20c27V下, 2	X20c32V下, 2	X20c39V下
		X21b	41	V層下位	1	8点中の2点			
116	Ib-1	W15c	3	V層中位	1	1点中の1点			
117	Ib-1	Y24b	3	V層下位	1	Y23d10V下, 2	Y24b3V下, 2	5点中の1点	
118	Ib-1	X14d	15	V層下位	1	X14c13V下	3点中の1点		
119	Ib-1	U17b	21	VI層	1	2点中の2点			
		V17a	15	V層下位	1				
120a	Ib-2	X9b	3	V層下位	3	S11b5木椀	T6b3V下	U10d1V下	W8d3V下, 2
		X9b	4	V層下位	2	W9a7V中	W9c1V中	W9c6W	W10b4V下
W11c		4	V層下位	3	W10b5V下, 2	W10b7V下, 2	W10d2V下	W11c4V下, 9	
120b	Ib-2					W11b5W	X8c9V下	X8d9V下	X9a7V下, 4
						X9a8V下	X9a11V下, 7	X9a10V下, 4	X9b3V下, 4
						X9b4V下, 5	X9d2V下, 2	X9d3V下, 2	X9d4V下
						X10a5V下, 4	68点中の8点		
121a	Ib-2	W8d	9	V層下位	2	V10b1V下	W8d2V下	W8d3V下	W8d7V下, 2
W8d		12	V層下位	2	W8d12V下, 2	W9a3V下	W9a7V中, 2		
W9a		6	V層中位	2	16点中の6点				
122a	Ib-2	X9a	7	V層下位	1	T3d8VI	T3d10V下	U3d5V下	W9b3V下

表VI-1-11 包含層掲載土器一覧(0)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
122a		X9a	11	V層下位	1	W12d5V下	X7a4V下, 3	X8c9V下	X8d17W	
			13	VI層	1	X9a6V下	X9a7V下, 20	X9a8V下, 40	X9a10V下, 19	
122b	Ib-2	X9a	9	V層下位	1	X9a11V下, 29	X9a12W, 2	X9a13W, 2	X9a15W, 3	
			X9d	2	V層下位	1	X9a17木根	X9b3V下, 2		
122c		W9b	4	V層下位	1					
			X8c	9	V層下位	1	138点中の9点			
			X9a	11	V層下位	2				
123a		X9a	7	V層下位	1	Q7b7V下	W8d3V下	W9b3V下	W9b9W	
			W9b	3	V層下位	1	X8c4V下	X8d4V下	X8d6V下, 3	X8d9V下, 4
123b	Ib-2	X9a	8	V層下位	1	X8d10W	X9a4V中	X9a6V下, 2	X9a7V下, 8	
			X9a	16	V層下位	1	X9a8V下, 16	X9a9V下	X9a10V下, 5	X9a11V下, 20
							X9b4V下	72点中の4点		
124	Ib-2	U3d	5	V層下位	5	T4b3V下	U3d5V下, 57	U3d6W, 5	X9a11V下	
							69点中の5点			
125	Ib-2	X9a	11	V層下位	2	U5b4W	W9a7V中, 19	W9b3V下	W9b4V下	
			X9a	13	VI層	1	W9d5W	X8d2V下	X9a6V下	X9a7V下, 6
							X9a8V下, 8	X9a10V下, 4	X9a11V下, 7	X9a13W
							X9c5V下	X9b3V下, 4	X9b4V下, 7	X9d1V下
							X9d3V下	X10a5V下, 5	Z25a1V中	74点中の3点
126	Ib-2	R7b	3	V層下位	1	Q7b1W風攪	Q7b12V中風攪	R7a4V下, 2	R7a8W	
							R7b3V下	7点中の1点		
127a	Ib-2	T12c	19	V層下位	1	T12c23W, 2	U11c4V下	不明5排土, 3		
127b		T12c	15	V層下位	1	8点中の2点				
128	Ib-2	T11a	6	V層下位	4	T4a8W	T11a5V下, 8	T11a6V下	T11a7V下	
							T11b6V下	T11c4V下, 2	18点中の4点	
129	Ib-2	S9c	3	V層下位	1	T4b2V下	T4d4V下	T5d2V下		
			T9d	4	V層下位	1	5点中の2点			
130	Ib-2	Q7a	1	V層下位	1	Q5a3V下	Q5c6W上位	Q5c8V下	Q5c9W	
							Q5c10V下, 3	8点中の1点		
131	Ib-2	Q6c	15	VI層	2	Q5b6V下	Q5b11W	Q6d6W, 6	Q7b14V下	
			Q6d	2	VI層上位	1	Q7b15V下, 3	Q7b17V下	Q7b23W	R5a2V下
			Q6d	6	VI層	1	R7b1V下	S4d2W	T8d7V下風攪	V8a8W
							V8d4V下	24点中の4点		
132	Ib-2	不明	2		2	Q5d15	3点中の2点			
133a		W17d	15	V層下位	1	U17b3V下	V17b14V下	V17b16V下	V17b19V下	
			16	V層下位	1	V17c25V下	V17c32W, 2	V17d24V下	V17c17V下	
			V17d	33	VI層	1	W17d5V下	W17d9V下, 6	W17d12V下	W17d15V下
133b	Ib-2	W17c	6	V層下位	1	W17d16V下, 2	W17d20V下, 4			
			W17d	9	V層下位	1				
			W17d	10	V層下位	1				
			W17d	16	V層下位	2				
			W17d	21	V層下位	1				
134a	Ib-2	S4a	4	VI層	1	W11d1V下	S3c1V中, 2	S4a2V下	S4a3W	
			S4b	1	V層中位	1	T3b9W	T3d2V下, 3	T3d4V下	T3d6V下, 5

表VI-1-12 包含層掘載土器一覽(1)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
134b	Ib-2		T3d	2	V層下位	1	T3d7V, 23	T3d8V	T3d9V, 2	T3d10V下, 5
			T3d	4	V層下位	1	T3d15木根	T4a1V中	T4a4V下	T4a7V
			T3d	6	V層下位	1	T4b4V	T4a12V下	T4d5V	
			T3d	9	VI層	2	60点中の7点			
135a	Ib-2		Y22a	7	V層下位	1	T18d1V中	X21d19V下	X22b8V下, 3	X22b16V下
135b			Z22b	5	V層下位	1	Y22a7V下	Y22d6V下		
135c			Y22a	7	V層下位	4	14点中の6点			
136	Ib-2		W8d	7	V層下位	1	T11a9V	W8d8V下	W9a6V中	W9a7V中, 13
							X9a16V	X14c17V下	19点中の1点	
137a	Ib-2		V12d	10	V層下位	1	S7a4V下, 3	U12b4V下	U12b6V下	V11c3V下
			V12c	9	V層下位	1	V12a7V下, 2	V12a9V下, 3	V12a12V下, 3	V12b1V下
							V12b5V下	V12c6V下, 8	V12c9V下	V12d4V下, 3
							V12d5V下	V12d7V下	V12d8V下	V13a14V下
							W12d6V下	W12d8V下	W13c7V下	X7d4V下
							X12d1V中	X14b20V下	Y12d3V下	41点中の2点
138	Ib-2		X7b	2	V層下位	1	X7a3V下	X7a9V	X7b1V中	X7b3V下
			X7b	3	V層下位	1	X7b5V下, 3	X7b6V	X7b8V下, 2	X7b10V, 3
							X7b11V	X7c2V下	X7c5V下, 2	X7d4V下
							X9d4V下 21点中の2点			
139a	Ib-2		X7b	13	VI層	4	Q7b13V下	Q7b15V下, 2	X7a3V下	X7b1V中, 2
139b			X7b	14	VI層	1	X7b2V下, 4	X7b3V下	X7b8V下, 9	X7b10V, 2
							X7b11V, 5	X7b12V, 8	X7c3V下, 2	X7c4V下, 4
							X7c5V下, 3	X7c7V, 3	X7d4V下, 2	54点中の5点
140	Ib-2		V13b	15	V層下位	1	U13c8V下	U13d3V下	V13b10V下	V13d25V下
			V13d	27	V層下位	1	V13d30V下	W9a7V中	W13d14V下, 3	
			V13d	29	V層下位	1	12点中の3点			
141	Ib-2		X21d	16	V層下位	1	T12d19V下	W14c4V下	W18a12V下	X15a15V下
			Y17b	8	V層下位	1	X15d14V下	X22a17V	Y14d10V下	Y15d10V下
			Y18b	27	V層下位	1	Y16c9V下, 3	Y18b8V下	Y18b15V中	Y18b17V中2
							Y18b27V下, 2	Y18b34V中	Y18c1V中	Y18c13V中
							Z18d5V中, 3	Z22b5V下	Z23a10V下	Z23a15V
					29点中の3点					
142a	Ib-2		W14b	11	V層下位	1	V11c5V下, 2	W10b7V下	W14b12V下, 3	W14b18V下, 6
			W14b	12	V層下位	1	W14b20V下	W14b23V下, 2	W14c5V下	W17a42V下, 3
			W14b	18	V層下位	1	W17a44V下	W17a46V風脱	W17b16V下	W17b20V下, 2
			W14b	20	V層下位	1	X14a4V下	X14a9V下	X14a12V下, 2	X14a14V下
			W14b	23	V層下位	1	X14a16V下	X14a21V	X14a22V	X14c13V下
142b		W14b	2	V層下位	1	X14c15V下, 2	X14d12V下	X15b6V下	X15b7V下	
						Y14a5V下, 2	Y14a6V下	Y14d7V下	48点中6点	
143	Ib-2		Z23c	6	VI層	1	Z23c6V	2点中の1点		
144	Ib-2		T4a	13	木根	1	T3c6V下	T3c7V, 2	T3d3V下	T4b10V
			T4b	10	VI層	9	15点中の10点			
145	Ib-2		T3c	5	VI層	1	Q3d2V中	R3a5V	R3a6V	S3b1V
			T3c	7	VI層	2	S4b4V	S4c2V下	T3c3V下, 3	T3c5V, 3

表VI-1-13 包含層掲載土器一覧(1)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
145	Ib-2		T3c	8	VI層	1	T3c11V	T3c13V下, 2	T3c7VI	T3d2V下
			T3c	9	VI層	2	T4a4V下, 2	T4b3V下, 4	T4b7VI	T6d4V下
			T3c	10	V層下位	1	U3d5V下			
			T3c	12	VI層風倒	4				
			T3c	13	V層下	2				
						39点中の13点				
146a	Ib-2		T4b	5	VI層	3	S4c1V中	T4b2V下	X10b2V下	
146b			X9a	11	V層下位	4	10点中の7点			
147	Ib-2		S6b	8	V層下位	1	S5c2V中	S6b4V下	S6b8V下, 5	S6b9V下, 13
							T4c3VI	T5a6V下	T5a12W上	T5a13W
							T5d1V下	T5d5V下, 3	T6d1V下	T6d4V下
						31点中の1点				
148	Ib-2		X8d	9	V層下位	2	U3d5V下, 2	W8c4V下	W8d4V下	W9d2V下
							X7a7V下	X8a6W, 2	X8c8V下	X8c9V下
							X8d3V下	X8d6V下, 3	X8d9V下, 42	X8d17VI
							X9a8V下, 3	X9a11V下, 4	X9a15VI	X9a18木根
							X9b3V下	69点中の2点		
149a	Ib-2		X9a	10	V層下位	2	W9b7V下	X7b5VI	X7b14VI	X9a7V下, 2
149b			X9a	11	V層下位	5	X9a8V下, 3	X9a10V下	X9a11V下, 3	X9a15VI
							X9b3V下, 6	X9b4V下, 6	X9b5V下, 8	X9c3V下
						43点中の7点				
150	Ib-2		T3c	5	VI層	1	T3c8VI	T3d6V下	T4b3V下, 2	
			T3c	10	V層下位	3	8点中の4点			
151a	Ib-3		W11d	1	V層下位	1	T5a8V下	S12b3V下	W13a5V下	W13d3V下
151b			V13c	20	V層下位	1	W13d6V下	W14a8V下	W14a13V下	9点中の2点
152a			W13c	7	V層下位	3	TP14-10覆土, 2	R18d2V下	T11b7VI	T8c9V下
152b			V13d	27	V層下位	6	T12d19V下, 3	T13a6V下	U8a3V下	U9c1VI
			U13d	12	V層下位	1	U13a7V下, 3	U13a13V下	U13a1V中	U13b5V下, 12
			W13d	3	V層下位	2	U13b7V下	U13b9V下, 3	U13b11V下	U13b12V下, 5
			X11d	3	V層下位	1	U13b13V下, 5	U13b14V下	U13c4V下	U13c6V下, 4
							U13c13V下	U13c11V下	U13d3V下, 2	U13d11V下, 2
							U13d12V下, 6	U13d18VI	V9b7VI	V12d5V下
							V13a14V下, 6	V13a22V下, 2	V13a25V下, 3	V13a29V下
						V13b8V下, 3	V13b15V下, 2	V13c12V下	V13c20V下, 2	
					V13c21V下	V13d21V下	V13d25V下	V13d27V下, 2		
					V13d29V下	V13d30V下, 2	V14d15V下	W13a3V下		
					W13a5V下, 9	W13d3V下, 4	W14a12V下, 2	W14a13V下, 2		
					W13b5V下	W18b7V下	W18c1V下	X11b2V下		
					X11d3V下	X14c6V下, 2	不明8拂土, 1	132点中の13点		
153	Ib-3		V17d	9	V層下位	1	1点中の1点			
154	Ib-3		N1b	2	V層下位	1	1点中の1点			
155	Ib-3		T8a	2	V層下位	1	1点中の1点			
156	Ib-3		T9b	7	V層下位	2	S8b8V下, 2	T9b6V下	U9a5V下	6点中の2点
157	Ib-3		T11a	10	VI層	1	T12a20V下	T12a21VI	T12c21V下	T12d11V中
			T12d	17	V層下位	1	T12d17V下	T12d18V下, 6	T13a14	14点中の2点

表VI-1-14 包含層掲載土器一覧(1)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
158	I b-3	T13c	4	V層下位	1	1点中の1点				
159	I b-3	R8a	6	V層下位	1	1点中の1点				
160	I b-3	U17b	2	V層下位	1	T10b4V下	V14a25VI	V15a10VI	X16d4V下	
		W14b	9	V層下位	2	Y15c2V下	不明I3排土			
		W17d	9	V層下位	1	10点中の4点				
161	I b-3	R8d	6	V層下位	1	R8d1V中	2点中の1点			
162	I b-3	W9d	2	V層下位	1	1点中の1点				
163a	I b-3	Q1b	1	V層中位	2	R19b1V上	T10b3V下	T11b1V下	V15c11V下	
163b	I b-3	U10a	4	V層下位	2	V17d9V下	V17d13V下	W11a3V下	X14a9V下	
						1	X14b10V下	13点中の4点		
164	I b-3	T13a	6	V層下位	2	Q1b2V下	Q1b3VI上	T12b13V下	T12c20V下, 2	
						1	T12d11V中	T13a6V下	T13b6V下, 2	T13c4V下, 3
						1	U13a4V下	15点中の2点		
165	I b-3	O1a	1	V層下位	1	1点の1点				
166	I b-3	X14b	10	V層下位	1	Q2a1V上	T8d19木根	T12b7V中	T13c4V下	
						1	V11b5V下	W11a7V下	W13a5V下, 2	W13a11V下
						1	W13d13V下	X15c16V下	12点中の1点	
167	I b-3	V17d	13	V層下位	1	V17d13V下, 4	V17d22V下			
		V18b	5	V層下位	1	7点中の2点				
168	I b-3	S7a	1	V層下位	1	P3b1V	Q2c9VI上	T2d1V下	4点中の1点	
169	I b-3	S9d	4	V層下位	1	S8c2V下, 2	U11d3V下	U16a3V中	5点中の1点	
170	I b-3	T11d	4	V層下位	3	S9a1V中, 2	S11c4V下	T11c1V下, 5	T11c3V下	
						1	T11c8W, 2	T11d4V下	T11d5V下, 2	T12d23V下
						1	Y14a2V下	19点中の3点		
171	I b-3	W17c	9	V層下位	1	1点中の1点				
172	I b-3	S8d	2	V層下位	1	1点中の1点				
173	I b-3	T12d	17	V層下位	1	T11d4V下	T11d5V下	T12c20V下		
		T13a	6	V層下位	1	5点中の2点				
174	I b-3	V17a	12	V層下位	2	V17a27V下, 2				
		V17a	31	V層下位	1	6点中の4点				
		V17b	12	V層下位	1					
175	I b-3	K15a	2	VI層	5	K15a2W, 13	K15a3VI			
		K15a	4	VI層	2					
		K15a	7	VI層	1	23点中の9点				
		K15d	2	V層下位	1					
176a	I b-4	T8a	6	VI層	1	S4a3VI	S8c9W	S9c1V下, 2	S9c8W	
		T8d	3	V層下位	1	T5d6VI	T6c2V下	T8a4V下	T8a5V下	
		U7b	2	V層下位	2	T9b1V中	T9b7V下, 3	T9d5V下	T9d7V下, 2	
176b	I b-4					1	T10a4V下	U7b2V下, 6	U7b3VI	V7d1V下, 2
						1	U8a4V下	U9a5V下, 9	U9a6VI, 6	U9d1V中
						1	U9d3V下, 2	V8a3V下	V8a4V下, 4	V8a8VI, 3
						1	W8b5V下	W8d5V下	58点中の4点	
						1				
177	I b-4	Q2c	4	V層中位	1	O2b1V中	O2c1V下	Q1b4W風機	Q2c2V中	
				1	Q2c3V下, 4	Q2c4V中, 10	Q2c5W下	Q2c6VI		

表VI-1-15 包含層掲載土器一覧04

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)							
177	Ib-4					Q2c7V下	Q2c8V下	Q2c9W上, 8	Q2c12W				
						Q3a2V下	Q3a3V中	Q3b2V中, 2	Q3b4V下				
						Q3b6W	Q3b7W, 2	Q3c4V下	R1d1V中				
						R3a2V下	R3a3V下	R3a4V下, 4	R3c2V下				
178	Ib-4		T6c	2	V層下位	1	Q6c6W, 6	Q6c8W上	Q6c14W, 2	Q7b7V下, 2			
							Q7b14V下	Q7b16V下, 2	Q7c1V上	R8d6V下			
							T6b1V下, 3	T6b2W上	T6b5W, 7	T6b6W, 6			
							T6b8V下	T6c2V下	T6c3V下, 3	T6c7W, 5			
							T6c8V下	T6b7V下, 2	T7d5W	U6d3W			
							U7b1V下	50点中の1点					
179	Ib-4	X12a	8	W層	1	1点中の1点							
180	Ib-4	Y17b	8	V層下位	1	1点中の1点							
181	Ib-4	Y16d	7	V層下位	1	X16c7V下	Y16a5V下	Y16d2V下	Y16d6V下, 2				
						Y16d9V下	Y17a7V下	Y17a8V下, 5	Y17c1V下				
						14点中の1点							
182	Ib-4	Y16a	4	V層中位	1	1点中の1点							
183	Ib-4	W15c	10	木根	3	W15c10木根	4点中の3点						
184	Ib-4	R8d	2	V層下位	1	R8a2V中	R8d1V中	R8d2V下, 4	R8b1V中, 2				
						R8d	6	V層下位	3	R8d6V下, 22	S8b8V下	S8d4V中, 2	T6a7W, 2
						39点中の4点							
185	Ib-4	S8b	8	V層下位	6	S7c6V下	S8a4V下	S8b3V下	S8b4V下				
						S8b8V下, 108	S8b10W	T8c1風紋	T9b6V下, 2				
						U10b1W 123点中の6点							
186	Ib-4	W12b	2	V層下位	2	P1a2W	T12a3V中	T12a7V中, 2	T12a10V中				
						W12b	8	V層下位	4	V8a10W	V17c15V下	W9d2V下	W12a1V下
						W12b	9	V層下位	1	W12a2V下	W12a9V下	W12b1V下, 12	W12b2V下, 21
								W12b3V中	W12b4V下	W12b6V下, 3	W12b8V下, 7		
								W12b9V下, 6	W12c5V下	W13a5V下	X11a4V下		
						X12a1V下, 2	X12a3V下	X13b1V中	76点中の7点				
187a	187b	V13c	13	V層下位	5	R19c2V下	T12c14V下	T12c16V下	T12d10V中				
S9a		2	V層下位	1	T12d23V下	T15b3V中	U12c5V下	U12c8V下					
S9d		3	V層下位	1	U13a3V下	U14b4V下, 2	U14d5V下	U16a12W					
U10c		3	V層下位	2	U16b10V下	U16b17V下	U16c9V下	U16c13V中, 9					
		V13c13V下, 15	V13b5V下	V13b9V下, 4	V13c16V下								
		V13c19V下	V13d26V下	V13d28V下	V16a6V下								
		W10a1V下	W10c4V下	W10d3V下	W12d2V中								
		W12b12W	W13a6V中	W13b4V下, 2	X10a3V下								
						X10d2V下	X15c7V下	70点中の9点					
188	IIa-1	A027d	3	V層中位	1	1点中の1点							
189	IIa-1	Y15a	9	V層下位	1	1点中の1点							
190	IIa-1	V13c	13	V層下位	3	V13c13V下, 3	V13c14V下	V15b4V中	V15d6W				
		V13d	26	V層下位	1	X15c7V下, 3	13点中の4点						
191	IIa-1	Y15d	8	V層下位	1	1点中の1点							

表VI-1-16 包含層掲載土器一覧(15)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)			
192	IIa-1	U13c	2	V層下位	1	1点中の1点			
193	IIa-1	T7d	2	V層下位	1	1点中の1点			
194	IIa-1	T12a	12	V層下位	1	1点中の1点			
195	IIa-1	W17a	28	V層下位	1	V16a6 V中			
		W17a	34	V層下位	1				
		W17b	5	V層下位	1	5点中の4点			
		W17b	8	V層下位	1				
196	IIa-1	V12c	3	V層下位	1	1点中の1点			
197	IIa-1	U11b	3	V層下位	1	1点中の1点			
198	IIa-1	X19c	7	IV層	1	1点中の1点			
199	IIa-1	R9b	3	V層下位	1	1点中の1点			
200	IIa-1	R6a	2	VI層	1	1点中の1点			
201	IIa-1	T12d	22	V層下位	1	1点中の1点			
202	IIa-1	T11d	1	V層奥段	1	U11a2 V下	U11b1 V下, 3	5点中の1点	
203	IIa-1	V13c	13	V層下位	1	1点中の1点			
204	IIa-1	W15b	2	V層中位	1	1点中の1点			
205	IIa-1	S8a	5	V層中位	1	Q7c3 V下	R7b2 V下	S11c1 V下	U7a2 V下
		V14a	24	VI層	1	U13c2 V下	U15b5 V下	V13a20 V下	V13b7 V下
						V13b9 V下	V13c4 V下	V13c13 V下	V13d4 V中
						V13d6 V中	V13d10 V中	V14a4 V下	V14a7 V下
						V14a9 V下, 5	V14a11 V下	V14a27 V下	V16a6 V中, 2
						W13a7 V下	X15a7 V下	X15d4 V下	30点中の2点
206	IIa-1	V18b	7	V層下位	1	1点中の1点			
207	IIa-1	T13a	5	V層下位	1	1点中の1点			
208	IIa-1	U11b	3	V層下位	1	R8c4 V下	S7c1 V下	S9c5 V下, 2	T6a8 V
		U13b	4	V層下位	1	T6d5 V下	T8d5 V下	T8d6 V下	T12a8 V中
						T12d23 V下	U8b1 V下	U13a3 V下	U13c5 V下
						U14d5 V下	U16a1 V上	U16b5 V中, 2	U16b6 V中
						U16c5 V中	V11a6 V下	V12c1 V中	V13a18 V下
						V13c6 V中	W11b2 V下	W13b2 V中	W13d10 V中
						W13d12 V下	W14a7 V下, 2	W14a9 V下	W16c9 V下
						X11a2 V中	X12d4 V	X15c7 V下	36点中の2点
209	IIa-1	T12d	9	V層中位	1	R18d1 V下	T12a5 V中, 2	T12a8 V中	T12a14 V下
		T12d	10	V層中位	1	T12a16 V下, 3	T12a18 V下	T12b9 V下	T12c9 V中
						T12c14 V下	T12d3 V下, 2	T12d10 V中, 5	T12d16 V下
						T12d22 V下, 12	T12d23 V下, 10	T13a5 V下	T13c5 V下
						U13d1 V下	V13c13 V下, 4	V16a6 V中	W16a1 V下
				53点中の2点					
210	IIa-1	V14a	11	V層下位	2	U15d5 V中, 3	U16c5 V中	U21c2 V中	V14a7 V下
						V14a9 V下	V14a11 V下, 6	V14a19 V下	V14b5 V下, 8
						V14b6 V下	V14b9 V下	V14c11 V下	V14c15 V下
						X14a8 V下	X14a10 V下	X14a17 V下	X14d13 V下
						X23c1 V中	Y15a9 V下	W14b13 V下	W15a7 V下
						W15a9 V下	A025d4 V中, 2	A025d8 V下	A025d9 V下, 20

表VI-1-17 包含層掲載土器一覧(6)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)							
210	IIa-1					A026a7V下, 4	A026a8VI	A026c2V下	66点中の2点				
211	IIa-1	X14c	2	V層中位	1	X14c8V中, 2	X14c8V下	X15a4V下	X15c7V下, 23				
						X15c11V下	Y14d6V下	30点中の1点					
212	IIa-1	U14d	5	V層下位	1	R9c1V下	T12a16V下	U14c1V下	U14c5V下				
						U14c6V下, 4	U14d5VI, 9	W18a8V下	X18c17V中, 2				
213	IIa-1	W13d	5	V層下位	1	T13c5V下, 2	U12b5V下	V12a11V下	W12a7V下				
						W13d	7	V層下位	1	W13a4V下, 2	W17d13V下	X13a1V下	X15d2V下
						W15d	12	V層下位	1				
						W16c	12	V層下位	1				
						W16d	17	V層中位	1				
						X15b	9	V層下位	1	16点中の6点			
214	IIa-1	T11c	9	VI層	1	T9c2V中	T9c3V中	3点中の1点					
						T13b	5	V層下位	1	T12b3V中	T12d2V上	T12c4V中, 2	T12c7V中, 2
215	IIa-1					T12d7V中	T13a5V下, 3	T13a8V下	T13a9V下, 2				
						T13b4V中	T13b8V中	V10a2V下	17点中の1点				
216	IIa-1	W16a	2	V層下位	1	T11a3V下	V14a27V下	3点中の1点					
						Q18a	1	V層中位	1	W17d5V下			
217	IIa-1	R18a	1	V層下位	1								
						R18a	3	V層中位	1	5点中の4点			
						R19b	4	V層下位	1				
218	IIa-2	Y16c	3	V層下位	1	1点中の1点							
219	IIa-2	V17a	17	V層下位	1	1点中の1点							
220	IIa-2	V14c	11	V層下位	1	1点中の1点							
221	IIa-2	V12c	7	V層下位	1	1点中の1点							
222	IIa-2	Q5a	6	V層下位	1	1点中の1点							
223	IIa-2	X21d	4	V層下位	1	1点中の1点							
224	IIa-2	V12a	8	V層下位	2	V12a8V下, 2	V12a11V下, 5	V12c7V下, 4					
						V12c	7	V層下位	1	14点中の3点			
225	IIa-2	Q5a	5	V層下位	4	Q5a1V下	Q5a5V下	Q5d5V下, 5	Q5d11V下, 3				
						Q5d	7	V層下位	4				
						Q5d	11	V層下位	1	16点中の6点			
226	IIa-2	U16b	16	VI層	2	U17c2V下	W16b13V下	4点中の2点					
						X15a	4	V層下位	1	U13c3V下	U13d5V中	V14d4V下	V14d11V下
227	IIb					V16c21VI	W13d11V下, 3	W14d5V下	X15a16V下				
						X15c11V下	Y15a6V下	Y15d6V下	14点中の1点				
228	IIb	T13c	6	V層下位	1	T12c22V下	T13b6V下	T13b7V下	T13c6V下, 7				
						U13d	9	V層下位	1	U16c12V下, 2	U16c16V中, 3	U16c21V下, 8	U16c24V下
										U17b12V下	U17b20V下	U17b23VI, 2	V15a3V下
										V16a7VI	V17a32V下	V18b10V下, 2	35点中の2点
229	IIb	T12d	22	V層下位	1	1点中の1点							
230	IIb	W13a	10	V層下位	1	V14c18V下	W14a11V下, 2	4点中の1点					
						V13b	3	V層中位	1	T10c4V下, 2	U11b7V下	U13c3V下	V13c11V下, 2
231	IIb	V13c	6	V層中位	1	V14a17V下	W12d7V下	W13d11V下	W13d12V下, 2				

表VI-1-18 包含層掲載土器一覽(II)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)									
231	IIb					W14a11 V下	W14a16 V下	X14b5 V中, 2	X14c7 V下						
						X15d3 V下, 3	X16c4 V下	22点中の2点							
232	IIb	T10c	6	V層下位	1	1点中の1点									
233	IIb	S11c	5	V層下位	1	S11c3 V下	2点中の1点								
234	IIb	V13a	8	V層中位	2	M18a1 V下	Q18a2 V中	R5b2 V下	U11a4 V下						
						V10a6 V下	V13a1 V中	V13a6 V下	V13a8 V中, 4						
						V13a10 V中	V13a15 V下	V13a21 V下	V13a26 V下						
						V13a30 W	V13c3 V中	V13c8 V中	V13d5 V中						
						V13d9 V下	V13d11 V中	V13d14 V中, 2	X13b1 V中						
						27点中の3点									
235	IIb	Y15a	1	V層下位	1	Y19c1 V中	Y20d4 W	Z25b1 V下	A024c7 V下風披						
						6点中の1点									
236	IIb	U16c	25	V層下位	2	U16c22 W	3点中の2点								
						Z26d	1	V層下位	1	X24b20 V下	Z27a2 W	Z27b4 V下, 4	Z27b9 W, 3		
237	IIb					A025a13 V下, 2	A026d1 V下	A027a2 V下	B026a3 V中						
						15点中の1点									
238	IIIb-1	Y17d	10	V層下位	1	W17d1 V下, 2	W18a3 V中	W19d3 V下	X15c2 V中						
						X17d2 V下, 2	X18b9 V下	X18c10 V中	Y17b6 V下						
						Y17c3 V下	Y17c7 V下	Y17d3 V下	Y17d8 V中						
						Y18a4 V中, 3	Y18a5 V中, 3	Y18a9 V下, 4	Y18a10 V中, 4						
						Y18a18 V下, 3	Y18a22 V下, 9	Y18b6 V中	Y18b35 V下, 2						
						Y18c4 V中	Y18c11 V下	Y18d10 V中	Y18d16 V下, 4						
						Y18d18 V下, 2	Y18d19 V下, 2	Y18d14 V中	Y18d25 V中, 2						
						Y19a14 V中, 2				62点中の3点					
239	IIIb-1	Y17d	10	V層下位	1	W16d14 V下	W18d11 V下	W19d1 V下	X17c1 V下						
						X19a5 V下	X19d9 V中	Y16c1 V下, 2	Y17b3 V下						
						Y17c3 V下	Y17e4 V中	Y17c6 V下, 2	Y17c7 V下, 2						
						Y17d3 V下, 2	Y17d2 V中	Y17d10 V下	Y18a9 V下, 2						
						Y18a10 V中, 2	Y18a22 V下, 8	Y18b7 V下	Y18b10 V下						
						Y18b16 V中	Y18b18 V下, 11	Y18b30 V下, 9	Y18b33 V中, 3						
						Y18b35 V下	Y18c11 V下, 10	Y18c7 V下	Y18c17 V中, 2						
						Y18d16 V下	Y18d18 V下	Y18d19 V下	Y18d25 V中						
						76点中の1点									
						240a	IIIb-1	Y18a	10	V層中位	1	V15d9 V下	X19d8 V下, 2	X21c9 V上	Y17a1 V中
						X17c		7	V層下位	1	Y18a4 V中, 2	Y18a5 V下, 2	Y18a5 V下, 2	Y18a9 V下, 2	
Y18a	18	V層下位	1	Y18a10 V中	Y18a22 V下, 2	Y18b7 V下		Y18b18 V下							
Y18b	35	V層下位	1	Y18b35 V下	Y18c11 V下	Y18d17 V中, 2		Y18d18 V下							
Y18d	18	V層下位	1	26点中の5点											
241a	IIIb-1	X18c	3	IV層	1	W17c1 V下	W17d1 V下	X17c5 V下	X17c7 V下						
Y18d		16	V層下位	1	Y17a6 V下	Y17c1 V下	Y17c3 V下	Y17d3 V下							
242	IIIb-1	Y18a	10	V層中位	1	Y18b33 V中	2点中の1点								
243	IIIb-1	Y18b	10	V層下位	1	X18b1 W	X18c14 V中	X18c19 V下	X19b7 V下						
		Y18c	7	V層下位	2	Y19a14 V中	8点中の3点								
244	IIIa	Y18a	2	V層中位	2	2点中の2点									

表VI-1-19 包含層掲載土器一覧08

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
245	Ⅲb-1	Y21d	8	V層下位	1	Y21d1 V上, 10	Y21d4 V下	Y21d6 V下, 4	Y21d8 V下, 4	
			9	V層中位	2	X21b3 V上, 2	X21b16 V中	X21b19 V下	X21b29 V下, 3	
							X21c2 V上, 7	X21c3 V上	X21c5 V中, 2	X21c6 V中
							X21c10 V中, 3	X21c16 V下	X21c26 V下, 2	X21d9 V中
					47点中の3点					
246	Ⅲb-1	Y18c	17	V層中位	1	1点中の1点				
247	Ⅲb-1	W21c	4	V層下位	1	X20c11 V中	Y19c5 V上	3点中の1点		
248	Ⅲb-1	S8c	3	V層下位	1	1点中の1点				
249	Ⅲb-1	Y18d	10	V層中位	1	Y17d10 V下, 6	Y18a9 V下	Y18a10 V中	Y18a16 V下	
						Y18a18 V下	Y18a22 V下, 3	Y18d13 V中	Y18d14 V中	
						Y18d10 V中	Y18d16 V下	Y18d18 V下	Y19a14 V中, 3	
						Y19a19 V下, 2	Y19b8 V中	24点中の1点		
250	Ⅲb-1	Y17d	8	V層中位	1	V13d31 V下	V16c11 V下	V17d1 V中	W16d3 V上	
						W19b2 V下	X14b9 V下	X14a6 V下	X17c1 V下, 2	
						X17c7 V下, 2	X17c12 V下	X17d4 V下	X20c22 V下, 2	
						Y12a9 V下	Y17a3 V下	Y17d10 V下, 3	Y18a4 V中, 2	
						Y18a7 V下	Y18a9 V下	Y18a22 V下, 2	Y18b10 V中	
						Y18b18 V下	Y18d16 V下	Y18d17 V中	Y19a14 V中, 3	
						Y24a1 V上	35点中の1点			
						251	Ⅲb-1	Y18a	10	V層中位
W21c4 V下	X13c3 V中	X13d2 V下	X14a6 V下							
X17b5 V下	X17c7 V下, 2	X18c1Ⅲ	X18c2Ⅱ							
X19b7 V下	X20c11 V中	X20c22 V下, 4	Y14c1 V下							
Y17a9 V下	Y17c3 V下	Y17d2 V中, 2	Y17d3 V下							
Y17d8 V中, 2	Y17d10 V下, 3	Y18a5 V下	Y18a9 V下							
Y18a10 V中, 2	Y18a18 V下	Y18a22 V下, 5	Y18b10 V下, 3							
Y18b18 V下, 4	Y18b30 V下	Y18c11 V下, 3	Y18c17 V中, 3							
Y18d17 V中	Y18d18 V下	Y18d25 V中	Y19a4 V中							
Y20a8 V下	Y23b3 V中	61点中の1点								
252	Ⅲb-2	U12c	2	V層中位	1					
			V13a	13	V層中位	1				
			V13d	13	V層中位	1				
253	Ⅲb-2	V16d	9	V層中位	1	V13c10 V中	2点中の1点			
254a	Ⅲb-2	Y15a	3	V層下位	1	U16c10 V下	V16a3 V中, 2	V16a4 V中, 2	W11a9 V下	
			Y15b	6	V層中位	1	W7d4 V下	W13c3 V下	W17a29 V下	W19a5 V下
254b	Ⅲb-2	T8c	7	V層下位	1	X14c9 V下	X14d3 V下	X17c9 V下	Y14a3 V中	
						Z24d6 V下		W16c3 V下	19点中の3点	
255	Ⅲb-2	V14c	10	V層下位	1	V14c7 V中	X14a6 V下			
			V14d	13	V層下位	1	5点中の3点			
			W14d	14	V層下位	1				
256	Ⅲb-2	Y19b	5	V層中位	1	1点中の1点				
257	Ⅲb-2	W7c	1	V層下位	1	Z23c5 V下, 2	Z25d2 V下	4点中の1点		
258	Ⅲb-2	Y24b	5	V層下位	1	1点中の1点				
259	Ⅲb-2	N18c	1	V層上位	2	2点中の2点				

表VI-1-20 包含層掲載土器一覧(19)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)			
260	Ⅲb-2	W14c	8	V層下位	1	1点中の1点			
261	Ⅲb-2	S8d	1	V層下位	1	1点中の1点			
262	Ⅲb-2	Y23a	2	V層中位	1	1点中の1点			
263	Ⅲb-2	Z25a	4	V層下位	1	X25c1 V上, 2	Z23a5 V中	Z25c1 V中, 3	Z25c5 V中, 5
		Z25c	5	V層中位	1	Z25d6 V下, 5	Z26a1 V上	19点中の2点	
264a	Ⅲb-2	R20a	1	V層中位	1	S20a2 I, 3	T13c1 V中	T13d1 V中	U16c10 V下
		S20a	1	V層中位	1	U17b14 V下, 2	U17b16 V下	V16b1 V中	V16c13 V下
		V17d	3	V層中位	2	V17a2 V中	V17a7 V下	V17b18 V下	V17d3 V中
		W16d	8	V層中位	2	W16a4 V下	W16d4 V中	W16d5 V中, 5	W16d2 V上
264b	Ⅲb-2	W17c	11	V層中位	1	W16d6 V下, 2	W16d8 V中, 4	W17a12 V下	W17a11 V中
						W17a15 V下, 2	W17a24 V中, 3	W17a26 V下	44点中の7点
265	Ⅲb-2	W17a	17	V層下位	1	1点中の1点			
266	Ⅲb-2	U7a	1	V層中位	1	1点中の1点			
267	Ⅲb-2	V13d	15	V層中位	1	1点中の1点			
268	Ⅲb-2	W16d	15	V層下位	1	W16d5 V中, 3	W16d7 V下, 2	W16d8 V中, 10	W17a11 V中, 6
						W17a12 V下, 3	W17a15 V下, 7	W17a17 V下, 9	W17a20 V中
						W17a21 V下, 6	W17a23 V中, 3	W17a24 V中, 5	W17a26 V下, 14
						W17a29 V下, 4	W17a31 V下	W17c3 V下	76点中の1点
269	Ⅲb-2	R7b	2	V層下位	1	1点中の1点			
270	Ⅲb-2	Y23b	4	V層中位	1	W14a1 V下	Z25d10 VI		
		Y24c	2	V層中位	1	4点中の2点			
271	Ⅲb-2	Z24a	1	V層中位	1	Z23b2 V下, 2	Z24a1 V中	Z24b6 V中, 3	Z24b10 V下
		Z24b	6	V層中位	1	9点中の2点			
272	Ⅲb-2	X24b	2	V層中位	1	1点中の1点			
273	Ⅲb-2	Y18c	9	V層下位	1	1点中の1点			
274	Ⅲb-2	V15a	1	V層中位	1	U13b6 V下	V14a8 V下	V14a14 V下, 2	V14d13 V下
		V15a	6	V層下位	1	V15a8 V中	V16c9 V中	W13d1 V下	W14a3 V下
						V15a6 V下	12点中の2点		
275a	Ⅲb-2	T4d	3	V層下位	1	P4b1 V下	P4b2 VI	Q3d3 VI	Q4a2 V中
T4b		1	V層中位	1	Q4b1 V中, 2	R2b1 V中	T5a2 V中, 2	T5a4 V下, 2	
Q4c		5	V層中位	1	T5a7 V下, 3				
R4a		1	V層中位	1	18点中の4点				
276	Ⅲb-2	Y23d	1	V層中位	1	Y23d1 V中	2点中の1点		
277	Ⅲb-2	U17b	6	V層中位	1	1点中の1点			
278	Ⅲb-2	S9c	2	V層中位	1	1点中の1点			
279	Ⅲb-2	W19a	6	V層下位	1	1点中の1点			
280	Ⅲb-2	R5b	4	VI層上位	1	R8b3 V下	2点中の1点		
281	Ⅲb-2	U12c	8	V層下位	1	1点中の1点			
282	Ⅲb-2	V17d	3	V層中位	1	U17b5 V中	V14a20 V中	V17c10 V中	V17d1 V中, 2
		V17d	31	V層下位	1	V17d3 V中, 2	V17d21 V下, 3	V17d31 V下, 3	15点中の2点
283	Ⅲb-2	W15a	11	V層中位	1	V13c10 V中	V17d5 V下	3点中の1点	
284	Ⅲb-2	Z24b	7	V層下位	1	1点中の1点			
285	Ⅲb-2	P1c	1	V層中位	1	Q3c1 V中	R4a1 V中	R4d8 V下	S3a3 VI
		R2c	1	V層上位	1	S9d1 V中	V17a3 V中, 2	V17a7 V下, 2	W17a21 V下, 2

表VI-1-21 包含層掲載土器一覧(20)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	同一個体・破片点数 グリッド、遺物番号、層位、点数(1点の場合は省略)				
285	Ⅲb-2					13点中の2点				
286	Ⅲb-2	Z26a	3	V層中位	1	1点中の1点				
287	Ⅲb-2	W17a	19	V層下位	2	U16a8 V下	U16c6 V中	U16c20 V下	U16c28 V上	
		W17a	26	V層下位	2	U17b10 V下	U17b27 V下	U17b32	U14b4 V下, 2	
						V14d2 V中	V14d6 V下	V16a3 V中	V16b1 V中	
						V17b10 V下, 2	V17b13 V下	V17c12 V下	V17d8 V下	
						W16b5 V下	W16c10 V下	W16d6 V下	W16d8 V中, 2	
						W16d11 V下	W17a19 V下	W17a21 V下	W17a26 V下	
					31点中の4点					
288	Ⅲb-2	V16d	9	V層中位	2	U14b9 V中	U16c4 V中	V16d11 V中	V16d13 V中, 2	
		U17b	4	V層中位	1	V17b2 V中	V17c1 V下	V17d5 V下, 2	X11c1 V中	
		Y13a	1	V層下位	1	14点中の4点				
289	Ⅲb-2	Q5c	3	V層中位	1	2点中の2点				
		S9c	4	V層下位	1					
290	Ⅲb-2	W17a	9	V層中位	1	W17a24 V中	2点中の1点			
291	Ⅲb-2	U17d	1	V層	1	U17b4 V中	U17b6 V中	U17d1 W	V17b13 V下	
		V17d	5	V層下位	2	7点中の3点				
292	Ⅳa	Z23d	8	V層下位	1	R9b5 V下	Z23a8 V下, 8	Z23c3 V下	Z23d3 V中, 4	
						Z24b4 V中	16点中の1点			
293	Ⅳa	A024a	2	V層中位	1	Z23a1 V中, 2	Z23a4 V中	Z23a8 V下	Z23d1 V中	
						Z23d3 V中, 4	Z24b1 V上	Z24c1 V上	A024d2 V上, 3	
					15点中の1点					
294	Ⅳa	Z23d	9	V層下位	1	Y23c1 V中	Y23c3 V下	Z23d3 V中	Z23d9 V下, 2	
						6点中の1点				
295	Ⅳa	N17c	2	V層下位	1	2点中の2点				
		S8c	5	V層下位	1					
296a	296b	X20c	25	V層下位	1	W20c3 V下	W20b3 V下, 3	X18c15 V中	X19c3Ⅲ	
X20a		5	V層中位	1	X19c7Ⅳ	X19c9 V上, 3	X19c4 V上	X19c11 V下, 9		
X20c		20	V層下位	1	X19d2 V中	X19d6 V中	X20a3 V上, 2	X20a4 V下		
X20d		3	V層上位	1	X20a5 V中, 6	X20a6Ⅳ	X20a9 V下	X20a11 V下, 17		
X19d		1	Ⅲ層	1	X20a13 V下, 24	X20a14 V中	X20a15 V中	X20a16 V下, 5		
Y19d		1	V層中位	1	X20a18 V中, 10	X20a21 V下, 11	X20a22 V下, 3	X20a26 V下, 2		
Y19d		3	V層下位	1	X20a29 V下, 3	X20b2 V上	X20b3 V中, 7	X20b4Ⅳ		
Y19d		7	V層下位	2	X20b6 V	X20b8 V下, 3	X20b9 V中	X20b10 V下, 8		
296c		Ⅳa					X20b12 V下, 19	X20b15 V下, 3	X20b20 V下, 7	X20c8 V上
							X20c10 V中, 14	X20c13 V中, 12	X20c16 V中, 2	X20c18 V下, 11
						X20c20 V下	X20c23 V下, 2	X20c25 V下, 14	X20c34 V下, 7	
						X20c37 V下	X20c41 V下, 3	X20d1Ⅳ	X20d3 V上, 7	
						X20d5Ⅳ, 2	X20d7 V中	X20d9 V中	X20d10 V下, 5	
						X20d14 V中	X20d15 V中, 3	X20d19 V下, 3	X21b9 V中	
						X21b13 V中	Y19d1 V中	Y19d3 V下, 3	Y19d3 V下, 3	
						Y19d7 V下, 3	Y19d9 V下	275点中の9点		
297	Ⅳc	I15c	2	V層中位	2	I15b1 V中, 19	I15b2 V中, 7	I15c2 V中, 16	I15c1 V中	
						45点中の2点				

2 石器

概要

平成13年度、宮戸4遺跡では遺物包含層より13,403点の石器等が出土している。大分類ではフリークが8,836点と最も多く、礫・礫片が2,570点でこれに次ぐ。定型的な石器は、剥片石器1,341点、磨製石器372点、礫石器271点の計1,984点出土した。剥片石器は石鏃が534点と最も多いが、破片・未製品がほぼ半数を占める。その他、つまみ付ナイフ、スクレイパーなどの刃器類の多さが目に付く。磨製石器は磨製石斧を主体とするが、大部分が剥片と未製品であり、刃部を残す製品は非常に少ない。礫石器では、断面三角形または扁平な礫を素材とする、すり石が多く出土している。

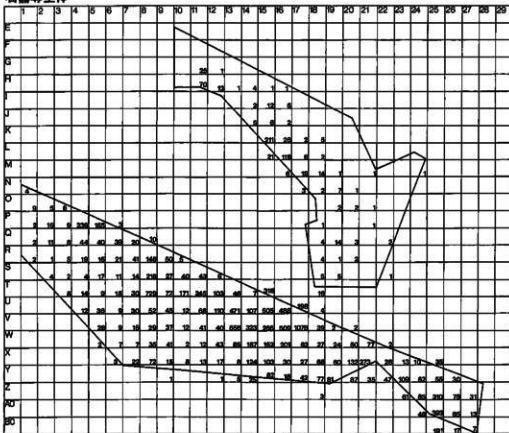
石器等全体の出土傾向を見ると、層別では、V層下位、V層中位、VI層からほぼ4:2:1の比率で出土している。V層下位からは、縄文時代早期後半～前期前半の土器群が出土しており、石器も同様の時期に製作されたものが多いと推測される。出土分布では、調査区中央部、U・V-13～17グリッド付近の、微高地に挟まれた沢に集中が見られる。地形的に遺物が溜まりやすいこともあるが、南西側の後背地にあたる標高25～27mの台地上に主体となる集落が存在する可能性がある。調査区北側のS・T-8グリッドでもやや出土点数が多い。これは大部分が微細なフリーク・チップであり、石器製作の場であるFC-1より周囲に散らばったものと考えられる。

その他、包含層からは自然礫154,723点が出土した。V層の中位から下位にかけて、凝灰岩、流紋岩、砂岩を主体とする亜円礫・円礫が密集して出土し、当初はこれを集石遺構の可能性があると考えていた。しかしながら、調査の進捗につれ礫群は調査区全体に広がり、遺構としてのまとまりを把握するのが困難となった。そこで、最も礫が集中していたQ-7・8グリッドでトレンチ調査を行い、土層断面を観察したところ、ずっと下位のVII層の礫が何らかの原因で上位に表れ、VII～V層を通じて連続と自然堆積したものであることがわかった。人為的な遺構ではないことが判明したが、これらの礫の中に礫石器等が混在しているため、すべてを包含層出土の遺物として取り上げることとした。現場において水洗後、加工痕・使用痕・被熱の有無を確認し、自然礫に分類したものは廃棄した。

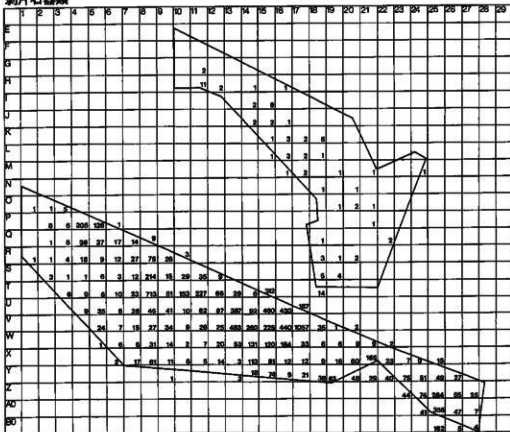
表VI-2-1 層別別出土石器等一覧

	分類	III層	IV層	V層			VI層	攪乱 風衝木	表探 掘土	不明	計
				上位	中位	下位					
剥片石器	石鏃	16	12	41	129	265	62	8	1		534
	石槍・ナイフ	1		3	4	17	1				26
	石	1	1	7	25	36	10			1	81
	つまみ付ナイフ	4	2	8	28	61	8	1			112
	スクレイパー	5	2	8	56	129	25	2		1	228
	ピース・エスキーユ		1	2		14	3				20
	Rフリーク	9	9	17	52	113	24	1			225
	Uフリーク	1		3	12	21	6	1			44
	両面調整石器		1	2	5	5	2				15
	石核・原石		1	3	19	31	2	2	1		59
剥片	フリーク	209	153	467	2183	4004	1346	442	11	21	8836
磨製石器	石斧	18	12	24	156	150	6	6			372
	たたき石	1		8	11	26	2	1			49
礫石器	くぼみ石	1	1		6	9					17
	すり石	4		14	25	62	11	4		2	122
	石鏃						2				2
	砥石			1	12	11					24
	台石	2	1	2	16	32	4				57
	加工痕のある礫			3	2	2					7
礫・礫片	礫・礫片	166	168	354	615	1111	98	54		4	2570
	砥石			2	1						3
合計		438	364	967	3358	6102	1610	522	13	29	13403

石器群全体

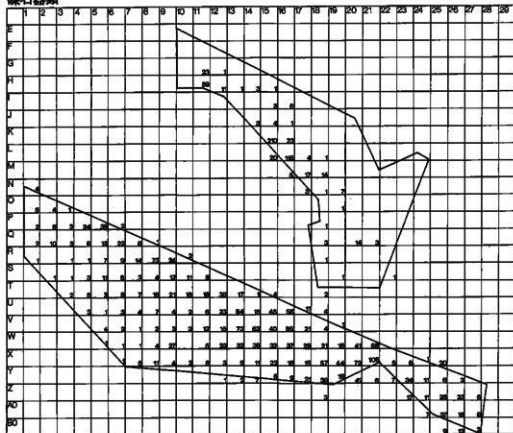


剥片石器類

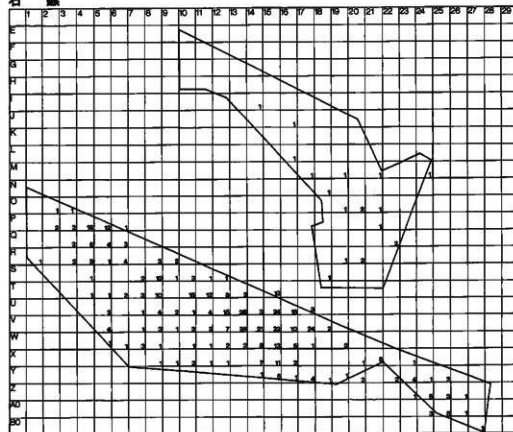


图VI-2-1 包含層出土石器分布图(1)

礫石器類

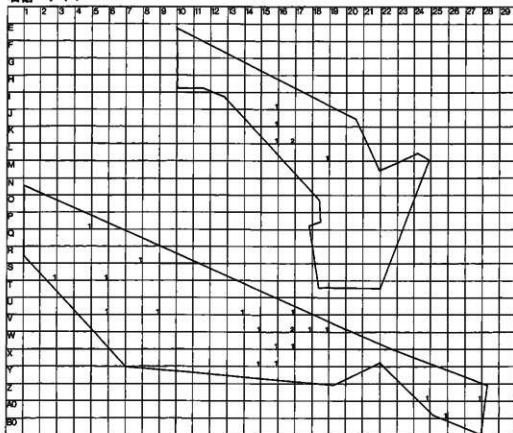


石 鏃

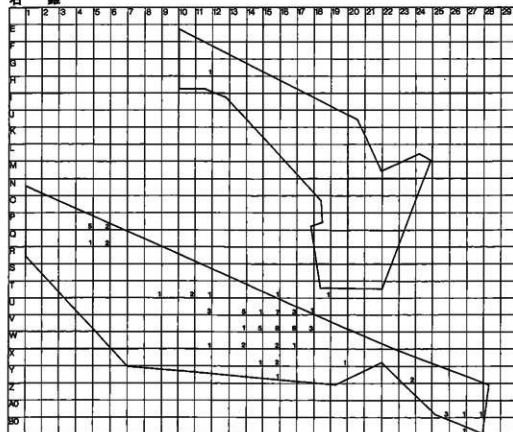


図VI-2-2 包含層出土石器分布図(2)

石槍・ナイフ

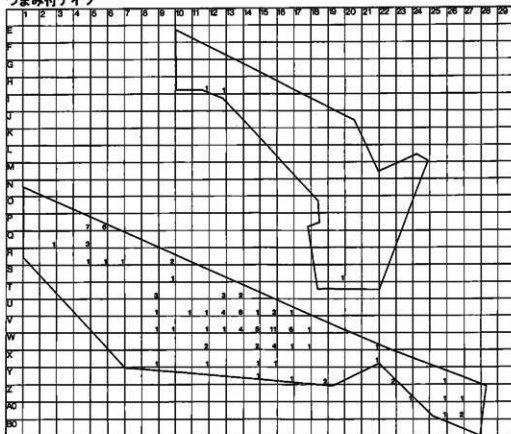


石鏃

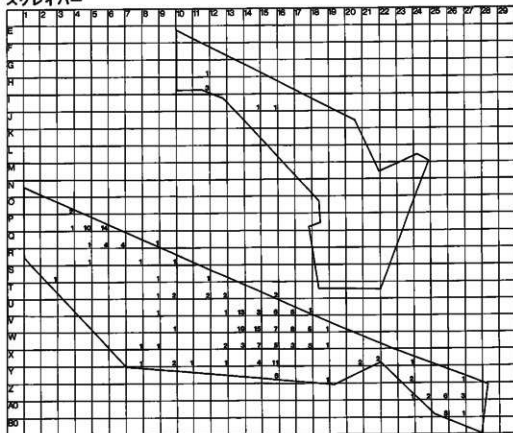


図VI-2-3 包含層出土石器分布図(3)

つまみ付ナイフ

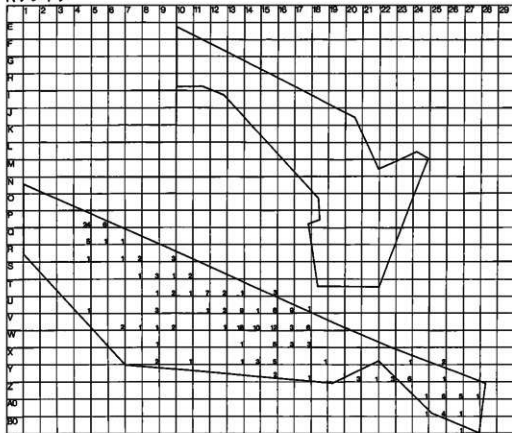


スクレイパー

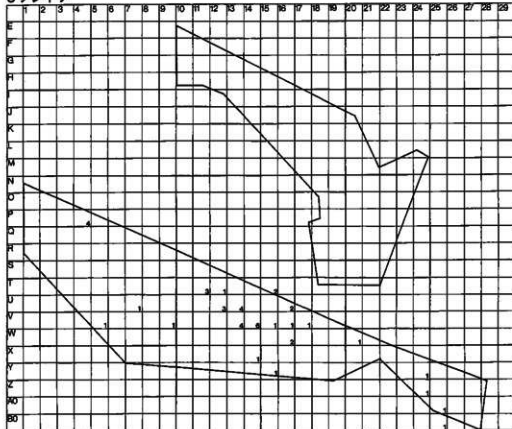


図VI-2-4 包含層出土石器分布図(4)

Rフレイク

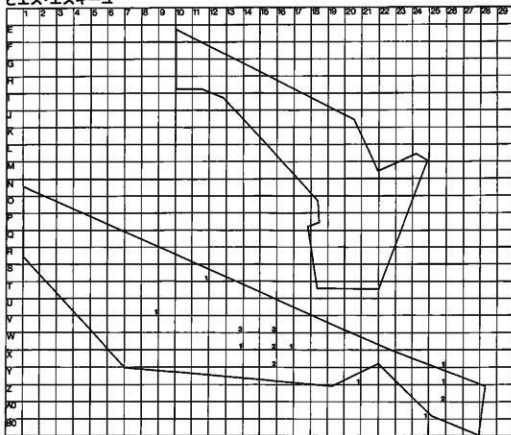


Uフレイク

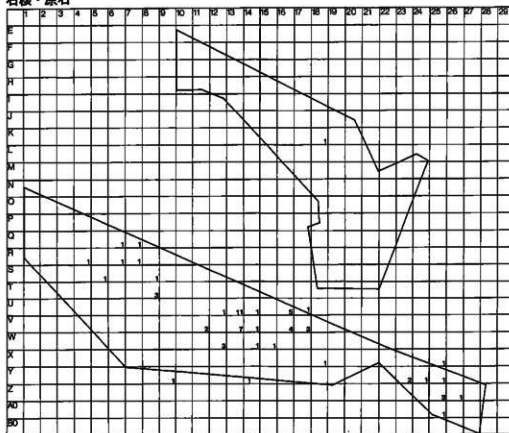


図VI-2-5 包含層出土石器分布図(5)

ピエス・エスキュー

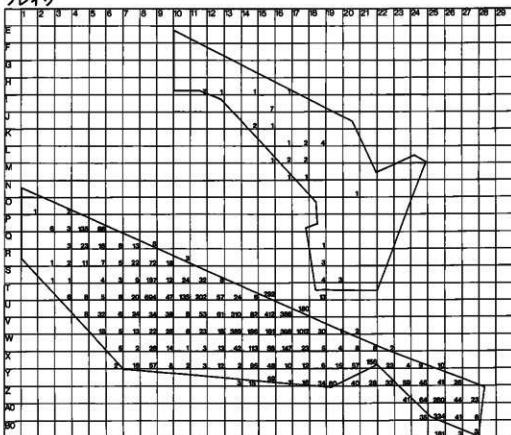


石核・原石

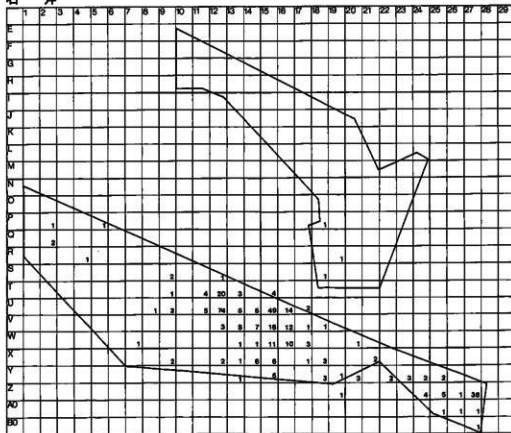


図VI-2-6 包含層出土石器分布図(6)

フレイク

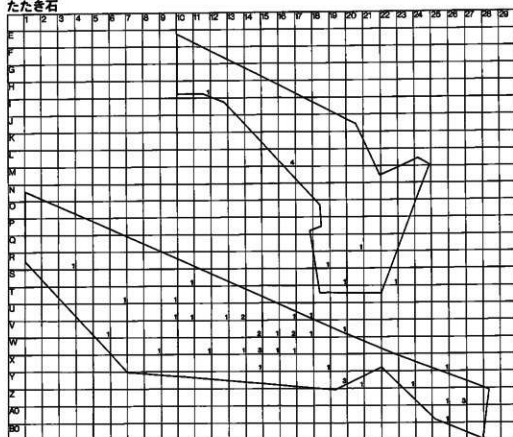


石 斧

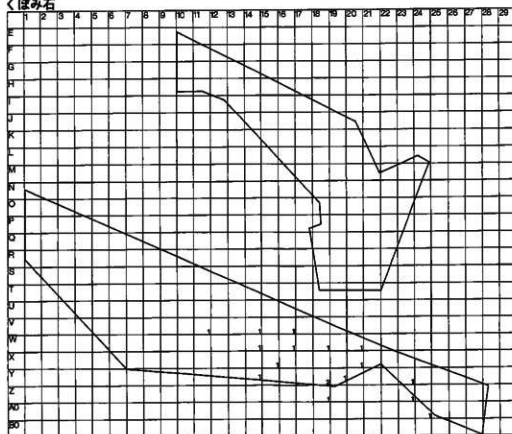


図VI-2-7 包含層出土石器分布図(7)

たたき石

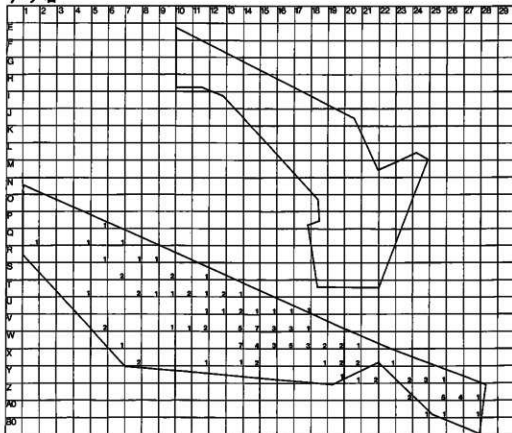


くぼみ石

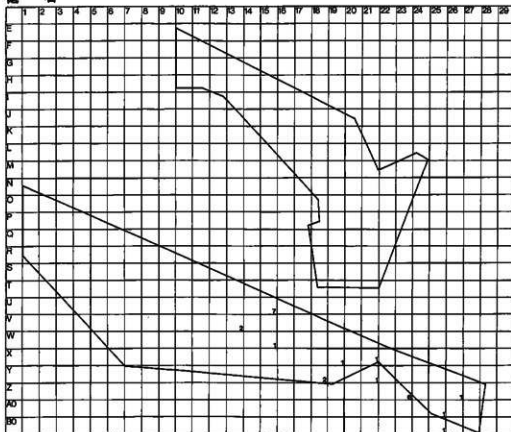


図VI-2-8 包含層出土石器分布図(8)

すり石

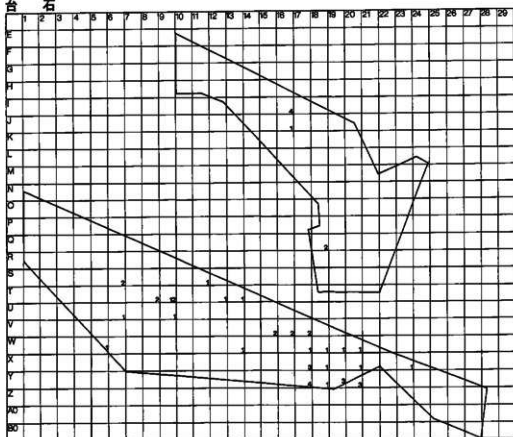


礫石

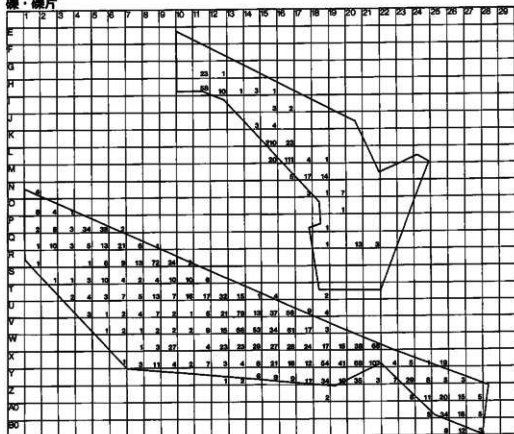


図VI-2-9 包含層出土石器分布図(9)

台石



礫・礫片



図VI-2-10 包含層出土石器分布図(00)

1) 剥片石器

石鏃(図VI-2-11-1~77、12-78~115、表VI-2-2~4、図版58~60)

534点出土している。調査区全体より満遍なく出土するが、特にU・V-12~17グリッド付近の、浅い沢地形の内部で多い。出土層位はV層下位が263点と過半数を占める。形態別では、柳葉形81点、木葉形3点、五角形7点、三角形161点、有茎77点、茎が明瞭に見られないもの18点、形態不明な破片37点、未製品150点となっている。破片・未製品を除くと、三角形のものが最も多く、柳葉形がこれに次ぐ。石材別では、黒曜石522点、頁岩8点、粘板岩・凝灰岩・珪岩・チャートが各1点で、ほとんどが黒曜石である。ここでは115点図示した。1~26は薄身のもの。1~22は柳葉形。柳葉形は短身のもの(1~16)と長身のもの(17~22)がある。長身のもの、先端部と基部を欠損するものが多い。21は両側縁が鋸歯状になっている。22は基部に浅い抉りが見られるもので、被熱している。23・24は木葉形。24は幅広く、先端部が全体の約1/3ほどである。裏面に主刺離面を残す。25・26は五角形。25は基部と比較すると先端部がやや細身であることから、柳葉形のを再加工した可能性がある。26は両面を丁寧に調整し、非常に薄く仕上げられている。27~77は三角形の石鏃。形状から基部が直線的なもの(平基)と基部が内湾するもの(凹基)に分けた。前者は短身で正三角形に近いものが大部分で、後者は短身から長身まで見られるが、縦長の二等辺三角形のものが多い。27~46は平基。27は粘板岩の剥片を素材とし、粗く加工したもの。28は肉厚で、基部の両端が丸く調整されている。41・42は左右の側縁の長さが等しくなく、非対称になっている。45は表面に自然面を残す。46は剥片の周縁部のみを荒く調整したもの。47~77は凹基。47は側縁と比べて下縁が長いもので、脚部が左右に張り出している。60~77は特に基部の抉りが大きいもの。72・73は細身で縦長のもの、両面が細かに調整されている。特に73は赤レンガ色の凝灰岩と考えられる非常に軟らかい石材を用いており、本遺跡では他の剥片石器類を含めても例がない。78・79は菱形。79は細身で先端部が鋭く、側縁が直線状になっている。80~106は有茎。80~83は基部よりも基部が長いもの。特に83は幅広いの基部を有する。84~106は比較的基部が短いもの。凸基が大半を占め、99のみ平基である。側縁は直線状のものが多いが、90~92は内湾、104~106は外湾する。103は基部が斜めになっており、両面に刺離面を残す。107~114は茎が明瞭に見られないもの。厚手で大型のものが多い。113は薄身で柳葉形に近い形状だが、右側縁に抉りが調整されている。もともとは柳葉形の石鏃を有茎に再加工しようとした可能性がある。114は縦長の形状が石鏃によく似ているが、先端部が扁平であること、刺突による潰れなどの使用痕が見られないことから、ここに含めた。115は未製品。先端部以外はまだ調整が荒い段階で終わっている。ここで図示したものの石材は17が頁岩、27が粘板岩、73が凝灰岩、91がチャート、92が珪岩、その他はすべて黒曜石である。

全体の傾向として、柳葉形・五角形がVI層~V層下位、三角形(短身)がV層下位~中位、有茎がV層中位~上位、三角形(長身)がV層上位~III層より主に出土している。石鏃が基本的に「飛道具」であり、遺物包含層が動植物の活動や冬季の凍上現象の影響を受けていることを考慮すると、これが直ちに時期差を反映するとは断言できない。ただし、大まかに同一層位から出土する土器と、他遺跡の出土例などから、柳葉形・五角形が縄文時代早期後半、三角形(短身)が同前期前半、有茎が同中期~後期、三角形(長身)が同晩期~続縄文時代初頭の所産のものが多いのではと推測している。また、27のようなスレート素材とする三角鏃は、今年度はIII層から1点のみ出土した。平成12年度は米原3遺跡で3点、米原4遺跡B地区で1点出土しているが、この地域では出土例が少ないようである。しかし、早来町安平A遺跡、苫小牧市タブコブ遺跡、千歳市オサツ2遺跡、江別市荻ヶ丘遺跡での調査例(ともに墓墳)から、続縄文時代後北式期のものである可能性が高い。

ここで掲載した石鏃のうち、石材が黒曜石のものは、現在産地分析を依頼中である(被熱している22、排土より出土した101を除く)。今年度は遺構に伴う石器が非常に少なく、包含層出土のものから器形が明瞭に分かれる石鏃を分析することにした。平成14年度以降の報告書に掲載を予定している。ちなみに平成12年度の調査では、宮戸3遺跡の縄文時代早〜前期と考えられる包含層より出土した黒曜石製遺物は、大部分が十勝三股産であった。また、米原4遺跡B地区で検出された同中期後半の住居跡より出土した黒曜石製遺物は、赤井川産のものが多量。一方、やや離れた米原3遺跡の同中期末の住居跡から出土した黒曜石製遺物も赤井川産であった(北埋調報153)。

石槍・ナイフ(図VI-2-12-116~124、表VI-2-4、図版61)

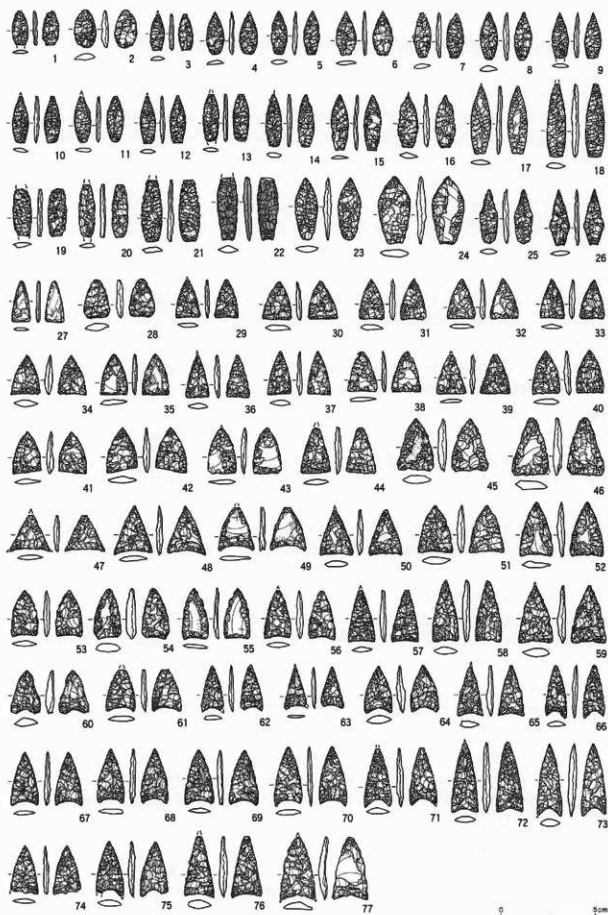
26点出土している。このうち破片が11点、未製品が5点である。石材別では、黒曜石が24点、頁岩が2点となっている。定型的な剥片石器のなかでは最も出土点数が少なく、分布も疎らである。9点図示した。116~121は茎をもつもの。すべて凸基である。116は未製品で、表面の周縁部のみが加工されている。117は裏面に自然面を残す。118~121は基部を欠損する。119は厚身で、両側縁の調整が急角度になっている。120は先端部で切損している。121は基部を含めた復原値が5cm以上と推定したため石槍・ナイフに分類したが、その形状は石鏃の110・111などに近似する。122~124は茎が明瞭に見られないもの。122は調整が粗く、裏面に主剝離面を残す。123・124は菱形を呈する。図示したものは、122が頁岩製、それ以外は黒曜石製である。

石鏃(図VI-2-13-125~151、表VI-2-4、図版61)

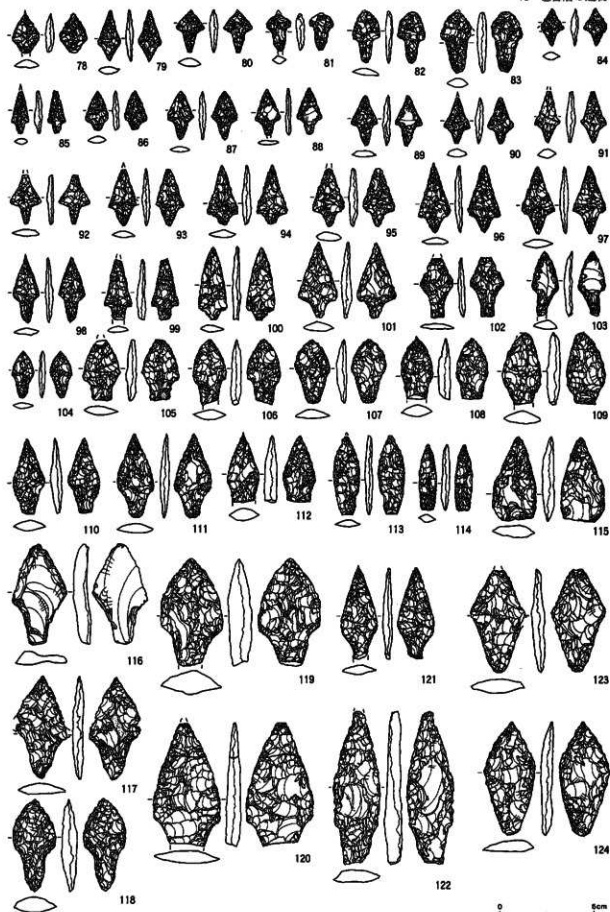
81点出土している。このうち破片が12点、未製品が6点である。U15、V15・16グリッドで各8点出土している。V層下位が36点で最も多く、V層中位が25点でこれに次ぐ。石材別では、黒曜石78点、頁岩3点となっている。27点図示した。125~130は棒状のもの。全面に調整加工されているが、130のみ基部に自然面を残す。126は被熱している。127~130は側辺に使用による潰れが著しく見られる。131~134は周縁のみを加工したもの。素材の形状をあまり変えておらず、両面に剝離面を残す。特に132は、下端の右側辺にのみ簡単な調整が施されている。131・132は基部に自然面を残す。134は基部の上部を欠損している。135は断面が湾曲するもの。136~150は刺突部を顕著に作り出したもの。136~144は比較的大きめの基部を有する。137・139・140は基部に自然面を残す。145~150は特に細長の刺突部を有する。145・150は刺突部が折損している。151はつまみ付ナイフを転用したもの。もとは周縁部のみ加工された斜形つまみ付ナイフであったと推測され、刃部を再加工して刺突部を作り出している。両側辺が使用によって磨減している。図示したものは、126、146が頁岩製、それ以外は黒曜石製である。

つまみ付ナイフ(図VI-2-13-152~158、14-159~183、15-184~207、表VI-2-4・5、図版62~64)

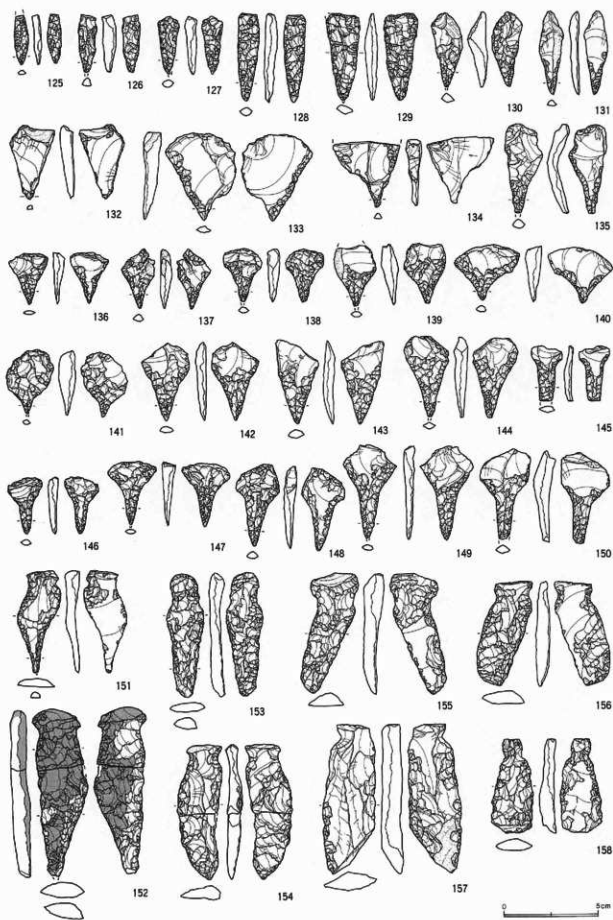
112点出土している。このうち破片が29点、未製品が2点である。V15グリッドで12点と最も多く出土している。出土層位は、V層下位が61点で過半数を占める。石材別では、黒曜石94点、頁岩16点、珪岩・メノウが各1点である。形態別ではすべて縦型であり、横型は出土していない。また、つまみ部と刃部の軸線が斜交するものが多い。56点図示した。152~158は両面加工のもの。152は2点が接合したもので、被熱後に再加工している。刃部の先端を尖頭状にしていることから、151のように石鏃に転用しようとした可能性が高い。刺突部の加工が終わらないうちに折損してしまったと考えられる。154・155はつまみ部に自然面を残す。154も2点が接合したもので、刃部を折損する。157はつまみ部の作り出しが不明瞭で、加工が粗雑であることから、未製品の可能性がある。159~183は片面全面加工で、裏面の側縁に刃部をもつもの。159~163は比較的小型のもので、頁岩、メノウなどの石材が用いられている。いずれも黒曜石と比較して細かな調整が施されている。162はつまみ部が小さく、右



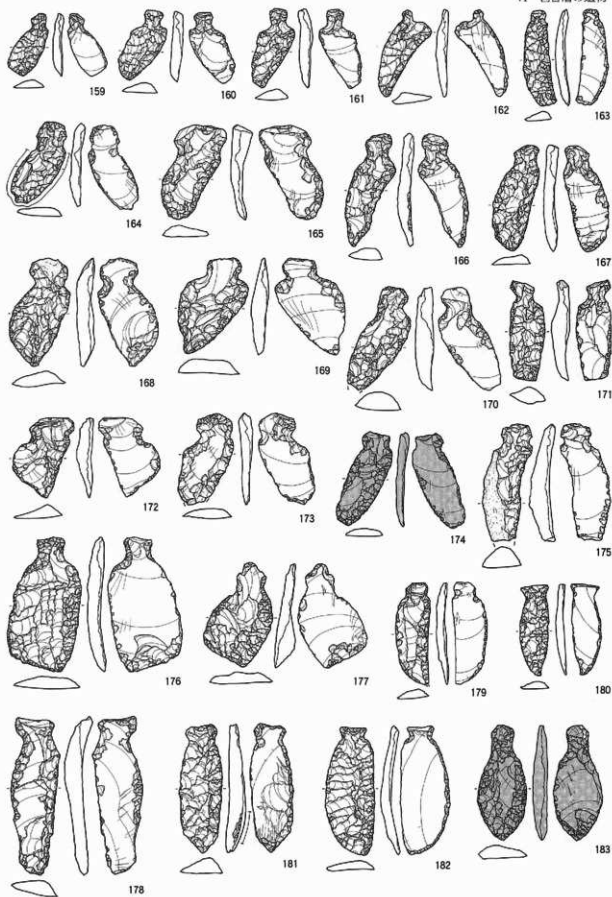
図VI-2-11 包含層出土の石器(1)



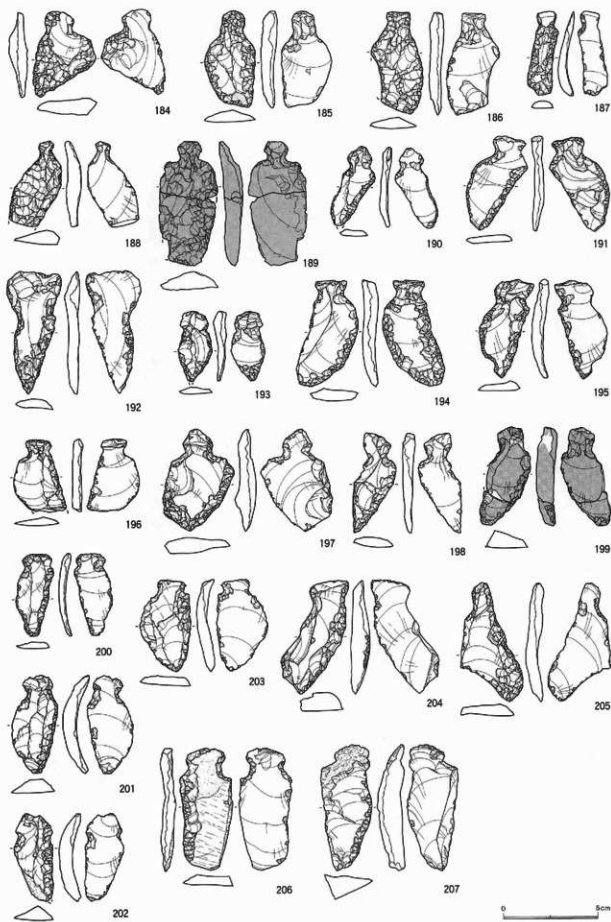
図VI-2-12 包含層出土の石器(2)



図VI-2-13 包含層出土の石器(3)



図VI-2-14 包含層出土の石器(4)



図VI-2-15 包含層出土の石器(5)

側縁の肩部分がやや突出している。164は刃部全体が使用によって磨滅しており、特に側縁は著しく擦り潰れている。165は厚身に幅広のつまみ部を有する。168はつまみ部、175は刃部に自然面を残す。174は被熱により、光沢が失われている。176・177は扁平で幅広の刃部をもつもので、下端が切られたように直線状になっている。181は刃部に厚みがあり、外湾している。182は素材の薄片が非常に薄く、内湾しており、刃部の調整が丁寧である。184～189は片面全面加工で、裏面に刃部をもたないもの。186は左側縁を欠損するが、もとの形状は176・177に近いと推測される。189は被熱により表面が剝落し、刃部が折損している。190～207は周縁部のみ加工されているもの。192はつまみ部が刃部よりも幅広になっている。195は刃部に挟りが見られる。205は左側縁が加工されておらず、未製品の可能性がある。206・207は表面に自然面を残す。図示したものは、157、161～163、179～182、187、188が頁岩製、160がメノウ製、189が珪岩製、それ以外は黒曜石製である。

スクレイパー(図VI-2-16-208-231、17-232-253、18-254-262、表VI-2-5・6、図版64～66)

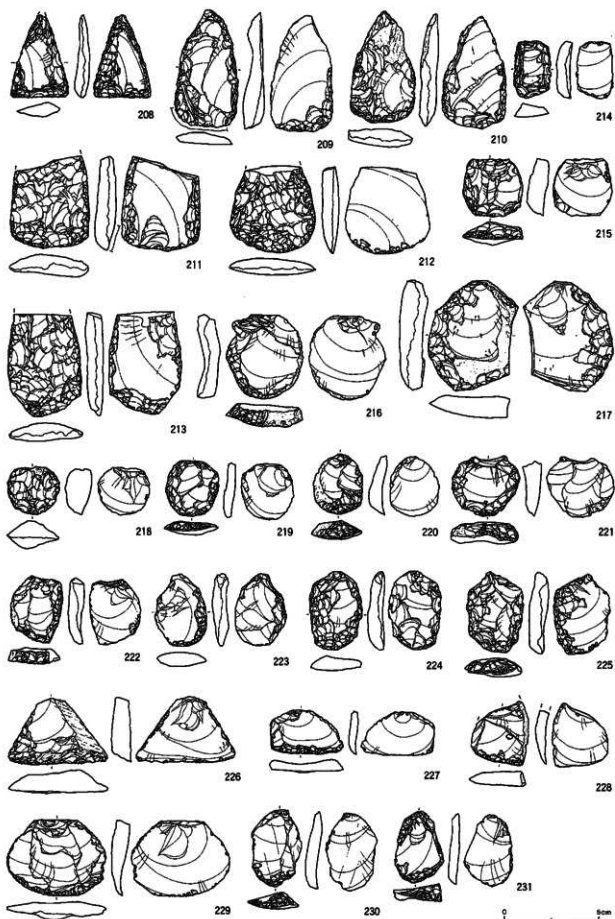
228点出土している。このうち28点が破片である。P4・5、U13、V12・13グリッド付近に分布の集中が見られる。石材別では、黒曜石188点、頁岩35点、チャート・メノウ各2点、凝灰岩1点である。55点図示した。208～213は石べらと称されるもの。208～210は三角形で、周縁部のみが加工されている。208は側縁および下縁に直線状の刃部を有する。209は下縁の刃部が使用によって擦り潰れている。210は表面に自然面を残す。211～213は片面全面加工のもので、上部を欠損する。214～225はラウンド・スクレイパー。214・215は四角形のもの。214は刃角が高く、断面が台形になっている。215は上部に打面、右側縁に自然面を残す。216～221は円形のもの。217以外は、裏面に刃部を持たない。218は断面が非常に厚く、片面が全面加工されている。222～225は楕円形のもの。224は周縁の刃角が高く調整されており、厚みがある。225は右側縁に使用痕が見られる。226～231はエンド・スクレイパー。226は素材の剝片の形状をほとんど変えず、下縁に刃部を設けているもの。表面に自然面が残る。227・228は直線状の、229～231は外湾する刃部を有する。232～262はサイド・スクレイパーで主に縦長の剝片を素材とする。232～242は刃部が張り出すもの。232・233は素材の形状のため、断面が著しく湾曲している。238は被熱している。242は表面が粗く全面加工されており、裏面の周縁にも刃部が設けられている。243～253は刃部が直線的なもの。246はやや透明度の高いメノウが用いられており、刃部の剝離は非常に把握しづらい。下部を欠損する。253は表面に細かな調整が施され、左側縁にも外湾する刃部が設けられている。254・255は刃部が内湾するもの。254は片面全面加工で、両側縁に刃部を有する。上下端に自然面を残す。256～262は刃部が尖頭状のもの。261は先端が左へ曲がっている。260を除き、いずれも自然面を残す。図示したものは、209、211～213、242、256、260が頁岩製、210がチャート製、246がメノウ製、それ以外は黒曜石製である。

ピース・エスキュー(図VI-2-18-263・264、表VI-2-6、図版67)

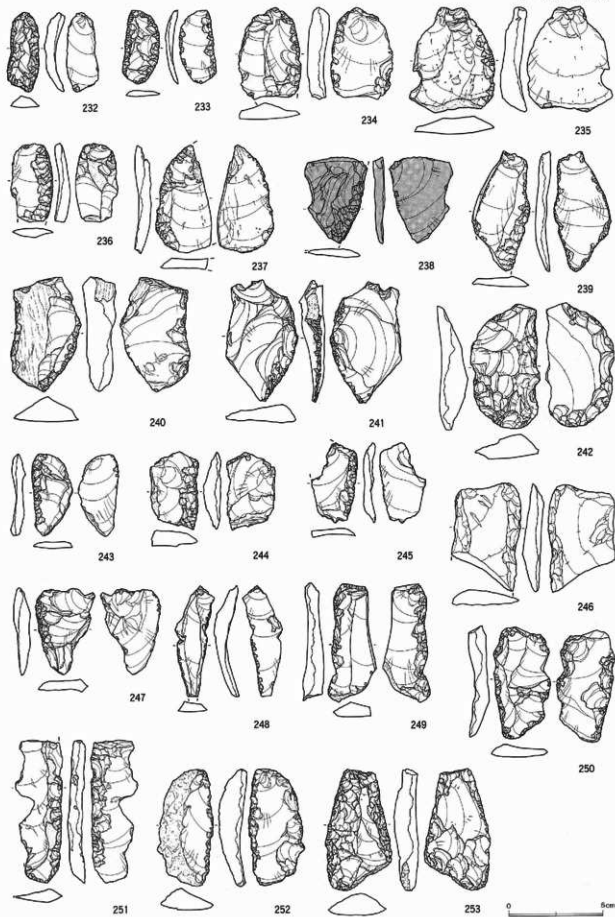
20点出土している。すべて黒曜石である。2点図示した。263・264は剝片の上下端に打撃による階段状の細かな剝離が認められるもの。263は両面に細かな調整が施されている。264は縦方向の剝離作業によって、両側縁が鋭角になっている。

石核(図VI-2-18-265～269、表VI-2-6、図版67)

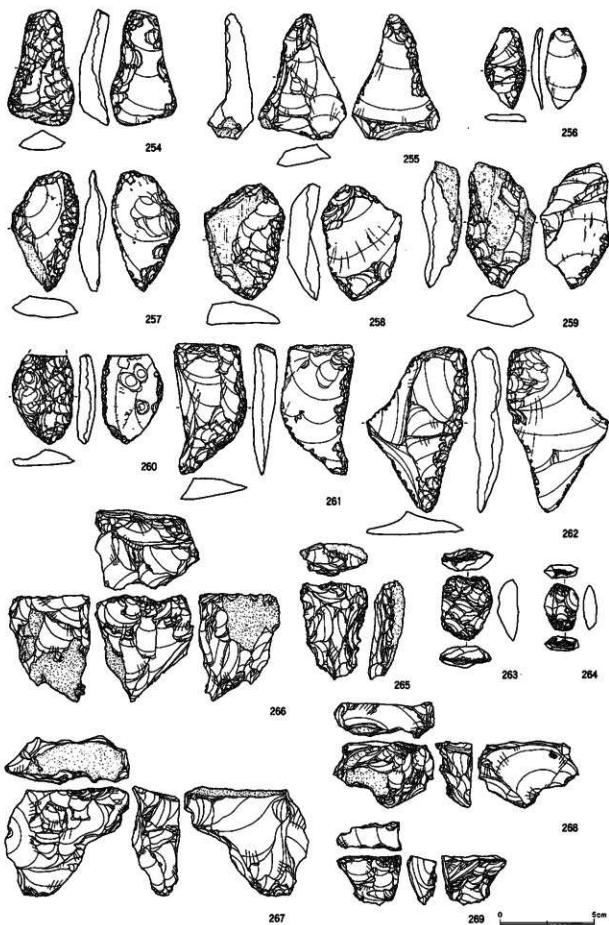
59点出土している。大部分が黒曜石で、1点のみ頁岩である。同一グリッド出土の剝片を主体として、接合作業を行ったが成果は得られなかった。5点図示した。265は背面に礫面をもつ亀甲形の残骸。266～269は上面に打面を設定して剝離作業を行ったもの。いずれも打面を転移しながら剝片を剥ぎ取っている。各作業面から、少なくとも266は4回、267・268は3回、269は2回の転移が認められる。265～268は自然面を残している。図示したものは、すべて黒曜石である。



図VI-2-16 包含層出土の石器(6)



図VI-2-17 包含層出土の石器(7)



図VI-2-18 包含層出土の石器(8)

(2) 磨製石器

石斧(図VI-2-19-270~276、表VI-2-6、図版67)

372点出土している。石斧・石斧片26点、剥片287点、未製品56点、石材2点、擦切残片1点となっており、刃部または基部を残すものは少ない。U12グリッドで74点、U15グリッドで49点と多く出土しているが、いずれも破片や微細な剥片である。石材は緑色泥岩が大部分で、蛇紋岩、片岩などは少ない。7点図示した。270~275は、いずれも両刃である。270は擦切手法によって製作されたもの。ほぼ全面が研磨されているが、基部と刃部の一部を欠失する。刃縁は直線状である。石材や製作技法などから、縄文時代早期の所産と考えられる。271~275は打ち欠きによる整形が見られるもので、部分的に研磨されている。271は使用により基部が大きく剥落し、被熱している。鏃は不明瞭である。272は刃部の破片。刃縁が横方向に研磨され、直線状になっている。273は両側縁が強く研磨されており、表裏面との間に稜が作り出されている。鏃は比較的幅広く、刃縁は弧状になっている。頭部に装着痕と考えられる赤褐色の付着物が見られる。274は、右側縁に両面から細かに打ち欠くことによって稜線を作り出そうとした痕跡が残る。使用による刃部の磨滅が著しい。275は特に鏃の周辺を強く研磨しているが、自然面を残す。刃縁は弧状である。基部の上半を折損する。276は未製品。両面を打ち欠いて整形されているが、研磨痕は見られない。図示したものは、270が蛇紋岩製、271が泥岩製、272、274~276が緑色泥岩製、273が片岩製である。

(3) 礫石器

たたき石(図VI-2-20-277~283、表VI-2-6、図版68)

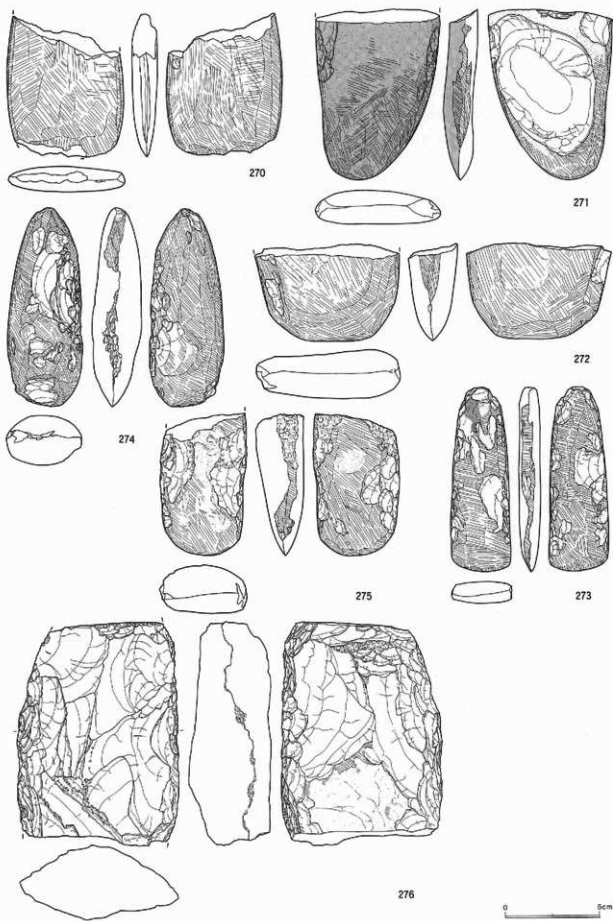
49点出土している。7点図示した。出土分布は疎らである。277・278は棒状礫の両端にたたき痕が見られるもの。277はやや厚みのある楕円礫を打ち欠きにより整形したもので、主に下端を使用している。被熱による爆ぜのため、表面が剥落する。288は石斧未製品を転用したもので、打ち欠きによる加工痕が残る。腹面にもたたき痕が見られる。裏面の一部を欠損する。279は楕円礫の底面および腹面にたたき痕が見られるもの。特に底面を強くたたいており、潰れによる白濁が著しい。断面の形状から、すり石を転用した可能性もある。280~282は扁平礫の周縁にたたき痕が見られるもの。280はほぼ全周をたたいており、表裏面には擦り痕が見られる。風化により礫面が脆くなっている。281は表面が煤けのために変色しており、黒く煤がこびり付いた部分も見られる。282はくぼみ石と複合しており、周縁よりも腹面の方が強くたたかれている。283はやや大型の円礫の上面をたたいているもので、欠損する。片手で持てる重量であるため、たたき石に含めたが、下面が平坦で安定性が高いことから、据え置き状態で使用した可能性もある。石材は、277・283が凝灰質泥岩、278が緑色泥岩、279が安山岩、280・281が片麻岩、282が花崗岩である。

くぼみ石(図VI-2-20-284~286、表VI-2-6・7、図版68)

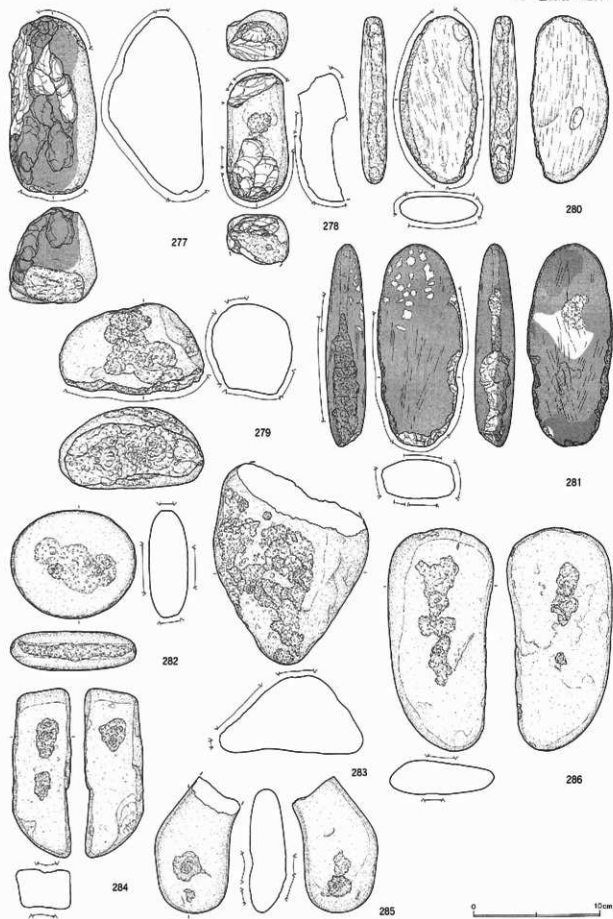
17点出土している。3点図示した。出土分布は疎らである。284は角柱状礫の相対する2面がたたかれているもの。上面で2ヶ所、下面で1ヶ所、たたき痕が見られる。285・286は扁平礫の表裏面がたたかれているもの。285は欠損品で、表裏面とも2ヶ所、たたき痕が見られる。特に表面の上部1ヶ所が著しく窪んでいる。286は、表裏面ともに、打点を移動しながら複数回にわたってたたかれている。石材は、284が凝灰岩、285が泥岩、286が砂岩である。

すり石(図VI-2-21-287~295、22-296~303、23-304~309、表VI-2-7、図版69~71)

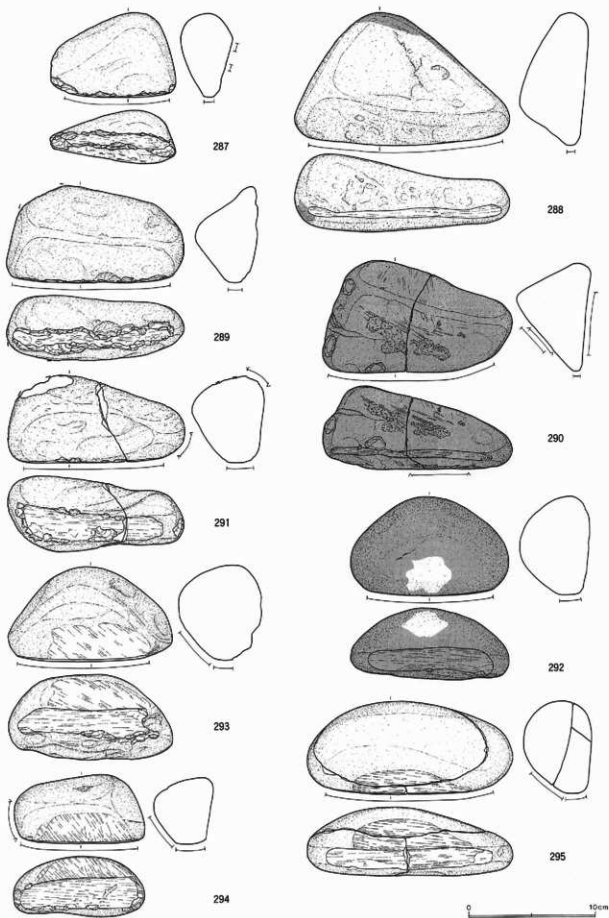
122点出土している。23点図示した。礫石器では最も出土点数が多く、調査区全体に分布する。287~299は断面が隅丸三角形の礫の稜をすったもの。いずれも断面が鋭角をなす一辺が使用されている。287は比較的小型のもので、掌の中に収まる大きさである。擦りの程度は強く、よく使い込まれて



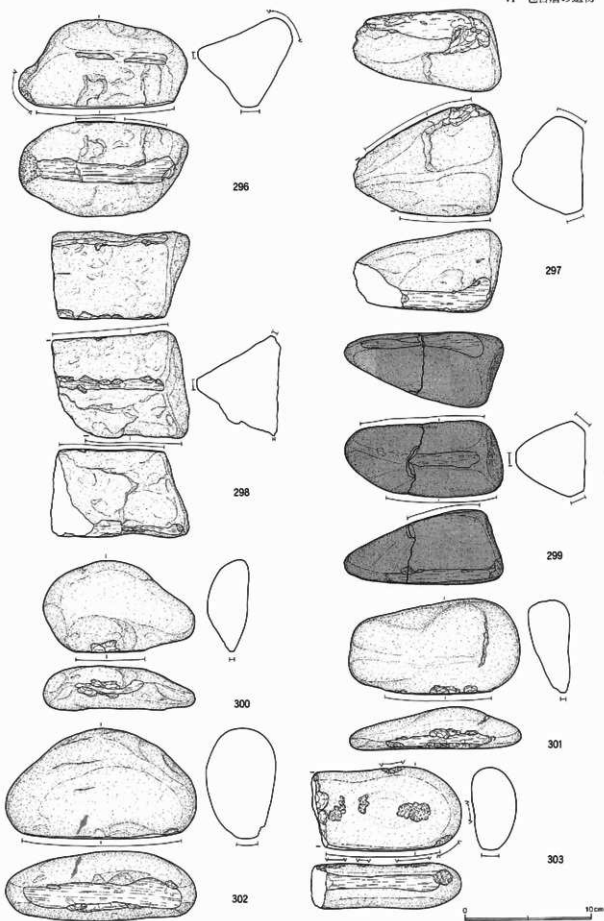
図VI-2-19 包含層出土の石器(9)



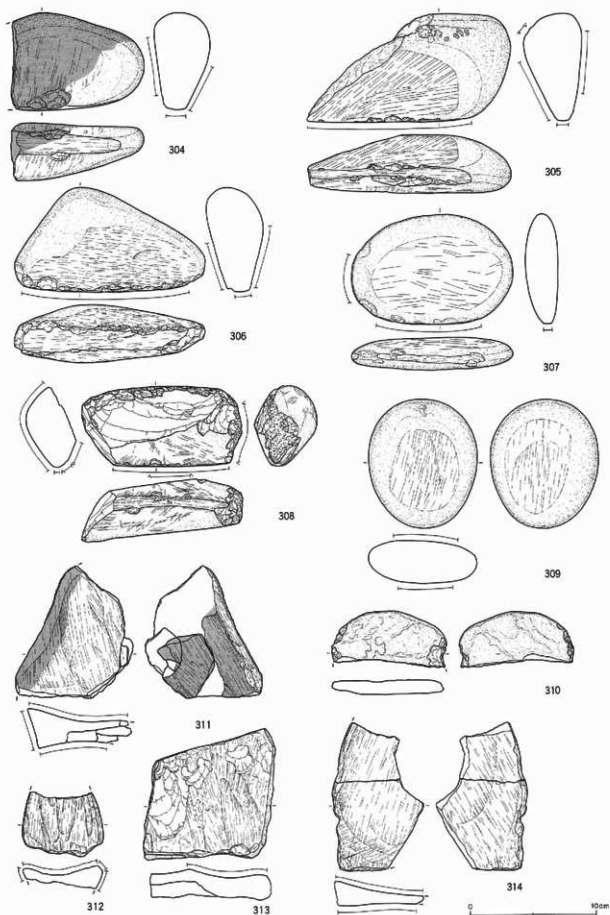
図VI-2-20 包含層出土の石器(10)



図VI-2-21 包含層出土の石器(II)



図VI-2-22 包含層出土の石器⑫



図VI-2-23 包含層出土の石器(13)

いる。288は被熱により赤化した部分が見られる。擦りの程度は弱く、使用前の礫面の凹凸が若干残る。289は破損品。強く擦っているが、本来の石質のためにすり面は滑らかではない。290は2点が接合したもので、全体に被熱による赤化と煤けが見られる。すり面の幅が狭く、使用は少なかったと考えられる。291も2点が接合したもの。幅広のすり面を有し、使用頻度の高さが窺える。292は被熱による赤化が著しい。すり面と持ち手の指があたる部分に礫面が露出していることから、被熱後に使用されたと考えられる。293～295は腹面にもすり痕が認められるもの。293は下弦に比して腹面の擦りは微弱である。294は287と同様に小型であるが、下弦のすり面が2.5cmと今年度出土のすり石で最も幅広い。295は3点が接合したもので、下弦・腹面ともに強く擦られている。図示できなかったが、背面の中央が浅くくぼんでおり、持ち手の親指があたる部分ではないかと推測される。296～299は2か所以上のすり面をもつもの。296はたたき石と複合しており、側弦の擦りは弱い。297は欠損品。上弦・下弦ともに幅広いすり面を有する。298も欠損品で、上弦・下弦・側弦が擦られている。299は2点が接合したもので、強く熱を受けて全体が暗赤褐色になっている。上弦・下弦・側弦ともに強いすり痕が認められる。300～307は扁平礫の側縁をすったもの。302は腹面に炭化物あるいは煤と推測される物質が付着している。303は欠損品で、くぼみ石と複合している。304～306は背腹両面にも広いすり面を有するもの。304は欠損後に被熱しており、赤化した部分が見られる。308は石斧未製品を転用したもので、たたき石と複合する。309は扁平礫の腹・背面をすってあり、その形状から土器の内面を調整する「磨き石」である可能性もある。石材は287・288・292・294・295・297・299～301・303が砂岩、289・293・296が凝灰岩、290・304・306が泥岩、291・302・307が片麻岩、298が玄武岩、305・308が緑色泥岩、309が花崗岩である。

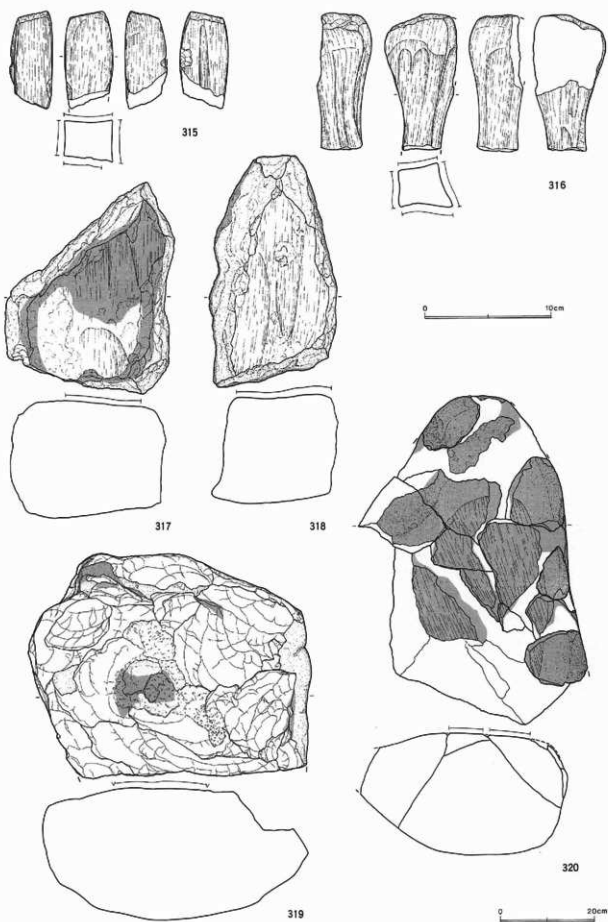
本遺跡出土のすり石は自然礫の形状をそのまま利用したものが多く、打ち欠きや敲打による整形は見られない。イモッペ川対岸の米原4遺跡では北海道式石冠が多く出土している。これに対して宮戸4遺跡では、平成12年度に数点出土しているが、今年度は見られない。米原4遺跡が縄文時代中期後半の集落を主体とし、宮戸4遺跡が同早期後半の遺物を主体とすることに関係すると思われる。断面三角形礫や偏平礫を素材とし、側縁に縦長のすり面を有するものは、図示以外のものを含めて56点出土している。このうち、全体の3分の2以上残存していると推定されるもの41点について、使用の程度を比較するためにすり面の最大幅を計測した。すり面が複数の場合は最も幅広いものを採用した。最大幅1cm未満が26点、1cm以上2cm未満が11点、2cm以上が4点という結果であった。素材礫本来の形状や石質が影響することも考えられるが、全体としてすり面の幅が狭く、すりの程度が弱いものが多い。これは長期間に繰り返して使用されたのではなく、道具としては短命であったことを示している。本遺跡では、作業を行う際に近くにある自然礫の中から形状が適しているものを選択し、すり石として使用後はその場にすぐ遺棄してしまう場合が大半であったと推測される。

石錘(図VI-2-23-310、表VI-2-7、図版71)

2点のみ出土している。このうち1点を図示した。310は石錘の可能性のある破片。偏平礫の長軸の両端に打ち欠きをもつが、ほぼ半分を欠失する。石材は結晶片岩。今年度出土のもう1点も破片である。石錘は宮戸地区では初めての出土であり、昨年度調査した周辺の米原3・米原4・宮戸3遺跡でも出土していない。次年度以降の出土例を待ち、考察したい。

砥石(図VI-2-23-311～314、24-312～318、表VI-2-7、図版72)

24点出土している。大部分が破片である。8点図示した。311～314は扁平な素材礫の両面または側面に複数の砥面が見られるもの。311は6点が接合したもので、被熱により赤化した部分が見られる。裏面は剝落しているが、強い研磨により中央部が薄くなったことが窺える。312は小型の砥石片。上半



図VI-2-24 包含層出土の石器(14)

分を欠損し、裏面が剥落している。ごく浅い溝が複数折り重なるように見られる。313は板状に整形した礫の上面を砥面とし、方向を変えながら研いでいる。314は2点が接合したもの。表裏面はよく使い込まれており、砥面が非常に滑らかになっている。315・316はいわゆる四面砥石で、棒状礫を角柱形に面取りして砥面を設けたもの。いずれも下半分を欠損する。315は裏面に浅い溝が見られる。316は裏面の一部が剥落している。各面とも顕著に使用されており、中央部が磨滅により窪んでいる。317・318は大型の砂岩礫を手ごろな大きさに打ち欠き、上面を砥面として使用したもの。2点の母岩は同一のものと考えられる。317は上面、318は下面が被熱している。317はそれほど使用されておらず、上面に本来の礫面が残る。これに対して318はよく使われており、砥面全体が浅く窪む。石材は、311～316が砂岩、317・318が凝灰質砂岩である。

台石(図VI-2-24-319・320、表VI-2-7、図版73)

57点出土している。大部分が破片である。接合関係や同一石材などから、全体で約10個体ほどと推測される。大型礫ですり面を有するものの中でも顕著な凹みが見られるものはなく、あえて「石皿」の名称は用いなかった。2点図示した。いずれも被熱している。319は大礫の上部を打ち欠いて平坦に整形し、台石としたもの。上面の中央部が数ヶ所たたかかれている。加工痕・使用痕の観察により、被熱後に使用されたと考えられる。320は破片13点が接合したもの。上面が強く擦られて、平坦になっている。高熱により全体が赤化し、礫の表皮面が剥落している。接合はしなかったが、320と同一個体と推測される破片が多数出土した。これらの破片および接合面の状態から、被熱後に人手により破砕されたと考えられる。石材は、319が流紋岩、320が花崗岩である。

(芝田)

表VI-2-2 包含層掲載石器一覽(1)

図番	分 類	調査区・番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石 質	備 考
1	石	鎌 U16c・5	V層下	1.72×0.83×0.19	0.3	黒曜石	破損品
2	石	鎌 U13b・24	V層下	1.93×1.15×0.31	0.7	黒曜石	
3	石	鎌 T10d・1	V層中	1.88×0.69×0.21	0.3	黒曜石	破損品
4	石	鎌 S8b・29	VI層	2.23×0.93×0.22	0.4	黒曜石	
5	石	鎌 S10c・6	V層下	2.27×0.81×0.23	0.4	黒曜石	
6	石	鎌 X15d・26	V層下	2.28×1.09×0.16	0.4	黒曜石	
7	石	鎌 U16c・24	VI層	2.31×0.99×0.23	0.5	黒曜石	
8	石	鎌 W16b・12	V層中	2.49×0.91×0.26	0.5	黒曜石	
9	石	鎌 U17b・20	V層下	2.38×0.90×0.22	0.4	黒曜石	破損品
10	石	鎌 T8c・32	V層下	2.40×0.87×0.22	0.4	黒曜石	破損品
11	石	鎌 V17d・17	V層下	2.39×0.89×0.18	0.4	黒曜石	破損品
12	石	鎌 T8c・33	V層下	2.48×0.80×0.22	0.4	黒曜石	破損品
13	石	鎌 T8d・3	V層上	2.48×0.80×0.17	0.4	黒曜石	破損品
14	石	鎌 T11b・4	V層下	2.72×0.82×0.25	0.6	黒曜石	
15	石	鎌 V11c・3	V層下	2.90×0.90×0.22	0.5	黒曜石	
16	石	鎌 Y25b・5	V層下	2.81×1.05×0.31	0.8	黒曜石	
17	石	鎌 S8b・10	V層下	(3.57)×1.04×0.28	(1.0)	頁 岩	
18	石	鎌 V14c・28	V層下	3.85×0.99×0.30	1.2	黒曜石	破損品
19	石	鎌 Y23b・9	V層下	2.49×1.00×0.26	0.8	黒曜石	破損品
20	石	鎌 A025a・7	V層中	2.72×0.87×0.22	0.6	黒曜石	破損品

表VI-2-3 包含層掲載石器一覧(2)

図番	分類	調査区番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
21	石 鏃	R4b・8	VI層	3.21×1.12×0.25	0.9	黒曜石	破損品
22	石 鏃	U16a・23	V層下	3.29×1.10×0.40	1.4	黒曜石	破損品 被熱
23	石 鏃	X11a・1	V層中	3.21×1.20×0.38	1.1	黒曜石	
24	石 鏃	T6a・1	V層下	3.52×1.68×0.40	2.2	黒曜石	
25	石 鏃	V17d・19	V層下	2.80×0.95×0.28	0.7	黒曜石	
26	石 鏃	Y15d・23	V層下	2.90×1.05×0.23	0.5	黒曜石	
27	石 鏃	O2a・1	III層	2.17×0.95×0.19	0.4	粘板岩	
28	石 鏃	V14b・7	V層下	2.00×1.40×0.36	0.9	黒曜石	
29	石 鏃	U17b・10	V層中	2.00×1.30×0.20	0.2	黒曜石	
30	石 鏃	W6a・1	V層下	2.00×1.55×0.23	0.7	黒曜石	
31	石 鏃	V13d・47	V層下	2.11×1.32×0.29	0.6	黒曜石	
32	石 鏃	V13b・20	V層下	2.09×1.49×0.23	0.7	黒曜石	
33	石 鏃	U13d・16	V層下	2.08×1.29×0.23	0.5	黒曜石	
34	石 鏃	R9b・24	V層下	2.10×1.52×0.36	0.8	黒曜石	
35	石 鏃	V5a・2	VI層	2.10×1.40×0.20	0.7	黒曜石	
36	石 鏃	V12c・22	V層下	2.20×1.25×0.29	0.6	黒曜石	破損品
37	石 鏃	U15a・32	IV層	2.27×1.21×0.28	0.6	黒曜石	
38	石 鏃	U15d・9	V層中	2.09×1.59×0.19	0.7	黒曜石	
39	石 鏃	X14c・7	V層下	2.01×1.58×0.25	0.5	黒曜石	破損品
40	石 鏃	X14c・2	V層下	2.22×1.49×0.29	0.8	黒曜石	
41	石 鏃	T10c・11	V層中	2.20×1.49×0.35	0.8	黒曜石	
42	石 鏃	T10c・12	V層中	2.33×1.60×0.34	1.0	黒曜石	
43	石 鏃	V15c・22	V層下	2.38×1.50×0.23	0.8	黒曜石	
44	石 鏃	V14d・15	V層下	2.40×1.57×0.31	1.0	黒曜石	破損品
45	石 鏃	V14d・16	V層下	2.72×1.91×0.40	1.9	黒曜石	
46	石 鏃	U12d・20	V層下	3.01×1.98×0.42	2.3	黒曜石	
47	石 鏃	R8d・10	V層中	1.82×2.11×0.25	0.6	黒曜石	破損品
48	石 鏃	R4d・1	V層下	2.60×2.05×0.29	1.0	黒曜石	
49	石 鏃	Y22c・2	V層中	2.23×1.90×0.18	0.9	黒曜石	破損品
50	石 鏃	Q4c・11	VI層	2.37×1.79×0.29	1.0	黒曜石	破損品
51	石 鏃	T12c・11	V層中	2.45×1.81×0.35	1.4	黒曜石	
52	石 鏃	T5b・5	VI層	2.81×1.79×0.33	0.3	黒曜石	
53	石 鏃	Q3d・14	VI層	2.40×1.40×0.29	0.9	黒曜石	
54	石 鏃	V15a・31	V層下	2.55×1.43×0.43	1.7	黒曜石	
55	石 鏃	V15a・34	V層上	2.69×1.29×0.18	0.8	黒曜石	
56	石 鏃	U11b・1	V層上	2.51×1.41×0.30	1.0	黒曜石	破損品
57	石 鏃	P4b・8	VI層	2.70×1.41×0.27	0.8	黒曜石	破損品
58	石 鏃	S9b・2	V層上	3.21×1.39×0.34	1.4	黒曜石	
59	石 鏃	P3b・1	V層中	2.98×1.81×0.39	1.7	黒曜石	
60	石 鏃	V15c・28	V層下	2.21×1.58×0.46	1.2	黒曜石	
61	石 鏃	I14b・1	V層上	2.14×1.53×0.27	0.8	黒曜石	破損品
62	石 鏃	R1a・1	III層	2.39×1.19×0.25	0.6	黒曜石	
63	石 鏃	V13b・13	V層下	2.14×1.21×0.20	0.3	黒曜石	
64	石 鏃	Q22a・1	V層下	2.48×1.48×0.41	1.1	黒曜石	

表VI-2-4 包含層掲載石器一覧(3)

図番	分 類	調査区・番号	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	石 質	備 考
65	石 鏃	W15a・4	Ⅳ層	2.61×1.36×3.60	0.9	黒曜石	
66	石 鏃	N18a・1	V層上	2.70×1.12×0.26	0.7	黒曜石	
67	石 鏃	X15d・3	V層上	2.78×1.43×0.29	0.9	黒曜石	
68	石 鏃	M17d・1	V層上	2.83×1.45×0.23	0.9	黒曜石	
69	石 鏃	U12c・1	Ⅲ層	2.89×1.51×1.80	0.8	黒曜石	
70	石 鏃	Q22c・1	V層下	3.18×1.48×0.26	1.0	黒曜石	
71	石 鏃	O20b・1	V層下	3.21×1.47×0.34	1.2	黒曜石	破損品
72	石 鏃	Y17d・3	V層中	3.69×1.35×0.32	1.6	黒曜石	
73	石 鏃	V11d・1	Ⅳ層	(3.83)×1.32×0.39	(1.7)	凝灰岩	
74	石 鏃	Y14d・1	V層中	2.55×1.46×0.24	0.7	黒曜石	
75	石 鏃	S7d・1	Ⅲ層	2.88×1.95×3.10	1.0	黒曜石	
76	石 鏃	M19c・1	V層中	3.20×1.59×0.43	1.6	黒曜石	破損品
77	石 鏃	V17a・4	V層中	3.30×1.89×0.36	1.9	黒曜石	破損品
78	石 鏃	T13c・3	V層中	2.05×1.41×0.41	1.0	黒曜石	破損品
79	石 鏃	X10b・1	V層上	2.68×1.20×0.37	0.8	黒曜石	
80	石 鏃	O3c・1	V層中	2.22×1.50×0.41	0.8	黒曜石	
81	石 鏃	U13a・20	V層下	1.93×1.27×0.40	0.7	黒曜石	
82	石 鏃	V17a・10	V層下	2.70×1.48×0.32	1.0	黒曜石	
83	石 鏃	V17c・12	V層中	3.20×1.62×0.48	2.1	黒曜石	破損品
84	石 鏃	W15d・7	V層上	1.95×1.19×0.36	0.4	黒曜石	破損品
85	石 鏃	V17a・3	V層上	2.20×0.90×0.36	0.5	黒曜石	
86	石 鏃	W13d・4	V層中	2.01×1.20×0.31	0.6	黒曜石	
87	石 鏃	W16a・8	V層中	2.51×1.39×0.31	0.7	黒曜石	
88	石 鏃	A025a・6	V層中	2.40×1.31×0.21	0.5	黒曜石	
89	石 鏃	Q3c・1	V層中	2.61×1.39×0.39	0.8	黒曜石	
90	石 鏃	Y23d・2	V層中	2.37×1.89×0.37	0.8	黒曜石	破損品
91	石 鏃	L16d・1	V層中	(2.68)×1.30×0.49	(1.0)	チャート	破損品
92	石 鏃	Q5a・1	V層中	(2.59)×1.64×0.35	(0.8)	珪 岩	破損品
93	石 鏃	M24a・1	V層中	2.98×1.49×0.39	1.1	黒曜石	破損品
94	石 鏃	R20d・1	V層中	3.10×1.61×0.44	1.3	黒曜石	
95	石 鏃	O20b・1	V層下	3.05×1.65×0.45	1.6	黒曜石	破損品
96	石 鏃	P21c・1	V層上	3.52×1.70×0.27	1.5	黒曜石	
97	石 鏃	A025c・5	V層中	3.50×1.73×0.41	1.6	黒曜石	
98	石 鏃	Z24d・8	V層中	3.38×1.39×0.32	1.0	黒曜石	
99	石 鏃	U12c・8	V層下	3.12×1.45×0.42	1.3	黒曜石	
100	石 鏃	R6d・4	V層上	3.30×1.49×0.38	1.8	黒曜石	
101	石 鏃	不明	埴土	3.94×2.07×0.46	2.5	黒曜石	
102	石 鏃	U14a・8	V層下	3.10×1.75×0.35	1.3	黒曜石	破損品
103	石 鏃	V17c・2	V層下	3.37×1.40×0.39	1.7	黒曜石	破損品
104	石 鏃	U13d・3	V層中	2.42×1.13×0.31	0.7	黒曜石	
105	石 鏃	Q5b・1	V層中	3.21×1.99×0.52	2.4	黒曜石	破損品
106	石 鏃	U13b・19	V層中	3.41×1.72×0.55	2.7	黒曜石	
107	石 鏃	A024d・9	V層中	3.30×1.85×0.48	2.5	黒曜石	
108	石 鏃	V16a・27	V層中	3.19×1.69×0.60	3.0	黒曜石	破損品

表VI-2-5 包含層掲載石器一覧(4)

図番	分類	調査区・番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
109	石 鏃	Z26b・9	V層中	3.79×2.08×0.69	4.6	黒曜石	破損品
110	石 鏃	U8d・2	V層下	3.94×1.70×0.58	2.5	黒曜石	
111	石 鏃	Y17c・7	V層下	4.38×1.90×0.49	2.9	黒曜石	
112	石 鏃	V17b・4	V層下	3.48×1.69×0.68	3.5	黒曜石	破損品
113	石 鏃	X23a・3	V層下	4.10×1.35×0.39	1.9	黒曜石	
114	石 鏃	V14b・8	V層下	3.41×0.90×0.38	1.2	黒曜石	
115	石 鏃	U15c・46	V層下	4.38×2.28×0.67	6.3	黒曜石	未製品
116	石槍・ナイフ	K15d・1	V層中	5.33×2.82×0.71	13.0	黒曜石	未製品
117	石槍・ナイフ	J15a・1	VI層	5.39×2.61×0.56	5.8	黒曜石	破損品
118	石槍・ナイフ	Z24c・1	V層上	4.90×2.25×0.79	6.8	黒曜石	
119	石槍・ナイフ	X14c・5	V層下	5.60×3.30×1.23	18.4	黒曜石	破損品
120	石槍・ナイフ	K16d・1	V層下	6.49×3.55×0.70	13.8	黒曜石	破損品
121	石槍・ナイフ	U8d・6	V層下	4.71×1.91×0.54	3.3	黒曜石	破損品
122	石槍・ナイフ	V16d・14	V層下	(8.10)×2.48×0.95	(17.1)	頁岩	
123	石槍・ナイフ	I15a・1	V層中	5.38×2.89×0.65	7.2	黒曜石	
124	石槍・ナイフ	Z27c・1	V層下	5.99×2.69×0.63	9.0	黒曜石	
125	石 鏃	P4c・38	V層下	(2.59)×0.75×0.36	(0.7)	黒曜石	破損品
126	石 鏃	B026a・6	V層中	(3.0)×1.00×0.71	(2.0)	頁岩	
127	石 鏃	W15a・26	V層下	(3.03)×1.13×0.56	(1.6)	黒曜石	
128	石 鏃	Z25c・14	VI層	4.65×1.11×0.67	3.2	黒曜石	
129	石 鏃	U16b・12	V層下	4.52×1.81×0.64	4.0	黒曜石	
130	石 鏃	U11a・4	V層下	(3.92)×1.44×0.97	(3.8)	黒曜石	
131	石 鏃	V17d・16	V層下	4.37×1.24×0.51	1.8	黒曜石	
132	石 鏃	U14d・1	V層上	3.36×2.39×0.69	5.3	黒曜石	
133	石 鏃	G11d・1	V層下	4.61×3.73×0.67	7.9	黒曜石	
134	石 鏃	V15c・13	V層中	(3.45)×3.55×0.84	(4.6)	黒曜石	破損品
135	石 鏃	X15c・9	V層下	(4.70)×2.02×0.7	(4.5)	黒曜石	
136	石 鏃	Z25a・26	VI層	2.70×2.05×0.54	1.7	黒曜石	
137	石 鏃	W13a・12	V層下	3.17×1.75×0.55	2.0	黒曜石	
138	石 鏃	V15d・26	V層上	(2.81)×2.04×0.64	(2.7)	黒曜石	
139	石 鏃	T8d・45	V層下	(3.25)×2.19×0.83	(4.2)	黒曜石	破損品
140	石 鏃	P5b・8	V層下	2.94×3.43×0.83	5.5	黒曜石	
141	石 鏃	T10c・9	V層下	(3.44)×2.46×0.89	(5.8)	黒曜石	
142	石 鏃	V16a・16	V層中	4.13×2.54×0.56	3.9	黒曜石	
143	石 鏃	V15c・14	V層中	4.40×2.26×0.54	4.1	黒曜石	
144	石 鏃	V16c・26	V層下	(4.26)×2.36×0.71	(4.4)	黒曜石	
145	石 鏃	V14a・27	V層下	(2.90)×1.63×0.36	(1.1)	黒曜石	
146	石 鏃	Z25a・23	VI層	2.95×1.81×0.47	1.6	頁岩	
147	石 鏃	U13a・3	V層中	(3.33)×2.56×0.69	(2.9)	黒曜石	
148	石 鏃	V16a・31	V層中	4.32×2.29×0.62	4.0	黒曜石	
149	石 鏃	U15b・1	III層	(4.93)×2.83×0.51	(4.1)	黒曜石	
150	石 鏃	T18a・8	V層中	(4.80)×2.60×0.93	(6.2)	黒曜石	
151	石 鏃	A027a・2	VI層	(5.38)×2.00×0.76	(5.8)	黒曜石	つまみ付ナイフを転用
152	つまみ付ナイフ	A026d・2	V層下	(8.86)×2.60×0.94	(21.2)	黒曜石	Z26c・5と接合 被熱

表VI-2-6 包含層掲載石器一覧(5)

図番	分類	調査区・番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
153	つまみ付ナイフ	T12a・10	V層中	6.50×1.99×0.80	8.3	黒曜石	
154	つまみ付ナイフ	V15c・16	V層中	7.12×2.20×0.76	(10.8)	黒曜石	V16a・25と接合
155	つまみ付ナイフ	V15c・24	V層下	6.35×2.52×1.09	13.1	黒曜石	
156	つまみ付ナイフ	U15d・13	V層中	5.50×2.24×0.70	10.1	黒曜石	
157	つまみ付ナイフ	Y18d・7	V層中	7.98×2.76×1.07	24.1	頁岩	未製品
158	つまみ付ナイフ	S19a・1	V層下	4.97×2.21×0.79	7.6	黒曜石	
159	つまみ付ナイフ	U11a・3	V層下	3.32×1.60×0.44	2.4	頁岩	
160	つまみ付ナイフ	V8a・2	V層中	3.73×1.94×0.56	4.3	メノウ	
161	つまみ付ナイフ	U8b・3	V層下	4.18×1.90×0.71	4.9	頁岩	
162	つまみ付ナイフ	Y18d・4	V層上	4.60×2.10×0.58	4.4	頁岩	
163	つまみ付ナイフ	V17d・1	V層下	5.01×1.44×0.54	4.3	頁岩	
164	つまみ付ナイフ	U13c・12	V層下	4.38×2.13×0.54	5.5	黒曜石	
165	つまみ付ナイフ	U13d・11	V層下	5.00×2.43×1.01	11.5	黒曜石	
166	つまみ付ナイフ	V15d・36	V層下	5.96×2.16×0.67	7.6	黒曜石	
167	つまみ付ナイフ	V15a・1	III層	5.60×2.00×0.64	7.8	黒曜石	
168	つまみ付ナイフ	U12b・4	V層中	5.75×2.87×0.88	13.7	黒曜石	
169	つまみ付ナイフ	V16a・13	V層中	5.10×3.52×0.75	12.6	黒曜石	
170	つまみ付ナイフ	T12d・26	V層下	(5.45)×2.50×0.98	(13.0)	黒曜石	
171	つまみ付ナイフ	H11c・10	VI層	5.25×1.88×0.98	7.7	黒曜石	
172	つまみ付ナイフ	P5b・60	VI層	4.24×2.55×0.76	6.3	黒曜石	
173	つまみ付ナイフ	V15a・3	III層	(4.82)×2.61×0.71	(7.3)	黒曜石	
174	つまみ付ナイフ	V15b・1	III層	5.00×2.08×0.49	5.5	黒曜石	被熱
175	つまみ付ナイフ	P5b・4	V層下	(6.22)×2.03×1.11	(13.7)	黒曜石	破損品
176	つまみ付ナイフ	V14a・20	V層下	6.08×3.66×0.79	20.0	黒曜石	
177	つまみ付ナイフ	T12d・25	V層下	5.50×3.40×0.64	10.2	黒曜石	
178	つまみ付ナイフ	A026a・8	V層下	8.38×2.46×0.90	17.0	黒曜石	
179	つまみ付ナイフ	X21d・25	木根	(5.38)×1.74×0.51	(5.4)	頁岩	
180	つまみ付ナイフ	T8b・27	VI層	4.75×1.55×0.40	3.4	頁岩	
181	つまみ付ナイフ	V13b・19	V層下	6.84×2.24×0.90	15.0	頁岩	
182	つまみ付ナイフ	A025b・1	V層上	6.85×2.60×0.56	10.7	頁岩	
183	つまみ付ナイフ	W16b・21	V層下	6.11×2.59×0.76	10.1	黒曜石	被熱
184	つまみ付ナイフ	W15b・16	V層下	4.50×3.20×1.00	9.0	黒曜石	
185	つまみ付ナイフ	V14a・13	V層中	5.09×2.70×0.80	9.5	黒曜石	
186	つまみ付ナイフ	U15c・1	III層	5.35×(2.74)×0.75	(9.9)	黒曜石	破損品
187	つまみ付ナイフ	V15d・24	V層上	4.42×1.30×0.44	3.6	頁岩	
188	つまみ付ナイフ	T13b・5	V層中	(4.50)×2.38×0.75	(7.4)	頁岩	破損品
189	つまみ付ナイフ	V16c・25	V層下	6.55×3.06×0.89	(17.3)	珪岩	V12c・15と接合 被熱
190	つまみ付ナイフ	R6d・15	V層下	(4.25)×1.73×0.41	(3.0)	黒曜石	
191	つまみ付ナイフ	U12b・5	V層下	5.00×2.80×0.62	6.6	黒曜石	
192	つまみ付ナイフ	W15d・20	V層中	6.47×2.81×0.75	10.5	黒曜石	
193	つまみ付ナイフ	Q4b・4	VI層	(3.72)×1.77×0.58	(3.1)	黒曜石	
194	つまみ付ナイフ	U13d・15	V層下	5.60×2.63×0.76	11.1	黒曜石	
195	つまみ付ナイフ	Y14d・7	V層下	5.25×2.20×0.62	7.1	黒曜石	
196	つまみ付ナイフ	R9a・2	V層下	(3.76)×2.47×0.52	(4.9)	黒曜石	破損品

表VI-2-7 包含層掲載石器一覧(6)

図番	分類	調査区番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
197	つまみ付ナイフ	X11a・2	V層下	5.38×3.47×0.98	13.9	黒曜石	
198	つまみ付ナイフ	R5c・3	V層下	5.30×2.09×0.56	5.3	黒曜石	
199	つまみ付ナイフ	Q4c・2	V層下	5.20×2.25×0.83	(10.1)	黒曜石	Q4c・1と接合 被熱
200	つまみ付ナイフ	R4d・2	V層下	4.34×1.73×0.43	3.4	黒曜石	
201	つまみ付ナイフ	H12a・2	V層下	5.19×2.27×0.77	8.3	黒曜石	
202	つまみ付ナイフ	P5c・14	VI層	(4.70)×2.06×0.74	(5.8)	黒曜石	
203	つまみ付ナイフ	P4d・2	V層中	4.80×2.70×0.54	6.7	黒曜石	
204	つまみ付ナイフ	W14a・6	V層下	5.95×2.50×0.99	12.9	黒曜石	
205	つまみ付ナイフ	T13b・10	V層下	6.23×3.10×0.67	8.8	黒曜石	
206	つまみ付ナイフ	Y25d・1	V層中	6.49×2.73×0.67	12.8	黒曜石	
207	つまみ付ナイフ	W17a・17	V層中	6.70×2.57×1.28	15.3	黒曜石	
208	スクレイパー	P4a・3	V層下	4.30×3.09×0.73	7.2	黒曜石	
209	スクレイパー	S2d・1	VI層	6.15×3.29×1.02	20.7	頁岩	
210	スクレイパー	V16a・24	V層下	5.90×3.41×0.86	20.4	チャート	
211	スクレイパー	Y15d・21	V層下	(4.93)×4.19×0.93	(24.4)	頁岩	破損品
212	スクレイパー	Z25a・7	V層下	(4.54)×4.48×0.86	(23.1)	頁岩	破損品
213	スクレイパー	A026a・6	V層中	(5.40)×3.84×(0.91)	(23.3)	頁岩	破損品
214	スクレイパー	W15a・9	V層中	2.99×1.91×0.65	5.4	黒曜石	
215	スクレイパー	V14b・32	VI層	3.05×3.14×1.07	12.2	黒曜石	
216	スクレイパー	P5c・12	V層下	4.41×4.08×0.93	18.4	黒曜石	
217	スクレイパー	V13c・9	V層中	5.80×4.30×1.30	39.0	黒曜石	
218	スクレイパー	T8b・20	V層下	2.49×2.74×1.31	8.5	黒曜石	
219	スクレイパー	V13d・72	VI層	2.92×2.71×0.60	5.7	黒曜石	
220	スクレイパー	P5c・8	V層下	3.15×2.65×0.74	6.3	黒曜石	
221	スクレイパー	P3d・9	VI層	3.20×3.51×1.09	12.6	黒曜石	
222	スクレイパー	Q6a・4	VI層	3.52×2.72×0.79	8.5	黒曜石	
223	スクレイパー	P4a・6	V層下	3.85×2.73×0.72	7.9	黒曜石	
224	スクレイパー	V15c・19	V層中	4.15×2.78×0.79	10.3	黒曜石	
225	スクレイパー	V14b・6	V層下	4.28×2.99×1.00	12.6	黒曜石	
226	スクレイパー	W12c・1	V層下	3.49×5.25×1.14	16.9	黒曜石	
227	スクレイパー	H11d・3	V層中	2.28×3.39×0.45	4.6	黒曜石	
228	スクレイパー	P5c・7	V層下	(3.38)×3.00×0.80	(7.0)	黒曜石	破損品
229	スクレイパー	P5b・67	B調	4.03×5.22×0.85	15.1	黒曜石	
230	スクレイパー	Q5d・12	VI層	4.10×2.69×0.74	6.9	黒曜石	
231	スクレイパー	T9a・22	V層下	3.79×2.59×0.95	6.7	黒曜石	
232	スクレイパー	V13c・11	V層下	4.20×1.68×0.72	4.1	黒曜石	
233	スクレイパー	Q8b・3	V層下	3.90×1.84×0.39	2.8	黒曜石	
234	スクレイパー	W17a・24	V層下	(4.86)×3.30×1.15	(17.1)	黒曜石	
235	スクレイパー	U15a・2	III層	5.48×4.50×1.11	25.3	黒曜石	
236	スクレイパー	V13d・24	V層下	(4.16)×2.26×0.58	(5.5)	黒曜石	
237	スクレイパー	U13b・10	V層下	(5.70)×(2.97)×(0.80)	(10.7)	黒曜石	破損品
238	スクレイパー	V13b・15	V層下	(4.56)×(3.33)×(0.57)	(8.0)	黒曜石	破損品 被熱
239	スクレイパー	U13b・11	V層下	(6.30)×3.06×0.61	(9.8)	黒曜石	破損品
240	スクレイパー	A025d・8	V層中	6.08×3.44×1.75	31.4	黒曜石	

表VI-2-8 包含層掲載石器一覧(7)

図番	分類	調査区・番号	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	石質	備考
241	スクレイパー	Q6c・1	IV層	6.40×3.79×0.98	21.5	黒曜石	
242	スクレイパー	X15c・19	V層下	6.54×3.64×1.41	29.0	頁岩	
243	スクレイパー	H11d・1	V層下	4.31×2.06×0.70	5.1	黒曜石	
244	スクレイパー	V16b・32	V層下	4.10×2.58×0.85	7.9	黒曜石	
245	スクレイパー	G11d・2	V層下	(4.20)×(2.47)×(0.36)	(3.3)	黒曜石	
246	スクレイパー	X12a・3	VI層	(5.70)×3.52×(0.90)	18.4	メノウ	破損品
247	スクレイパー	X15d・22	V層下	4.56×3.15×0.87	8.3	黒曜石	
248	スクレイパー	Q5c・13	木根	(5.85)×1.55×0.57	(5.1)	黒曜石	
249	スクレイパー	A025c・22	VI層	6.21×2.20×1.03	14.7	黒曜石	
250	スクレイパー	Y15a・1	V層下	5.90×3.06×0.91	15.3	黒曜石	
251	スクレイパー	V13d・49	V層下	(7.60)×(2.48)×(0.72)	(12.5)	黒曜石	
252	スクレイパー	W13d・6	V層下	6.20×2.80×1.19	19.5	黒曜石	
253	スクレイパー	V14a・9	V層下	6.46×3.52×1.20	24.1	黒曜石	
254	スクレイパー	Z25d・3	V層下	6.07×3.52×1.21	20.1	黒曜石	
255	スクレイパー	V13c・2	V層中	6.60×4.62×2.40	33.6	黒曜石	
256	スクレイパー	Z25a・28	VI層	4.24×2.18×0.33	3.1	頁岩	
257	スクレイパー	T12c・9	V層中	6.34×3.55×1.05	19.9	黒曜石	
258	スクレイパー	V13a・12	V層中	6.12×4.28×1.45	32.7	黒曜石	
259	スクレイパー	V15b・28	V層下	6.60×3.50×2.08	36.8	黒曜石	
260	スクレイパー	Y26b・7	VI層	(4.70)×3.20×0.86	(13.1)	頁岩	破損品
261	スクレイパー	X10c・2	VI層	6.94×3.58×1.13	30.3	黒曜石	
262	スクレイパー	V17c・13	V層中	8.72×5.10×1.39	39.0	黒曜石	
263	ピース・エスキュー	Y25b・4	V層下	3.38×2.69×1.20	9.0	黒曜石	
264	ピース・エスキュー	W15d・22	V層下	2.45×1.79×0.70	3.3	黒曜石	
265	石核	V17b・8	V層下	5.11×3.51×1.57	25.5	黒曜石	
266	石核	W12b・1	V層中	5.59×5.20×4.29	112.8	黒曜石	
267	石核	V13c・7	V層下	5.79×6.56×2.50	71.0	黒曜石	
268	石核	U17b・1	IV層	3.45×5.29×1.90	29.6	黒曜石	
269	石核	V15d・1	III層	2.61×3.38×1.51	10.9	黒曜石	
270	石斧	W13a・11	V層下	(7.50)×6.15×(1.35)	(93.3)	蛇紋岩	破片
271	石斧	Y22a・6	V層下	(9.00)×6.57×1.52	(140.9)	泥岩	破片 被熱
272	石斧	Y22c・1	V層上	(5.10)×(7.65)×(2.60)	(139.6)	緑色泥岩	破片
273	石斧	Y18a・5	V層中	9.72×3.17×1.14	64.1	片岩	
274	石斧	Y20b・6	V層下	10.47×3.95×2.61	151.0	緑色泥岩	
275	石斧	A027d・1	V層上	(7.48)×(4.56)×(2.50)	(119.3)	緑色泥岩	破損品
276	石斧	V16c・27	V層下	(11.8)×8.55×4.34	(670.0)	緑色泥岩	未製品
277	たたき石	Z25b・2	V層中	14.03×6.92×7.60	1022.0	凝灰質泥岩	被熱
278	たたき石	U13a・13	V層下	10.07×4.86×(3.90)	(309.0)	緑色泥岩	石斧未製品を転用
279	たたき石	S19d・1	V層下	7.20×11.45×6.35	776.0	安山岩	
280	たたき石	V19b・1	V層中	13.10×6.15×2.10	281.4	片麻岩	
281	たたき石	W13c・2	V層中	15.86×6.72×3.12	530.0	片麻岩	被熱
282	たたき石	V5a・5	VI層	8.50×9.86×3.10	417.1	花崗岩	
283	たたき石	V16d・6	V層中	(15.75)×12.30×6.20	1335.0	凝灰質泥岩	破損品
284	くばみ石	V14a・6	V層下	13.40×4.60×3.15	320.5	凝灰岩	

表VI-2-9 包含層掲載石器一覧(8)

図番	分類	調査区番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
285	くぼみ石	Y19c・5	V層中	10.80×5.86×2.87	269.1	泥岩	破損品
286	くぼみ石	V11a・2	V層中	17.5×8.27×2.70	542.9	砂岩	
287	ナリ石	Z25a・27	VI層	6.60×9.90×4.15	317.2	砂岩	
288	ナリ石	V13b・2	V層中	10.46×16.98×5.90	1074.0	砂岩	被熱
289	ナリ石	W6a・7	V層下	(7.65)×14.00×(5.12)	689.0	凝灰岩	
290	ナリ石	V14c・13	V層下	8.85×15.00×6.60	950.0	泥岩	V14a・12と接合 被熱
291	ナリ石	W17d・12	V層下	(6.90)×14.00×5.88	(810.0)	片麻岩	V17b・5と接合
292	ナリ石	Z26a・4	V層下	7.77×12.54×5.55	715.0	砂岩	被熱
293	ナリ石	T7b・9	VI層	7.48×12.97×6.69	831.0	凝灰岩	
294	ナリ石	W18a・13	V層中	5.50×10.32×4.73	380.5	砂岩	
295	ナリ石	W18c・18	V層下	7.30×16.23×5.40	880.0	砂岩	W15d・21、W19a・17と接合
296	ナリ石	Z23d・9	V層下	7.00×13.32×7.50	929.0	凝灰岩	
297	ナリ石	V13d・46	V層下	8.78×(11.70)×6.46	(770.0)	砂岩	破損品
298	ナリ石	Z25c・3	V層下	8.45×(10.95)×6.92	(877.0)	玄武岩	破損品
299	ナリ石	Y21a・1	V層上	5.87×12.60×5.86	559.0	砂岩	Y21a・2と接合 被熱
300	ナリ石	Q6d・2	V層上	7.20×12.00×3.30	363.0	砂岩	
301	ナリ石	Y25c・1	V層中	7.40×13.53×3.30	403.9	砂岩	
302	ナリ石	A024d・10	V層下	8.70×15.03×5.50	1026	片麻岩	付着物
303	ナリ石	Q1c・2	VI層	6.70×(11.80)×(3.61)	(485.2)	砂岩	破損品
304	ナリ石	X7b・2	V層下	7.65×10.50×4.50	478.1	泥岩	破損品 被熱
305	ナリ石	T12d・11	V層中	8.50×16.02×4.60	801.0	緑色泥岩	
306	ナリ石	T7b・6	VI層	8.24×15.05×4.50	620.0	泥岩	
307	ナリ石	X19c・12	III層	8.60×12.70×2.60	467.0	片麻岩	
308	ナリ石	V13d・17	V層下	6.30×12.60×3.96	479.5	緑色泥岩	石斧未製品を転用
309	ナリ石	V5c・5	V層下	10.14×8.55×3.44	448.7	花崗岩	
310	石	錘 W17a・36	V層下	(4.38)×(9.07)×1.26	(69.0)	結晶片岩	破片
311	砥石	U15d・19	V層中	(10.40)×(9.24)×(3.45)	(202.4)	砂岩	被熱
312	砥石	Z23c・6	V層下	(5.14)×6.42×(1.92)	(54.1)	砂岩	破片
313	砥石	Z23d・8	V層下	10.30×10.50×2.28	313.7	砂岩	
314	砥石	B025d・4	V層中	(11.70)×(7.20)×1.96	(150.0)	砂岩	破片 A025d・7と接合
315	砥石	Z23b・1	V層中	(7.63)×3.78×3.30	(131.8)	砂岩	破損品
316	砥石	Z23d・2	V層中	(10.70)×(5.72)×(4.00)	(245.4)	砂岩	破損品
317	砥石	V13d・30	V層下	16.60×13.46×9.40	2370.0	凝灰質砂岩	被熱
318	砥石	W15b・17	V層下	18.20×10.10×8.60	2000.0	凝灰質砂岩	被熱
319	台	石 W20a・10	V層下	(23.72)×29.90×14.20	(1420.0)	流紋岩	被熱
320	台	石 V17c・25	V層下	(34.5)×(24.1)×(14.5)	(1300.0)	花崗岩	W13c・5、W17d・16、W19a・18、X17b・11、X17d・11、X17d・12、X18b・18、X20d・14、X17a・9、Y17d・9、Y18c・9、Y19a・4、Y19b・17、Y20a・1と接合被熱

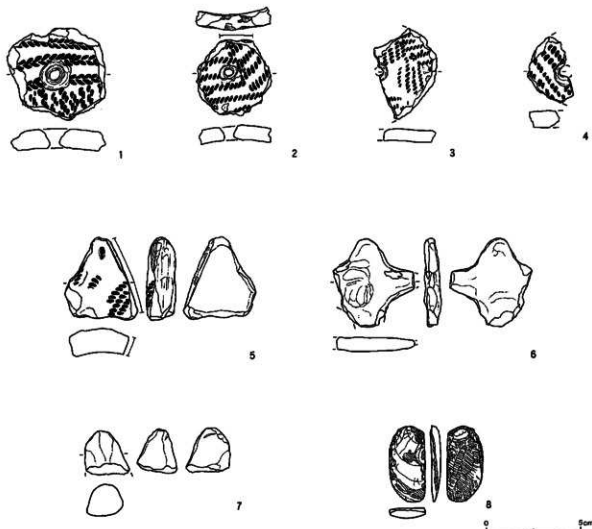
3 土製品・石製品

(1) 土製品

土製品には円盤状土製品、三角形土製品、板状土偶と、全体の形状不明で単に土製品としたもの、焼成粘土塊などあわせて8点が出土した。このうち、焼成粘土塊を除く7点を掲載した。掲載した土製品はいずれもV層下位から出土したものである。

円盤状土製品(図VI-3-1-1~4、表VI-3-1、図版73)

1~4は縄文時代早期後半の東銅路Ⅲ式土器の破片を円形に整形して穿孔したものである。1は幅4mmの鉅紐瓦痕文と幅4mmのRL斜行縄文が施されている。内面調整は横ナデである。色調は器面が明黄褐色、内面は黒褐色を呈する。胎土には微量の小礫・黒色鉱物と、少量の白色火山灰を含む。2は幅3mmのLRの縄文が条の幅程の間隔で施されている。内面は横ナデにより調整されている。色調は、器面が暗黄褐色、内面は暗褐色である。胎土には微量の白色火山灰を含む。3は条の幅2mmのLRとRL羽状縄文が施されている。内面は横ナデにより調整されている。色調は、器面が暗褐色、内面は暗黄褐色である。胎土には微量の白色火山灰・砂粒を含む。4は幅3mmのRLの縄文が条の幅程の間隔で施されている。内面は横ナデにより調整されている。色調は、器面が暗黄褐色、内面は黄褐色である。胎土には微量の黄白色火山灰を含む。



図VI-3-1 包含層出土の土製品・石製品

表VI-3-1 土製品一覧

番号	分類	調査区	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	円盤状土製品	T8d	2	V層下位	4.86×5.04×1.08	25.8	
2	円盤状土製品	V10b	4	V層下位	3.93×4.00×0.89	12.4	
3	円盤状土製品	A027a	3	V層下位	(4.75)×(3.37)×(0.66)	(10.6)	
4	円盤状土製品	X20c	20	V層下位	(3.28)×(2.46)×(0.88)	(5.5)	
5	三角形土製品	Y20d	29	V層下位	4.28×3.56×1.46	16.9	
6	板状土偶	T13a	12	V層下位	(4.57)×(4.31)×0.80	(11.1)	
7	土製品	X20b	36	V層下位	(2.37)×(2.30)×(2.01)	(7.9)	
-	焼成粘土塊	Y19d	5	V層上位	2.25×2.49×1.84	6.9	

表VI-3-2 石製品一覧

番号	分類	調査区	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
8	石のみ形石製品	U15a	62	VI層	4.02×1.87×0.52	5.8	緑色泥岩	石斧片を再加工

三角形土製品(図VI-3-1-5、表VI-3-1、図版73)

5はRL斜行縄文が施された東銅路Ⅲ式土器の破片を三角形に整形したものである。右側面が縦方向に削られて平らになっている。内面調整は横ナデである。色調は、器面・内面とも黄褐色を呈する。胎土には微量の黄白色火山灰を含んでいる。

板状土偶(図VI-3-1-6、表VI-3-1、図版73)

6は縄文時代前期前半の網文式土器と同じ面から出土した板状土偶である。4つの突出部のうち2箇所が欠落している。表面に指頭痕がある。これは上側の表面の粘土を削り取り、それをすぐ下に貼り付けて右方向から押さえつけたものである。色調は黄褐色を呈する。胎土には繊維を多く含む。周辺で出土した網文式土器と同じような胎土である。芽室町小林遺跡(大橋・西澤 2000)出土のものに類似する。

土製品(図VI-3-1-7、表VI-3-1、図版73)

7は割れ口が三角形を呈する土製品である。指頭3本で擠んだような3面をもつ。色調は黄褐色を呈す。胎土には微量の黒色鉱物と、少量の砂粒を含んでいる。周辺で出土した縄文時代中期後半の柏木川式土器の胎土と類似する。(鎌田)

(2) 石製品

石のみ形石製品(図VI-3-1-8、表VI-3-2、図版73)

8は石斧片を再加工した石製品。もとの石斧(もしくは石斧未製品)の研磨面を利用し、さらに下端を研磨して刃部を作り出している。また、剝離面と側縁に弱い研磨を加えて、薄身に縦長に形状を整えている。用途は不明であるが、刃部をもつことから、小型の石のみあるいは楔を想定している。ただし、使用痕が見られないこと、1点のみの出土であることなどから、ここでは仮に石のみ形石製品とした。類似としては、千歳市キウス5遺跡B地区出土の「石斧片再生楔形石製品」(北埋調報126)がある。次年度以降の出土例を待って再考することにする。(芝田)

VII 成果と問題点

1 宮戸4遺跡のTピットについて

(1) 宮戸地区とエゾシカ

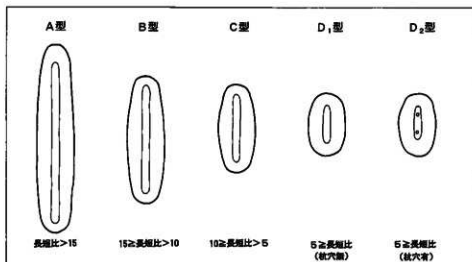
鷗川町の宮戸地区は古来より、エゾシカの猟場として知られていたらしい。『鷗川町史』(1968)は、アイヌのコタンに伝わる、エゾシカについての逸話を収録している。以下は原文のままである。

「コタンを驚ろかすものに鹿の移動があった。日高の山脈から樽前へ向けて夜間移動する鹿の大群が、時々イモクベの原野を駆け抜けた。まるで、砂利を満載したダンプが何百台も暴走するようだ。すさまじい音と風を切って空を飛ぶようなスピード、静かな夜、月光を浴びて、何百頭もの鹿の大群が駆け抜ける有様は、夢でも見ているような壮観であった。こんなにいる鹿を狩って食膳に供することはた易いことだったが、折角作っている僅かな畑を荒らされるので、逆茂木をめぐらして守ったりする。その方がむしろ厄介であった。」

明治時代に入ってから鷗川はエゾシカ猟が盛んで、特に宮戸地区は猟師仲買人の集合地として繁栄し、「明治七、八年ころには、胆振・日高一の賑わいを呈せり」との記録が残っている。

現在の宮戸地区は往時の活気が消え失せ、平穏な農業地帯となっているが、エゾシカは相変わらず出没しているようである。遺跡に隣接して農業を営む旧地主の山下与造氏(鷗川町議)は、「(道路の)工事が始まって大分減ったけれども、毎年鹿に畑を踏み荒らされるのが悩みの種だ。畑の傍に犬を飼って鹿を追い払うようにしている。」と語っている。また、調査期間中にプレハブのすぐ近くでエゾシカを目撃したり、朝発掘現場の中に足跡が続いているのを発見することが頻繁にあった。

おそらく縄文時代においても、イモッベ川流域はエゾシカの良好な猟場として利用されていたのであろう。平成13年度の調査で、宮戸4遺跡より計13基のTピット(陥し穴)が検出された(TP-5~17)。本遺跡では平成12年度の調査範囲からもTピットが4基検出されている(TP-1~4、平成14年度報告予定)。同様に、昨年度は、周辺の宮戸3遺跡で32基、米原4遺跡で10基のTピットが調査された(北埋潤報153)。このように宮戸地区では、イモッベ川へ向かう沢筋にTピットが多数設けられている。次年度以降の調査の進捗につれ、さらに検出数が増加する可能性がある。本稿では今年度検出された13基について、現段階での考察を行う。



図VII-1-1 Tピットの形態分類模式

(2) 形態

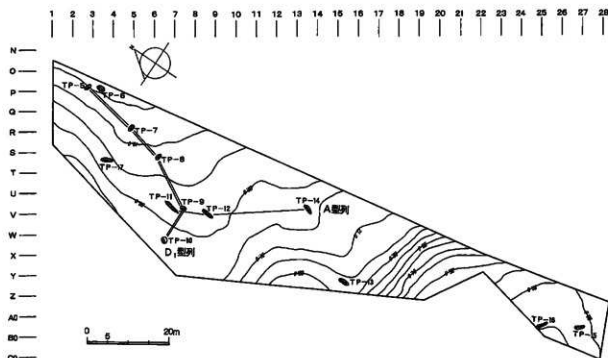
形態分類にあたって、従来の論文、調査報告書などで用いられてきた方法(森田・遠藤1982、大泉1987、谷岡1996など)を参考とし、底部の長軸・短軸の長さの比を用いた。すなわち、長短比15より大きいものをA型として、以下5毎にB型、C型、D型に分類した。A型は溝状に近い細長の楕円形、D型は短めの丸みを帯びた楕円形で、B型とC型はその段階的な中間となる。D型については、杭穴の有無でD1型、D2型に細分した(図VII-1-1)。今年度宮戸4遺跡で検出されたTピットは、A型4基(TP-11・12・14・16)、B型3基(TP-13・15・17)、C型0基、D1型5基(TP-5・7・8・9・10)、D2型1基(TP-6)であった(表VII-1-1)。数の多少は限られた調査範囲の中では比較できないが、C型が検出されない、D2型が少ない、などの傾向は見られる。

今回の形態分類は、Tピット全体の形状が最も反映されるという点で長短比を採用した。しかしながら、長短比で説明しきれない要素は複数残っており、その個々について検討する必要がある。まずは、掘り込みの深さである。構築面からの計測ではないが、大部分がVI層上面での検出なので同一条件と仮定する。A型・B型は1.20m以下と比較的浅いものに対し、D1型は1.30~1.50mと深めである。D2型のTP-6は1.17mとD1型よりも浅い。つまり、長軸の長いものは浅く、短いものは深く掘り込まれる傾向があるが、杭穴を有するものは例外と考えられる。底面の幅に注目すると、A型・B型はTP-11・17を除けば、0.20m以下と狭いものが多い。これに対しD1型はいずれも0.20m以上と幅広く、D2型のTP-6は0.40mと突出している。これは、比較的浅いA型・B型は上面から細く掘り込めるが、深いD1型は内部で作業するため幅広になくなくてはならないという工程の違いによると考えられる。また、D2型は底面に杭を立てるために、一定以上の幅を必要としたのであろう。

亜成獣以上の個体の場合、エゾシカは胴幅が約21~34cm、体高が約81~104cmだという(佐藤1986)。エゾシカがTピットに落ちた状態を推測すると、A型・B型・D1型はいずれも身体が挟まれて四肢が底面に届かず、自由を奪うことが可能である。一方で、D2型のTP-6はエゾシカが内部に落ちてしまうが、逆茂木に支えられて、身体が宙に浮くことになる。この場合、獲物の胴部の均衡を保つため、最低2本以上の逆茂木が必要と考えられる。このように形態は異なるが、エゾシカを捕獲するため、一定の規格を守って合理的に構築されている点は共通している。

表VII-1-1 Tピット属性一覧表

遺構名	平面形状	上端規模		下端規模		深さ(m)	長短比	横断面形状	縦断面形状	底面形状	杭穴	分類
		長軸(m)	短軸(m)	長軸(m)	短軸(m)							
TP-5	楕円形	1.57	0.83	1.07	0.21	1.50	5.10	V字型	袋状	中央が窪む	無し	D1型
TP-6	楕円形	1.81	1.12	1.65	0.40	1.17	4.13	U字型	オーバーハング	ほぼ平直	2ヶ所	D2型
TP-7	楕円形	1.49	0.86	1.12	0.25	1.33	4.48	Y字型	袋状	傾斜する	無し	D1型
TP-8	楕円形	1.54	0.85	1.22	0.24	1.30	5.08	Y字型	袋状	傾斜する	無し	D1型
TP-9	楕円形	(1.39)	0.91	1.17	0.26	1.40	4.50	Y字型	袋状	傾斜する	無し	D1型
TP-10	楕円形	1.56	0.93	1.10	0.25	1.40	4.40	V字型	袋状	中央が窪む	無し	D1型
TP-11	長楕円形	3.57	0.70	4.36	0.28	1.13	15.57	Y字型	著しくオーバーハング	傾斜する	無し	A型
TP-12	長楕円形	(2.95)	0.68	2.45	0.14	1.20	17.50	Y字型	中端でオーバーハング	2段に傾斜する	無し	A型
TP-13	長楕円形	2.60	0.93	2.17	0.19	1.14	11.42	V字型	船底状	ほぼ平直	無し	B型
TP-14	長楕円形	2.65	0.72	2.31	0.10	1.12	23.10	Y字型	オーバーハング	ほぼ平直	無し	A型
TP-15	長楕円形	2.07	0.75	1.93	0.17	0.83	11.35	V字型	オーバーハング	傾斜する	無し	B型
TP-16	溝状	3.40	0.47	3.04	0.18	0.91	16.89	I字型	船底状	ほぼ平直	無し	A型
TP-17	長楕円形	2.54	(0.73)	2.75	0.23	1.13	11.96	V字型	オーバーハング	傾斜する	無し	B型



図VII-1-2 Tピット配列図

(3) 立地・配列

Tピットの立地を見ると、標高22.0mより低い緩斜面上に11基、標高25.0mより高い台地上に2基検出されている(図VII-1-2)。また、緩斜面上のものについて、さらに微地形で分けると、中央の沢地形内2基(TP-13・14)、北側の沢地形内8基(TP-5~12)、北西側の斜面上1基(TP-17)となる。調査区内では北側の方が高密度に検出されているが、これはイモツペ川流域の遺跡群全体の傾向と一致する。100m²当りのTピットの出現率は宮戸3遺跡0.89、宮戸4遺跡(平成13年度)0.41と倍近い差があり、両遺跡間の未調査部分も同様に北側ほど多いと推測される。

形態分類別ではA型とD1型に配列が見られる。A型のうちTP-11・12・14の3基は、長軸方向が近似しており、沢地形を横断して設けられている(A型列)。また、D1型のTP-5・7・8・9・10の5基は、長軸方向は異なるが、北側の沢筋に沿うようにして設けられている(D1型列)。Tピットの長軸方向がエゾシカの進行方向と一致したと仮定することで、ある程度狩人の意図を推し量ることは可能である。すなわち、A型列は長軸方向がほぼ南北で、沢の出入りに位置する。D1型列は北西側の微高地を仰ぎ見るような方向で、ぐるりと配されている。どちらの配列もイモツペ川へ向かうエゾシカを狙ったものであるが、沢筋か斜面かという進入路の想定が異なると推測される。

以上のようにTピットの配列は狩猟戦略の結果と考えられる。ある集団が一定の労働力で、同じ方法・道具を使用して、同時期に複数のTピットを作成した場合、これらが同じような規模や形態になる可能性が高い。しかしながら、厳密な規格性が存在したかは疑問である。立地や地形、植生、土質、天候、時間、人手などの制約が付帯したであろうし、いかに効率よく獲物を得るかという機能が重視されたとみるべきである。筆者は、Tピットの形態はエゾシカが移動する際の地形による運動の習性・癖などに関係すると考えている。例えば、斜面を駆け下りる、障害物を飛び越える、平地をゆっくり進む、といった動きからエゾシカの姿勢を想定し、最も補足しやすい形態のTピットが構築され

たのではなからうか。この推測はあくまで想像の域を出ておらず、動物生態学の面からもまだ検討の余地が多い。いずれにせよ、Tピットの形態と地形は密接に関係していると言えよう。

(4) 時期

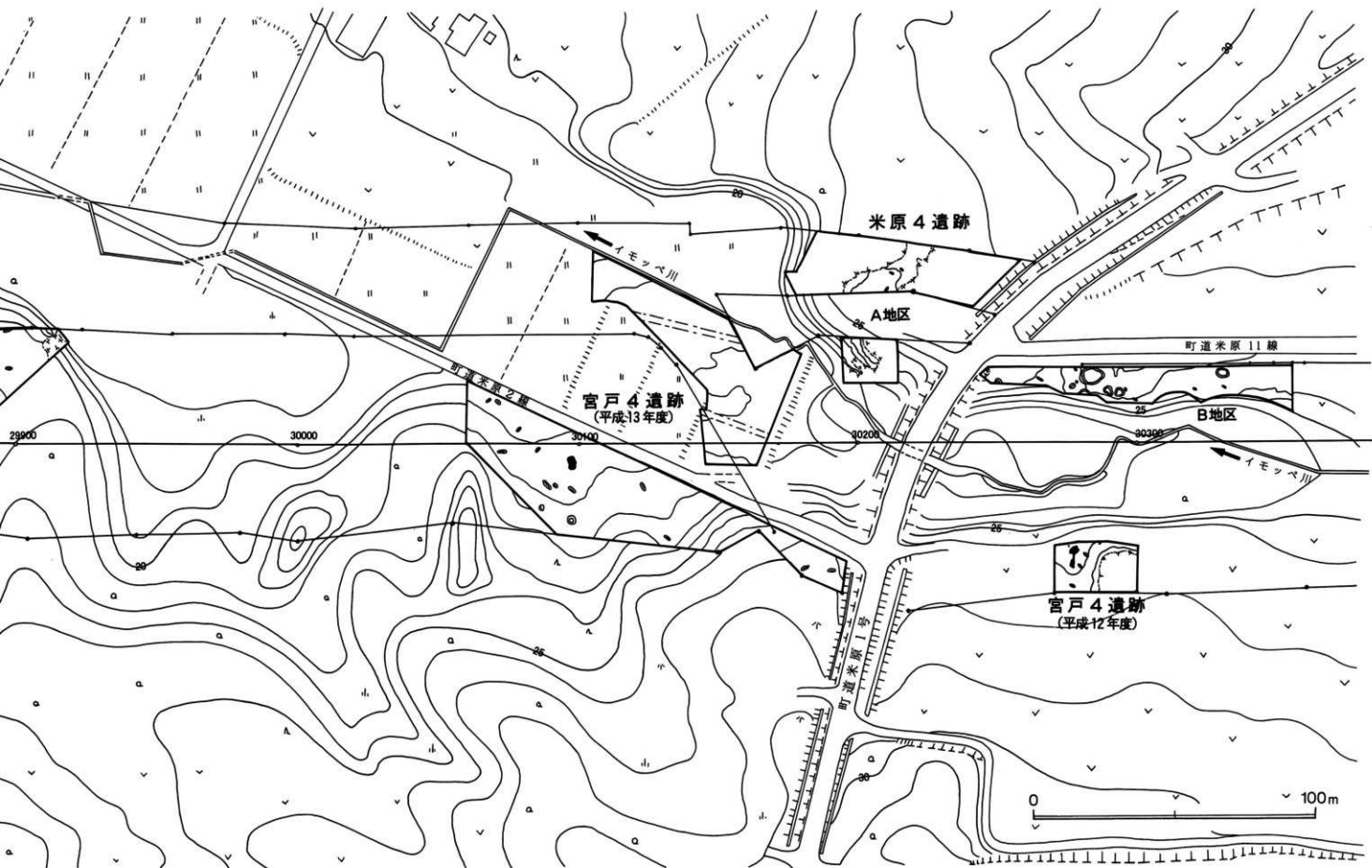
これまで北海道のTピットの構築時期については、縄文時代中期後半～後期初頭とする意見が主流である(森田・遠藤1982など)。平成12年度に宮戸3遺跡を調査した大泰司統は、Tピット同士の切り合い関係を手がかりにして、「中期後葉から後期初頭という期間のなかでTピットの形態変化が頻繁であった」と推測している(北埋調報153)。宮戸4遺跡のTピットは、同じくイモツベ川左岸の沢地形に立地し、150mほどしか離れていない宮戸3遺跡とほぼ同時期のものと考えられる。

宮戸4遺跡の包含層遺物の主体となる時期は、縄文時代早期後半～前期前半である。この時期の遺構にはH-1やFC-1、多くの焼土があり、人間の生業活動が活発に営まれたと推測される。このような場にエゾシカの通り道(鹿道)があったとは考えにくく、まして当時の人々も自らに対しても危険な陥穴を掘り込むことはしなかったであろう。前期後半～中期前半、遺跡では遺構が見られなくなり遺物も疎らになることから、人間の活動が行われなくなった可能性が高い。前期後半からTピットが構築された可能性は全く排除できないが、人間の居住域の選地と、エゾシカの行動圏という点に着目するならば、中期後半と考えたほうが妥当ではないだろうか。中期後半の遺構・遺物の分布に注意すると、イモツベ川兩岸の標高20～25mの段丘を境として、様相が異なる。上面では米原4遺跡B地区を中心に集落が営まれており、遺物も大量に出土している。一方、下面では明確な生業活動の痕跡が見られず、遺物は疎らである。これは当時の人々が主要な生活域を段丘上面に限定しており、段丘下面を別の目的のための空間として利用していたことを表している。さらに言えば、居住域と隔てられた、人間が普段立ち入ることのない場所は、自然界＝動物の世界として、一種の「住み分け」が成立していたと考えられる。段丘下面はイモツベ川が下流へと入る地点で、大きく開けた扇状地となっている。この川沿いの平坦部がかつて胆振から日高方面へ移動するエゾシカの通り道であったと推測される(大綱1952)。また、左右の丘陵から大小の沢がイモツベ川へ向かっており、エゾシカが水を飲むために降りてくることもあったであろう。当該期の人々は狩猟の対象としてエゾシカの行動習性を熟知しており、この地域が猟場として好適であると認識し、陥穴を仕掛けたい可能性が高い。

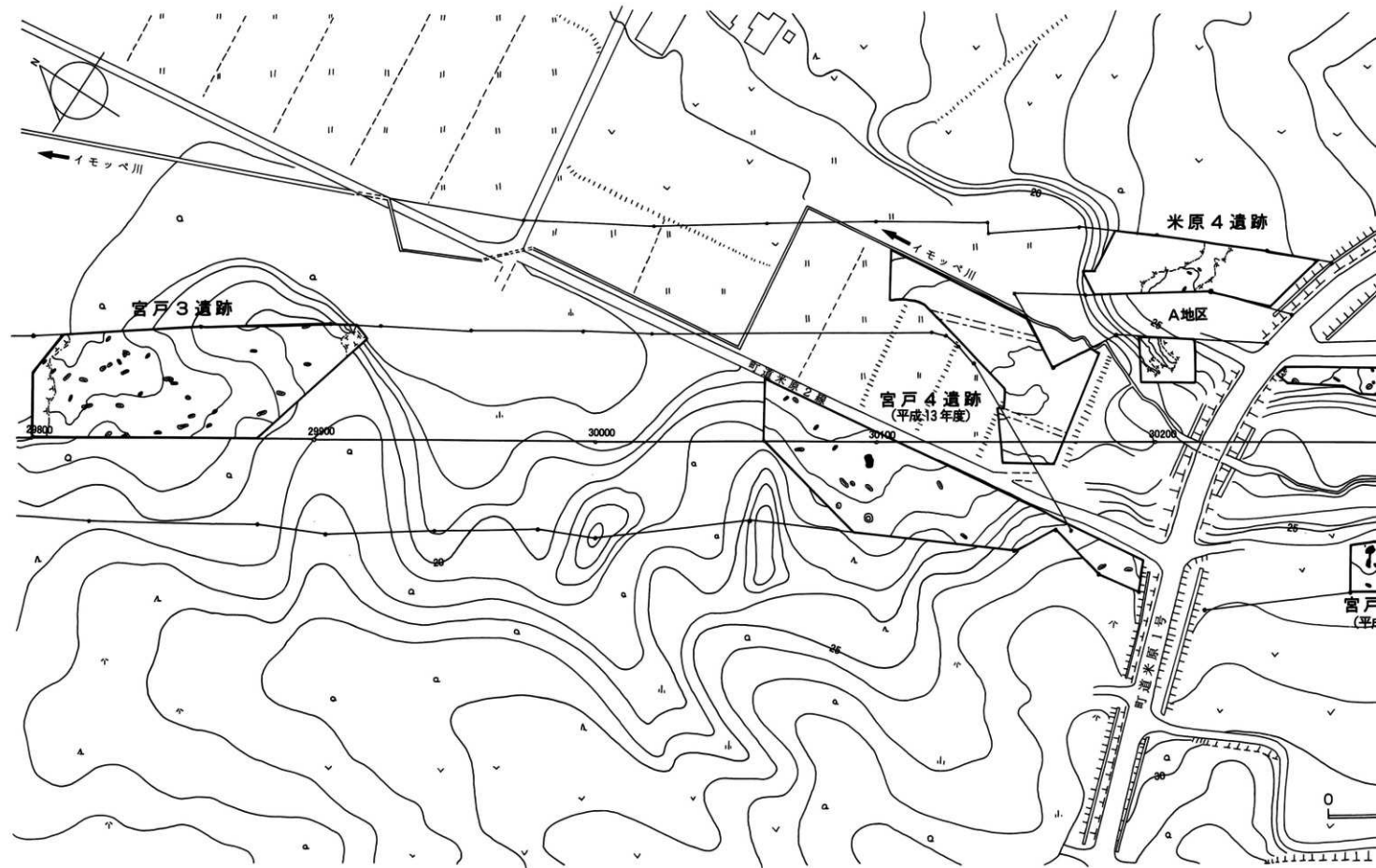
今回は段丘上面に立地するTP-15・16、あるいは米原4遺跡で住居跡と近接して検出されたTピットの時期について論じるまで至らなかった。現段階では中期後半の集落に前後する時期とまでしか言えないが、やや離れた米原3遺跡の中期末葉～後期初頭の住居跡に伴う時期のものが含まれているのではと考えている。

(5) むすび

イモツベ川流域の遺跡群の調査は現在も継続中で、平成14年度以降、今年度調査区の周囲を発掘調査する予定である。宮戸3、宮戸4、米原4遺跡は別個の遺跡名が付けられているが、その立地、遺構の分布、遺物の組成などから、同一面上に展開した一つの大きな遺跡として捉えることができる(図VII-1-3)。特にTピットについては、狩猟戦略を考察する上で、調査範囲の広いほうがデータの精度が高まると思われる。幸いにして今回は大規模な高規格道路の建設工事に伴うことから、きわめて広範囲の調査が可能である。イモツベ川流域の遺跡群の様相がより明らかになった次年度以降、資料の蓄積を待って、再考する。また、同僚の大泰司統からは、切り合い関係に着目してTピットの時期を考察した論文(大泰司2002)を発表前にもかかわらず読ませてもらったが、筆者の力量不足から本稿に反映できなかった。改めて謝意を述べるとともに、次年度の自己の課題としたい。(芝田)



図VII-1-3 イモツベ川流域の遺跡群



図VII-1-3 イモツベ川流域の遺跡群

2 アイヌ語地名のイモツベについて

a はじめに

道内のアイヌ語地名の中で、イモツベと呼ばれているのはただ一か所、鶴川町の宮戸4遺跡の立地する沢谷を流れる川のみである。この「イモツベ」について『鶴川町史』には「地名解」の項目で、更料源蔵が次のように書いている。

「井目戸(いもつべ) 鶴川町宮戸の古名。イモツベとは魚を釣る餌などのことで、この辺で昔よくみみずを掘ったといわれている。」

現在広く流布しているのは、この「みみず」にまつわる地名説であるが、ほかに説明がないわけではない。ここでは、古地図、古文書などの諸資料を検討し、地名「イモツベ」がどのように表現されてきたかを明らかにし、さらに、「みみず」とは異なる地名起源について、その説の成り立つアイヌ文化期における古地理的、古景観的な妥当性の検討をおこなう。

b 地名ムカワと地名イモツベ

地名「ムカワ」は、近世にあつては東蝦夷地に属し、「勇払」から十勝、根室などへ向う主要経路にあつており、多くの地図類にその地名が表されてきた。当時の陸路は海岸線に沿ったものなので、勇払を東へ出発すると、ムカワは最初の宿泊地である「サルプト」までの中間である。日高路を東から来ると勇払まで半日の行程であり、旅人にとって今宵の勇払泊まりを目前にした昼飯の場所でもあった。川ムカワは、当然船で渡る。

現在の鶴川市街地が立地する付近が「ムカワ」と呼ばれるようになるのは19世紀中頃からであり、それ以前は一級河川鶴川の河口付近、東岸の地が「ムカワ」と称されていたようである。しかし明治政府の鉄道を含めた陸路の整備は、東岸の「ムカワ」地区にとって主要交通路からの逸脱を意味していた。「アイヌ文化期」の頃には荒地であつた場所が、やがて市街地となっていくことにより、地名「ムカワ」は西岸で生き延びることになったのである。

このような「ムカワ」の位置変化とは異なり、東岸の「イモツベ」は場所が移動することはなかったにもかかわらず、すべての古地図、古文書などにおいて、地名イモツベは地名ムカワと関連して表現されてきた。したがって、ここではムカワとイモツベが表現されているものを、古いものから新しいものへと時代の順に拾い出していく。

c 古地図での表現

多くの古地図を紹介してある『北海道古地図集成』(高倉新一郎編著、1987年、札幌)を見ていく。

- ①『和漢三才図会、蝦夷之図』(1713年、正徳3年)「ムカワ」。
- ②『津軽一統志、巻十附図』(1731年、享保16年)「ムカハ」。
- ③『東山道陸奥松前千島及方州掌覧之図』(1789年頃、寛政元年)これには「サル」の西側に「ムカウ」と読める地名が二つ並んでいる。
- ④『蝦夷古地図』(1790年、寛政2年)「ムカワ」。
- ⑤『東西蝦夷地図』(1801年、享和元年)「ムカワ川」。
- ⑥伊能忠敬の中図は『蝦夷国測量図』(1821年頃、文政4年)と呼ばれているものである。東蝦夷地沿海部の地名のなかに「ムカワ」「ムカワ川」がある。これらの文字の西側には大きな水域が描きこまれている。
- ⑦間宮林蔵の図と伝えられている『蝦夷全図』(1822年、文政5年)は、内陸の河川湖沼など詳細なものである。ここに見る『北海道古地図集成』の図は、尺があまりにも大きすぎて地名が読み取れないが、河川名に関しては、部分拡大図とでもいえるものが小林和夫作成で示してある(図Ⅱ-2-1)。この小林作成の付録図には多くの地名が記されており、「ムカワ」の河口部には地名「シモムカワ」がある。

この『蝦夷全図』は、さいわいにも、恵庭市郷土資料館の1999年夏の特別展示「記録に現れたエニワ」において、国立国会図書館所蔵の『蝦夷図』の名称で写真パネルとして展示された(口絵4)。この「ムカワ」川筋の東岸の支流名は、下流から「ライバデン」「イモツベ」「ヲサン子ツブ」「アツツルベシベ」「ヲルイカ」などが読み取れる。ここで気がかりなのは「ライバデン」の親元の河川名といえる「チン」が見当たらないことである。

⑧松浦武四郎には、自著図および関係・関連図など、多くの記録がある。『東西蝦夷山川地理調図』(安政6年)、『東蝦夷日誌』、『官版実測日本地図、蝦夷諸島』、『北海道国郡全図』(1869年、明治2年)など、すべて「ムカワ」である。これらのうち『東蝦夷日誌』の基礎資料とでもいえる『武加和誌』の図では、「イモクナイ」が読み取れる。

⑨ほぼ同じ頃の「北海道歴検図、北海道国郡全図」(1871年、明治4年)では「ムカハ」が胆振州ではなく、日高州に属するような表示になっている。

⑩「三角術測量北海道之図」(1875年、明治8年)、は開拓使地理課の刊行であり、英文題名は「THE ISLAND of HOKKAIDO」となっている。ここでは「ムカワ」であり「Mukarwa. R」も読み取れる。

⑪「石狩原野殖民地撰定概図」(1891年、明治24年)に示してある「鷺川」原野は、現在の鷺川町域よりも上流域のことである。

以上に見てきた諸地図の表記は、「ムカワ」「ムカハ」であり、コタンと川の名称である。イモツベの初出は、⑦『蝦夷全図』の「イモツベ」であり、川の名称である。⑧松浦武四郎の『東蝦夷日誌』『武加和誌』では「イモクナイ」「イモクベ」とあり、川とコタンの名称である。

d 5万分の1地形図

①図II-2-2は1896年(明治29年)「陸地測量部」製版の「北海道假製五万分一図」[鷺川](ムカハ)である。これは「假製」という制約もあって、海岸線や河川に比べて丘陵や山地の表示は概略的になっている。この図の地名表記は、すべてアイヌ語をカタカナ、漢字で写したもののばかりであり、「佐瑠太(サルプト)村」と「鷺川(ムカワ)村」との境界は、日高、胆振の国郡の境でもある。

「イモツベ沢」の表示があり、小径(こみち)がこの「沢」を横切っている。この小径は当時の地図表現では「小路」と呼ばれていた。「小路」はアイヌコタンや「場所」「番屋」「会所」を連絡するものであり、踏み分け道である。イモツベ沢から小径を東に向かうと、「ポロヲサン子」を横切り、丘陵を北に進み、やがて穂別、平取の方面へ抜ける道筋に達するはずである。

小径を西側へ行けば、3キロメートル足らずで「チン」「ライ(バ)チン」に達する。さらに「ライ(バ)チン」から西へ500メートル進むと大きな道路にあたる。大きな道路は、この図幅では左端に「室根自」の文字があるが、元図では右から左に読むと「自根室至苦小牧」なので、根室と苦小牧とを結ぶ官道である。

この官道は19世紀前半の諸旅行記に表れる道筋が、改良されてきたものである。つまり「ライ(バ)チン」から「佐瑠太(サルプト)村」間では、標高20m前後を行くもので、「入北記」に「此間山道なれども平坦にして、歩行大に宜し」とみえ、松浦武四郎が「陸道」と記述したのにあたる。川「鷺川」の東岸には「イモツベ」の地名が描きこまれ、ゆるく曲がる「小路」は段丘の縁に沿ってコタンを連絡する生活道路である。川の西岸、官道の北側、のちに鷺川市街地が形成される辺りに「文」の記号があり、学校が認められる。

「イモツベ沢」の周辺は、概略的な丘陵の表現にあっても、標高20mの等高線が南側に食い込んでいる様子が捉えられている。この沢地形と宮戸4遺跡との関係は図II-1-4(21ページ)の1950年頃の地形図とも調和的である。そして「イモツベ沢」の下流部は沼沢の荒地であり、途中の流路約1キロメートルは見失われる。

②図II-2-3は、1921年(大正10年)「大日本帝國陸地測量部」発行の「鷺川」である。この頃までには

鷄川市街地が形成されて、大きな道路(官道)が3キロメートルほど内陸部に直線的に走っている。その道路の脇に「井目戸(イモツベ)」の集落地名がある。沼沢の中に「イモツベ」川の流路が描き込まれている。③図Ⅱ-2-4は、1949年(昭和24年)「地理調査所」発行の「鷄川」である。直線で延びる道路が多くなり、以前低湿な荒地と表現されていたところの大部分が、水田と化した。この図でも描き込まれている「井目戸(イモツベ)」は集落地名のみである。井目戸が宮戸と呼ばれるようになるのは、1943年(昭和18年)の字名改正からである。

最古の5万分の1地形図を見ると、イモツベ沢は南側に食い込んだ地形と表現されており、ここを横切る踏み分け道が存在する。この小さな道はアイヌコタンを結ぶものである。イモツベ沢の下流部は沼沢地であり、流路は判然としない。鷄川の東岸にあるイモツベの集落には、チン、ライパチンからの踏み分け道が通じている。イモツベの集落は昭和の字名改正により、宮戸と呼ばれることになる。

e 19世紀までの古文書の記録

古文書などに「ムカワ」「イモツベ」がどのように記録されてきたかを、時代の順に示しておく。

- ①「元禄郷帳」は1700年(元禄13年)の調査記録である。これには、東蝦夷地61部のうちのひとつとして「ムカワ」「む川」が記してある。「東夷竊々夜話」は、1805年(文化6年)の見聞記録である。このなかに「松前郷帳」(元禄13年)の記述が引かれており、「イモクベ、ムカワフト」の地名がある。
- ②羽太正養の「休明光記巻之五」(1803年、享和3年)には「休所ムカワ」とある。
- ③兼徳麻呂の「東蝦夷地名考」は、1808年(文化5年)の記述である。地名「ムカワ」は存在するがその地名の意味などについては、「未考」となっている。
- ④「東行漫筆」は、1809年(文化6年)の見聞である。このなかに「ムカワ水源三日路程あり、此川に魚無し。依て無川と云よし。」という一項がある。
- ⑤1824年(文政7年)の上原熊次郎「蝦夷地名考并里程記」には、以下のように書いてある。

ムカワ：休所。川舟渡。モンベツ江四里程。夷語ムカなり。則水の涌くといふ「事」。此水上平原にして所々に水の涌き出で、源水となる故、地名になすといふ。

- ⑥「天保郷帳」として知られる「松前編郷帳」(1834年、天保5年)には「ムカワ」とある。
- ⑦「東蝦夷日誌」は、松浦武四郎の1858年(安政5年)の見聞録である。これのウヅツ領の項、6月29日の部分には地名の「義」について記してあるが、武四郎の本文説明にもあるように、ここの地名については「武加和誌」が詳しい。少し長くなるがムカワ、イモツベの「義」を述べた部分を引用する(『戊午武加和日誌』秋葉実解説1985年『戊午東蝦夷山川地理取調日誌』)。なお、ここの地名には「イモクナイ」「イモクベ」も使われている。

原名ムカと云しが、今延てムカワと云へり。是全く和人が延せし也。夷人未だムカと詰て通称するなり。其和人が延せしと云は、此川によって(をさして)武河等と字を当、また東部のウラカをして浦河の字を当て、原称の意をば失脱し、却て土人にも其訳を大概は解すものなし。ムカ、訳して山中処々より水涌出る事による也。此水源ウウハリの南の麓なる平地にして其処諸々より水涌出り。其水一川に帰して此大河に成り来るなり。故に此名あるなり。ムカ、水涌出ると云義のよし也。

イモツ(ク)べ村

同じく東岸小川の上に有也。此辺川の西岸には谷地有て、茅葺原也。少し洪水の時は沼の如く成るよし。其名義は此沢にはヲクタイキと云て、飛制て歩行る虫有。是を夷言イムクと云よしなるが、其が居りしによつて号しとかや。本名はイムクベツのよし也。其ヲクタイキとは砂蚤と云事也。是浜の砂原ならで不居虫也。

⑧1874年(明治7年)に北海道開拓使が取りまとめた『北海道地誌提要』には、井目戸(イモクヘ)村の表記になっている。

⑨『開拓使事業報告』第零編、地理の部、1882年(明治15年)2月の胆振国勇払郡の村として「井目戸」村がありこれには「キメド」のふりがながある。

⑩永田方正の『北海道蝦夷語地名解』(初版1891年：明治24年)の複製版(1984年)は、以下のように書いてある。胆振国勇払郡の項である。

Mukap, =muk-ap: ムカブ: 羊乳草(ツルニンジン)アル処。土人此根ヲ食料トス。

○鷄川(ムカハ)〔村〕ト称ス。

○松浦氏日誌ニ本名「ムカ」ナリ延(ノビ)タル義トアリ。「ムカ」トアルハ是ナリ延タルトハ非ナリ。

さらにムカブ川筋の項に

Imokpe: イモクペ: 陥(ヲトシ)ノ餌(エバ)ヲ置ク處。井目戸(井モクベ)村

以上の古文書でのイモクペの表記は、「イモクペ」「イモクベ」「井目戸」「イムクベツ」「キメド」などがあり、初出は①『元禄御帳』(1700年)をもとに書いたという『東夷雜々夜話』(1805年)である。現在広く流布している「みみず」に関連する元といえる⑨永田方正の『北海道蝦夷語地名解』が述べられたのは1891年のことであった。松浦武四郎の『武加和誌』にある「ヲクタイキ」「イモクベ」「イモクナイ」については、後に検討する。『開拓使事業報告』にみえる「キメド」は漢字の読みそのままではないので、アイヌ語地名の検討からは除外できる。

f 20世紀にあらわれた説

① J. バチラーの『アイヌ地名考』は1925年の著述である。中川裕の訳は以下のようである。

MUKAWA(鷄川): Muka-pet: 「せき止められた川」または「しみ出している川」。こう呼ばれるのは、満ち潮のたびにその河口に大量の砂が集まり、川がそこを流れ出ることが難しくなるからである。

②1954年(昭和29年)の『北海道駅名の起源』の著者は、高倉新一郎、知里真志保、更料源蔵、河野広道である。鷄川(むかわ)については、「アイヌ語ムッカ・ベツ(塞がる川)から出たもので、鷄川が上げ潮のため砂で川口が塞がれるからである」と説明している。

この本には「アイヌ語地名単語集」というのが、知里真志保の執筆で付け加えてある。

これには「ムク(muk)ふさがる。ムッカ(muk-ka)ふさがらず。」とある。

③1968年(昭和43年)に刊行された『鷄川町史』の「地名解」を担当した更料源蔵は、以下のように説明している。

鷄川(むかわ): 疑問の地名であったために、色々伝説があった。昔この川はムカワといわずモシリカベツとあったが、ある時この付近一帯が凶漁に見舞われたとき、人びとはこの川筋に多いムック(ぼあそふ)の根を掘って食べたため助かったため、それからムックアツというようになり、それがなまってムカワとなったと土地の古者たちは伝えている。しかし本当はムッカ・ベツというので、入鹿別と同じように海の潮のために砂で河口がふさがる川なので、ふさがる川(ムッカ・ベツ)と名付けられたものである。現在も時々川口がふさがってかわることがある。

井目戸(いもつべ): 鷄川町宮戸の古名。イモクペとは魚を釣る餌などのことで、この辺で昔よくみみずを掘ったといわれている。

④1972年(昭和47年)山田秀三は『北海道の川』のなかで、鷄川について次のように注記した。

勇払郡の大川であるが、この川名の意味も、ほかの大川と同じように、はっきりと残っていない。

(中略)(鶏川のアイヌ系古老から聞いた話)並んで流れている沙流川は男で、鶏川は女であった。沙流川の古名がシシリ・ムカなのに対し、鶏川は女なのでモ・ムカ(小さい・ムカ)と呼ばれ、それから鶏川の音が生れた。《註 この二つ並んだ有名な川が、共に muka の音を持っていた。そこにこれら川名の謎がありそうである》

さらに山田秀三は1984年(昭和59年)『北海道の地名』のなかで鶏川(むかわ)とイモクベについて記述している。鶏川(むかわ)については、上原熊次郎、松浦武四郎、永田方正、パチラー、『北海道駅名の起源』などの諸説の紹介であり1972年段階での説明を出るものではない。イモクベについては、永田方正の説のみを紹介し、「イモクベ(imokpe)は、餌、みみずの意」と書いた。

永田方正の「陥(ヲトシ)ノ餌(エバ)ヲ置ク處。」をもとに更科源藏の「みみず」説があらわれる。

g 松浦武四郎の「武加和誌」

さきにe⑦で引用、紹介した松浦武四郎の1858年の見聞である「武加和誌」のイモクベ部分を現代文(意訳)に直すと、以下のようになる(部分)。

イモクベ村は(ライバチンヤチン)と同じように、(川ムカワ)の東岸の小川に接してある。この川の西岸は谷地なので、茅芦などの原っぱになっている。ちょっとした洪水のときでも、沼のようになってしまうとの事である。ここの名前の元はと聞いてみたら、この沢(川筋)には「ラクタイキ」という飛び跳ねる虫がたくさんおり、この虫をアイヌ語では「イムク」と呼ぶので、このような地名になったというのです。ですからきちんと言うときは「イムクベツ」とのことです。その「ラクタイキ」とは和語では砂蚤になります。つまり海浜の砂地でないと見られない虫の事なのです。

さらに『東蝦夷日誌』の該当部分を見ると「イモクベ(東岸小川、人家六軒)、此上にラクタイキと云砂地を飛虫多きより号(なづく)の地有」と記してある。これは「川の上流部に虫の多いところがあるので、この虫の名前をもとにして地名にした」というのである。

h アイヌ語

上に見てきた「武加和誌」ではアイヌ語「ラクタイキ」「イモクベ」「イモクベツ」が地名イモクベについて関係する語句だと述べてある。それではこれらの言葉はどのようなものなのか。

武四郎は「ラクタイキ」を砂蚤と記している。これはラク(ota:砂、砂浜)、タイキ(tayki:のみ、蚤)で、まことにわかり易いものである。タイキ(蚤)は、以下に引用する①から⑦まですべての辞書等で見ても北海道全体に通じる言葉である。

更科源藏の『コタン生物記、Ⅲ野鳥・水鳥・昆虫篇』(1977年)にはノミの項で、名寄付近のタイキオナイ(ノミの多い川)という小川について「ノミは川砂からわくものだ、だから山に行くとき米粒ほどのノミがいるものだ」という古老の話が紹介してある。

「イモクベ」と「イモクベツ」とは略称と正式名称の関係であり、「イモクベツ」はイモクにベツ(pet:川)が加わった「イモクの川」である。地図に使われていた「イモクナイ」は武四郎の知識の中では同じ「イモクの川」であった。それでは「イモク」はどのようなものなのか。

①萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』(1996年)には「イモク(imok)餌」となっている。

②田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』(1996年)には「imok(イモク)【名詞】餌(餌うためではなく魚やネズミなどを取るのに使う餌)」とある。

③久保寺逸彦編『アイヌ語・日本語辞典稿』(1992年)には「imok:餌」とある。

④中川裕の『アイヌ語千歳方言辞典』(1995年)には「イモク:imok:(名詞)(魚などを捕らえるためのえさ)」とある。

⑤更科源蔵の「コタン生物記、Ⅲ野鳥・水鳥・昆虫篇」(1977年)には釣餌虫の項目があり、「魚を釣る餌のことをイモクという」文章の後にミミズ、コガネムシ類、クワガタムシ、カミキリムシ類などについてそれぞれの説明がなされている。

⑥服部四郎の「アイヌ語方言辞典」(1964年)には「イモク(imok)」に関して二つの説明がある。ひとつは「えさ(餌)」であり、胆振幌別、沙流でのものとする。沙流では「魚やネズミを取るための」とつけ加えてある。もうひとつは、「みみず」であり、帯広、旭川でのものとする。胆振幌別、沙流でのみみずは「ツニン(tunin)」となっている。

⑦知里真志保の「分類アイヌ語辞典、第二巻、動物篇」(1962年)をみると、ミミズをimokとするのは旭川であり、胆振幌別、静内、襟似ではtonin、鶴川ではkenas-tuninとなっている。

⑧文化元年(1804年)の序で知られる上原熊次郎の「蝦夷方言藻沙草」には「蚤：タイケ」「ミミズ：トニン」とある。

以上見てきたようにイモクは餌なのであり、すぐにミミズにつながる事はない。⑥⑦でみてもムカワ地域でイモクとミミズが結びつく事は適切な説明ではない。ミミズについては「トニン、ツニン、トウニン」「tunin」などとなっているのだから。

i 地理的、景観的な妥当性

さきに5万分の1地形図で検討したが、イモッペのコタンの上流域は沼沢地なのでイモッペ川をさかのぼる事は、水結期間以外は容易なことではない。それでは砂蚤が多く見られる頃、つまり沼沢地がぬかるむ季節に人々は、「イモクの川」の上流の様子をどのようにして認識したのであろうか。

同じ地形図の読み取りにおいて「イモッペ沢」を横切る「小路」があることを述べた。この小道は、ムカワの河口部と内陸部とを結ぶ道であり、イモッペ、チン、ライバチンなどの諸コタンにとって、欠くことのできぬものであった。したがって、この小道付近の風物こそが「イモク」であり、その川の名称とするほどの特色を持っていたと考えられる。

イモッペの流域は17世紀中葉には降下火山灰(1663年の有珠山と1667年の樽前山)に覆われてしまう。これは平坦部で厚さ60cmにも及ぶものであり、植生、景観に大きく影響したであろう。おそらく地表部分は白色砂で覆い尽くされ、柏林に代表される樹林の復活は緩やかにしかすすまない。

」 おわりに

宮戸4遺跡の調査に従事し、ひと夏周辺の地形を観察する機会に恵まれた私の見るところ、松浦武四郎の地名起源説は十分に成り立つと考えられる。

アイヌ文化期において、宮戸4遺跡の周囲は丘陵地帯ではあるが川に沿う沢部分には砂地が広がり、そこに砂の蚤「ヲタタイキ：イモク」が目につく場所であった。それ故に、「イモク」を特色ある川の名前に使った。「イモッペ沢」に砂浜と類似した景観が広がっていたのは、考古学的な時間尺度で見ると、限定された時期の局地的な事象だったと理解できる。これには踏み分け道が横切って往来が確保されていた事も、地域社会における「イモク」の共通認識成立に影響したと見てよい。

松浦武四郎が「是(：ヲタタイキ)浜の砂原ならで不居虫也」と書いたのは、地名にまつわる特色ある事柄、場所を確かめられなかったこととともに、いくらかの不思議を込めたものである。さらに、武四郎の「イモク」に基づくと、ムカワのあたりには、砂蚤を餌とする地域社会があったことが推定できる。したがって、この具体的な事柄については、別途説明が必要とされよう。(西田)

引用・参考文献

- 赤石慎三
 赤石慎三
 赤石慎三
 赤石慎三
 稲葉勝男
 大飼哲夫
 大飼哲夫
 今村啓爾
 宇田川洋編
 宇田川洋編
 宇田川洋
 大泉博嗣
 扇谷昌康
 扇谷昌康
 扇谷昌康
 大島直行・柳川拓郎
 大森可統
 大谷敏三・大島直行ほか
 大沼忠春
 大沼忠春
 大沼忠春
 大沼忠春
 大沼忠春
 大場利夫・扇谷昌康
 大橋 毅・西澤千鶴ほか
 加藤邦雄
 川内谷修
 川内谷修
 川内谷修
 川内谷修
 川内谷修
 菊池俊彦
 木村尚俊
 木村英明
 黒崎康雄・中田幹雄ほか
 児玉作左衛門・大場利夫
 古原敏弘
 古原敏弘
 佐藤一夫・宮夫増夫ほか
 佐藤一夫・宮夫増夫ほか
 佐藤一夫・宮夫増夫ほか
 佐藤一夫・宮夫増夫ほか
 佐藤一夫・工藤 肇ほか
 佐藤一夫・工藤 肇ほか
 佐藤一夫・工藤 肇ほか
 佐藤一夫・工藤 肇ほか
 佐藤一夫・工藤 肇ほか
 佐藤一夫・宮夫増夫ほか
 佐藤一夫・宮夫増夫ほか
 佐藤孝則
 佐藤孝則
 佐藤忠雄・山田 忍ほか
 佐藤宏之
 更科源藏
 更科源藏
 澤 四郎
 澤 四郎
 沙見二区自治会
 鈴木道之助
 高橋 理
 高橋 理
- 1983 「鶴川町パンケニウケナイ遺跡出土資料について」『北海道考古学』19
 1997 「苫小牧市柳館遺跡における縄文時代前期中葉の土器について」『北海道考古学』33
 1998 「美沢遺跡群」苫小牧市教育委員会
 1999 「苫小牧地方の円筒上層式について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』1
 1961 「鶴川流域の遺跡遺物について」『北海道地方史研究』43号
 1941 「シヤマコマイノミ(柳葉魚類)」『北方文化研究報告』5
 1952 「北海道の鹿とその御亡」『北方文化研究報告』7
 1983 「船穴(おとし穴)」『縄文文化の研究2 生業』雄山閣
 1976 「釧路川中流域の縄文早期遺跡—金子遺跡—」釧路町教育委員会
 1976 「釧路川中流域の縄文早期遺跡—飯島遺跡—」釧路町教育委員会
 1988 「アイヌ文化成立史」北海道出版企画センター
 1987 「第2節 遺構の分類 落し穴」『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群II』
 1977 「鶴川町遺跡分布調査報告書」鶴川町教育委員会
 1979 「日高門別の先史遺跡」門別町教育委員会
 1982 「礼内台地の縄文時代集落址」登別市教育委員会
 2002 「切り合うTピット」『北海道考古学』38(2002年4月刊行予定)
 1978 「苗別川流域における考古学的調査」千歳市教育委員会
 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初葉の編年について」『考古学雑誌』66-4
 1981 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』17
 1986 「道南の縄文前期土器群の編年について(II)」『北海道考古学』22
 1986 「龍文原体の変遷—東網路式土器」『季刊考古学』17 雄山閣
 1964 「勇払郡鶴川遺跡」『北方文化研究報告』19
 2000 「芽室町 小林遺跡—第5次発掘調査報告書—」芽室町教育委員会
 1994 「縄文尖底土器」『縄文文化の研究3 縄文土器1』雄山閣
 1990 「メサウコンツ遺跡・ユクウコンツ2遺跡」門別町教育委員会
 1991 「ポロクンツキ遺跡」門別町教育委員会
 1995 「メサウコンツ遺跡II」門別町教育委員会
 1996 「ケノマイ遺跡」門別町教育委員会
 1967 「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3
 1980 「縄文文化早期」『北海道考古学講座』みやま書房
 1996 「植苗式土器」『日本土器事典』雄山閣
 1969 「清河町の遺跡」清河町教育委員会
 1955 「網走市大曲湧窟出土の遺物について」『北方文化研究報告』10
 1987 「駒場7遺跡における考古学的調査」静内町教育委員会
 1985 「静内町清水丘における考古学的調査」静内町教育委員会
 1976 「植苗貝塚」苫小牧市教育委員会
 1984 「クアコブ」苫小牧市教育委員会
 1985 「ニナルカ」苫小牧市教育委員会
 1986 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群I」苫小牧市教育委員会
 1987 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群II」苫小牧市教育委員会
 1990 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群III」苫小牧市教育委員会
 1992 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群IV」苫小牧市教育委員会
 1995 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群V」苫小牧市教育委員会
 1998 「柏原27・ニナルカ・静川5・6遺跡」苫小牧市教育委員会
 1988 「ショップ遺跡」三石町教育委員会
 1983 「北海道における溝状ピットの自然科学的検討」『十勝考古』6
 1986 「動物生態学からみた溝状ピットの機能」『北海道考古学』22
 1976 「あびら—北海道勇払郡早来町安平A遺跡発掘調査報告書—」
 2000 「北方狩猟民の民族考古学」北海道出版企画センター
 1955 「北海道伝説集 アイヌ篇」鎌書房
 1966 「アイヌ語地名—北海道地名の起源—」北書房
 1962 「東網路—東網路貝塚発掘調査報告書」網路市教育委員会
 1988 「釧路の先史」釧路叢書24
 1987 「沙見二区沿革史 大地は語り継ぐ」鶴川町沙見二区自治会
 1991 「石器入門事典—縄文」柏書房
 1992 「ムカンボシC13遺跡における考古学的調査」千歳市教育委員会、
 1996 「余市式土器再考」『北海道考古学』32

- 高橋正勝編 1971 『柏木川—縄文時代・縄文時代晩期の墳墓と縄文時代中期の住居址』北海道文化財保護協会
- 高橋正勝・畑 宏明 1976 『浦河町栄丘遺跡出土の遺物—中野式土器群に伴う石器群—』『北海道考古学』12
- 高橋正勝・小笠原忠久 1980 『縄文文化前期・中期』『北海道考古学講座』みやま書房
- 高橋正勝・直井孝一ほか 1982 『狭々間遺跡』江別市教育委員会
- 竹田輝雄 1976 『中野式土器—胎土に含む赤鉄質のX線透写の試みから—』『北海道考古学』12
- 竹田輝雄・大島秀俊ほか 1997 『大谷地貝塚と五十嵐磯—余市式土器をめぐって—』小樽先史懇話会
- 田才雅彦 2000 『豊川1遺跡』厚真町教育委員会
- 谷岡康孝・小柳リラコ 1996 『夕張市 十三塚遺跡・境の上4遺跡』北海道文化財保護協会報告書1
- 知里真志保・山田秀三 1956 『あの世の入り口』『北方文化研究報告』11
- 鶴丸俊明・豊原照司 1988 『旧平取小学校植物園遺跡』平取町遺跡調査会
- 鶴丸俊明・川内 基 1990 『北海道平取町 藤平川2遺跡』平取町遺跡調査会
- 戸刈賢二・土屋 薫 2000 『北海道の石』北海道大学図書刊行会
- 土肥研晶 1996 『川端遺跡・川端2遺跡』由仁町教育委員会
- 豊原照司 1999 『コックロ第3地点出土の遺物』『北方探求』1
- 水田方正 1984 『初版 北海道環状地名解 復刻版』草風館
- 二階堂将也・赤石慎三 1993 『美沢11遺跡』苫小牧市教育委員会
- 西脇隆 1996 『東網路Ⅲ式土器』『日本土器事典』雄山閣
- 西脇対名夫・宗像公司 2000 『熊沼2遺跡』厚真町教育委員会
- 野村 崇・宇田川洋編 2001 『新北海道の古代1 旧石器・縄文文化』北海道新聞社
- 羽賀軍二 1989 『早期北海道平底土器様式』『縄文土器大観1』小学館
- 長谷川徹 1987 『エサヌマップ4遺跡』門別町教育委員会
- 長谷川隆博・阿部千春 1989 『エサヌマップ2遺跡・エサヌマップ3遺跡』門別町教育委員会
- 兵藤千秋 2001 『北海道典拠郡嶋川町 米原3遺跡』嶋川町教育委員会
- 部落史編集委員会 1972 『二宮部落史』二宮自治会
- 北海道埋蔵文化財センター 1982 『旭町1遺跡』北埴調報10
- 北海道埋蔵文化財センター 1983 『栄丘遺跡』北埴調報16
- 北海道埋蔵文化財センター 1985 『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』北埴調報26
- 北海道埋蔵文化財センター 1988 『美沢川流域の遺跡群XⅡ』北埴調報58
- 北海道埋蔵文化財センター 1989 『美沢川流域の遺跡群XⅢ』北埴調報62
- 北海道埋蔵文化財センター 1994 『千歳市 オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡』北埴調報96
- 北海道埋蔵文化財センター 1995 『千歳市 キウス5遺跡(2)B地区』北埴調報104
- 北海道埋蔵文化財センター 1997 『美々・美沢—新千歳空港の遺構と遺物—』
- 北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市 キウス5遺跡(4)B地区・C地区』北埴調報116
- 北海道埋蔵文化財センター 1997 『千歳市 キウス5遺跡(6)B地区・C地区』北埴調報126
- 北海道埋蔵文化財センター 1997 『千歳市 ユカンボシC15遺跡(1)』北埴調報128
- 北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市 ユカンボシC15遺跡(2)』北埴調報133
- 北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市 キウス4遺跡(3)』北埴調報134
- 北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市 キウス4遺跡(4)A2地区』北埴調報135
- 北海道埋蔵文化財センター 2000 『嶋川町 米原3遺跡・高戸3遺跡・米原4遺跡』北埴調報153
- 前田正憲 1991 『ショップ遺跡』三石町教育委員会
- 松浦武四郎著・高倉新一郎校訂・秋葉実解説 1985 『武加和誌 上・中・下』
- 松浦武四郎著・秋葉実解説 1988 『附録 東西蝦夷山川地理取調図誌 中』北海道出版企画センター
- 松浦武四郎著・秋葉実解説 1988 『附録 東西蝦夷山川地理取調図編 川筋取調図』
- 松浦武四郎著・秋葉実解説 1988 『武四郎蝦夷地紀行』北海道出版企画センター
- 宮夫靖夫 1999 『東網路式土器の分類と編年について』『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』1
- 宮夫靖夫 2000 『宮東遺跡群における集落の様相』『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』2
- 宮夫靖夫 2001 『平成年代におけるアイヌ考古学』『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』3
- 嶋川町史編纂委員会 1968 『嶋川町史』嶋川町
- 嶋川町大漁地蔵尊奉賛会 1987 『嶋川大漁地蔵の歩み』
- 森岡健治 1996 『平取町カンカン2遺跡』平取町教育委員会
- 森岡健治・長田佳宏 1999 『平取坂井遺跡』平取町教育委員会
- 森岡健治・長田佳宏 1999 『平取町旧平取小学校植物園遺跡』平取町教育委員会
- 森田知忠・遠藤香登 1984 『Tピット論』『北海道の研究1 考古編1』清文堂
- 山田秀三 2000 『北海道の地名—アイヌ語地名の研究 別巻』草風館
- 渡辺俊一 1996 『美沢10遺跡』苫小牧市教育委員会

報 告 書 抄 録

ふりがな	むかわちょう みやとよんいせき
書名	滝川町 宮戸4遺跡
副書名	日高自動車厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第168集
編著者名	西田 茂・鎌田 望・芝田直人・柳瀬由佳
編集機関	北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
発行年月日	西暦2002年3月29日
ふりがな	みやとよんいせき
所収遺跡名	宮戸4遺跡
ふりがな	ほっかいどうみやとよんいせきむかわちょうみやと
所在地	北海道勇払郡滝川町宮戸182-1ほか
市町村コード	01582
遺跡番号	J-14-40
北緯・東経	42度33分56秒・141度59分3秒
調査期間	20010507～20011026
調査面積	5,310m ²
調査原因	高規格道路建設に伴う事前調査
種別	遺物包含地
主な時代	縄文時代早期
主な遺構	住居跡1軒 Tピット13基 焼土26ヶ所 フレイク・チップ集中1ヶ所
主な遺物	縄文土器(東網路Ⅲ式、コックロ式、中木路式、東網路Ⅳ式、網文式、静内中野式、植苗式、天神山式、柏木川式、余市式、タブコブ式など) 弥文土器(高坏) 石器(石鏃、石槍・ナイフ、石鏃、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、くぼみ石、すり石、石鏃、砥石、台石など) 土製品(円盤状土製品、三角形土製品、板状土偶、焼成粘土塊) 石製品(石のみ形石製品)

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第168集

鷗川町 宮戸4遺跡

一日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

平成14年3月29日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL(011)386-3231(代表) FAX(011)386-3246
E-mail: mail@domaibun
Home Page: <http://domaibun.or.jp/192.168.1.10>

印刷 興国印刷株式会社
〒060-0041 札幌市中央区大通東2丁目3番地1
札幌松村ビル2号館2F
TEL(011)252-2221(代表) FAX(011)252-2229